

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

10月号



10—OCTOBER' 66

奇譚クラブ

昭和四十二年十月号

定価 三五〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



10月号 ¥ 350

一部 一〇〇〇円(下共) 略号△美10▽

ピチピチした若鮎のような美しいモデル達の柔肌に厳しく掛った綱目。これすべて緊縛女性のポーズの中で、とっておきのものばかりで百態を選びました。いづれ也未発表の力作ばかりです。この一冊に約十名の美女モデルの緊縛姿態——〇ポーズが、皆さまでお手元に届くのです。特製アート紙に対する極鮮明なグラビア印刷の女性緊縛のフオートを、心よりお楽しみ下さい。

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
全身緊縛首攻めの場面(東浦)	縄でくびる豊麗な女身(東浦)	足首で引回される女(東浦)	ムチ打ちに悶えぬく(東浦)	少女羞らひの緊縛操像(一宮)	剥がされたパンティ(一宮)	豊臀を無理に晒される(美木)	Pタイルに振がされる(美木)	逆さ吊りの緊縛女体(増田)	インサリベルト縛り(増田)	M女性の陶酔的表情(木村)	瘦身は縄にくびれる(木村)	脚線美も露わな女体(美木)	松樹に晒された奴隷(木村)	立木の枝から逆さ吊り(木村)

30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16

縁の柱に晒された女	後手吊りにあう女体	片足吊りにあう女体	諸親の若々しい裸身	後手網縛りに込む女裸体	柔肌に喰ひにわたる女裸体	後手縛りに空ろな表情	華麗な刺青裸身強縛り	長髪をアップにして	全裸後手足首連繫縛り	絹目に操縛にあえぐ	鏡に写す縛られた裸身	二の腕に喰ひ込む紐	全裸後手縛り豊満女体	包づいた乳首を晒す
(玉田)	(大塚)	(一宮)	(絹川)	(山原)	(木村)	(山原)	(長野)	(東浦)	(東浦)	(東浦)	(木村)	(木村)	(玉田)	(大塚)

65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31

女ドレイの品定め (大塚)
強烈股間縛りに泣く女 (東浦)
初めての縛りに恥じる (一宮)
隣室に見た驚異の縛り (大塚)
乳房の巨大になる縛り (山原)
吊りを嫌がるモデル嬢 (玉田)
真紅の腰巻でポーズす (山原)
驚つかみにされた黒髪 (東浦)
麻縄縛りにのびた女体 (大塚)
開孔器による鼻責め (大塚)
エビ責めに耐えぬく女 (東浦)
豊胸を黒帯に托して (長野)
雪白の美肌を晒す縄目 (大塚)
人身御供の緊縛全裸像 (大塚)
股間縛りに投げ出す脚 (一宮)
エビ縛りに苦悶の表情 (大塚)
伸びやかな二本の脚線 (一宮)
滑車後手吊りの準備 (大塚)
みゆきの素顔と緊縛像 (増田)
竹に拘束された洋子嬢 (木村)
離家の縁に縛られた (大塚)
輝く白肌を晒す全裸身 (絹川)
身動きできぬ後手縛り (大塚)
腰巻を剥ぎとられる (木村)
大の字逆さ吊り女体 (増田)
美しい裸身にからむ縄 (美木)
若肌のすべを晒して (一宮)
若手股間足首縛り (東浦)
浴室の荒縄縛りにあう (山原)
股間縛りと腰縄縛りに (木村)
緑蔭の庭を背景にして (大塚)
立木で両手吊りにあう (大塚)
縄の反応とその表情 (一宮)
強烈縛りである弓反り (大塚)
麻縄は豊かな肌を扶る (東浦)

104 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66

恍惚境のMの表情 (山原)
胡坐縛りでもだえる (絹川)
股間縛り正面で立つ (大塚)
ムチ打ちを願うポーズ (木村)
伸びやかな女体の細目 (一宮)
責めめかれた股間縛り (一宮)
後手滑車吊りにあう女 (大塚)
縛られて歩かされる (大塚)
亀甲縛りと股間縛り (美木)
正坐で放置する縛体 (木村)
夫から鼻責めを受ける (増田)
可愛い小悪魔の表情 (一宮)
徐々に吊られる片足 (大塚)
強烈縛りで受ける鼻責 (美木)
均斉のとれた美麗縛体 (大塚)
室の隅に逃げた女奴隷 (美木)
首縄股間縛猿轡の表情 (美木)
可愛い裸身の鑑賞 (木村)
セーラー服の後手縛り (大塚)
後手股間縛りで引回し (一宮)
海老責めで耐え忍ぶ (木村)
縄でくびった柔肌地獄 (一宮)
エビ縛りの苦悶と戦う (大塚)
台上に晒す緊縛裸身 (山原)
火あぶりにあう女囚 (大塚)
アグラ縛りで頑張る女 (大塚)
がっちりした後手縛り (東浦)
柱縛りでもがく清子 (山原)
石橋の上に放置される (玉田)
ムチ打ちに悶える女体 (大塚)
猿轡を三面鏡に映す (大塚)
庭園を引き回される (山原)
首縄にあえぐ哀婉表情 (大塚)
太縄が柔肌をくびる (大塚)
大の字荒縄ハリツケ (山原)

強烈あぐら縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(えめ)
柱を背負つて両膝を左右にえ
きつて開いてアグラをかけた両足
首を揃へて縛り、背後の柱と連結
して締めあげると、二の腕豊胸を
括られた女体は二つ折りになる。

大手札十枚一組
山原清子
一二〇〇円
略号(えし)

大手札十枚一組 一二〇〇円
山原清子 略号(えし)
白禪一本の刺青女性が脇差短刀を用いて下腹から鳩尾にかけての間に切り更に止めの刃を咽へ。豊富な血紅を使つて切腹と屍体有様を微細に描写した。

大手机三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えう)

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えう)

大手札十二枚一組 一二〇〇円
大塚、東浦 略号(えの)
大塚啓子の手によって高手小手

大手札五枚一組
大塚、東浦
六〇〇円
略号(えわ)

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号(えわ)
二の腕から双胸、東浦、後手は
しく縛りあげられた、調子よく
大塚啓子から息もつけぬ猿ぐつ
を噛まされ呻めき悶えながら、
ばれいじめられる数々の場面

大手札十二枚一組 一五〇〇
山原、東浦 略号(えみ)

大手札十二枚一組
山原、東浦
六尺揮一本の入墨姫御が赤い巻一枚の娘を相手にアイクチをりまわしての大立ち回り。豊富血紅を利用しての断末魔にあえ娘の凄惨な場面を描明に描写

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えな)

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えな
東浦ひかるの仲びきった腋の下
大塚啓子が両手の指先をつかっ
くすぐる。身をくねらして懸命
耐えている東浦ひかるの裸身。

.....

大手札五枚一組 六〇〇円
東浦、大塚 略号(えお)

大手札五枚一組 六〇〇円
東浦、大塚 略号(えお)
れた東浦ひかるは鴨居に吊り上げ
てはいけないというので猿ぐつ
を盗まされ大塚啓子から毛髪を
まれ股間縛の縄を弄ばれる。

大手村三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号（ひか）
最近になって、ひとしおポリ

東浦ひかる
大手村三校一組
略号(ひか
3C3C)

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひお)

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひお)

.....

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひく)

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひく)
最近になって一層の美しさと
気の増してきた啓子の全裸の女
に思うさまに縄を掛け、身動き
きめま翻弄される柔肌に光と
の屈折が麗美な画面となす。

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひき)

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひき)

大手村四枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(ひそ
男生の手によって完結を施さ

大手村四校一組 五〇〇
大家啓子 略号(ひそ)

アルバム／美しい縛しめ／第九集

女性刑罰拷問特集／『西洋篇』

革具に拘束される女

略号／美9
一部 一〇〇〇円
(T共)

完成／好評発売中！

革具に拘束された美女の媚態七十二葉の豪華版

「女性刑罰拷問特集」日本篇「略号美5」の姉妹篇として、待望の「革具に拘束される女」特集のグラフィック印刷写真集をここに完成いたしました。真白で豊かな肉づきの女体が、黒光りのする革具、或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられるさまを七十二枚の大小の鮮明なるフォトによって、とっくりとごらんいただけます。

内容

- T型に磔られた女正面像（くさり、尾錠付革具使用）／三葉
- 皮張椅子に拘束された女（手枷革具くさり付、首、胸、胴、脚、膝、足首固定革具使用）／二葉
- 革製猿ぐつわを噛まされた女性（全身縄緊縛、革箱口具使用）
- 皮張椅子に固定仰臥させられた女体のアップ／二葉
- 黒覆面（革製）並に黒革褲（チヤック付）着用、両前手錠及び黒革褲単独着用／四葉
- 黒革猿ぐつわ、首絞め股間括り

- 両手、膝、足首拘束／五葉
- 電気椅子に固定された女死刑囚／四葉
- 口腔検査／三葉
- 女死刑囚の生体実験／一葉
- 黒革覆面貞操帯着用にて前手錠立姿の女／一葉
- 並に同じ姿にての各種ポーズをとる女／五葉
- 革製猿ぐつわ、首輪、股間並に膝固定立柱括り前手錠／二葉
- 全身革具に固定される女の正面背面仰臥姿態／十二葉
- 貞操帯着用にて黒革製長椅子に仰臥固定される女／四葉
- 牛革製箱口具、股絞め、股間固定絞全身拘束に呻く女／五葉
- 首革枷、両手枷、両足枷を鎖で繋かれた女／一葉
- 牛革具に拘束された女性の正面背面側面各種姿態／七葉
- 首輪、両手枷、両足枷に鎖をつけられて引回される女／三葉
- 貞操帯を着けた女／二葉

以上

限定版グラビア印刷M結集版アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇〇〇円（送50円） 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真集

待望久しく、今回初めて刊行されるM派ばかりの限定版グラビア写真集です。今迄熱心なファンの方々から強く要望されていたのですが、従来の例ではM傾向の需要が極端に細いので、刊行を躊躇しておりました。初の試みとして企画したものであります故、どうか一冊お求め下さい。全部M傾向のものばかり結集しております。

今迄、本誌の男性モデル募集に応じてきた男性モデル諸氏を駆使して、それらM男性が女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを豊富な写真資料によって提供します。いずれも本限定版写真集刊行のために特に撮影したもの、更にM傑作フォトの秘蔵版を収載したもので、未発表の作品ばかりです。印刷部数が限定されており、早くお申込み下さい。一旦売切れになりますと、本集の再版は不可能です。御承知下さい。

内容

○女御主人様の素足の脂を丹念に舌舐めさせて頂く奴隷男。

○女御主人様が御手ずから奴隷男を縛りあげて弄ぶところ。

○飼犬の男に、女御主人が足の股に食物を挟んで与えているところと、そのあとで、足の指を舐めさせているところ。

○首輪をした犬男が、くさりを女御主人様に握られているので、どうにもならず、さんざんに足蹴にされて罵られているところ。

○女御主人様に縛られて、その上浣腸されているM男。

○女御主人様の大きなお尻の上で呻めいている哀れな男の表情。

○女御主人様の激しいムチの下で苦痛に喘ぐ男の恍惚境地。

○二人の女御主人様から、いたぶられる幸福なMモデル志願者。

○女御主人様を背中に乗せて這いずり回る男奴隷。

○女御主人様の飼犬飼育ぶりと調教ぶりABC。

○女御主人様のSぶり発揮と犬男のMぶり発揮。

○女御主人様の豊満な柔肌の重圧に包まれる男奴隷。

等々

☆新しい△緊縛写真△超力作分譲品☆

両手吊りにもがく

大手札二枚一組 三〇〇円
木村洋子 略号「むさ」

頭上に高々と伸した両手首を揃えて括り鴨居に固定すれば、無防備にさらけ出された洋子の女体は、嗜虐者の如何なる魔手からも逃れるすべはなくなってしまう。

生ゴムの猿ぐつわ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村洋子 略号「むこ」

ムンムンと強く匂う生ゴムの臭気を鼻口にいっぱい、無理矢理に吸わされて、ううう、と呻めく洋子嬢の真に迫った生ゴム猿ぐつわに苦しめられる縛られポーズ。

後手吊りのもだえ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村洋子 略号「むれ」

高小手に縛り上げられた後手が鴨居に固定された滑車で、ギリギリと吊り上げられてゆく。次第に足の爪先が床から離れ、洋子嬢のM性が火花を散らす。

強烈縛りにうめく

大手札五枚一組 六〇〇円
木村洋子 略号「むそ」

なよなよとした瘦身に掛った縄がまるで洋子嬢の女体をくびりちぎってしまいそうになる強烈な縛り。マゾと自称する彼女にして初

めて出せる痛々しい雰囲気。

顔面を凌辱される

大手札四枚一組 五〇〇円
木村洋子 略号「むよ」

全身、肌に喰い込むばかり情容赦なく縛り上げられて床に転がされた彼女の顔面が、男の汚れた足の裏で踏みつけられ、足の指で鼻を摘まれなぶられ尽くす。

後手柱宙浮き縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村洋子 略号「むか」

俵を括ったように女体が縄でくびられ柱に括りつけられる。一本棒のように宙に浮き足の爪先が苦痛に伸びて真下を向き、顔面はのけぞって只喘ぐのみ。

大の字逆さ吊り

大手札二枚一組 三〇〇円
増田みゆき 略号「むの」

両足を思いきり大の字に開けて左右の足首に掛けた縄によって、逆さ吊りに吊り下げられたみゆき夫人の、よくぞここまで飼育されたと驚く逆さ大の字吊り二態。

鼻責めに苦悶する

大手札七枚一組 八〇〇円
木村洋子 略号「むる」

ぎゆうと裸身が折れそうになる

まで縄で締めつけておいて、さて痛さにふうふう喘ぐ鼻を、器具で指で、足で、さんさんに責めあげる。洋子も逃げもならず只、口をパクパクさせて為すがまだ。

エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号「やこ」

足の指を見せるのさえ恥しい乙女の身で、高小手はおろか、両足を交叉させられて縄を掛けられ、エビのように締め上げられ足指をくの字に曲げて苦悶する。

股間首縄縦縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やひ」

首縄から股間まで女体を真二つに割る縦縄縛りは、これこそ女性特有の羞恥責めであろうか。まだ充分縄に馴染んでいない百合子嬢は顔を真赤に染めてうつむく。

後手足首連結縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やせ」

百合子御自慢の脚線美を殊更に見る人の目の前にクロース・アップされるように足首を縛り、後手縛りの縄尻と連結させ、逆エビ縛りで女体を開陳させる。

淫らなる開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やす」

まだ幼い胸をきっちり縄掛けされて高小手に悶える百合子が、その両脚を大の字に、八の字に、くの字にさまざまに開いて男の目を挑発する姿態のなまめかしさ。

縄目に悶える裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号「やく」

どちらかと云えば、まだまだ豊満とはいえない百合子の裸身に縄を掛けて、荷造りでもするようにじりじり締めつけると、いやいやと身悶えて縄に抵抗する。

白晒フンドシ着用

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号「やに」

清潔な純白の晒フンドシをきりきりと凛々しく締め込んだ百合子嬢の美しい裸身のさまざまを、殊に双兵にぐっと喰い込んだ晒の見事な有様を中心に組合せた。

相撲マワシ着用

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号「やは」

学生用の相撲マワシを正式に締め込んだ伸びやかに生長した百合子の裸身を、女相撲ファンとマワシ姿の女体を愛される方々のため

先月号の本欄で注文が増えてきたと書いた矢先、大手の取次店から、来月号より一割減数してほしいと言ってきた。理由は返品率が高いとのこと。もともと発行部数の多きを殊更望むわけではないので、それはそれとして、やむを得ないのだが、それにしても直接購読者の数が思うように増加しないのは淋しい。直接購読者がせめて現在の二十倍位あれば採算圏内に入るのだが、現状のように贈呈誌と同数ぐらいでは、とるに足りない。やはり取次店を経て各地の書店で捌いて貰うより仕方がない。



秋立つ日の偶感

編集子

書籍雑誌の販売機構というのは、まことに強力であり又それだけ信頼するに足るものである。このルートに乗らない限り、殊に雑誌のように足の早いものは、一挙に全国的に捌くことはできない。エロダクシオン映画を専門に配給するOPチェーンのような機関を作ったという読者の声もあったが、今のところ、そんな企画は夢想にすぎないようだ。私の住む市には貴誌が見かけないが販売している書店を知らしてくれ、といった便りが各地から次々と舞い込んで来るのも、またやむを得ない

ことだと思ふ。

書店で見掛ければ買うが、その書店に置いてないのだから、欲しくても買えないわけである。本誌のように、曲りなりにも、二十何年かに亘って毎月確実に発行している月刊誌にしたって、直接予約購読の申込みをする人が案外少いのだが、発刊してもすぐ廃刊、改題、住所変更といった目まぐるしく変る雑誌には信頼がおけないから、勢い予約なんてする者は限られていくことだろう。

先日、帝国興信所大阪支社の調査第四部、山根某という名刺を持った調査員が訪れた。依頼主の住所氏名を知らせたら、調査の要項全部を回答してやろうと持ちかけたところ、調査依頼書の氏名の個所だけを伏せて見せて寄こした。癖のある文字と住所で氏名の大体の推測はついたが、氏名を明かさないと回答は拒否しておいた。調べても判らなければ、それでいいのですと、その調査員は不明不詳で押し通すらしい。大金を払って、こんなことを依頼するなんて馬鹿な話ですよ、とその人は暑いさ中を帰って行った。

あつたらしく、執拗に喰いさがる調査員の訪問を受けたことがあった。回答してやるということをした。大の餌にして、彼等興信所の内幕などをさんざん喋らせた挙句、仮空の住所を知らせてやったこともあったが、殆ど時間の無駄に終ることが多いので大体玄関払いにすることにしている。先日の帝国興信所の調査員が来たときは、丁度暇だったので時間潰しに思わず長話をしてしまった。

テレビに出てくる探偵は、尾行したり張り込みをしたり、華々しく活躍するが、興信所なんかは極めて通り一遍の調査をするに過ぎないらしい。だから、登記所へ行って調べたりするようなことはこまめにやるだろうが、官庁へ行って記録を調べるといったことで簡単に判らないような事項についての依頼は無理のようだ。だから本誌寄稿家の住所を知りたいというようなことから、興信所を利用するのは金をドブへ捨てるようなものである。そんなお金があつたら、もう少しなんとか有効な利用方法があると思うのだが、不明不詳の回答書でも、それで一応依頼者の気がすむのであつたら、また何にをかわんやである。

「奇ク」九月号雑誌

河津安春



「奇ク」九月号、例の如く一気に読み終えたと、何やら無性にペンを採りたくなりました。さてと机に向うと、今度はどうした事か、何一つ書く事がありません。それもその筈です。九月号総紙数二三二頁の中で、我等M派を喜ばせるものは、三原寛氏の「断続の空間」二頁、花原竜子さんの「生尿」(この題名は傑作です)三頁、合計五頁でザッオール。嗚呼、我れ又、何をか言わん哉。

愛好する芳野眉美氏も近頃、創作源泉の地熱がやや下降気味の御様子ですし、敬愛する福田久文氏は流行のエッセイに隠れて、「しよぼうげんぞう」を物静かに語り、ジェフリースに思いを托される。かくては我等目途を失えるM派の徒は、何処に縋らん術も非ず、只

あても無く右往左往するばかり。右せんか、「アリアドネ」在りてMの徒を寄せつけず、左せんか、「心傷む遍歴」在りて、これ又厳として門戸を閉ざし、M派を入れず。辛うじて岡田咲子女史の「忘れた人」に、往年の懐しき奇クの薫りをチョッピリ嗅いで往生するの止む無きに至る。せめて「花と蛇」の哀れな犠牲者達の中に、M派得意の心境置換を試みんとすれども、如何なる理由にや、数多、美女群の登場するにも拘らず、全編に張り渡るムンムンたる男臭さは、何やらホモの白い世界を連想させ、鼻を押さえて辟易す。

「奇ク」はもとより天下の大道、人も通れば車も通る。あえて不足を申す訳ではありませんが、どうしてこんな事になってしまったのでしょう。愚見(文字通りの)を申し述べる事を許されるならば、近頃とみに誌上を横行……失礼、誌上を飾る事の多くなつた難解な論文や、痛烈な批判の所為では無いでしょうか。下手な事を書いて、コテンパにやつつけられては堪らないと、尻込みさせる雰囲気があるのでは無いでしょうか。特にM派の諸先生方は、書かれる事とは裏腹に、公開の場における恥辱には堪えられない程、繊細な神経と貴族的なプライドをお持ちのように見受けられますから。さればとて、このままでは、折角我々の為に輝やかしいMへの途を開拓された、沼正三氏を始め、多くの諸先輩に対し申し訳が御座いません。願わくは、M派の諸先生方よ。貴方の崇拜されるミューズの為に、何卒勇気を振るい起して下さい。我等M派の衆生の為に、声高らかに貴方の夢を、多彩な貴方のパラダイスを、絢爛たる貴方のエルドラドを、現実には遂に見出せぬ貴方のエレフォンの世界を、奔放な空想の翼に乗せて歌いあげて下さい。美しくも残忍な永遠の女神の足下に、それを捧げて下さい。驥尾に附して、私も祈ります。

嗚呼、冷酷にして残忍なる女神よ。一顧にして我等を魅了し、一笑すれば忽ち我等を雌伏せしめる美しき女神よ。さては罪無きキューピットを鞭打つ豊麗なるヴィナスよ。サチリスを弄ぶ悪戯なニンフ達よ。寄り来る男、凡てを醜い豚と化す蒼い目の魔女サイケよ。新婚の夜に良人を縛り、鴨居に吊した猛きブルンヒルデよ。大賢アリストテレスを恋の馬となしたフリリスよ。この才無く能無き、市井の一蒼生をして、せめて女神を崇え奉るに足る一片の才能を与え給え。されば卑劣なるこのMの徒は、鼓腹して貴女を讃え、小笛をとって貴女の名を崇め続ける事で御座いましょう。

終りに、没と信じていました『戯文列伝』が、思いがけなく八月号に掲載され、死児に廻り合つたような嬉しさと、盲蛇に怖じず、夢中になつて書いた當時を思い出して、冷い汗が背を流れる思いです。只、気にかかつていましたのは、紛らわしい氏名を用いました為に、諸先生方の御気を悪くするのではないかと云う事でしたが、流石、大人揃いの諸先生の事とて、笑って済まして頂いた様子、ホッとした気持です。

尤も私も決して他意があった訳

雑感

九月号を
読んで

無名子

本誌、九月号の『サロン』の編集子の「この頃の本誌」をよんで「変態十二史」の十二冊で一万二千円はおどろかされた。つい、二三年前は、私は一冊三百円位で、探書したものである。勿論、一揃いという事もあるが、それにしても「特異風俗文献研究」についての資料が極めて僅少であり、有っても高価では益々、新しい風俗文献誌としての本誌の存在は貴重である。小説、告白物と共に、現在では入手困難な、風俗SM資料の紹介も期待したい。ただし、単なる回想や回顧に終らず、先人の研究を現在の視点から取り上げるような執筆態度が望ましい。

所で「私も一言」のおもだか。

しの氏のエッセイは、近頃になかった。ピリッとサンショのきいた投稿だった。「まともに変態的な」の言葉など、この一節だけでも良い意味の諷刺があつて掲載価値ありと考える。そう言えば、かの梅原北明など（昭和初期「風俗出版」のオルガナイザー）は、△変態▽という言葉をよく使用したもので、いまから思うと、パラドックスな反骨精神が、みなぎっていたようだ。あまり変態を売り物にするのも、現状の本誌の場合何んとも言えないが、しかし、おもだか氏の言われるように、もっと、まっとうな変態的な小説、告白もたまには読みたいものである。

では御座いません。永年、諸作を拝見している内に、自然に脳裡に形成されたイメージに、私自身を合せて、痴夢を綴ったに過ぎません。編集長殿にも厚く御礼を申し上げます。昨年の暮れでしたでしょうか、始めてポケットブックが

採用され、嬉しくて夢中で書きました。その時の楽しさは今も忘れる事が出来ません。重ねて御礼を申し上げます。夜乃探郎さん。寛大に笑って頂いて有難う御座います。Sだけでは無いとお言葉、全く同感です。

人間皆、SもあればMもあり、それを偏せずバランスをとった所に社会人があります。奇くも健全なこの社会人の為の雑誌で、色情狂の為に存在しているのでは無い筈です。軽快な大兄の文章のテンポには、非常に教えられる所多く、

今後共、宜しくお願い致します。福田久文さん。偶然の一致と言われて、何だか変な気持です。九月号では、大兄の御作に接することができず、いささか不満を感想にぶちまけてしまいました。お笑い下さい。



大阪城にて

一宮百合子

六月上旬の梅雨前、ひとときの晴間を大阪城見物としやれこみま

した。観光バスのガイドさんの詳しい説明に、つい聞き惚れていまして、天主閣へ上る時間もなくなってしまうました。これはお化粧もしない私の素顔です。いかがでしょうか。

「妊婦写真」を歓迎！

—妊婦ヌードモデルあらわれよ—

瀬 沼 四 郎

七月号の「臨月妻」にひきつづいて、九月号でふたたび、二十三ページに妊婦フォトがカットとしてのせられた。妊婦マニアとしてうれしい限りである。「妊婦写真雑感」と題する、提供者「会津の綾研二氏の文には、くわしいことが記されていないのは残念だが、写真に見る、子を孕んでぶっくりと太く膨満した若い妊婦の腹部の白い裸像は、やはり見たえのあつたものである。おそらく全裸なのであろうが、下腹部をカットされて、上を向いたアゴの線から上の顔は見えない。大きく膨らんでいる妊婦腹の見事なクローズ・アップである。七月号の「臨月妻」が、棒をつかったかなり複雑な縛り方で、妊娠した巨大な腹部を、思い切り前に突き出させているのにくらべて、同じく縛られているけれども、ほとんど正面から、ぶつくりと太く大きくなった妖しいまでに白い腹部の、なまなましい肉感が、よく写しとられている。一九

六三年三月号で最初に分譲が発表された、児玉昌子さんの写真の中にこれと似たような感じのものがあつた。もっとも児玉さんのものは、ネガが相当損傷しているらしく、不鮮明であつたけども。しかし、印画紙ではなく、誌上にカットがわりに印刷されたものでは、シャープな描写は、とうてい望みえない。

十二ページの「編集部だより」によれば、「八妊婦フォトV」についても、誌上に掲載以来、月を追って新しい写真を送って来られるので有難い」とあり、妊婦マニアとして、垂涎おくあたわざるものがある。もちろん本人のプライバシーということがあるが、出来る限り誌上にも発表し、出来たら分譲してほしいものである。さらに、同じページに、「八妊婦フォトV」といえば、今までのところ、志望者は数件あつたのだが、写真撮影は実現していない」というのは一体どういうことだろうか。辻

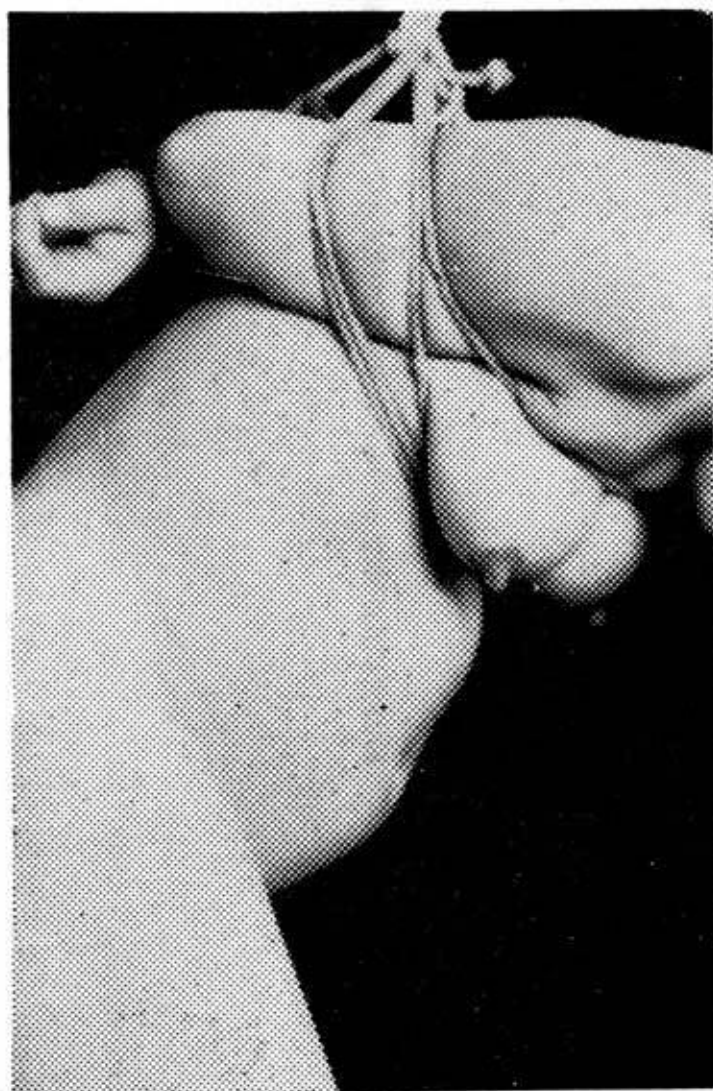
村氏はじめ、意欲的なカメラマンによる精巧な妊婦フォトが、一日も早く分譲されんことを望む。今月も八十六ページにのっている増田夫妻のような熱心なマニアによって、本格的な妊婦フォトがどんどん撮られるようにならないものだろうか。増田みゆき夫人が妊娠されたら、かねての約束どおり、それが実現するわけである。増田氏は妊婦の「縛り」を撮ると言っておられるが、小生としては、同時に、山原嬢の刺青のように、観賞用の縛りなしのものもほしい。

妊婦フォト

出来たらやはり、天然色のものも分譲してほしい。みゆき夫人の早い妊娠を待ちこがれているのである。

七月号の投稿で、「分娩ショウ」についてふれたが、ショウとして、非常に特異なものであつても、映画などでは先例もあり、可能であるような気がする。また腹の中の胎児中心にはあるが、週刊誌——たとえば「女性自身」——などの医学的な記事では、妊娠——分娩の過程をとりあつた写真が、かなりのせられることがある。

綾 研二（会津）提供





残暑御見舞い申し上げます

—休筆の弁もふくめて—

橘 行 司 子

十月号。——誌上では初秋でしょうが、この地上ではまだ残暑と
考え、先ずもって御見舞い申し上げます。

いずれも、かなり充実した内容のものである。最近話題になったマ
スターズ博士の「人間の性的反応」
の紹介をみると、被検者の中には、
かなりの数の妊婦が含まれている
ようである。よく気をつけて見る
と、妊婦にかんする資料は、ごく
断片的だが、あちこちにあるわけ
だ。もちろんそういうものでは、
小生のようなマニアには、ごく漠
然とした想像の材料を与えるだけ
である。しっかりした、鮮明な妊
婦ヌードの写真資料が是非ほしい
わけだ。そういうものは、今のと

ころ、奇クだけにしか望みえない
ものであることは事実である。ス
トリップなどでも、十分にひまに
あかせて見て歩けば、ある程度、
妊娠した女のハダカが見られるの
かも知れないが、第一それだけの
ひまがないし、かりにあって、
劇場の方でも、妊娠した女は、な
るべく出さないようにしているに
ちがいないのである。結局、われ
われ妊婦マニアとしては、もっぱ
ら奇クだけに、最後の期待をかけ
ざるを得ないわけである。
ヒノエウマの迷信があるといっ

ても、今年はお産がまったくな
なるといふわけではもちろんない
から、近所の若い奥さんなんかで
も、かなり妊娠して大きな腹をし
ている人がいた。ああいう妊婦に
たのんで、どこかヌード・スタジ
オのようなところを借りて、全裸
の妊婦写真をジャンジャンとって
みたいものだ、といつも思ってい
たが、まさかそう簡単に言い出せ
る性質のことではないし、会うた
びに横目で見て、妊娠月数とも
にどんどん大きくなる腹の太さを
想像によって測っているうちに、

つぎつぎに産まれてしまふ。着衣
が薄くなりはじめた五月ごろか
ら、これは毎年の出来ごとなので
ある。もちろん、社会人として、痴
漢のような行動はとれないから、
着衣の妊婦を目で見たい想像し、た
のしみだけである。それだけにい
つも惜しい惜しいと思っている。
若い妊婦の、アッこれは！と思う
ような、すごい腹に出くわすこと
もある。そのようなときには、こ
とさらに、妊婦マニアとして残念
に思うのである。

七月号より『KK文芸時評』を
休筆のやむなきに至りまして、ま
ことに長らく御愛読いただきまし
た大方読者の方々に申しわけござ
いませぬ。家庭的事情よりくる過
労で身心すぐれず、時評という大
任がはたされそうもなく、無理に
書いても、ぶざまな内容ではかえ
って貴重な紙面を汚すことをおそ
れた結果、思い切ってペンを休ま
せた次第です。休筆の際は原稿用
紙に、その御挨拶を執筆するの
もおくうで、編集部に走り書のお
ガキ一枚を投じ、よろしくとお願
いした位で、実に粗略すぎておわ
びの申し上げようもございませ

ん。しかも休筆以来、心ある方々
より、本文または読者通信などで、
お声をちょうだいして、本当に感
謝の言葉も、どう表現してよいか
判らない位です。ふり返って見ま
すと、見る雑誌より読む雑誌への
激動期、ようやく読める雑誌に脱
皮と楽しい声なきこえる時まで、
変らず軍配を天にむけ、種々な思
い出で一入です。本来ならばお言
葉をいただきました御尊名を上げ
させてもらって、それぞれ御挨拶
する所ですが、この程度の執筆も
思うにまかせぬ現状ですので、簡
単ながら失礼させて頂きます。

夫婦SMプレーに寄せて

新宮明夫

連日三五度を越えるうだるような暑さが続きます。しばらく御無沙汰いたしました。奇クの皆様お変わりありませんか。七月号で辻村氏のSM対談、カメラハントで私達夫婦のSM生活の一端を紹介いただいたのですが、私達夫婦が辻村氏の目には本当にあのよう映ったのかと少々面映い思いで何度も妻と読み返しました。

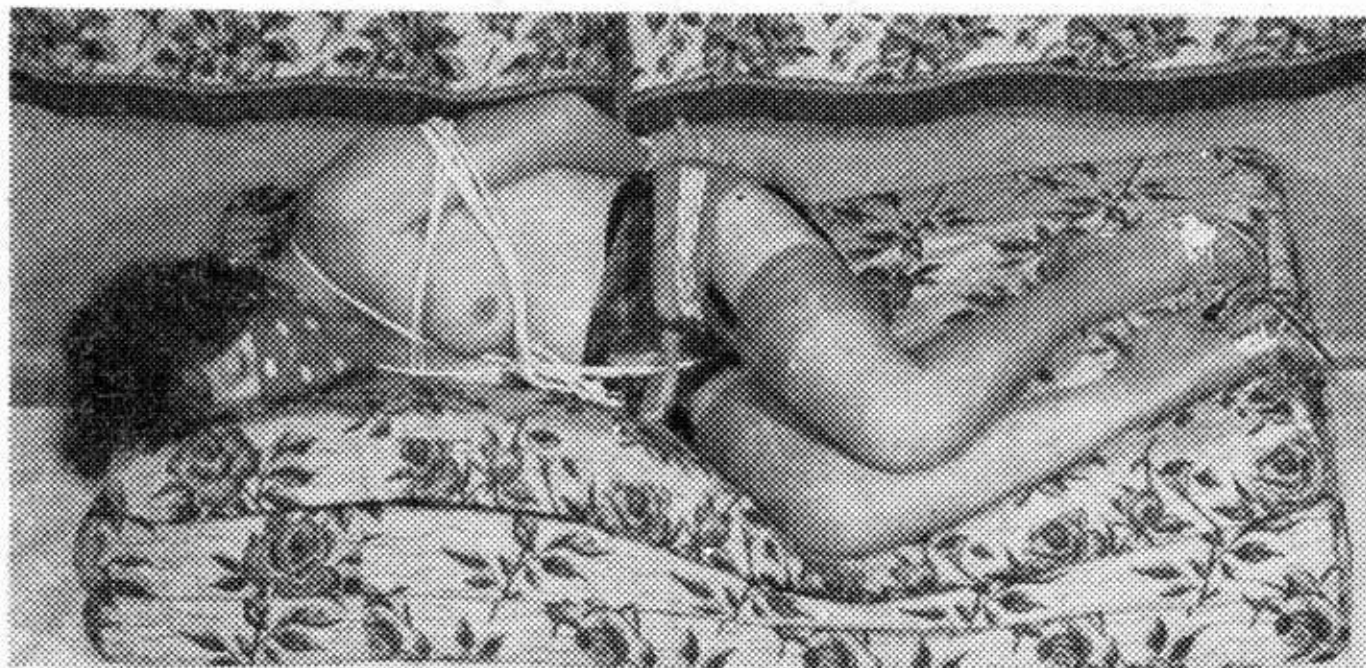
過去七、八年の私達のSM生活ですが奇クを頼りに夫婦だけの秘密として楽しんでた私が奇クのグラビヤに突然夫婦のSMフォトを投稿してからもう三年以上、その間多くの御夫婦が、その作品を發表されるようになり、読者にも好評を得ているようで心から嬉しく思い、この方面の開拓者とひそかに自負しています。しかし多くの読者の中には風俗文献誌である奇クにプライベートな作品の掲載を苦々しく思っておられる方もあるかと思いますが、私達の心の生活に奇クが果している役割りを考

えますと、あながち無意義とは思えないと思います。

私としても従来、夫婦の場合は、その夫婦のみの間でひそかにエンジョイすべきもの、第三者の前に公開すべきでないという考えを持ち続けて参りました。しかしながら夫婦だけのプレーには限界があります。そして閉鎖はマンネリを生みます。夫婦生活に倦怠期があると同様。そこに奇クが存在価値があると思います。

勿論、風俗文献誌という大義名分は必要でしょう。しかし総べてメカニズムで片付けられる現代生活の中で私は奇クにその憩いの場を求めるのです。

私はこの夏休みを利用して奇クを通じて知合った北陸路のある読者のお宅へ夫婦でお邪魔することになり



〈提供〉

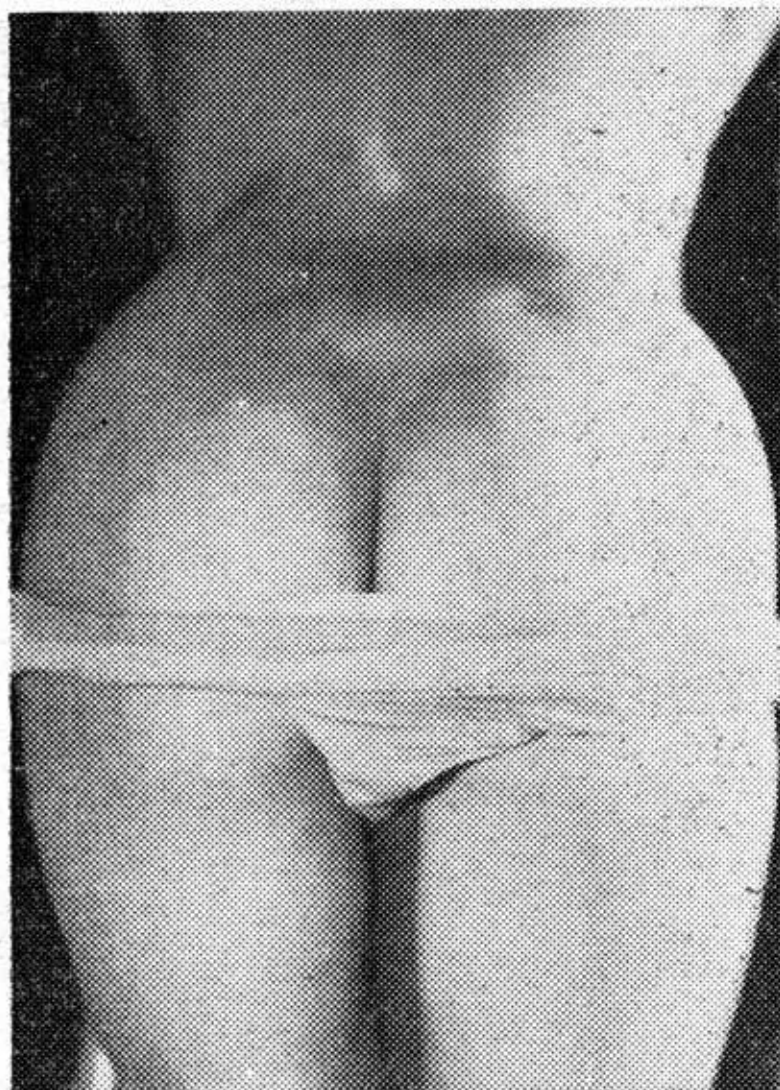
須磨松男

代理部だより

○九月号に広告しました通り、アルバム美しき縛しめ第十集「責められる美女百態」略号A美10Vは七月二十五日に完成、発送を開始しました。申込者が極めて多く幸先よいスタートを切りましたが、A美3V/A美6Vと同様、売切れも間近いと思われまますので、せいぜいお早くお申込み下さい。

○美しき縛しめ第九集「革具に拘束される女」略号A美9Vは八月五日に完成、御予約の方には早速発送申上げました。引続いて順調にお申込が増えております。

○初めての試みとしてのM版グラビア印刷限定版写真集、Mフォトオンパレード「女王様に飼育される日々」略号A M特Vは、八月二十日完成の予定ですので、局留にて御予約の方は、二十五日にお受取りになれると思います。只今までの所予約数は僅少ですが、完成と共に漸次増加するものと考えております。印刷部数はA美しき縛しめV各集と比較して若干減数はいたしました。それでも尚且つ捌けないようでしたら、企画中の



フオト「豊 臀」

無 名 子

キヤビネ版二葉の巨大な女性の
臀部二葉の中の一葉、七月号に引
続いて紹介いたします。

ました。勿論この地方を知らない
私達夫婦の観光旅行ともいえま
す。この旅行に私達が踏み切った
動機は、やはり二組の夫婦を結び
つけていた二年有余のSM文通に
外なりません。私達は二つの部屋
に別れ、お互いの妻を全裸にして
軽く後手に縛った上、その上に浴
衣を着せかけて交換し、それぞれ

の部屋でプレーフオトの撮影、或
は女二人の連縛等を予定しており
ます。

この春、辻村氏宅を訪問して奥
様に御迷惑をおかけし、今また遠
く北陸路へ私をかりたてるのもS
Mのムードに酔っているのかも知
れません。しかしこのようなこと
は双方が心から信頼し合わねば到

底実現不可能なことであり、この
ようなプランについては読者の皆
様の間でも、いろいろ御意見があ
ることと思います。

帰宅すれば、その経過を簡単に報
告する心算でありますから、是非
御批判を仰ぎたいものと考えてお
ります。

△短歌▽

「股間縛り」

高 村 初 子

思はずうめきをあげてうずく
まる肌を喰いこむ股間縛りに
羞かしく肌にくいいる一すじの
股間の責めに身をもみあえぐ
電撃のごとき羞恥にみもだえぬ
下腹部をわる縄を引かれて
一すじの縄にはあれど羞かしく
股間にくいこむいましめに泣く
ゆくりなく縄のせめぎにうめき
つつうずくまるのみ鞭うたるれど
肉体をたてにさいなむいましめ
の痛さにもだえうずくまるのみ
後手の縄尻深く肌をわりたて縄
に泣くおみな子われは
歩きたび胸あつくしてただうめ
くこの心ねを君は知らずや

M版の第二弾を中止して、印画紙
焼付のものに変更いたします。

○既に度々お断りしました通りE
組百集B組五十集は分譲打ちりに
なり最近号では広告しております
のに、旧号の広告によってのお
申込みがあとを絶ちません。少く
とも最近六カ月以内の新しい雑誌
に広告した分譲品目録によって、
お申込み願います。

○局留にて郵便物を受領される方
々について、近頃は極めてスムー
スに受渡し頂いておりますが、中
には用件があつて受取りに行けな
かったから再送せよというお申出
の方もあります。再送の際は必ず
切手にて△送料△をお送り願いま
す。余った切手は郵便物に封入し
てお返えしいたします。

○御注文書の中に御住所の書いて
ないもの、お名前の書いてないも
の、局留の指定があつても局名の
書いてないもの等が相変らずござ
います。それから、△略号△の書
いていないものは発送に大変手間
どりますから、必ず△略号△を御
明記願います。尚、「花と蛇」の
連載小説所載の既刊号は、別項に
掲載しておきますから、雑誌では
何年何月号と御指定の上、御注文
下さるようお願いいたします。

サロン展望台

露出秘願の女 目出鯛三

私の友人で産婦人科の病院を開業しているのが居る。余り上等でない大学の医学部を、しかもドン尻に近い成績で卒業、自らヤブを名のっている男だが、不思議と病院は繁昌している。場所はある私鉄沿線の高級住宅街、ネコがくしやみをしたからと云って自家用車にのせて都心の有名病院にやって来る人種の住んでいる所。

そういう環境の中で、お世辞にもきれいと云えない、ちっぽけなこの男の病院がはやるんだから判らない。先週の土曜日、例によって患者を追放り出して府中の競馬に来てたこの男とバッタリあった時、其の訳を聞いてみた。すると「病氣じゃなくて、充分時間をかけて、ゆっくりとみてやればいいのさ」と云う。どこをみるのだった？ この男、産婦人科だぜ。「要するに彼女たちはアソコをみて貰いたいのだ。若い人より中年、貧乏人より金持の方が、この傾向が強いね」と、これは八東京スポーツ／＼七月六日付「芸能欄」に載せられた

『医者』アソコを見せたがる金持のおくさん」という記事。

何をかくそう、これこそ「露出願望」のいつわりのない事実を如実に物語っているのではなからうか。してみると、裸体美を、又は裸体を見世物とするストリップパーは、まぎれもない芸術或は芸術美として考えても支障ない様に思われる。

裸踊りなどなんと下品で淫猥だと柳眉を逆立てる御人婦方よ、今一度あなたの胸の奥底に、ストリップパーも同然の、もしくはそれ以上に赤裸な願望が無意識の中にあるはしないであろうかと。

スパンコールとバタフライでカモフラージュした踊娘のはちきれるばかりに充実した肉体美には、下品で淫靡以前の「美」が存在していることを男性の多くは認めているのだ。たとえ、生れたままの姿態であっても、女体の美しさは決して淫靡でもワイセツでもない筈である。さて、横道へそれてしまひそうだから、ストリップ談義はこれ位にしておこう。

すでに前回、保藤久氏が紹介ずみの高橋鉄氏の「アブラぶ」の第一章「女性にひそむ露出欲」に採り上げられている。

寝る時のネマキはシャネルの5番だけよと答えて世界中の男共を悩ませたマリリン・モンローは、死を賭したまま素ッ裸で昇天し、彼女の正直さを証明していった。と、そして教義が高い程、裸体でのベッド生活を愉しむことは、キンゼイ博士もリポートしていると書かれている。しかも、ふだんから「文明の抑圧」を受けている裸を露出したい願望が、自分だけが特定のパートナーとだけの場合にのみ満足されるのだとも。

従って新聞記事の金持の奥さんたちが自分の願望を満たしたために医者の目前で全てを公開するということとは、自分だけより特定のパートナー、すなわち（夫ではなく）医者という社会的に特定の相手に最も恥しい部分を覗かせることによって、見られたい見せたいという露出欲を満足させるためだということが判然とするのではな

からうか。要は誰に見せても見られても良いのであるが、実際的には何かと社会的、道徳的制約上、医者を選定したにすぎないことは申すまでもないことになる。従って、その気になればストリップパーと何ら心理的には変わるところはないことも同様である。

更にレポートは、婦人科医、泌尿科医、神経科医を訪れるクランケの中には、露出の秘願を叶えるために通ってくるケースがすくなくない。そうしたタイプだと判ったら「しげしげと丹念に内診してやらなければならぬ」というのが常識である。又医師があつさりとは扱ふと彼女たちは恨みをもつので心の病気になる、と……。

それにも増して彼女達の露出願望がいかに微妙な秘願であるかということがつけ加えられている。婦人科医に内診して貰う時、彼女たちは診察台の上で花の様な下穿きを脱いでも尚もじもと内腿の筋肉をけいれんさせているが、次に――医師がどこへも触れもしないのに、うすい花弁も透明な前庭腺液で濡れそぼち全身をくねらせ、まるで人妻のアクメのような状態を呈することが多い――と。ああ、何をかくそう。僕は医師



「僕のイメージ画集」

室井亜砂路画

手記

和 トジの本から

谷 久子

私がSMに興味を持つようになったのは二十の時でした。住込みで働いていたので休みの日、久しぶりに姉のアパートへ遊びに行っ

たところ、姉がいなかったのか雑誌でもないかと思ひ洋服ダンスを開けました。二、三冊の平凡に挟まれて和トジの本が二冊あり

の立場がうらやましい。もし僕がそういう立場に置かれたら、僕は嬉しくて、そうした患者を心ゆくまで診察して差し上げたい。しか

も診察だけでは不満とあれば、味覚……で始末してあげよう。勿論、診察料は不要、どうしてもおっしゃるならば、あなたの

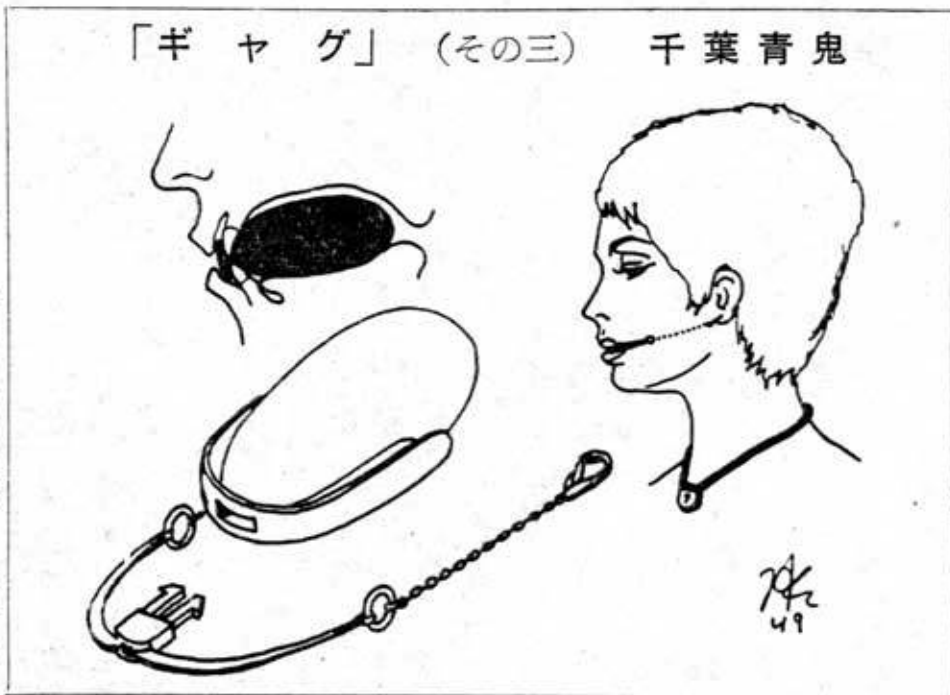
花の下穿をプレゼントして頂くだけで結構ですと。あなたが見せたいのなら、僕も見たいし味わいたい、更に嗅ぎたいのですと。

そろそろ、僕のチャンネルが変調をきたしたようです。この哀れな独身男の秘願をききとどけて下さる女性どうぞお知らせ下さい。

胸がドキドキしましたけれど、恐いもの見たさで次を見たのですが、遊女かしら、日本髪のかいりな着物をきた人が後手に柱につながら、老婆に青竹で叩かれてるところでした。何か別の世界でものぞいたようで、胸がわくわくしましたが、姉が帰ってきたので、そっと元の所へ返えして、知らぬ顔をしていました。夜になって蒲団の中へ入ってか

ら、ヒル間のあの絵が目に見え、寝つかれませんでした。自分がまるで、あの絵の主人公になったような気で胸が、わくわくするのでした。

「ギャグ」(その三) 千葉青鬼





わ が 独 白

福田 久 文

わが独白——主題の無残さと好みの違いを超えて愛読できるのはお人柄と学殖と文才による。小説新解体新書のような力作をものされて超然としておられるその孤高の風貌は素晴らしい(以上高野氏)持てあます時間があれば四百字詰十枚ほどでこの人の考えと感情とにメスを入れてみたい。ただし南米から帰えれらてから(以上黒田氏)素直な分りやすい文体と挿入されている雪崎氏提供の挿絵は羨望に価する(以上奮斗志さん)せめて橋氏がお休みの間だけでも思存分本文で鋭い批評を聴かせて頂けないであろうか(以上天道氏宗像氏)三原氏の作品についてわ

たしには強い葡萄酒。ご主人様なる人がこの文才のある若い婦人に古典の読書を強制してくれるといののだが(以上山中さん)髪の毛をちぢらせ、着物をよう着ず、昼寝を好み、子供に勉強を強制するこんな厭な女のいなかった頃こそ古い良い時代であったといえる。(以上牧氏)充分理解したもの、本誌の必要としておられるもの、それを分りやすく書いておられる。まさに評論の師表である。価値は特異なものにこそより多く宿るものだ(以上おもだかさん)M派希望のグラビア特集が出るのであるが「なぜ、男側から見た対象は、常に若く美しい女性でなければなら

サロシ楽我記

(第二十八回)

辻村 隆

かねての約束通り、七月中旬、河内カルメンの小原真澄と一泊のドライブをした。一泊だからかなり成果を挙げる予定が、二人きりなので遊んでしまつて、案外フォトは少なかつた。それにしても、近頃のようにこうレジャーだバカンスだ、釣りだと辺境まで人が出歩いては、到底オチオチ野外のプレイも出来なくなつた。志摩半島で、僅かの時間を最大限に活用して何とかモノにしたが、これとてもいつ人が現われやしないかとヒヤヒヤものである。野外のプレイは、これからいよいよ難かしくなるだろう。志摩よりの帰途マスキの希望で、それより数日後ミナミで会い、食後旅館でかなり多くSMフォトを撮つたが、もうマスキもこれ以上、続々として発表するものもどうかと思うので、都合によつては、奇クの分譲フォトにでもと考えているが、気持の弾むまま撮つたので、十中八九まで分譲不可能のカットものが多く、どうやら私蔵版になりそうである。

× × ×

糖尿病になる以前から、私は余りアルサロやキャバレーなどを好まぬタチであつて、ついぞ出掛けないが、知友の東京都のS氏来訪され是非との仰せで、一夜お供をした。ミナミのマンモスキャバレーだが、お互いに酔う程に、SMの談論風発し、ホステスの委細かまわず、大声で喋りまくつていた処、私についたホステスが、おハナシがあるから、勤めが終つてから、少しの間、つき合つてほしいという。酒の上の助平心で応諾し、S氏を新大阪駅まで送つて、引返して時間をつぶし、午後十一時その人をキャバレーの裏出口で待つた。そして数日後思いがけぬカメラ・ハントとなつたが、彼女二十六才、結婚の経験あり、容姿は歌手の二宮ゆき子にそっくりの美人である。余り精しく書くとかメラ・ハントとダブるので紹介程度で終るが、来月号で発表します。ちなみにその人の名は、飯塚千鶴子。ミナミのマンモスキャバレーFの人です。

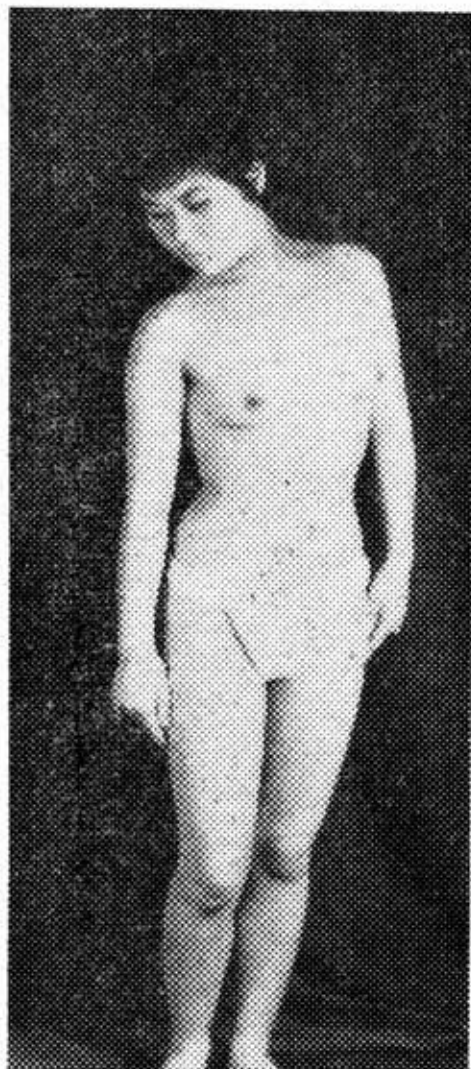


ないか」と喝破された夜乃氏に共鳴される方々のために、せめて一葉の例外のまじっていることを願う。責め手をいいますこし年輩の婦人にしてほしいという希望は十数年前から時々誌上に現れている。(以上編集部)なまえきすが高級食品であるという命題の論証解説は明快でした。婦人がしばしば論評において男子を凌駕しているのは奇クの特色ですから、別に珍らしいことはないので、その戴かせ法が周到かつ優雅なものには、すこし感嘆しました。詩的発想と数学的周到さの見事な綜合です。あなたの効用所見は学位希求病の医師や製薬会社の技師を喜ばせるかも知れませんが、S女性のいやらしさやおつむの弱さ加減のあまり感じられないあなたのような人から直接頂くのでは、たぶん、なまえきすの味などどうでもよいかも知れないという懸念が、あなたの説

得力にもかかわらず、まだなまえきすをすっかり信じるのができないのは遺憾です。が、しかし、なまえきすを飲むのは内科的疾患ではないかといったり、婦人と猿を一緒にして論じたり、S女性を気持の悪い幽霊扱いするのは、今後なるべく慎みます。といっても、逢いたい、飲みたいというのは毛頭ありませんから念のため付記します。ご健筆を期待しています(以上花原さん)酷暑、宴会人事異動、低血圧、不眠症、腺病質、幾何学、仏典、親戚付き合い、六つと三つの娘。何と邪魔が多いことか。まるで編集長なみだ。暇があり過ぎる保藤氏やアリアドネのように健康な黒淵氏を羨む。自宅へ押しかけてくる業者にはサジストになることを決意する(以上福田)封を切るや否や目次をみるが、お名前がないと寂しい。(以上河津氏)

前述した東京のS氏は、私の大の支持者である。私のカメラ・ハントの場合、大体近畿一円に限定されているが、東京へこられたら、一兩日の滞在中に、カメラ・ハントになる女性五、六人位は紹介して見せましようと思有る。トルコ娘、おさわりバーの女、ガイド・ガール等S氏の仰有るのは、どうもどれもこれもいささか玄人めいた女性が多く、ヒモもつきかねない様な女達許りであるが、それだけに話もし易いと思える。私の場合は箕田氏の紹介や又文通等によって真のSMのシロウト(?)女性の場合が多いので、一寸意図が違ふ。しかし前述のようにホステスといっても、飯塚千鶴子さんのような素晴らしい人も偶には存在するのだから、一概に玄人は危険

とばかりも云い切れない。近いうちに上京して、東京女性を撮りたい野望に燃えている。麒麟児久氏の切望しておられる沖村レイ子の分譲フォトについて。実は私も彼女のイメージ忘れ難く、あれから二度許り便り出したのですが、返事はありましたが、今の処来阪の可能性少なく、近々結婚するそうです。彼女のフォトは掲載分とは別にかなりとりましたが、私流の好みで、お分け出来ないシロモノ許りです。唯、結婚前には是非もう一度私に逢いたいといって来ておられますので、その節は必ず分譲的フォトをモノしますから、長い目でお待ち下さい。麒麟児氏の御支援本当に有難く思っております。



【Mレポート】

△女の痴漢▽その他

高岡久人

1

東京スポーツの「チャンネルゼロ八」という欄は短文ではあります、時々マニア向きの記事が出ています。七月五日付の分には△女の痴漢▽と題して、筆者の友人が終電間近い国電に乗っていたら、三十才前後のOL風の女性四人に鶯谷で下ろされ、上野公園へつれ込まれて、いきなり押し倒され手足を押えてトルコ風呂みたいな事を交代でやられたという話が載っていたが、美青年が四人の女に自由にされる処など、如何にもM的だと思ふ。

トルコ風呂みたいな事とは、どんな事かよく判らないが、その際女性側はやろうと思えばどんな事でも出来た筈です。顔面騎乗でもネクタールでも、トルコ風呂では交渉次第ではやって呉れる様だから、あながち普通のおスベだけでは無かったかも知れないが、そのところはよく判らない。

2

五月の末頃、トルコ嬢が二人共

同で西武沿線の某所にデラックスなアパートを新築した話。その財源は専らおスベでは無く、独特の若返り療法とかで、大いに初老中老の紳士達の抛金に依るものらしく、今でもそのアパートには、「若返り療法致します」との看板が出ているそう。

その若返り療法とは、女性ホルモンを吸収させる事だそう。仲々効果があるとの事。女性ホルモンといえば、ネクタールの中には相当量の女性ホルモンが含まれている事は文献に見えている事であるが、飲ませて呉れるのかどうか、そこまでは書いて無い。

3

「男女対抗大舌戦」この欄の筆者が都内のある喫茶店に入った処、数人の学生風の若い男女が集って男女対抗大舌戦と書いた紙を前にして何やら相談していた。

「今時珍らしく弁論大会でもやるのか、感心に」と思っていた処、聞くともなしに聞いている中に、それで無い事が判った。

「女王様君臨す」

春川ナオミ画



同数の男女が一室に集り、各男女一組宛になって競技者と審査員になり、競技者は舌のみを使用し審査員の性的興奮を高める様努力し一定時間を経過すれば順次交代して行き、最後に得点の最も多い者が優勝と決まる。競技者は審査員という異性の快楽の道具となり審査員は参会者の異性の全員から順次交代で舌の奉仕を受けて、これを採点するわけである。

この筆者は頗る慨嘆していたが私なら是非特別参加を申込みたい処である。而し、この「ゼロ八」という欄は地方版だけで都内版には無いらしい事が、先日上京した折に判った。一寸古いけれど、昨年には矢張りこの欄に渋谷辺りのバーや喫茶店で三十才前後の有閑マダムやオールドルOLのグループがシスターボーイ風の男達と落合、その後舌を使っての奉仕を受けてなにかしのお小遣いを渡していた話もありました。



「女斗図」 「乳房責」

原口慎一

彼女達の述懐に依ると、妊娠の心配が無く、病気の方もその率はずっと低いとか、中にはトイレまでついて来る可愛い坊やがいる様で、私はトイレで何をするのか、気がかりです。

4

七月十二日発行の八週刊現代Vには京都の舌技名人の話がありま

したが、この人にかかる数年間旦那様で充分な満足感が味わえず半ば不感症かと諦めていた御婦人が生れて初めての絶頂感を味わった、生半可な技巧にはびくともしない筈の芸妓さんから逆に玉代を出すからと追いかけて回されたり、兎に角、その技術は大したものらしい。女性を喜ばせる事、御奉仕

申し上げる事に半生をかけたその態度、正に我々M族の模範とするに足るものと思います。

5

七月十三日の八中スポーツVに依りますと、民芸のベテラン女優佐々木すみ子さんが今稽古中の「悲しみの酒場のバラード」(二十六日の新宿紀伊国屋ホール)で

身長一米八七釐の男まさりの大女に扮し、男性相手に五分近い格闘シーンを演じているという記事と共に男優の腹の上に勇ましく跨って押さえ込んでいる写真が出ていました。地方にいる悲しさ、一寸観に出るといふわけにもゆきません。誰か観られた方は、御感想をどうぞ。

毎度結構な女斗美、女相撲のフットを分譲下さいまして有難うございます。相撲の女性の肉体美を見事に表現してあるものと感心しております。しかし、小生はどちらかというと、やはり女性は、ここ一本勝負という時は急所責めで対決するのが普通と存じます。そこで暇を見て決斗図を作って娛んでいます。大変拙い絵で恐縮ですが、一応バイクの様なものを着用させました。

最初から坐り相撲の乳房責めということに致します。先ず乳首を掴み上げて口で攻撃させる方式と致します。ここに掲げました二葉は、いずれも緒戦の取組みです。

若い娘同志の喧嘩ですと、下着を先に脱がせた方が勝つようなことが多いので、相手のバイクをむしり取った方が勝ちということで、図8ま



で対手を一方的に押さえ込んでバイクを高々と掲げて勝名乗りを挙げるところまで、順を追って書いてみました。

映画通信

東山映史

最近の縛り責め映画から

独立プロ作品、東映、大映などにも仲々迫力のあるすさまじい縛り責め映画がある。

東映の遊廊の残虐さを描いた藤泰監督の「骨までしゃぶる」も、廊から逃亡の遊女の吊し責めなどですさまじかった。男姿となつて逃亡し警察へかけ込む寸前に捕えられる。

荒縄で後手にがっちり緊縛されそして吊し上げられる。後手までも。苦痛にゆがむ顔がクロージング・アップされる。ヒロインの桜町弘子の菊奴も折檻部屋にほり込まれ、食事責めにあう遊女に食物を持ってゆき、発見されて、水平縛りの晒し責めにあう。

ほうきに両手をひろげて縛られ頭に商売道具の枕をヒモで縛られ台所で坐らされているユーモラスな格好だが、彼女の反抗的な姿は迫力がある。

同じ遊女ものでエロダクションの「夜ひらく花」これも明治の京都の遊廊「橋本」の娼妓の物語。加山恵子の遊女お絹が京大生に連

れ出されるが発見されて引き戻され腰巻一枚の半裸にされ、棒でピシピン打たれる。水揚げのシーンなど、サジスチックだった。

最近の白眉は小森白監督の「私は見られた」「残酷刑罰拷問史」の監督に「赤いしこき」の香取環の女探偵の品行調査から、麻薬捜査に乗り出し、女007ばりの活躍をするが、遂に捕えられる。両手をベッドのフチに縛りつけられ責められ、おかされる。

地下の密室でのシュミーズ一枚で豊かな乳房の上を太縄で縛られ身もだえするシーンなど、たまらない。また、彼女の助手が半裸に

新東宝 「女奴隷船」



むかれ、脚立の上にはりわたされた上で両手両足を開いて縛られ、ローソク責めにあう。

グラマー松井康子も出演するが裏切を発見され、簡単に消音ピストルで殺される。その豊かな身体

編集部だより

○団鬼六氏から通信を早く貰っておきながら紹介するのを忘れていたのだが、続「花と蛇」の映画化の企画で出来上がった八骨まで縛ってVという映画が、只今各地で上映されている。もっとも内容は原作に忠実でないと原作者シナリオライターである団氏が最初から断っておられるので、お含みの上御観覧頂きたい。しかし題名通り若い女性の縛りがふんだんにありそうなので、お暇を見てのぞかれても失望されないと思う。

○辻村隆氏宅を訪問された増田喜代司氏の言によると、まゆみ夫人遂に待望の妊娠された由。来年一月上旬出産予定とのこと。すでに喜代司氏が記録写真の撮影を始めたということだが、いずれ辻村氏のカメラ・ハントとして誌上で詳細な各月の記録が報告されることだろう。分譲フォトとして登場する可能性もあるわけだ。増田夫妻のご多幸を祈る。

○八妊婦Vといえ、この欄で度々お願いした甲斐があつて、妊婦フォトの寄稿が次々とあり、更に

短信往来

編集部への要望

佐保 伸

私は三十九才になる男性です。年齢が示す様に丁度青年期を戦争中や戦後の混乱期に過したため、良い読み物などには全く恵まれていなかったが、先日偶然貴誌を購入する機会があり、それ以来、完全に貴誌の魅力にとりつかれてしまいました。

中には、初めての私にとって、とても難しい内容を述べているものもありますが、花と蛇Vには全く驚嘆してしまいました。

私の心のどこかに潤いのない隙間のあいだに感じを永らく抱いていたのですが、その原因が自覚

を責めてもらいたかった。その松井康子も「花と蛇」の作者団鬼六氏の脚本「魔性の人妻」で、山中の白痴の男の妻にされ、昔の恋人にあい、その弟や妹に吊し責めに

あう。

パンティ一枚、また腰巻一枚にされ、前縛りにされ、吊し上げられピシピシ打たれる。責めるのが、これも被虐女優の橘桂子とい

出来た思いがします。人間生活や社会生活の一部には、この種の読み物が、どうしても必要なのだと思います。

文中では美貌の夫人や令嬢達が登場し、これに悪役の男女が責めを加え、更にこれを、まわりを取りかこむ観客に見せるという内容であるが、女を最も女らしく見せるはずかしめを、男の心の中には少しはあるであろう。女をそうしてみたいという気持とを作中で実現して戴きたい気持です。

九月号で続篇の二十一回ですが現在までの分を単行本として頒布して下さるか、或は連載ものであるので途中で区切るわけには行かないというのなら、せめて前編までの分についてでも刊行して頂きたいものと思います。

色々な都合や仕事もお忙しいことと思いますが、途中から読者となった者のことを考えると、編集

うのも面白い。真白い脂肪ばかりする身体が吊し上げられ、責められる。あきらめ切った顔、苦痛にゆがむ顔。エロダクシオン作品は楽しい。

部には是非実現して下さい様に望むと共に、作者にも益々御健斗、御発展を、衷心から期待する次第であります。

又、瀬沼四郎氏の「臨月妻に感激！」の中に分婉シヨウなどというものがあってもよい様な気がする。この意見が載っていました。これには私も全く同感で、分婉こそは女性のさだめであり、人類にとって最も厳粛な生理です。この様なシヨウの実現又は作品を心から願うものであります。

△編集部よりVこの方は三十九年五月に発行した臨時増刊号「花と蛇」特集号のことを御存じないようなのですが、現在の状況下では特写グラビアフォトや四馬孝画の△花と蛇V写真集、口絵集を収めた特集号は出来ませんので、文章だけでも刊行したいと思っています。作者と打合せの上、いずれ誌上で発表します。

妊婦フォト撮影の志願者が協力を申出られたのには、全く感謝にたえない。しかし最近便りを頂いたのは九州と東北で、地理的に出向けないのが、まことに残念。御主人のカメラによって記録されることになれば、或は一部誌上を飾ることになるかもしれない。

○編集部に対して単行本や雑誌或は貴重なコレクションの寄贈下さる方が多いので、この欄で厚くお礼の言葉を述べさせて頂く。最近多数の切抜き緊縛写真ノート十冊分をお送り下さった方。小包には滋賀県栗東町とだけしか書いてなかった故誌上でお礼申し上げます。

○今月号から愈々値上げ増頁に踏み切った。グラビア頁再開については、具体的にグラビア頁のレイアウトまで作って頭が痛くなるほど検討したが、只今のところ、時期尚早として見送ることにした。読者の方からの通信を見ても、本文増頁の要望の方が多いようだ。○本誌の巻頭に△本誌の信条Vとして自肅態度を明らかにしている通り、内容については誠に神経質なほど慎重な注意を払っているため、本年上半期に於て本誌は東京都条例の指定を一回も受けなかったことを御報告しておく。

五月亜紀子嬢へ

麒麟児久

ぼくがぞっこん惚れこんだ美しいひとよ。ぼくを夢中にさせるなやましい乳房よ。なつかしい、やさしい花のおもかげよ。あなたはパンティも脱がないで消えてしまった。あなたは、いま何処にいるのか。あなたはもう、憧がれと追憶のひとになってしまったのか。

ぼくは、あなたの不在を淋しがる。ぼくは、あなたを想って夜ふかしをしよう。あなたを想って、返事の来ぬラブレターを書こう。

九月号に、「貴女がやさしいお姉さんのような気がしてなりません。しばらく決まっていたくだけないでいいのです」という読者通信がありました。ぼくはとてもヤキモチ妬きだから、美しいあなたにお便りをするすべての男を憎むのですが、谷生という青年のプラトニックな呼びかけには好感を持ち、安心もできました。そしてまた、あなたを愛するファンが大勢いることを、ぼくはよろこぶ。あなた

の恋仇きが大勢いることに誇りを感じるのです。

つつまややかに伏せられた明眸や、はにかんで固くなったあなたの写真を眺めていると、ぼくはモデルになるために、はじめて奇クのドアを押した一瞬のあなたを勝手に想像してしまう。

それでも、あなたは羞しさに葉鶏頭のように赤くなりながらも、モデルになって下さった。うーいしい新鮮さと実った肉のなやましさ。あなたの持つしとやかでやさしい聖処女のムードに、ぼくに一目惚れした。恥かしがり屋のあなたは、もう二度と着物をぬぐうとはしなかった。そしてなぜか、ぼくたちの前から姿を消してしまっただ。身も心も美しいあなたは、いつまでもぼく達の世界にいる人ではなかったのかも知れません。あなたとは身分も境遇もまるきり違い、甚だ失礼な引用だとは思いますが、ぼくの真意を判ってもらいたいと思います。荷風の濯東綺譚の結末のくだりに、次のような一文があります。

「わたしは遊里の消息に通曉した老人から、こんな話をきかされたことがあった。これほど気に入った女はない。早く話をつけないと、外のお客に身受けされてしまい、せぬかと思うような気がする」と、その女はきつと病気で死ぬか、そうでなければ突然厭な男に身受けをされて遠い国へ行ってしまう。」

そして荷風は

「お雪は、あの土地に似合わしからぬ容色と才智とを持っていた。鶏群の一鶴であった」

と、お雪を讃美しながら、別離した愛着と哀愁を詩っています。△鶏群の一鶴▽——近ごろの新人モデル中では、あなたはそれにふさわしい。沖村れい子嬢しかり、どうもツイていないらしい。荷風が惜んだお雪のように、ぼくの心をとろかし、せつない想いをさせると忽ち消えてしまう。

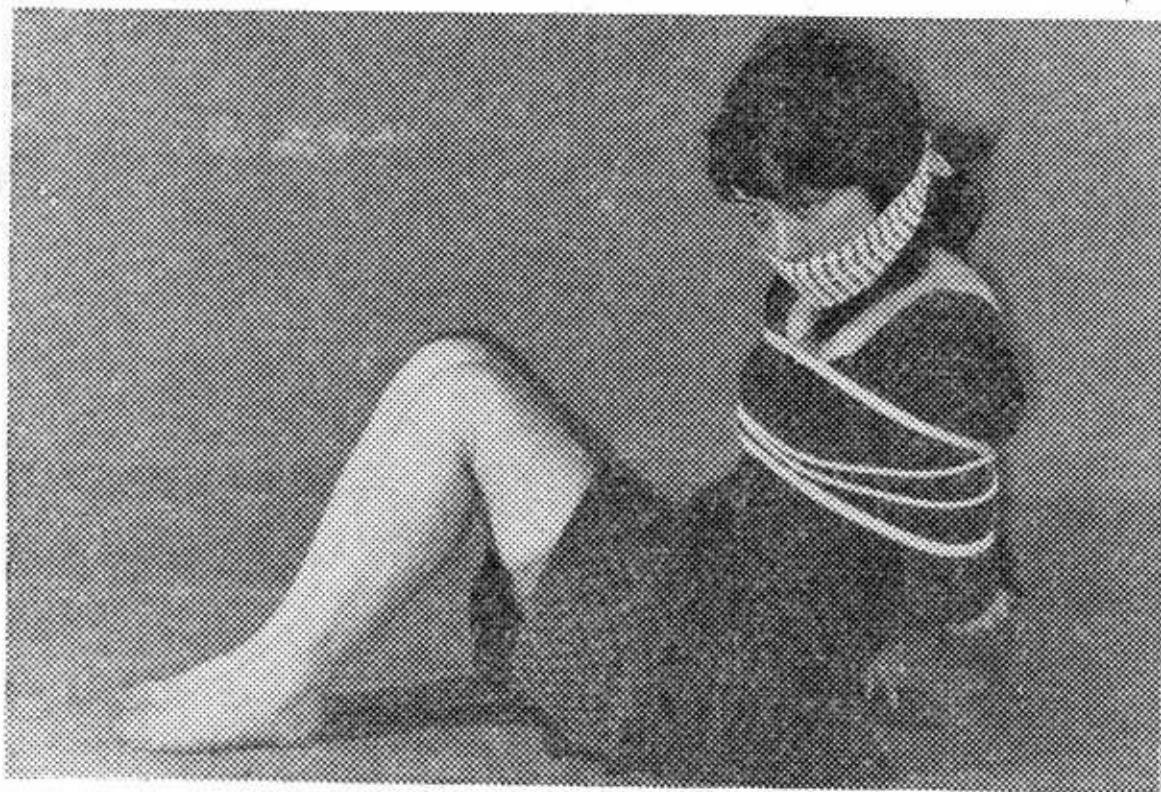
五月亜紀子さん！ あなたはサウナも言わないで、奇クから去ってしまったはいけない。頬につける紅白粉も美しいひとだけを美しくするのは。女をしる縄もまた美しいひとだけを美しくするのは。



奇譚クラブ

昭和41年10月号

(1966年・10月号〈第20巻第10号・通刊第219号〉)



本誌の信条

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。

一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。

一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。

一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビヤ写真と口絵は廃止いたします。

一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



△感想▽

コ ロ ナ ・ ボ レ ア リ ス

福 田 久 文

一、黒渕氏のアリアドネ

六百枚の大作「アリアドネ」が完結した。星辰のようにきらびやかな女性群像のなかにそれらを白昼の星のように包み込んで輝く一人の女性アリアドネを創造して、しかもこれらの太陽や星たちが軌跡を描く弓なりの天空として使用された古代ギリシャ史は、ここにいくたの創見を与えられている。商業性を損わぬために随所に洗練されたSMシーンを挿入し、長過ぎることへの配慮か

ら毎回主題を選んで区切りをつけ、作者が全編の完結をもって提示しようとした新しいSM文学についての解説まで作品に瑕をつけるのも嫌わず時として付記されている。

アリアドネこそ精神の高みに達したM女性である。彼女にとってただひとりの男性であったテセウスへのエロスすら受難の宿命ゆえに己に克って捨てるのである。作者によってギリシャ神話のなから選び出され、近代的感覚と精神の高貴を附与されたこの女性はいちの青春の至純のエロスを国民の救出と故

国の再建への苦行に転じた。あらゆる心身の呵責も凌辱もアリアドネにはこの困難な転身を維持し続けるための聖なる苦難であった。その暗澹たる負担の拡がりを背後にもって、エロスはついに彼女において死を恐れぬアガペとして輝いた、暗藍の夜空にひととき美しい光芒を放つ星のように。

エロスが使者タナトス（註一）の訪れるまえに死の諦感を内包して美しく輝くとき、それはアガペとなるのである。エロスは、今生（こんじょう）でアガペとなるためには、

死の恐怖と婚交するように宿命づけられたものだったからこそ、死とエロスが親近性をもつてわたしたちのまえに浮び上っていたのではなかったか。

「ゲテモノセックス」級エロスは永遠の輪廻としての死に通じる。そこで人は一切の精神の光輝と清浄な歓喜とから見放されて、輪廻の闇に沈むのである。生きながら永遠の死を死んでなおかつ自己の正当性を主張するあの悲惨は、常にタナトスの眼を覆わせているのだ。エロスと死のかかる危険な野合からわたしもアリアドネのように自由でありたい。(このパラフレイズはどなたを非難したものででもない。わたし福田の悲しみの表白である)

詩人黒淵嬰一氏の創造されたこの神々しい女性に比べると、本誌に現実の女として現れたM女性古川裕子さんなど、路傍で泥にまみれ踏みにじられて夜空の星のしたに立つ草花のようなものである。わたしたちがそれにもかかわらず彼女をいつまでも記憶にとどめているのは、あの泥まみれの踏みにじられた人がいままも本誌をみているなら「アリアドネ」を愛読して自己を悲しむことのできる人だったと信じるからである。つまりわたしがあえていいたいのは、SMの世界がこの独創の叙

事詩「アリアドネ」の世界と全く断絶するものならば、それは痴愚と病痕と安逸の世界だということである。

人あつてあるいは、いかも知れない、アリアドネは天上の星だ、と。わたしは自分の貧しい言葉の代りにカントを引こう。これは「実践理性批判」のなかから抜かれて、彼の碑に刻まれているものである。

そを思ふこと屢々にしてかつ長ければ長きほど常に新たにして募り来る驚歎と畏敬を胸に満たすもの——それはわが頭上なる星辰鏤める空とわが裡なる道德律なり。

人間の心はこのように星の美しさを宿すことができるのである。星のように美しい自己のイデアを見詰めてそれに近づこうとするエロスなしに、わたしたちはどうして精神の高貴を獲得することができよう。詩人とはわたしたちのあるべき姿を描いてくれる人なのである。

わたしたち——とわたしは書いた。この「わたしたち」というのはSMのセックスをもつがために、平和なセックスに満ち足りている人たちよりも精神の高貴に強くあこがれる人たちのことだと定義させて頂きたい。人は本誌においてそういう人たちと逢うことがで

きる。

わたしはアリアドネの作者に書簡を呈して申し上げたことがある、SMのセックスがその極みにおいて至高の価値に転じるようなそういう文学をもちたい、と。わたしはそのためにひとり「悪女」を描き続けて徒労に近かった。いま輝く星のような神々しい婦人の創られたのを見て、わたしはわたしの希念が荒唐無稽でなかったのを喜ぶ。だが、生れ出たアリアドネはまだ遥か天上の叙事の世界のなかにいる。いつかこのような女性を地上に降して来て、「大衆席」と「精神貴族」の和解の地ホルコモションをもてる日の来ることを願うものである。

二、黒淵氏の私信を公開

黒淵氏に「アリアドネ」完結後の所感をお書きになると意向がないのを知って、わたしに感想文を書かせて頂きたい旨申し上げたところ、長文のお便りを頂いた。以下氏の書簡の「アリアドネ」に関する部分の大半を転記する。

○「アリアドネ」ヲ書ク時編集部ニ質問状ヲ送ッテ、SMシーンヲ全体ノ四分ノ一二スルト予告シ、編集長自筆ノ了解ヲ得マシ

タ。SM不足が不評判ノ原因デシヨウガ、
「本誌ノ信条」ガ羊ノ頭デナイ限りコレデ
良イト思イマス。

○エロチシズムヲ故意ニ回避シ、純粹ノS
Mノミヲ抽出シマシタ。(福田註。「純粹
ノSM」とはセックスを除去した単純な加
虐、被虐のことと拝察する。この純粹のS
Mが抑圧されたセックスの変形であること
が多いのはすでに周知の事実であるが、こ
れがネグリジェよりも高級または強烈なエ
ロチシズムを発揮するスーツとなり得ると
いう考察は、わたしたちが麻生氏に負うと
ころである。麻生氏がだれよりも早く「ア
リアドネ」を高く評価された理由の一つを
ここに見る)

○ギリシャ神話ニ必要以上ニ拘泥シマシタ
不必要ナ筋ガ多ク入ッテイルノハソノ為デ
ス。コノ意味デ「アリアドネ」ノ筋ハ私ノ
創作部分ハ一ツモナカッタト言エマス。但
シ最終章ダケハ別デス。

○ギリシャ神話ハテセウスニツイテハ詳シ
ク伝エテイマスガ、アリアドネハ僅力数行
ノ記事シカアリマセン。テセウスニ恋シ、
糸玉ヲ与エ、ラビリンスヲ逃シ、ギリシャ
ニ行ク途中デ棄テラレ、ディオニソス神ノ

妻ニナルトイウ話ノ他ニモット悲劇的ナ別、
伝ガ幾ツカアリマス。

○イカロスノ話、ミノス王ノ統治、アマゾ
ン族、アンティゴネノ事、ディオニソス、
スキュラ、ニュソス王etc、何レモギリ
シャ神話ノ重要部分ヲ採用シマシタ。コレ
等ノ伝説ト、考古学ノ発掘ヲ掛ケ合ワセル
ト自然ニ私ノ作品ノヨウナ答エガ出テ来マ
ス。本文中ニ三分ノ一説(福田註。三分ノ
一程度は史実だということ)ヲ書イテオキ
マシタガ麻生氏ノヨウナ歴史家ガ見テモ歴
史トシテ暴論デナイト思イマス。科学的ナ
事、歴史ノ解明、等ハ最新学説ヲ導入スル
ヨウニ試ミマシタガ、天文学、歴史学ニ興
味ヲ持タナイ人カラ見レバ「退屈極マル」
作品デアル事ハ、本人ガ認メマス。
この書簡は私にすべきものでないと思い、
引用させて頂きたい旨お願いしたところ、折
り返えし三枚を超える原稿を頂いた。本誌に
寄稿される予定であったが、福田あての書簡
と内容が重複するために棄案にされたものと
拝察する。重複部分を省略してそれを左に掲
記する。

○班師之表

草莽ノ臣黒淵嬰一、謹ンデ書ヲ

貴族院議長ニ呈ス

(中略)

ネグリジェトスーツハ何レガ着易キ歟ハ
知ラズ。SM過剰トSM制禦(不足ニ非ズ)
ハ何レガ書キ易キ哉。吾人ヲシテ言ハシメ
ヨ。「商業性」ノ發揮ハ其ノ抑制ニ不レ如。

(中略)

孫子ニ曰ク「小敵之堅者大敵之虜」臣嬰
一自ラ望ンデ戎衣ヲ纏ヒ、疆域ニ立チテ内
憂ヲ慮フ。棧道未ダ陥チザルニ成都ヲ喪フ
莫レ。

奇ク共和国千載ノ安泰ヲ祈念ス。

奇ク共和国貴族院議長 麻生保閣下

辺城ノ守将 黒淵嬰一

わたしたちはここに、近代的諧謔と感覚の
なかに何代もの優れた血統と訓育によって風
格を帯びた古武士の気魄を見る。

この班師之表の他に一枚の図表を頂いた。
大きな方眼紙の上部に右から左へミノス三十
二世以下三十九名の登場人物の名が並び、右
側に上から下へこの三十九名の逐年の年令を
表わす数字を記入できるように横線が引かれ
その年における重要事件の摘要欄も兼ねてい
る。これは百冊を優に超える参考文献とともに
に「アリアドネ」執筆のために用意された多

くの資料の一つだった。「アリアドネ」にはこのように、作者が精密に組み立てて運行させていった大きなメカニズムが稼働しているのである。

スウィフトはガリバーの流れ着いた小人国の人間の平均身長をガリバーの十二分の一と定め、小人国のあらゆる事物の規模をこの比率で正確に算出して、ガリバーを迎えた小人たちの騒ぎを描写している。東京工大の遠山教授（水道方式の算術で有名）によれば、スウィフトの唯一のミスは、ガリバーの食料は小人の十二の三乗分必要であると述べて、十二の三乗を一七二四としている（一七二八が正しい）ことだけだという。「アリアドネ」にはこれに類似した計算違いはおそらく発見できないものと思われる。

三、素人作家とミューズ

どういうものが、また、どう書けば編集者にうけるか——これは売文業者である職業作家の考えることであって、わたしたちはこの種の煩わしさから自由である。つまり「商業性」に乏しいものを書く自由を持っている。

自分と妻子を支えるだけの生活費は職業として従事している実務が与えてくれるのだから

わたしたちは純粹に女神ミューズの子として自由な余暇をひたすら自分自身の所信と充足感を求めて創作に捧げる。そしてこの自由な創作が高級な商業性を獲得したときこそ、わたしたち素人作家が芸術の女神の微笑と識者の賛同とを得るときなのである。卓越した天分のないかぎり、終日家に引き籠って売文小説を書く生活の不潔と不安定とは、わたしたちの執らぬところである。

陸軍省医務局長、帝室博物館長として極めて有能の士であった森鷗外は、その作品において、同時代のあらゆる職業作家を凌駕している。鷗外のような達人にしてなお、一日二十四時間をミューズに捧げ切れる精神の強靱さはなかった。というよりも、むしろ、真摯な実務こそ彼にミューズを正しく受けいれる素地を与え続けたのだといえるであろう。と同時に、ミューズを基盤にもった鷗外は卓越した高級官吏であり得たのである。彼にとって文学と官職とは相扶けて彼を人生の達人にするところのもの、つまり真摯な人生そのものだった。

実生活と切り離されたミューズなど真面目な商人にさえ劣る。嘲笑を買って当然であろう。ミューズは実生活をよく支えてそれに意

義を与える神でなければならない。素朴な現実の暗さと不確かさのなかによく詩的現実の不壊（ふえ）と光を持ち込めるところの目覚めた一双の眼を持たずして、何の意義ある人生か。

ウエストミンスター寺院をたそがれに訪れた作家アービングの感慨を待たずもなく、王侯貴族、顯官富豪の名の空しさは、彼らがよくミューズの子でなかったことの何よりの証左である。彼らは現実の生を生きぬままに忘却の墓に退いた。ミューズの愛（め）でる書を残したものは大帝國を建設する以上の仕事をしたのである。陸軍省も宮内省も森林太郎の授爵を不当に拒んだが、その爵位は、無暴の戦争に赴いて百戦功なく潰え去った大日本帝國とともに、いまはもう滅びてない。だが、森鷗外全集は不滅だ。なぜ不滅か。一人の特攻隊員以上の気魄がそのペンに籠められていたからである。売文の虚名は一人の戦士の死よりも空しい。

前置きが長くなった。この一大叙事詩「アリアドネ」を勤務の余暇に書き上げることのできる若い管理職社員を持った株式会社は、みずから知らずして、真に会社のためになる貴重な人材を得ているのである。と同時に、

こういう人材だけが本誌の自負と存続とを支え得る。

四、貴族的な文章表記法

終りにこの作品の表記法について若干の所感を述べたい。国語の単語に詞と辞の区別のあることは江戸時代の国学者がすでにこれを認め、いまは二八の生徒さえその区別を知っている（もっとも、詞と辞の区別についての江戸時代の禅問答のような定義から言語学上の一大理論を創り出して、詞と辞の本質を明らかにしたのは、時枝誠記（もととき）博士の功績によるものであるが）。アメリカ占領軍に迎合した文部官僚と二流の国語学者たち（国語学上の業績に乏しい女子大教授級の仮名文字論者、ローマ字主義者、時枝博士を国語審議会から追い出した連中）が国語の表記法を破壊する以前わたしたちは詞に（活用する詞にあつてはその語幹に）漢字を当て、辞に仮名を当てるという正書法をもっていたのである。「アリアドネ」はこの正書法を断乎固守している。表記法の面でも黒淵氏は保守的な貴族である。当用漢字の字数とその音訓表は、ここでは小気味よく無視されていて、わたしなどはその学識と実行力に敬意と爽快さ

を覚えるのであるが、戦後の国語政策の犠牲になった世代の読者には負担を与えているであらう。また若い文撰工は原稿の旧字体が分らなくて、黒々とした校正刷を作ったことであらう。

子や孫に自分たちの読んだ書物を読めなくしてしまった者は後世史家の批判に晒されるのではないか。小学校からローマ字教育を、中学校から英語教育を追放してほしい。そして曾祖父たちの書を与えよう。ペーブル（賤民）とは先祖の情感を知らぬ人間のことをいう。戦後の国語政策は青少年からこの国の古典を奪った。明治の文学さえが註釈と書き換えなしに読めなくなってしまったことは大きな不幸である。

末筆ながら、わたしたちは賀集子夫人の内助の功にも敬意を表するものである。昭和四十年六月号巻頭には夫人の感動的な文章が掲載されている。婦徳の荒（すさ）んでしまいたいまもお夫を想う万葉の婦人の床しさを身につけたこの人こそ「アリアドネ」の完備した文章表記法以上に貴重な存在だ。黒淵氏は確かに「一年ほど書かせてみたら、もう少し良いものが書けるようになるのではないかしら」という夫人の願いを叶えられた。「ア

リアドネ」が「高級な叙事詩」でなくて何であらう。黒淵氏は新しい文学を、夫人はその背の君の嗣子をともに事なく生み落された。ともに健やかなご発育と発展を念じる次第である。

補遺

○黒淵氏にあてた福田の書簡抄録——（前略）ご恵与下さった第十四章ヤオの草稿をいま一読して感動しました。そして自分自身に対しても静かに持続する満足を覚えていきます。再読する必要のないほどわたしにはよく分りました。そのため、誌上で第十三章ホルコモシヨンを読み終ってすぐ書き上げた草稿を加除修正する必要があるませんでした。終章を待たずして終章での結論を見通していましたことは、優れた作品を読んだ者の名誉でなくて何でしょう。アリアドネこそ死の美しさを包みこんだエロスすなわちアガペでした。（中略）アリアドネの星座コ罗纳・ボレアリスが見えるようでしたらご教示ください。

○註一——ギリシャ神話の死は「死神」デハアリマセン。崇高な死者ノ枕頭ニ立ッテ冥府ニ導ク半神ノ使者デス（黒淵氏の福田あて書簡より）

S M 的 自 殺 論

— または死の美学

夜 乃 探 郎



ぼくの「耽美」な生涯は亡びを意識しつつ
 実^{パラドックス}は生きつつけるという逆説的な人生に
 他ならない。ぼくは、いつも死のうと思って
 夜の巷にとび出し、哀れにも死ねずに帰って
 くる。だから、アルコールにやけただれた内
 臓のあたりを片手でおさえながら、ぼくは八
 美^Vの極致は「死」であると思っている。そ
 こまでゆきつかなければ、夜のはてに透明な
 美は顔をのぞかせない、と、引かれ者の小唄

を口ずさむことになる。こんなくされはてた
 アルコール
 酒精中毒者にとって「死」を思わず、なんで
 生きつつけることができようか。

「美」のカケラも無い、おのれの存在にうち
 のめされる時。美しい少女をぼくは憎む。裸
 にむき、ぶっくりと盛り上った青い二つの果
 実を、コッパミジンに痛めつけたという、
 どす黒い欲望は、それが、いつも不発に終ら
 んとする危機感から、ぼくの「死」の美学は

出発する。死が美をともしう時は、おのれに
 「醜」を感じるときだ。また、他者の美が、
 いつか醜に変ずることを意識したときでもあ
 る。「死」は問題にすべきではない。ドスト
 エフスキイ、キエルケゴール、ショウペンハ
 ウェルの、そこに語られる幾多の思想も信仰
 も、ぼくの生命も、死も、保証するわけでは
 無い。ぼくの死は、永久に、ぼくの死でもあ
 るのだ。むしろ、ぼくは「死」を物語ろう。
 その方が、ぼくにふさわしいようだ。

— 美しい少女は、それだけでサジズム的な
 対象でもある。その少女が幾人かの子供を生
 み、生活に疲れてグチをこぼす姿など、どう
 して考えられようか。むしろ、はかない死を
 とげることによって昇華されることを、ぼく
 は望む。その願望が、加虐的な本能を生み、
 殺意の影さえ、ちらつかせる。SMの「美」
 はもろさ、はかなさが象徴することによって
 一層の強烈さをよぶ。

ぼくの鞭の下に、ひとりの少女が、いつか
 大人となり、老年となり、みにくい悲鳴を上
 げるまで、ぼくは休みなく、その鞭を振りつ
 づけることなど出来ようか。美は亡びを意識
 することによって、常に新鮮な感動をもたら
 し、「おれだって、いつでも、このビルの屋

上から跳び降りることができると考え、死んだ気になって」という俗説は、この地点では、より正しく、死の本然の相とは逆な、このようなパロックスは、限らない故一の可能性の、みなもとでもある。

ソクラテスは、たしか、かれがいつも軽蔑していた連中にあわれみを乞うことを拒んで死んだ。たしかに、孤独の何んたるかを知っている人間は、こう云うだろう。「自殺など」と。なるほど、自殺は最後の切札。ジョーカ―をややすと使う馬鹿はない。しかし、死があるからこそ、ぼくたちは生きるといふ、この逆説も耽美派にとっては、ひとつのモラルでもある。

勿論、近代は「科学」の力によって、ぼくの話そうとする『死』など、身辺から遠ざけることに成功しつつある。やがて、結核の美しい少女がほそそと死んでゆく物語など、完全に後を断つにちがいない。そしてはなはだ小説になりにくい突発的な死や、奇妙な死がはばをきかすようになるだろう。小説も映画も、思想も、このような死の形式の変遷に戸惑い、しかたなく姿を変えてゆくにちがいない。しかし、『死』はそれでも在り、死は

ぼくにとって、それが、すべての精算であるだけ、はてしない意味をもたらす。ぼくは、夜の放浪のさなかで、いつも「あんた、いつまで、死なないの？」と、なんの前置もなく自殺をつめよる女の幻聴におどろく。

―うだつのあがらない中年男が、下宿の二階に万年床を引きっぱなし。ひるまは、のび放題の髪の毛を、手ぬぐいで包み、おしよヒゲをのぞかせ、まるで忍者のように、足音をしのばせながら、職場の人間の影、影を選んで動きまわり。夜は『夜』で、おのれの影におののく野良犬の如き存在。ただ、はてもなく美少女を求めてさまよう。いつそ、死んでしまった方がサッパリしている人生でもある。『死』を甘美な物とするなど、たしかにナンセンス。青くさいセンチメンタリズム。その精神的バランスの不具な故に、ぼくの悲痛な夜の章は、とめどもなく書きつづけられるのだ。ぼくの弱虫な自殺未遂の遍歴は、そのまま、SM追求のアルバムが印される。ぼくは一度、結婚に失敗している。そのままで無いが、かつて『美少女煩惱』という小説で本誌に発表した。たしかに、人間は成長し乙女はいつか主婦となろう。生活は、男・女共に、それにふさわしい年輪が要求される。

―あの晩。ぼくは、夫婦の危機をはらむ家庭を外にして、街角に、美少女とのデートを夢みて、いつまでも立ちつくした。少女は来なかった。その絶望感は、まだ底にくすぶる正常な良心をも刺激させ、その哀れさ故に、『死』の影が横切った。

―いその香がただよう港町で、くずれた体をもつ旅の女とゆきずりになったときも、その年の割にはあどけない顔立に引かれ、薄暗い宿の一室で、ゆたかな乳房をわしづかみにし、あげくは、はだかの女体の両脚の足首をもって、さかさに宙吊りにし、『怖い！』と、さけぶ女の悲鳴を耳にした時も、ぼくは『死』を思った。

この刹那的な考え方が、『死』のおどろおどろしたリズムが、いつもぼくを耽美なデカダンな世界にめり込ませる。

―こんなぼくに、ある機会で知りあったJ・Kという男が『人生を愛しすぎないように死にたくなるから』という言葉くれた。憎悪から出発したと思ったぼくの一頁は、この文句で、少なからず、とまどった。

―ぼくの『死』のムードは、かの太宰治がその処女作集を『晩年』と名付け、この一冊を残して死ぬ筈であったように、奇譚クラブ

とのつながりは、いつも眠られぬ夜の果てに『死』がポツカリと口をあけていた。

この投稿で人生、オサラバよ——書けるうちに書けという自爆的な乱筆乱作が、いつのまにか現在になってしまった。ぼくにとって、書いてることが『生』の証明のような日々でもある。

△異常Vをナンセンスと、笑いとばすことは簡単だ。それは逃げる場所を持っているから。ぼくにとって、異常は言葉通りの悲劇であり、現実と幻、^{まぼろし}見分けのつかない生活をしているような男にとって『死』より他、もう、美とのつながりなど何も無い。

ぼくは、SMは『死』と結び付かなければそこに本当の美の開花はあり得ない——そう思っている。自殺讃美ではなく、死の影を意識する世界こそ、かくし看板の無いロマンがただようと信じているからだ。

ぼくは、Sであるから、あまりマゾヒズムのことは知らない。しかし、よく若い女性にみられる「切腹願望」という自虐心理から、死の美学を形成できるのは容易である。

——いつも例をとる辻村氏のカメラ・ハントには、ほろにがい笑いが、夜の巷に投げつけられる。それは現実生活を肯定した上にか

もしだされる、どこかつかれをみせた年輪のひだをまざまざと見せつけられる一瞬でもあり、そこにぼくの詩も共通される。ただ、これは苦笑するだけだが、ぼくは夜の空間に股裂きの刑に処せられる美しい少女の白々とした裸像を、おのれの仕業と幻影にのぞみ、その戦慄と、むなしさに『死』をもって、とどめをさそうとする焦燥感が流れでる。

——「死の美しさをつつみこんで生きるこ」とができたとしたら、死の姉妹であるエロスは、どんな様相を呈して、現われるでしょうか」。この福田氏の言葉をよんで、ぼくはすぐB子を追憶した。これは、ぼくにとって秘められたエピソード。その少女はある国立病院の片隅で美しいまま死んでいった。これはぼくのような無頼な人間にとって、たったひとつのプラトニック・ラブでもある。その少女にだけは、どこまでもぼくは献身的であった。幾度か少女は血を啜いた。少女と近づいたキッカケは、純粋な動機からだった。もう少女は死を医師より宣告されたも同然なかなりの重態になっていた。そんな風の強い晩。少女は個室で、ぼくの来るのを、ただひとりまちうけていた。ぼくは一步、室内に足をふみ入れたとき、少女に新鮮なおどろきを感じ

た。形のよいくちびるには、きれいに口紅がぬられ、薄く化粧された顔は、いつになくバラ色に輝いていた。

「一度でよいから、貴方と夜の街をあるきたかった」

少女はかすかに微笑した。ぼくの片手を静かに少女はにぎった。そして、そのまま、パジャマのえりもとにみちびいた。

「わたしの乳房、小さくてごめんなさい」

少女は、そっとぼくにささやいた。

——これだけのことである。これがSMとなくの関係があるかといわれると、ぼくは何んとも言葉はない。ただ、死とエロスを結び付けたはてに、なぜか、ぼくはいつも、この一瞬のドラマを大事にしたいのだ。

その帰り、ぼくはあびるように酒をのみ、この偽善者め！と、おのれをバトウしながら、すでに肉体関係のあったK子を外につれだし、あやしげなホテルで、彼女をはだかにむき、狂ったように……その狂態は朝までつづいた。

いまになって、ぼくは自問自答する。いいきなものだ。なぜ、探郎よ。お前はK子など抱かず、少女を抱いてやらなかったのか。あの場合、むしろ『愛』は抱くことによって……

マゾヒスティック・ストーリー

血^ちの報^{ほう}酬^{しゅう}

三原 寛



〔サイゴン五日発〕AP 米軍スポークスマンが五日明らかにしたところによると、米海空軍機は四日、合計九十一機で出撃し、ハイフォン南東三十キロの石油貯蔵所、タンホア西方四十キロの石油貯蔵施設など北ベトナムの諸目標を爆撃した。また空軍のB52爆撃機は五日、ダナン南方五十キロのベトコン地区を爆撃した。

〔ANS東京〕ハノイ六日発新華社電が同夜のハノイでの発表として伝えるところによると、北ベトナムのパクタイ、クアンビン両省軍民は同日、米機四機を撃墜、飛行士一人を捕虜にした。

ヌエン大佐は腕の夜光時計が零時廿三分を指しているのを確認して立ち上った。

密林^{ジャングル}を切り開いて一直線に走っている、このアスファルト舗装の軍用道路^{ハイウェイ}は、その両側を鬱蒼とした樹海で遮蔽されていたのだが、ゲリラの出没に悩まされた米軍の焼夷弾で一面の焼け野と化している。

盛り上った胸の曲線が見事なシルエットとなつて、素晴らしい肢体をびったりと包んだ黒革^{コート}の上衣に乘馬ズボン、黒光りのする編上

げの乗馬用長靴、そして手にした黒革の鞭をしごいて、ローザ・ヌエン大佐は足許にうずくまっている二人の部下を見下した。

ヴェトナム民族解放正規軍の制服に身を固めたこの二人はディエプ・ラム中尉とカム・オング少尉、そして、ヌエン大佐は、此のサイゴンに最も近いビエン・フー地区を管轄するゲリラ部隊の女司令官である。

軍用道路は至る所爆弾で穴があき、スコールの水が溜って白く光っていた。遙か彼方からエンジンの排気音が響き米軍のジープが一

台まっしぐらに驀進して来た。オング少尉が手にした懐中電灯で大きく弧を描いた。三人の前でタイヤを軋ませて急停止したジープから、頬がこけて眼付の鋭い痩せた長身の開襟シャツ姿の四十代の米人がコーン・パイプを手にして下りて来た。彩色を施した米軍落下傘部隊の戦闘服を着けて自動小銃を腰に構えたヴェトナム兵が二名後に従った。

待っていた三人を拾い上げたジープはギヤを入れ換え乱暴にU・ターンして、今やって来た方角に向って猛烈な速力で引返して行った。



ドラット地区の大地主で、ゴ・ディン・ディエム政権に喰い込んでサイゴン米の集荷を一手に独占したヌエン一家はヴェトナム屈指の大富豪にのし上り、一人娘のローザは大勢の下僕、奴婢にかしずかれて我侖一杯に育て上げられたが、革命により、政権が殲された時、ヌエン一家も、反逆罪に問われて、全員惨殺された。

幸い、米国に留学していたローザのみ、難を免れ、折しも、渡米していて、同じ様に危い身を助かったゴ・ディン・ヌー夫人の斡旋で、米国の情報局に籍を置く事となった。

秘命を帯びて帰国したローザは、サイゴン第一流のナイトクラブ・金竜舞厅のホステスとして働らく裡に、筋書通りU・S空軍の大尉を籠絡し、大尉は夜毎彼女の居室に入り浸る様になった。

尤も、我侖で高慢な彼女に冷くあしらわれれば、あしらわれる程益々のぼせ上った大尉が、彼女の足下に土下坐して床に額を摺りつけて哀願しても、彼女の、ヴェトナム女性特有の透きとおるように冷く白い陶磁器の肌に一指を触れることも許されなかったのだ。彼女のお臀のぬくもりの残っている便器に、お許しを得て、狂気のように首を突っ込んで後始末する大尉を、皮肉な笑みを浮べて見下す彼女だったが、ある夜、この便器に罌が仕掛けられた。

麻酔から醒めた大尉は密林の奥のゲリラ軍の本部、秘密の地下壕の一室で、素裸に剥かれて、両手は鎖で天井に吊られて居た。

革鞭を手にしたローザの冷酷極まる拷問が開始された。肉を切り裂くような痛烈な鞭だった。

焼けるような背中への一撃、肉のやわらかい腹部を横切って真一文字に叩きつけられる心の止まるような一撃、彼女が自分をこのゲ

リラ軍に売り渡したのだということを知らぬ大尉は何故自分が、こんなに酷い目に遭わされるのか、その理由を考えるひまもなく彼女の鞭の嵐の下に呻吟した。

彼女はサイゴンの米空軍基地の配置を白状するよう責め立てた。貯油槽の所在、守備隊の配置、人員、警報設備等々、大尉は知る限りの軍事機密を絞り出されたのだ。

鞭の恐怖は、味わった者でなければ実感出来ない。どんなに意志強固の者でも、遂には一本の鞭にひいひいと悲鳴を上げ、その一撃を許して貰うためには、犬畜生にもなり下ってお慈悲を乞うようになるのだ。絶大な鞭の支配力である。ローザは幼少時より、鞭による征服に慣れていたのである。洗いざらい泥を吐かされた大尉は、猶も血に飢えたローザの生贄として、彼女の鞭の下で絶命した。

翌晩、ゲリラの一隊に襲撃された米軍基地の兵器庫が炎上し、貯油槽が爆破されて、多数の死傷者を出した。

彼女はベトコン・ゲリラの一隊を指揮する女隊長の地位を得た。情報局の筋書通りに事が運んだのである。下降線を辿る米国経済を辛うじて支える、この特需景気を持続する為には、この戦いが終焉してはならないのであ

る。その為に、米国の大財閥からは巨額の資金が、この情報局にも献納されて居るのだ。

彼女は、ベトコン・ゲリラの女隊長として次々に戦果を挙げ、その卓絶した作戦能力は高い評価を受けるようになった。そして、次第にその地位が上り、遂に民族解放正規軍の大佐として、最重要の拠点であるビエン・フー地区の司令官を任命されたのである。

彼女の作戦がすべて、情報局サイゴン支部から流される情報に基いて樹てられ、彼女が戦果を挙げられるのも、そのお蔭であることはベトコン側の誰もが察知出来ぬ所だった。まして、彼女の戦果の代償として、彼女から流された逆情報で、彼女の得た戦果の数倍の損害がはね返ってくる事になるのだということに気付く者は誰一人なかったのだ。

彼女はベトコン・ゲリラ軍の詳細な情報と交換に、彼女の生贄に指定された米軍部隊の人員配置の詳細をサイゴン支部から入手したが、この事は、情報局の上層部を除いて、米軍にも知らされてなかった。彼女の情報に対する情報局からの巨額の報酬は情報提供の度にスイスにある彼女の口座に振り込まれ、既に膨大な額に達していた。

彼女の指揮する戦斗は残忍極まりないもの

であった。すっかり相手の手の内を知り尽した上での攻撃であるから、全く一方的な襲撃となった。すっかり包囲してしまつて一斉射撃によって皆殺しにするか、殆んど無抵抗のまま全員を捕虜とするか、何れにしても、これはまさに米国の財閥から情報局を通じて彼女に捧げられる文字通りの生贄で、何も知らずに人身御供に選ばれたその米軍部隊こそ悲惨な運命を辿った。

捕虜は彼女の嗜虐の情慾を満す生きた玩具であった。捕虜に対した時、彼女は、ナチスの収容所の女所長イルゼ・コッホの立物にあった。素裸に剥かれた捕虜達はローザ大佐にとってこの上ない慰みものであった。地面に間隔をあけて二本の杭が打ち込まれる。そして、股の高さに二つに割った青竹が横渡される。青竹にびったりと下腹部を押しつけて整列させられた捕虜達は彼女は挑発的な姿態で点検して歩く。

不遜な反応を示した者は直ちに青竹に釘で固定された。満足する反応の得られなかった男達は、自分の足許に、ゲリラ兵達に鞭打たれながら穴を掘られ、首から下を生き埋めにされた。青竹に固定された男達は彼女の鞭の洗礼を浴びたり、射撃の標的代りにされ、

逃げようともがいては股間を血だらけにして絶命した。生皮をはがれる者、生き埋めにされて、脳天を彼女の乗馬靴のヒールで踏み割られる者、小銃の銃身を尻の穴から突っ込まれて絶息する者等、あらゆる方法で殺戮が続けられた。

彼女は部下に対しても絶対権力を握る暴君であった。豪華な司令室に傲然と君臨する彼女は部下達を虫けら以上には扱わなかった。

神格化された彼女に対して、部下達は宗教的な盲信をもって隷属させられた。粗末な雑穀しか口にした事のない兵士達にとっては、サイゴンから取寄せた贅沢な美味を食する彼女の排泄物ですら、せめて一生に一度でも味わいたい、その御褒美にありつくことを最高の榮譽として戦功を競うのだった。彼女のはく乗馬靴ですら、兵士達にとっては尊い存在となった。

乗馬靴にお仕えする当番兵は羨望の的となった。彼女にでなく、乗馬靴の奴隷としてお仕えするのである。床に脱ぎ捨てられた乗馬靴に対して当番兵は土下座して礼拝を捧げ、直接息のかからぬよう、口に布片を含み、両手で頭の上に捧げ持って磨かせて戴くのであるが、磨き終ったら、彼女の御使用がない時

は、その乗馬靴を祭壇の上に奉置して一晚中
でも礼拝を続けねばならないのだ。

革鞭を御主人様としてお仕える当番兵も
いた。彼女の履き古した靴下^{ソックス}が下賜された兵
士達は、それを胸に抱いて戦斗に参加した。
そして、最も幸運な二人は、彼女の足裏を御
主人様としてお仕える当番兵と、彼女の常
用便器として御奉仕する当番兵であった。

普通のセックスに興味を示さぬ彼女は男性
を責め苛むことによってのみ異常な刺激を受
けたが、足の裏を舐めさせることは好んだ。
また彼女は大地主の一人娘としてかしくかれ
て育った幼少時より、便器を使用した事がな
かった。ディエプ・ラム中尉とカム・オング
少尉が、この当番兵として新任された。



ローザ・ヌエン大佐は豪華な寝室で、ベッ
ドに仰向になって、投げ出した片足をラム中
尉に与えて居た。真紅の部厚い絨毯の上に感
激に震えながら這いつくばったラム中尉は目
の前に突き出されたローザ大佐の磨き上げた
巧緻な臘細工の様な見事な脚を捧げ持って、
白い絹のような足の裏を舐め続けていた。

残忍に薄く締まった紅い唇から紫の煙をく
ゆらしながら、鉛色に透明な女豹の眼を細め

て彼女は新しく生贄に選んだこの二人の男を
何時処置してやろうかと思案していた。そろ
そろ、始末せねばならなくなっていた。ラム
もオングも貧しい土百姓の出で虫けら程度の
価値もない男共だったが、命を惜しまず彼女
の下で働らき続け、戦斗の度に功績を稼いで
現在の地位になり上ったのだが、もう、余り
に長くつとめ過ぎたのである。

彼女の秘密を保つ為には、仮え愚鈍な虫け
ら共でも余りに長く生かして置いては危険で
ある。こうして、彼女の隊員達は古参者から
順に次々に生贄の祭壇に上げられてきたのだ
った。そして、こうして残忍な彼女の餌食^{えじき}と
して白羽の矢を立てられた哀れな生贄が隊員
達の羨望の的であり、いつかは自分の順番が
廻ってくる日を待ち焦がれながら、重なる激
戦を必死に生き延びているのである。

ローザ大佐の足の裏にお仕える奴隷或は
便器として選ばれた男は、きまって暫くする
と、その姿を消すのであるが、誰いうとなく
これは、サイゴンで特殊任務に就く為で、土
民出身の兵隊達には、想像も出来ない贅沢な
暮しを送っているのだと信じられていた。汗
みどろの顔を仰向けて彼女の足の裏に唇をつ
け必死に舌を動かし続けているラム中尉の額

を足上げて蹴りつけたローザ大佐は立ち上
って、部屋の隅のステイール・パイプ製の背
の高い腰掛^{チェア}に歩み寄った。

腰掛のお臀の当る部分はまるく穴があいて
珐瑯製の漏斗^{じょうご}がはめ込んである。床の上に土
下坐して、御主人様である腰掛^{チェア}に対して礼拝
を続けていたオング少尉が漏斗^{じょうご}に口を当てて
腰掛^{チェア}の下に這い込み、ローザ大佐は腰掛^{チェア}
に跨^{またが}って、ぷりぷりしたお臀にぴっちり張り切
った黒革のズボンを下した。ローザ大佐は
腰掛^{チェア}にゆったりと腰を下ろして悠然と紫煙を
くゆらしながら、満腹後の排泄感を楽しんで
いた。

「こんな御馳走をひとくち味わいたいばかり
に命賭けで血みどろになって皆が斗っている
のに、毎日食べさせて貰えるお前は幸福過ぎ
ると思わないかい？」

ローザ大佐の薄い唇に、皮肉な笑みが浮か
んだ。

「お前達二人共、今夜は祖国の為の特別の任
務について貰う。直ぐ出発するから身仕度す
るように」

二人は、ローザ大佐に、新しい部屋付きの
奴隷に指命されて伺候した時に、彼女に見せ
られた数葉の写真を思い出した。皆、昔、彼

等の前にローザ大佐の部屋付き奴隷に指令されて、そして消えていった連中だった。或る者は豪華なレストランで米軍将校の制服をつけて食事をして居た。ついこの間消えた仲間にはパーティで金髪の女性を腕に抱いていた。「みんな、祖国の為に重要な任務についている者達だ。そのうち、お前達にも行って貰う事になる」

そして、遂にその日がやって来たのだ。

「命令には絶対服従して貰わなければ計画は失敗する。どんなに酷い目に遭っても祖国の為だと思って我慢して貰う」

◇――◇――

ジープで深夜、サイゴンの米軍司令部のビルの地下室に連れ込まれた二人は、待ち受けていた二人の金髪の美人に抱きつかれて頬にキスされてまごついた。写真がとられた。

それから、二人を残して、金髪の美人も、彼等をジープで連れて来た長身の米人も、そしてローザ大佐も地下室を出て行き、入口には外から鍵をかけられた。

地下室は、四方を刷毛目の粗いコンクリートの生地で囲まれ、壁には血痕らしい黒ずんだしみがとび散っていて、天井からは二本の鉄鎖が垂れ下って、ちょうど彼等の頭上、手

を一杯に伸して漸く届く位の所に、それぞれ一組ずつの手錠がぶら下っていた。ドアが開いて愛用の黒革の鞭を手にしたローザ大佐が入って来た。ドアを後手に閉めながら、彼女は二人に命令した。

「さあ！二人とも、上衣を脱^とって！それからズボンも！ぐずぐずしないで下着も脱^とって、素っ裸になっておしまい！」

前をおさえて、おずおずと身をすくめて立つ二人に次の命令が下った。

「裸になったら、二人とも、鎖の下に立って手錠をはめなさい、急いで！」

カチリとはまった手錠は、今度は自分では外せず、腕の肉に喰い込む。

ぴゅうっと空を切った鞭が、しゃあっと皮膚を切り裂くような裂きさで裸の背中にはじけ飛んだ。

「お国の為よ！我慢おし！」

愚鈍な二人には何故自分達が、こんな目に遭わねばならないのかを判断する能力はなかったが、とにかく、これが祖国の為だと信じて、狂ったように荒れる鞭を歯を喰いしばって耐えるのだった。

「何故？」

ローザの鞭に打ちのめされ、断末魔の苦悶

に呻きながら、彼女の黒革の乗馬靴にとりすがって、息絶えたU・S・空軍の大尉の訴えるような眼差しを彼女は満足気に想い起していた。

仲間達の楽しそうな写真を思い浮べ、そして、祖国の為だと歯を喰いしばって耐える二人に、傲れる女神の冷酷非情な鞭が荒れ狂った。

彼女は男達に鞭を揮う事に異常な快感を覚えるのだ。男達の皮を切り裂き、打って打って打ちのめすのだ。愛用の黒革の鞭を手にした時から彼女の性感は鋭い刺激を受ける。そして、鞭がぴゅうっと空を切り男の皮膚にはじけ鞭を通じてびしっと腕に伝わる触感、強烈に反応を示す男の肉体、激痛に耐えかねる絶叫の悲鳴、断末魔の苦肉の表情が彼女の興奮に油を注ぎ、遂に男が彼女の鞭の下に絶息する時、彼女は恍惚の絶頂に達した。

彼女の錯倒した性の饗宴はこうして何時果てるともなく続き、生贄に選ばれた二人の男は全身を血に染めて苛め抜かれるのだった。

◇――◇――

冷く整ったローザ・ヌエン大佐が、まだ醒めぬ興奮に顔を紅潮させて嗜虐の部屋から出て来た。黒光りする乗馬靴を鳴らして階段

をかけ上り暗くひっそりとしずまりかえった夜の司令部ビルの廊下を通り抜けて、ここだけ明るく電灯のついた一室のドアを押した。

正面のデスクに、相変らずコーン・パイプを片手に眼付の鋭い頬の削げた四十代の米人が書類を調べて居たが眼を上げて、ニコチンで黒ずんだ歯の間から木枯しのような声を出した。

「片付いたかね？」

「今度の二人は歯ごたえがあったわね。後始末を頼むわよ」

女性写真モデル募集

本誌女性愛読者の方

奮って御応募下さい

○本誌では、代理部分護品用の各種写真を撮影するため、女性モデルを募集しております。どうか奮って御応募下さい。

○本誌愛読の女性の方でしたら、年齢は問いませんが、分譲用ですから、誌上に発表いたしません。誌上に発表が可能でしたら一層結構です。応募者の条件によっては、相当額の報酬をお支払い致します。

○モデルとしてではなく、助手介添え或はプレイのみに出演御希望の方にも出来る限り御期待に添いたいと思いますので、詳細

「困った趣味だ。取片付けさせよう」

コーン・パイプを握ったまま手を延して卓上のボタンを押した男は、大佐の方に身を乗り出した。

ローザ・ヌエン大佐は身を屈めて、乗馬靴から細く折畳んだ紙片を引き出してデスクの上に拡げた。

「赤色で印をつけた所が弾薬庫、青色が貯油槽、それから、ハイフォン東方四十八キロの沖合の島に、ここ二、三日のうちに魚雷艇を集結させる情報があるわ」

については御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年齢略歴記載の上、編集部宛お申込み下さい。報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心してお申込み下さい。尚、お好みの傾向がございましたら附記して下さい幸いです。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。○特に妊婦資料の作成に御協力下さる女性を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部▽

コーン・パイプをくわえた男は、デスクの後の壁に埋め込んだ金庫のダイヤルを廻し、綴じ込みの入ったハトロン紙の封筒をとり出した。そして、綴じ込みの間から一枚の紙片を抜き出し、それから、デスクの抽出しをあげて小切手帳をとり出して上に重ねた。

「ここに地図がある。三日後、午後四時にA地点を出発した三十名の米兵が赤線の経路を通ってB地点迄移動する。装備は、前回通りB級、但し機関砲一門を携行している」

片目をつぶった男は、歯茎の間から相変らず木枯しのような声を吐き出しながら、小切手に、零のいくつも並んだ数字を書き込んで署名し地図と一緒に彼女の方に押しやった。

真紅のカーテン、真紅の絨毯、そして冷房のきいた快適な寝室でローザ・ヌエン大佐は、ベッドに仰向きになって、突き出した足の裏を、新しい生簀として指名されたコ・ディ・ダウ少尉に舐めさせながら、今や彼女の掌中にある三十名の米兵達の生血を絞り上げるのに、どのような趣好を凝らしてやろうかと、薄い残忍な唇に皮肉な笑みを浮べて思い廻らしていた。

(完)

読者原稿 ……

往生際の美女

(女死刑囚物語)

黒 田 寿

“蒼白な顔に氷の如き微笑を浮べつつ、従容と刑場に立つ美しき女死刑囚”

というのは、なかなか劇的であるが、実際に死にのぞんだ美女たちは、果してどのような最期をとげたのでしょうか。

私は、女死刑囚に興味をもち、研究といつては大げさですが、数多くの本を集めています。私の本棚の八割は女性が死刑になるか、惨殺される話です。いかなる小説も美女が殺されなくては興味が無いのですから、全くわれながら呆れています。

小説、映画などから知った話を適当に着色し、さらに空想を加えたあることないことを

書きなぐり、次々と投稿してみました。これがことごとくボツなら話がわかるのですが時々採用の榮に輝くので、ますます図にのる次第。さぞ編集部の方々は、御めいわくでしたらう。

絞 首 刑

女性に最もふさわしい死刑は絞首刑ではないでしょうか。美しい身体に傷をつけずにすむのがその理由です。首をチョン斬ったり、身体に穴をあけたり、焼いてしまうのは殺される身にとって有難くないでしょう。ガス死刑は傷はつかないが、小部屋のなかに縛りば

なしでおかれるより、首を絞められてブラリブラリゆれる方が、はるかにまします。

死刑としての絞首がいつ頃からあったのかはわかりません。アレキサンダー大王の娘が絞首台を作って、特に若く美しい女性をこれに吊し、もがき苦しむ姿や死後の身体を眺めて楽しんだ話があります。

しかし、時勢一変して自分自身が、この絞首台に立つはめになり、泣きわめきつつ死んでゆきました。それはそうでしょう。どんなに苦しむか、死体がどんな風な目にあうか、よく知っているのですから。

集団死刑として、ユリシースの子テレカマ

スが十二人の侍女を一本のロープでもって、あつというまに吊し首にします。二十四本の脚がバタバタと宙をけりました。その苦しみは長くはありませんでした。

すでに書いたことは除きますが、まず海に出てみましょう。

現在でこそ女性はいく各方面に進出してありますが、十七、八世紀頃はすべて家庭を守るものとされていました。それが海賊を働き、その白い腕で殺人を行う事実を知った時の社会の驚きは相当のものでした。

海賊の情婦になったものはあります。しかし海賊船といえども女性のはせぬ規則になっており、このおきてを破った場合は恐ろしいリンチをうけました。

それは帆柱から足首でもって逆吊りにするのです。東の海に朝日がのぼると同時に執行され、西の海に陽が沈むまで放置する。たったこれだけで十人中九人までは死んでおり、たまに生きていても大勢でユサユサするるので、目鼻口から血を吐いて死ぬのです。これをも耐えぬいても、おもしろと共に海に投げこまれては、絶対に助かりっこありません。

その海賊船に女性が、しかも頭分として乗っている。とんでもないメロウだと、たちま

ち絞首刑でもって酬ゆることにしました。

絞首刑の場合、上半身裸体とするのが当時の規則でしたが、シャツを剥いだら乳房があらわれ、はじめて女性とわかった程度のものであります。勿論、私はこんなのは問題にもしません。

誰しもが美女と認めた海賊。それはアン・ポニーとマリ・リードの二人です。

この二人は仲良しで、一七二〇年頃、同じ船に乗りこんで活躍しましたが、悪運つきて共に捕えられ、共に絞首刑になりました。

アン嬢は吊される時、大いに暴れまわりましたが、これは末練がましいというより、本人自身、最後の抵抗を楽しむという調子だったそうです。尚残念にも(?)執行にあたって上衣着用を許されました。

マリ嬢の方はさらに若く美しく、社交会にでも花形となったと思われるほどで、しかも直接、劔や銃をとったことがないため、法廷は無罪放免とする予定でした。それがおせっかいな奴があらわれ、彼女の口ぐせを証言したので絞首台行となったのです。その口ぐせの言葉とは

「絞首刑なんてヘッチャラ。生き残るのは、臆病者ばかりよ」

決してハッタリでなかったことは、彼女が絞首台に立った態度でわかりました。都合により彼女だけ残され、しばらくたってから吊されたのですが、洗濯された白いシャツと茶色のスカート、磨いた靴といういでたちで、従容とあの世へ行ったのです。

次に西部にとびましょう。

西部開拓時代、女性はいく貴重なもの、貴婦人クラスはもとより、しがたない踊り子やいやしい酒場女まで大切にされ、いやしくも女性に対し乱暴を働いたら最後、フクロダタキにされても文句は云えませんでした。

ところが西部はさすがにひろい。リンチにあった美女がおるのです。

キャトル・ケートがその一人で、かなりの美女であつたのに、なんとなく西部に流れこんだのが運のつき。

たちまち馬や牛を集めて牧場主におさまったのですが、これはすべて盗んだものとあつては、お話になりません。

とうとうバレて、六人の男が彼女を捕え町はずれへと連れてゆきました。その意味をすぐにとった彼女の抵抗は、西部私刑史の語りぐさになっています。

服はズタズタに裂け、ところどころから白

い肉体をあらわしたまま、高い枝からゆられている美女。一八六九年のことで彼女は二十八才でした。

もう一人は、キャット・バルーという二十にも満たぬ娘です。

女だてらに父の仇を討つと称して西部にのりこみ、目的は果したらしいが、次第に脱線して銀行ギャングまでやったのでは絞首刑も止むを得ません。

保安官は正当の裁判にかけるともりだったが、町全体が何となくいきりたち、保安官の留守に吊るしてしまった。吊るしたところは正式の絞首台だが、やはりリンチの部に入るとしよう。

それでも若い彼女には、自分の立場がよくのみこめなかったらしく、絞首台上に立ったまま、大きな目を丸くして、何事が起るのかという顔をしていました。

頸にロープをまくときに、あいにく細いものがなく、細ければ頸に強く喰いこむので比較的早くオダブツになりますが、特別太いのしかなかった。このため吊り下ったあともしばらくジタバタと、もがかねばなりませんでした。

急をきいてフェミニストの保安官が帰って

きた時、バルー嬢は、すでにつめたくなっていました。

次はイギリスへ。

十八世紀、英国では、死刑囚はすべての生きる権利を失うという意味か、執行にあたってうすい経かたびら一枚をあたるだけ、それこそパンティも許されません。

一七三三年。サラ・マルコムという二十五才の美女が死刑になりましたが、ちょうど真冬で、彼女は寒さと恐怖でガタガタふるえていました。

執行にあたったジョン・フーパー君は、気の毒に思い、自分の着ていた厚い外套を着せてやると、彼女は弱々しく「ありがとう」と一言をもらし、首をくぐられました。

一七九〇年、トマス・タリス君は、とんだ災難でした。ハンナというアイルランドの女を吊るすとき、彼女は自分の着ている服をそっくりぬぎすて、群衆に混じっていた自分の友達の方に投げたのです。これら衣類は刑史の所得になる筈だったのに。

しかも、このハンナ嬢、極めて往生際がわるく、護送車の上で猛烈に抵抗し車がグラグラゆれて、思わぬ見ものに観衆は大いに喜んだといひます。

このタリスは更に一七七一年、サラ・メットヤートという二十二才の娘を絞首しましたが、彼女は刑場につれ出される途中、彼の顔に一撃を食わせ、絞首台にのぼるや自ら身を投げて、ぜんぜんあがきもせず地獄へー。この一撃が原因かどうか、彼はこの三日後に死んでいます。美女の執念も、こうなるとすさまじいものがあります。

悲運の少女サラ・トーマスなど、絞首された女にはサラと名づくものも多く、火あぶりには同様メリーやマリーの名がみられます。姓名学の材料にはならないでしょうか。

我国では戦後、女性の死刑執行はありませんが、偶然の機会からインド独立以来の女死刑囚第一号の話を知りました。

ラタン・ベイ・ヤインという二十四才の美女で、ライバルの女三人を毒殺したということです。

一九五五年一月、ニューデリーの刑場に絞首台が立てられ、十三階段をのぼっただけですが、吊るす方も始めてなら、吊らされる方も始めての経験（当り前でしょうね）どちらもブリブルふるえながら執行となりました。

いかなる罪をおかしたかは知りませんが、死刑という運命におちた哀れな女性。それに

対し同情より興味が先にたつ私は、全く人間の価値はないでしょう。しかし、これは事実なのです。一般社会にはとうてい明らかにできぬ性質、これをブチまけることができるのはただ、奇クのみですから、もう少し書き続けます。御容赦のほどを。

斬 首 刑

これもまたすでに登場したものが多く、高橋お伝のみにくい最期、夜嵐お絹のあっさりした往生際など、私にとっては何度も読みかえしても楽しいのですが、皆さんはもうあきあきされているでしょう。そこでニューヘイス島破りの花鳥があらわれます。

折からの雨のなか首の座についた花鳥は、もうどうあっても助かりっこないとふてくされ、背後に立つ首切り浅右衛門の方をふりかえって

「ダンナ。うまく斬ってくださいよ」と冷笑しました。

それまでいくらかは同情していた浅右衛門も思わずカッとなり、左手に雨傘をさしたまま、右手の大刀を片手なぐりにふりおろす。

どっと血しぶきがたちのぼり、花鳥の首は見事にころがりました。満場の喝采をあびな

がら、あとも見ずに引あげる浅右衛門。一方斬りたての生首は獄門に梃けられ、その上に冷雨がふりかかるのです。

斬首を宣せられた女囚が首の座についてもまだ泣きわめいていて、斬手の狙いがなかなかきまらない。後見としてついていた浅右衛門が一計を案じ、女囚の耳に口をよせ、

「女、よろこべ。恩赦により、その方助命されたぞ」

彼女はハッと狂喜する。その瞬間を狙ってスパッと首を斬りました。獄門に晒されてからも彼女はニッコリとはほえんでおり、いかにも大往生を思わせました。この方法は浅右衛門家の秘伝であったそうです。

この話を生かじりした新米斬手。獄舎にあって身のおきどころもなく悲しんでいる女囚に、明日助命されると言ってやった。喜んだ彼女はその晩は何日かぶりでグッスリねむりこみ、翌日お時間となるまでめざめない。

ゆりおこして刑場につれてゆく。ここでようやくハッキリ目がさめた彼女、始めてダメされたとわかったから大変だ。大の男が四人かかってやっと地上に押し倒し、斬手が刃を頭におしあててザクザクと、押し切るようにしてやっと首を落したが、その間じゅう「だ

まされた、だまされた」と絶叫しあはれまわりました。この晒し首がどんな表情だったかは想像つくでしょう。

大量殺人となると、信長や秀吉という戦国時代の面々が登場します。

信長がある日、竹生島に参拝した。どうせ一泊するだろうと、鬼の居ぬ間にというわけで三十六人の侍女は桑美寺に遊山に行った。

ところが信長は、ヘソまがりだから、その日のうちに帰ってきた。侍女が一人も居ないのでカンカンに怒り、御自ら処刑した。

侍女たちの大半は斬られる前にもう死んだものの如く、コロリコロリと首を落され、完全に失神して上半身を起しておけぬものは、胸を刺して殺してから頸をゴリゴリと掻きました。

生首が三十個ばかり並んだ時、突然一人が懐剣をぬいて斬ってかかりましたが、無念にも簡単にとりおさえられました。

彼女は信長を親の仇と狙っていたもので、身を秘して侍女にまでなり、機会を狙っておりながら、こんなつまらぬことで殺されたのでは死んでも死にきれぬ。せめて一矢を酬いようとしたのです。

彼女は安土城の広場で串刺しの刑をうけま

した。肛門から突き刺された槍が体内を貫いてゆく。その激痛のなかで彼女は、あまりにも情けない身の不運をなげき、この世には神も仏もないものかと、信長の呪いつづけておりました。

最後に口から穂先が突きだしました。その時まで彼女が生きていたというのは、無念の齒がみによって槍の穂先がバリバリとかみ砕き、それと同時に息絶えた……これはかなりフィクションが入っています。

問題はこの娘の保証人になっていたのがほかならぬ明智光秀で、両者の仲を不和にし、やがて本能寺への一因ともなりました。

関白秀次の愛妾たち三十六人が、秀吉のため獄門に梟けられました。この時もあまり暴れたりしたものはおりません。数が多いとあきらめやすいのか、それとも女同志の見栄で、おちついたふりをするのでしょうか。

秀吉がひそかに愛した美女は、お市の方と細川ガラシャ夫人ですが、二人とも自刃して首を落される運命になっています。そして淀君もそのあとを追う。戦国時代の宿命でしょうか。

我国では、お伝を最後として斬首された女性はいませんが、フランスでは現在もギロチ

ンを使用しており、数年前処刑された女性があり、何というヤバン人！とばかりさわがれました。

ドイツでは斧だからなお悪い。第二次大戦末期、反戦運動に加って首を斬られた、二十一才の処女ゾフィ・シヨルは、その執行にあってもマユひとつ動かさなかったと伝えられます。一九四三年二月二十二日の朝のことでした。

抵抗運動のパリジエンヌのなかにもおります。一九四四年八月二十三日、シモーヌ・ジャフレエ。ベルティ・アルブレシュト。アンリエット・デュマンといった乙女たちの生首が、さながら獄門の如く石の門柱の上にのせられていたのです。このような何かひとつの思想をもった女性たちの最期は、当然のごときいさぎよいものがあります。

銃 殺 刑

女性で銃殺というのは、まず戦争以外にはないでしょう。

抵抗運動の女性たちを一行にならべ、機関銃でバタバタとなぎたおす。あとにはもう人間とは思われない肉塊が残っていた。穴のあいた心臓をぬきとってアルコール漬にした話

など、殺す方も殺される方も、別になんとも思わぬようになっていたのでしょうか。

こうなるとちょっと古いが、やはりマタ・ハリに登場願わねばなりません。もっともその最期は、あまりかんばしくないのですが。

どういうわけか、彼女は銃殺は狂言で助命されるものと思いこんでいたのです。彼女の愛人には政府高官もいたから、ちょっとした言葉のはしが彼女をそうさせたのでしょうか。

刑場に引きだされても狂言と信じているから、目かくしも笑ってことわり、銃殺隊員に手をふってみせ、立合人にはウイंकを送る仕末。なんとという大胆な女だろうと驚ろかせました。

銃声！とたんにおこる恐怖の叫び。実弾が乳房を破って始めて本当の銃殺とわかったのです。その悲鳴を聞いて、見るものすべてが耳をふさいだというから、余程あきらめのわるい往生際を見せたものと思われま

す。美しい肢体もいまやボロの如く横たわり、隊長がその死体をけとばしながら

「誰か引取人は？」

と声をかけましたが、誰一人返事するものはありませんでした。ちょっと前までは数千人がナイトの役を買ってでたのに……。



間もなく彼女の首が紛失しているといううわさがたちました。シャルロット・コルデーの生首をアルコール漬標本にした国です。或は？と思われましたが半分だけ本当でした。一時彼女の首と胴体は別れていたのです。

彼女の生首は犯罪学研究のため、解剖学者のところに送られておりました。骨格が何か関係することですが、その後は元通り胴体に縫い合わせて埋葬したものの、死体から生首を切断したことは事実です。誰がやった

のでしょうか。

第二次大戦の時、独軍に侵略されていたソ連の一寒村で、スパイ活動をしていた十六才の少女がおりました。

当然銃殺に処することになりましたが、すでに独軍は敗走寸前にあり、将校がまたヒューマニストで、いまさら少女一人を殺してみたところで戦局に影響はないと、部下にナヅをかけてから彼女を刑場に引きだしました。

銃声と共に砂煙があがる。三斉射ともことごとく地面に命中し、彼女は無事な姿をみせている。「運の良いヤツだ」とばかり放免する予定でしたが……。

隊員のなかに石頭が一人いたのか、余程ヘタクソがいたのか、一発の弾丸が彼女の心臓部を射ちぬき、この美少女はねむるが如く横たわっていたのです。

祖国に生命をささげた、この少女の名をチャイカといいます。二十年後、世界最初の女性宇宙船の名と同じなのは、果して偶然でしょうか。

戦争はまだ終わっていません。南ベトナムで捕われた二十二才の美女グエン・ティガに、銃殺の判決がくだりました。美女の銃殺などは空想の世界のみにとどめ、決して現実にお

こなわれることがあってはなりません。

電 気 イ ス

一九四三年十月、二十八才の人妻アニーの死刑執行にあたった刑吏は、相当のSだったとみえて、最後のタバコをくわえさせながらからかいました。

「どんな気分だね」と。

アニーは決して、こんなヤツに敗けるような女ではありません。

「ありがとう。上上よ」

と言って、口にしたタバコをぷっと彼をめがけて吹きつけ、見事鼻頭に命中です。どうみても彼女の方が役者が一枚上でしよう。

名前が似ているので或は同一人かと思わせたのが、十九才にしかならぬ美人ギヤング、トニー・ジョーで、これがまた優秀きわまりない最期をみせました。

一九五三年四月、おなじみのシン・シン刑務所で死刑になりましたが、同情した刑吏がなぐさめの言葉をかけてもみむきもせず、自分の足でちゃんと死刑室まで歩いてゆき、頭や手足がバンドで固定される間、顔色ひとつ変えません。

電流が通じショックが三回、四分半で絶命

したのですが、その平然とした最期は全米を驚かせ、当時の新聞にも

「彼女は、小石の如く無感動のまま死んでいった」

と書かれています。

対照的にみにくい死際をとげたのは一九三〇年九月のルス・スナイダーです。

愛人と共に夫を殺し、ギヤングにおし入れられたようにみせかけたものの、警部に簡単に見破られ連行を求められました。

彼女は警部の前で、三十才の、中年というには、あまりにもみずみずしい肉体をさらけだし、ゆうゆうと服を着換えました。これは万一の望みをたくしたのでしようか。かのマタ・ハリも同じように警官の前で全裸になつてみせたそうです。

裁判になりましたが、彼女はせいぜい二年位の刑と思っていました。それが死刑を宣告されたのですから、たまったものではなく、たちまち気絶しました。

その後も毎日毎晩叫びつづけ。それこそ一分も止むことなく、刑場には勿論、手足をかかえるようにして運ばれ、いよいよスイッチがおされました。

彼女はまた運も悪かったのです。頭部にゆ

く電流回路に故障がありました。高压が脳をつらぬけば一瞬意識を失い、その間に心臓と呼吸をとめるようになっていたのですが。

このため普通の二倍の電圧をかけても意識は失なわれず、しかも両脚の方の温度は高まって、下半身から褐色の煙がもやもやとのぼりだす。彼女のうめき声は高く長くつづきました。

どうしても死なないので、一時中止し故障箇所を直してみましたが、なかなかうまくいかず、結局三度も焼きなおして、ようやく絶命しましたが、この時の電圧は三千ボルト、十五分を要しました。これでも完全に焼けたのは下半身だけで、上半身は生焼けの状態というのです。

普通電気イスで死亡した直後の体温は、口腔、肛門共に六十八度と記載されています。彼女の場合は口腔は五十五度にとどまり、肛門の方は八十度以上といえますから、その苦しきは想像がつくでしょう。

ガ ス 殺

「私は死にたくない」のバーバラ・ガラハムは最も有名です。映画ではおとなしく死んでいます。あちらの三流雑誌によれば、そ

うでもありません。

すべての望みが消えて、いよいよ明日執行というときは一晩中泣きわめき、叫びつづけて、シンシン刑務所に収容されている全囚人が蒼白になったほどです。時間がきてつれだそうとすると、独房の鉄格子につかまって、最後まで抵抗をやめませんでした。

しかも、この大立回りの間、二度まで執行延期の電話がかかり、その度に独房とガス室を入ったり来たり、四度目の電話でやっと処刑と決った時は彼女の気力はつきはてて、すぐに殺してと叫びました。

八角の小部屋に入れられ、周囲の小窓からは見物人の顔が見える。身動きもできぬほどいましめられ、最後に立ち去る刑事が、

「ガスがでてから、十かぞえて深呼吸する
とらくだ」

とささやく。

これに対する彼女の、この世にのこした最後の言葉は

「どうして知ってるの」

でした。

刑事は軽く、その肩をたたいて去ってゆくのです。

ガスがもうもうと彼女をつつむ。深呼吸ど

ころか必死にこらえています。二分、三分。みる方が辛い位の時間が経過し、三分四十秒にして逆に彼女は短く死のガスを吸ってしまいます。

喉が、気管が、肺が刺激されてチクチク痛む。続いて二度三度とあえいだとみるや、大きくぐうっと吸いこみ、その五秒後にガッタリとなっていくずれおちました。

米国ではどこかの国と違って、誘かいが重罪であり、必ず死刑それも即時死刑でもって酬いています。戦争による殺人はかまわぬそうです……これは余計な話。

ボビー少年を誘かいし殺害したヒルデ嬢、サッサとガス室に送られましたが、悪人だけあってあきらめよく、大きく深呼吸して地獄に帰ってゆきました。

彼女の最後の言葉は

「あまりキツクしばらないで」

愛児を殺された両親の、永久に続くなげきに対し、彼女の死刑があまりにも軽かったとばかり、当局には抗議が殺到しました。群衆の手にかければ火あぶり、ハリッケ、股裂きなどに処せられたことでしょう。

ナチスが行ったガスによる大量殺人は有名です。

久しぶりで外にだされ、全裸のまま陽の光をあびている三人の美女の写真を見たことがあります。この三分後に、死がまっているとも知らずに……。

シャワーを浴びさせるといので一列に並んで小部屋に入る。間もなく上からは液体が滴りおちてきたが、これは床にたまり人々の熱気によって気化し、死のガスとなって彼女たちを襲う。

だまされたと知った時はすでにおそく、次々と折重って倒れてゆく美女。十五分後窓があいて空気を入れ換え、床をもちあげると死体はゴロゴロとこぼれてくる。

指輪や宝石を口の中や其の他にかくしておいたものも奪いとられ、甚だしい時は頭髮まで刈りとってから、無造作にトラックに積んで焼却場にはこびこむ。悲惨とも何とも言えぬ最期です。

火 あ ぶり

八百屋お七とジャンヌ・ダークが東西の代表ですが、*拷問刑罰史*で原のおせき嬢がこれに加わりました。しかし二番煎じはやめて、ほかのものをあげてみましょう。

女性が火刑になるのは、夫殺し、にせ金作

り、毒殺犯人、それに魔女があげられます。最も悲惨なのは一七二六年、夫殺しのキヤサリン・ヘイズでしょう。

火あぶりといっても生身を焼くことは、あまりなく、火をつける前に刑吏が首を絞めてやるのが普通でした。そうでなくとも、一氣に火が燃えあがれば、焰が身体を焼く前に窒息死するのです。

キヤサリン夫人の場合、くびり殺そうとしたロープがうまく首にかからず、やり直そうとするうちに薪に点火され、焰が刑吏の手を焦がそうとしたので、ロープから手を放してしまいました。

薪もまたよく燃えず、群衆がぞっとして目を見はるうちに、彼女は半分首を絞められてもだえ、下からはジリジリと火に焼かれて、断末魔の苦しみに絶叫していました。

一七八六年には、フォエビ・ハリスがにせ金作りで処刑されています。

彼女が引きだされたのは、ある女性が絞首刑にかけられてから十五分位ののちです。しかし恐ろしい絞首台に頭を片側にねじまげ、ブラブラゆれている死体をもても、彼女はべつに恐怖も感じないし、うらやましいとも思いませんでした。何故なら彼女は半分失神し

ていたのです。

彼女は柱に縛られ、ロープを首にまかれてから踏台をはずされたので、地上から三十センチ位のところで両足が宙にうきました。それから息の根が完全に止ったのをみはからって、馬車二台分の薪で、この三十才の小柄な女性を灰になるまで焼きました。

にせ金作りではもう一人、一七八九年三月十八日にメリー・マーフイという二十二才のキリスト教徒が処刑されました。同じ様に絞首してから焼いています。

毒殺犯人は十七世紀フランス後宮に多く、ラ・バオサン・リアソン夫人、ピロン公妃など一流の貴婦人が次々と火刑になりました。

魔女裁判は中世の頃が多く、この犠牲になって焼かれたり吊られたりした女性は、四千人に達するといえます。毒薬を使うもの即ち魔女ということになったり、ちょっと人にすぐれた才能があると魔女だから、となる。全く油断がありません。

マリー・ドブレ。マリー・アン、メリー・ウッド。アン・ターナーなど親類ではないかと思われる類似した名。何か関係があるのでしようか。

一六一五年、ロンドンで行なわれたアン・

ターナーの処刑の時です。

色白の、二十三才の美しい裸体を鉄の鎖で嚴重に縛りあげ、全身炎につつまれた時、突然よく晴れた空に雷がとどきました。これは悪魔が自分の弟子を救いにきたもので、彼女は間違いなく魔女ときまりました。

私の第一作『水責め』に登場した絶世の美女ブランヴィリエ夫人。遂に拷問に屈し斬首され、その生首を槍に突きさして薪の上にかざし、胴体と共に灰にする……こういった火あぶりの惨刑は十九世紀まで続いたのです。

ハ リ ツ ケ

江戸時代の刑罰順序では、火あぶり以上の重刑になっています。

天和三年、京のおさんがこの刑をうけました。女性の場合には足をひらかず、のばしたままでおかれます。二人の刑吏が槍を突きだして彼女の前で交叉してみせた時、彼女はこの世のものとは思われぬ悲鳴をあげました。

二度三度とわざと空をついてみせてから、一人が脇腹から肩先へ、ぐいとひねって引きぬくと次の番になる。二十五回から三十回突き、最後に喉を右から突いて終る。これが正式のハリツケです。

しかし地方では、このやり方と異なるものも多く、特に富山藩と金沢藩では惨刑が好きでした。この両者は仲が極めて悪い。

富山藩が行った加賀のおいとの処刑は、すさまじいものがあります。彼女は十八才、商家の娘で単なる旅行のつもりでしたが、有無をいわず他領から来たスパイとして、ハリツケにしました。

まっ裸にして両足を馬の背に結び、おおむけにそりかえるような恰好で富山市中を引きまわします。

時々馬をとめて、おいと嬢の下腹部を槍でチヨイチヨイとつく。これが女スパイに対する刑罰の一つになっているのです。

彼女は舌をかんで死のうとしましたが、すでに歯は抜かれていました。しかも、この藩

のハリツケは女性の方が大の字になるように作られていたのです。

金沢藩でのやり方も全く同じ、ただハリツケ柱は中央に三角の切株があつて、この上にまたぐようにして縛りつけました。

戦国時代、人質を殺す時に火あぶりかハリツケです。大名の奥方になったからといって喜んではいられない。三河の奥平貞能の奥方は、良人の裏切にあつて、二十四才の美しさを散らしました。嫁にきてわずか三カ月、人質に使うのが目的としか考えられません。しかも、逆さハリツケ、鎗槍に刺されての最期です。

信長にそむいた荒木村重の妻妾も同様で、この場合は家臣の女房娘、さらに女中まで加えて女ばかり五百二十二人、ひとまとめにし

な肉体美を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずかずを画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。更に前記二嬢とは対照的に、清楚にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の痛々しいばかりの緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

て処刑されました。

身分が高く、しかも若く美しい女性が最も重刑で、あるものは串刺し、あるものは逆さにハリツケ、或は腹部を刺しとめるなど、一人一人殺してゆきました。とうとう時間がかかってやりきれぬと、一軒の家に押しこめて焼き殺しました。女中あたりの首は獄門に梃ける価値もないというわけです。

死んでも許されなかったのは有馬のよね。水牢中で死んだのですが、その水ぶくれになった死体をあらためたのち、逆さハリツケにかけられました。

『女斗美八景』の佐藤氏の作品に、例のお百が首を掻き斬られたのち、その死体をハリツケにしています。これなども非常に興味をひきました。

ハリツケ処刑後は三日間、そのままに晒すわけですが、三カ月もそのまま放置され、骨だけが残ってしまう、世にも悲惨な目にあった美女の話。

島原の乱の時、城内に糧食をはこびこむゲリラ隊の隊長をしていたのは、吉村とめという十九才の娘でした。

二人の侍女と共に捕えられ大の字ハリツケになりました。勿論いさぎよく死ぬ決心でし

四人の個性のある美女の 縛られポーズの代表的作品集

限定版
写真集

豊満と清楚

頒価一部一〇〇〇円 略号「限二」

登場モデル 長野 良子 大塚 啓子
五月亜紀子 新井マリ子

グラビア印刷による女体緊縛写真ばかりのアルバムです。内容は若々しい豊満

たが、寄手に彼女らに最も効果的な責めを支えたのです。それは処女の肉体を全裸にしてさらけだす、すこしでも息のある女性には絶対にてきぬ恰好で縛りつけた、それ以上のものでした。

即ち城内に向って、彼女たちが間道その他すべての秘密をもらしたと、呼ばわったのです。彼女たちは驚いて叫びました。

「ち、ちがいます」と

しかし鋭い槍が侍女たちの口を永遠に封じこめ、とめ嬢の口には布切をおし入れる。

幸い、城内から、情けの矢が飛んできて、とめ嬢の苦しみを終えてやりましたが、彼女らの死体は、遂に落城するまで放置されたのです。肉体には槍が尚もつき刺さったまま。

その他の死刑

元亀元年、讃岐の国で、おわかという二十才の娘が、城主の鷹狩りの邪魔をしたというだけで「牛裂きの刑」になりました。

二匹の牛に左右の脚を縛り、牛をそれぞれ別の方向に走らせると、彼女は絶叫もろ共まっぴら。問題は牛の速度ですがノロノロと歩かれてはたまったものではなく、せめて首を斬ってくれ、との願いは、入れられませんでした。

でした。

蛇責めと言えは加賀の高尾が有名ですが、実はその前に前田公の愛妾「お貞」が第一号をつとめています。

彼女は二十六才。江戸の神宮の娘で、すばらしい美女でしたが、蛇と一緒に入れられてはお終りです。

蛇は白い肌をいやがってよりつかない。そこで上からショウチュウを流しこんだので、驚いた蛇は苦しみのたうって、彼女の肌にまつわり、体内にもぐりこみました。

やがて内臓を喰い破った蛇は、彼女の口から頭をだしたとのことです。

釜うでは石川五右衛門だけかと思ったら、これも黒佐のおひさの名がありました。

奉行の女中で二十一才。燈台もと暗して万引の名人なのに主人は気がつかなかった。部下の手に捕って始めてそれとわかり、大いに怒ってテン普拉にしまいました。

彼女の死体は全裸のまま、河原のムシロの上に、もうもうたる湯気をあげながら晒しものになっていました。主人の奉行もまた、気の毒なことにクビという結果です。

最後はライオンと戦った処女たちの話。命じたのは勿論暴君ネロで、シエンキー・ヴィ

ッチが、その模様をこう想っています。

「数十頭のライオンが人間の手足を争い、破れた内臓に牙をたてた。たちまち広場は香料よりも強い、血の匂いに満ち満ちた」

「ライオンの口が、美女の頭をまるのみにした。柱に縛られた処女はライオンの前肢で乳房をそがれ、下腹を喰い破られた」

「ライオンの牙はバリバリと美女の首をかみ砕いた。白い手足がバラバラになってちらばる。そのなかでライオンは前肢で美女の生首をころがし、おもちゃにしていた」

「競技場はいちめん血汐にいろどられた。観衆は立ちあがってわいわいとさわぐ、興奮した彼等は、生き残った美女たちにとって、ライオンよりもおそろしいものに見えた」

「最後に残った処女に対し、数頭のライオンが同時にとびかかり、彼女はまたたくまにむさばり食われてしまった。今日の見物は、終わったのだ。観衆は早くも帰りかけている。明日も明後日も、また同じものがみられるのだ」

長々と書き並べてきましたが、この辺でお別れといたします。案外私はネロの生れかわりかも知れません。殺人マニヤである一方、小さな臆病者だと言いますから。

かずひこのノートから……………

『私はこの味のトリコになった』

とやま・かずひこ

二〇パーセント

ある泌尿器医師の研究によると、『タバコを吸うと、その二、三時間あとに、尿のなかに出てくるニコチンは、摂取分量の10〜20パーセントで、これが膀胱ガンの原因になるらしい』という。

ニコチンでさえそれだもの、アルコールが尿のなかにでてこないはずがない。

道理で、洋酒、あるいはビールを呑んだあとのを拝すると、こちらまで、ホノカに酔心地になれるようだ。

おそらく、この事実は、医学的に証明されることと思うが、体験を通じて、私はそれを

確信している。

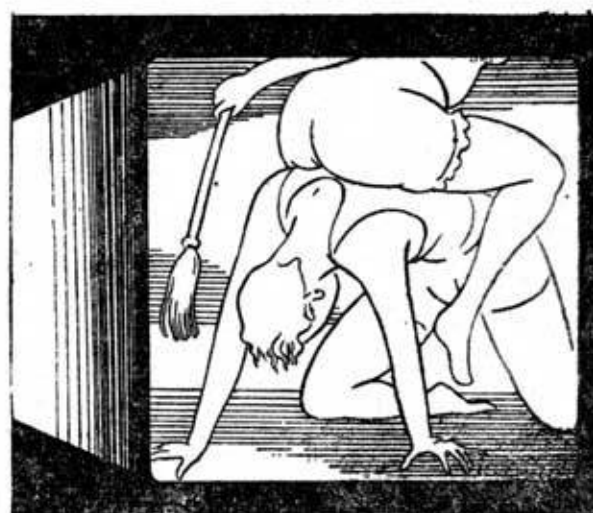
天下の美酒に、酔い痴れるとは、わが趣味のすばらしさを誇りたい。

これこそ、廃物利用の極致といえるのだと思う。天下のジュース党よ、自信をもとうではないか。

ペーパーの役

紹介が少々おくれたが、以下は週刊『アサヒ芸能』12月5日号から（プライバシー旅行大蛇と人食い魚）―渋谷和男氏の随筆から。私をジャングルに案内した黒人は、こんな笑い話をしてくれた。

彼らは猛獣の攻撃に備えて、ふだん水の上



にココナツぶきの小屋をつくって生活しているが、あるとき、彼の娘がトイレの最中に巨大なジボイアが下からヌーッと頭を上げ、ペロリと舌でペーパーの役を演じたのである。黒人の娘対、大蛇ジボイアの話だが、舌でペーパーの役“なんていわれると、私は弱いのである。

ホリダシ

日本橋のデパートで開かれた、大古書展でうれしいホリダシをした。

書名Ⅱ西洋古典好色文学入門。

FCフォルベルグ・大場正史訳

39・2・1、東京桃源社刊 Y1500

全体をきれいなシルバーグレーで装幀した
しゃれた書物でA5判220ページの、ほと
んどぜんぶが、すばらしいのだ。

内容の一部を紹介すると、

『液体を呑むことは、言語同断ないまわしい
慣行であり、ましてや固体にいたってはなお
さらである』

ときめつけておりながら、しかし、これを
軟骨の代用として、口腔または、咽喉に塗布
したり、薬用として嚥下すると、有効な作用
がある——と、その価値を肯定する表現を用い
ている。(P112)

また、この行為から『滋養分をとる』とい
う表現も用いている(P156)

とにかくこの書物は、私流に読んでゆくと
汲めどもつきぬ味があり、とにかく楽しい。

項目は8つに分れ、ノーマルの世界からア
ブの世界まで、それを、学問的に解説してゆ
くので、私は一気に読んでしまった。

私が、いくらすばらしい、すばらしいと絶
賛しても、みなさんにわかって頂けないのが
残念だ。

内容の一節を引用したら、私が、本書をい
かに感動しつつ読んだかを知って頂けるであ
ろうが、いまは、それは許されない。

残念だが――。

私は金千五百円を投じて、これを手にいれ
たが、まったくのホリダシだと思った。

ホリダシといえば、だいぶ古いことになる

が、四年前、東京都新宿区の古本展で求めた
『悪徳の栄え』を――上下二巻――を八七〇円で
手に入れたのも嬉しいホリダシだった。

とくに、この下巻は、発売禁止となり裁判
沙汰になり、世の話題を賑わした。

おいしいことに、入手後、それほど評判にな
ると思わず、誰かに貸し忘れて、いまは手許
にはないが、コプロの世界を描きつくして、
これほどのモノは他にないと思う。

美女と便器

若い人の週刊誌、平凡パンチは、毎号眼の
さめるようなグラビヤでたのしい。

なかでも5月2日号を開いて、私の眼はク
ギズケにされた。

というのは、グラビア特集の『女』の2ペ
ージめで、映画モノローのような女に出演し
た、真理明美が、半開のカーテンのむこうか
らこちらを向いて中腰に立っているからだ。

それだけではない。

注目してほしいのは、彼女のシリのあたり

に、輝やくばかりに白い便器が、顔をのぞか
せているではないか。そして、むかって左側
にはトイレットペーパーまでうつっているの
である。

残念ながら、このシーンについての説明は
一言もないが、まさに一人の美女、トイレの
なかで、これからご用をたすか、あるいは用
をたしたあとなのか不明だが、そのまぎわに
ある実写と解してもよい筈だ。(私は後者と
解したが)

光るタイルのうえに、ハダシで立つそのポ
ーズのすばらしさ。それにもまして、幸福そ
うな便器、みればみるほど暗示的だ。

スタアの私生活に、カメラが入ってゆくのは、
そう珍らしいことではあるまいが、ここ
までリアルに描いたのも珍らしい。

だから、週刊誌あさは、目がはなせない
のである。

女の警察

週刊新潮紙5月14日号の、梶山季之の表題
の小説はMごのみ(?)で仲々よい。

この号は、第6回で、大川作之助という、
ケタ外れの大高利貸しが、朝起きて、かわっ
た朝食をするシーンがでてくる。

やとっている三人の美人秘書を使って、かれ独特の朝食を『摂取』するのだが、朝めしとは云うが、これは決して、ごはんでもなければパンでもなく、すばらしいもの。われら

挿絵画家 を募る

○本誌の内容にふさわしい挿絵を描いて下さる方を求めます。腕に自信のある方は、どうか奮って自作画をお送り願います。

○用紙は必ず白い画用紙に墨又は黒インクにてお書き下さい。鉛筆画や青インクは製版できませんので避け下さい。大きさは御自由ですが、原寸或は二倍、三倍ぐらいが適当です。アミ目やハイライト版は最初は避けて下さい。

○今まで多数の方々の御応募を頂き厚く感謝しております。小誌の期待している程の力作には、残念ながら余りお目にかかっておりませんが、幸い最近になって若干の優秀作の投稿がありました。

○優秀作品は最近号の本誌に発表の上、読者の反響の如何によっては、本誌の寄稿家として毎月執筆願います。

○幻想的で優雅な異色作を期待しております。貴方の傑作で本誌の全誌面を飾って下さい。尚御投稿は第五種便が廃止になりましたので第一種便にて願います。

あこがれのもの—といえば、大体見当がつくだろう。

……大川作之助の朝餉（あさげ）なのである……かつて、彼女も大川の朝餉をつとめた時代があったのである……

とは、すばらしい文章だ。

いずれ、この小説も、単行本となるであろうが、この作者は、吾々を裏切らないから嬉しい。（この号は、発売直後この小説のため発売禁止となった）

ウイスキー

一月のはじめ、東京のデパートM本店で、Sウイスキー会社のPR展“Sまつり”がにぎやかに催された。

同業会社の、宣伝のしごとを引きうけている私は、この種企画は、見のがすことはできない。名古屋でも、仙台でも、必要とあらば、社命で飛んでゆき、状況偵察をし、それをレポートにまとめるのが、私のしごとなのだから。

サテ、そのSまつりの会場の一隅に、Sカクテル教室が特設され、ミスSという美しいお嬢さんたちが、振り袖すがたもあでやかに講師として、ホームバーのカクテルのつくり

かたを教えてください。

図々しく、いちばん前の席に陣どった私はカクテルのつくり方などはどうでもよく、お嬢さんの美しさをユックリ鑑賞させて頂く。ステージのうしろ天井から、前方へむけて、強いライトがたらされる。

つまり、お嬢さんの、うしろから、こちらへむけて、ライトが光るのだ。

そのまぶしい逆光線で、お嬢さんの、口から、きれいに、キリのようなツバキが、でるのまで、手にとるようにわかる。

そして、である。

ツバキは、当然、飛び散って、お嬢さんの手にもつグラスのなかに飛び込む。

説明に熱中するから、いきおい、ツバキの汁の分量も多い。

しかも、ご本人は気づかない。

客席の見物人たちも、そこまでは目がとどかぬ。

誰もが、カクテルのつくりかたにばかり目をうばわれているからだ。

講習がおわると、いまつられたカクテルを試飲させてくれる。

そのカクテルのうまかったこと。やはり、美女のつばきは、うまいのである。

「痴^ち人^{じん}

の

糧^{かて}」〓^{なぶ}

りもの

(三)〓

山本一章

セツ子には被縛や苦痛そのものの陶醉といったものはわからなかった。しかし幾度か経験の中で、自分の肉体が男を魅惑し歓喜させることに誇りのようなものを持ち始めていたことは確かだった。

目を血走らせて獣のように野性をむきだしにし、狂ったようにむさぼり、そして困憊の呻きを挙げる男の姿を軽蔑しながらも、なお

そこには勝利感があった。しかし老人の家での一夜は彼女の心に惨じめさと虚しさだけを残した。二人の男女の異様で執拗なムードの間において、セツコは玩具か小道具としてしか存在しなかったからである。彼女の体は利用されてあそばされたが、結局、最後において無視されたのである。

鄭の屋敷に戻り離れ倉庫の中で自由にされ

ると、セツコは拷問用に作られた木の台の上にぐったりと、その体を横にした。睡眠不足と、充たされなかった欲望のために、彼女は余計に疲労が強いようであった。

「だいぶ疲れているようだな。どないされたんや？」

鄭は目の前にある若いセツコの体に強い欲求を感じながらも、彼女の烈しい疲れ方が不

審だった。

「可愛がられた？」

彼女がかすかに顔を横に振るのを見て、彼は内心ほっとしていた。しかし彼女を老人の屋敷に送って行った時の、（最後のしめくくりは俺がしてやる！）という決心と氣勢が、少し鈍らされたような気持だった。だから、彼女の疲労が回復するのを待つことにした。

（もう一度元気な彼女を苦悶させて、それからしよう。そうでなければ俺の立場は道化してしまう）

彼は軽い寝息を後にして倉庫を出た。

○

午後四時、快晴の太陽は斜めになりながらも、中庭をまぶしく照らしていた。数日前にアケミが架けられて悶えた十字架の下に、セツコの体が両手を上にして爪先立っていた。手首を合わせて縛った縄が十字架の横木に結ばれて、彼女の体重の何分の一かを引き上げているのだった。手首の他に縄はなかった。

「どうだ、少しは元気が出たか？ これから俺がうんと可愛がってやるからな」

鄭は、無抵抗な女体の腰を抱くと引き寄せた。片手で髪をつかむと顔を前に押し出してその唇に口づけをした。彼女の顔がそれを嫌

って左右に振られたが、この姿勢ではその抵抗も無駄だった。唇を捕えた彼の口は、固く閉じた唇を割り歯を開こうとした。しかし、彼女は頑なに閉じていた。

「口を開けろよ！」

腰に廻った手が、その滑らかな尻を強くつねった。

「ウアー」

彼の舌が無遠慮に彼女の口腔の中に押し入った。セツコはむかつくような不潔感に襲われて、その無法な塊りを噛んだ。そう強く噛んだわけでもなかったが、鄭は一瞬、舌を引っ込めて飛び下った。

「イタタタッ！ ウウウッ！」

呻いている彼の唇に血が一筋こぼれた。

「なにをするんだ！」

もつれたような声だった。彼は暫らく口をもぐもぐさせていたが、少し舌が切れたものの大したことがないのを確かめると、じっとセツコを見つめた。彼女は目を閉じていた。

「そんなに俺が嫌いか？ 覚悟してるだろうな？」

鄭はこの女の抵抗を憎む反面、氣力を失うまで責め上げてみたい意欲を持った。彼は細手の縄を持ってきて、半吊りのままのセツコ

の頭髮を一つにまとめて縛り、後へ引いて右足首に巻きつけた。その縄がぐいぐいと縮められ、右足が尻の方へ引き上げられた。

セツコの顔は上向きにのけぞり、それと連結された右足先との間隔が三十センチ近くになった。彼女の体重は両手首と左足先だけに掛かり、弓なりにそり返って苦しげだった。

「苦しいだろう？ 罰にしばらく、そうしていいといい。少し叩いてやろうか」

平たい板片を持った鄭は、それで円く突き出された乳房の膨らみを軽くポンポンと叩いてから、伸び切った左足の腿を強く打った。

「アアアッ！ ムムム！」

板片は腿の前後から、柔らかそうで白々とした腹まで打った。アクロバットのような姿勢の女体は、その打撃には全く無防備でなすがままだった。上向きになった口は開かれたまま喘ぎ、打たれる度に呻いた。

「フフフッ、アアッ、アワワッ！」

密着していた両腿はだらしく開き、両手首と左足の爪先を軸にしてゆっくりと回転する女体は、バレーのポーズのようでさえあった。鄭は一しきり打ってから、その逆海老の真直ぐに伸びた喉もとに唇を寄せた。それから唇は僅かに開いた彼女の唇に上から蓋をし

た。今度は殆んど抵抗がなかった。

「いい娘だ。温順しくしてればいいのに。さあ、もう解いてやろう。苦しいだろうな、この姿勢は」

縄を解かれても、のけぞった首筋と、後へ引き上げられた右太腿は半ば痺れたように痛んでいた。

「温順しく云うことを聞くだらうな？ それなら少しは手加減してやるから」

鄭は若いピチピチした体を抱き上げると倉庫へ引返した。肌の弾力とぬくもりが、彼の手の中へ快い刺激を与えた。

「いい体だな。畜生！」

部屋の中へ入ってから、セツコは木製の台の上に仰向けに寝かされ、手首足首に縄を掛けられて大の字に縛られていた。そして尻の下に枕のようなものが差し込まれたため、女体の下半身は大きく足を開いたまま弓なりにそり返った。

その姿勢は無防備そのものであった。セツコは逆うことなく、鄭のなすがままに柔順に縛られていた。抵抗してみたところで結局は彼の思うままにされるのだという諦めの反面今は自分が主役であり、一人の男が自分の肉体に惑溺していることの満足感も強かった。

鄭は直ぐには行動に移らなかった。女の体の構造は、この姿勢では男性を自分の意志で全く拒むことができないのであったが、彼の中年のねばっこい欲求は、先ず口づけから始った。ぬめぬめしたなま温い彼の唇が彼女の口に押しつけられ、舌が無遠慮に彼女の舌を探り吸った。生臭いような口臭が、彼女を不潔感で一ぱいにした。

「ムムムムッ、ウウウウア、」

セツコはむかむかするような不快感のため彼の唇が外れると顔をそむけて唾を吐いた。

彼の吸盤のような口は、直ぐ彼女の他の部分へ移った。乳首からそれを支える膨らみの側面、腋窩から胸、脇腹、臍。

くすぐったかった。男の唇と舌は蛭のように離れようとはせず、彼女の敏感な皮膚の味覚を味っているかのようにであった。

（きたないひと！）

しかし時々頭の先までキューンと響くような刺激が襲い、彼女の全身がビリビリと震えるのだった。

痛かった。そして直腸をくすぐるようなやり方が、彼女に屈辱感と羞恥心と呼び戻したようであった。

「止して！ それだけはもう止して！」

セツコは喘ぎながら初めて声を立てたが、鄭の指は意地悪く動くだけで離れようとはしなかった。浣腸をされた時や、蠟燭を立てられた時とは全く違った圧迫感があった。

「どうだ、いい案配だらう？」

男はやっと口を放すと両手はそのままで囁いた。彼女は叫ぶように答えた。

「もうそれ取って！ 痛い！」

○
都会と異なり、夜は静かで暗かった。セツコはその暗闇の中で一人寂しい虫の音を聞いていた。孤独な肉体と心に、そのかすかな音は哀しみを運んできた。

庭の十字架の上は磔つけられていた。アケミの時と同じように二本の横木が彼女の両手と両足を広げてはいたが、両腕は左右に垂平であり、足先は横木の上に載せられた姿だったので苦痛は殆んどなかった。しかし口を割った縄は背後の柱と一緒に巻きつけられ、手首、足首、胸、腹部、太腿に掛けられた縄が彼女を十字架上にしっかりと固定していた。

「明日の朝まで、そうしているんだな。罰だよ」

鄭はセツコを磔つけると、そう云って去った。最初の接吻の時に舌を噛まれ、その後の

態度や表情からも自分を好いていない彼女に少し憎しみをすら持っているようだった。セツコはアケミのことを羨しく思った。同じように、いや、もっとひどい責めさえ受けているアケミではあったが、彼女への大山の愛情をセツコは本能的に感じていたからだ。売春婦以下の牝の道具のついた玩具でしかない自分の境遇を考えると、心細さと悲しさで涙がポロポロとこぼれて、乳房を濡らした。暗い夜は、彼女の心を感傷的にしていた。

自分の意志では、どうにもならない自分の体が可哀想になった。

(もうわたしは男から愛される女ではなくなったのだろうか。体だけをもてあそばれる牝でしかないのだろうか)

腰に力を入れると肛門が痛んだ。そして広げたままの腕がだるかった。

尿意が急激に襲ってきた。セツコは体を小刻みにふるわせた。

「ウウウウ、オーオーオーッッ」

声にはならなかったが、彼女は咬まされた縄の下で泣き喚いた。誰かに聞かそうという悲鳴ではなかった。特別な意味はなかった。強いて理由を探すなら、それは抑圧された心と生理の爆発といえるかもしれない。だから

呻きと殆んど同時に、液体が烈しく放出された。開いた両足を伝い、柱を濡らし、土に落ちた。その排出は彼女にささやかな解放感をもたらしただけの効果はあった。

鄭が戻ってきたのは、それから一時間以上も経ってからで、夜は深く静寂そのものだった。十字架上のセツコを見上げて、懐中電灯で顔を照らした。

「苦しいか？ 降ろしてやろうか？」

彼女は不自由な顔を僅かに肯かせた。

「降ろすといっても、休ませるんじゃないんだぞ。それでもいいんか？」

彼女はじっとしていたが、内心たとえ降ろされてから責折檻を受けるにせよ、独りで放置されているよりは、ましなような気がしていた。踏み台を寄せてそれに上った鄭は、広げられた彼女を電灯で照らしながら、揉むように撫でさすった。腕から乳房へ、そして腹部から腿へ。

「さては、やったな。くさいぞ、くさいぞ」

口の縄が解かれた。彼の口が迫ってきたがセツコは、もう逆らわずに、その口づけを受けた。

「いい子になったな」

縄は手首から下へ順に解かれた。足を解か

れている間、彼女は上体を彼の背にもたせかけていた。男の体臭が強かった。手も足も軽く痺れて自由に動かせないのを、抱きかかえるようにして彼女の体が地上へ降ろされた。

「海岸を散歩しようか？ もう今なら人もいないだろうからな」

鄭はセツコの返事を待たずに、彼女の手首を後手に縛ると、その縄尻を体の前面に廻わして首に巻きつけた。後手首は臀部の上にあった。別の縄で縦縄の上からウエストをくびるように締めつけられたので、縦縄は彼女の柔肌に喰い込んだ。

「それでいいだろう。顔は勘忍してやろう。誰かに見られるとまずいからな」

縛られた上から男用のワイシャツが着せられ、腕の通っていない袖は、胸の所で結ばれた。藁草履がはかされると、彼はセツコの背を押した。

妙な恰好だった。ワイシャツの裾は膝上十センチ位で、彼女を子供っぽく見せたが、藁草履は長くて半分近くが残り、歩くとペタンペタンと音を立てた。そして歩くことは、彼女に縦縄の苦痛を加重するのだった。だから小刻みにしか歩くことができず、時々よろけそうになった。鄭は右手で彼女の背を抱える

ようにしてゆっくり歩いた。

門を出て暗闇の降り坂を歩く二人の姿は、遠目には、仲睦まじいアベックのようであった。人に出逢うことはなかった。ただ国道を横切る時、まぶしくヘッドライトを照らしながら疾走する自動車が二台あったが、運転手は二人に気がつかないようであった。

「いい夜だな。こんな深夜に散歩するのは何年ぶりかな」

彼は星のない空を見上げて、大きく深呼吸をした。

「あんたはどうか。夜は嫌いか？」

「……………」

「軍隊にいた頃はよく夜の空を見たもんだが……………。精神榛で尻をぶたれてな。尻が青む程殴るんだよ。足を開いて尻を出せて掛声を聞くと、ぞっとしたもんだよ。まあ命だけが残ったのが幸いだが、あんたは戦争中のことは知らんだろうな」

「……………」

セツコの耳には彼の言葉が殆んど入っていなかった。縄の摩擦が股づれのような痛みを絶え間なく感じさせ、彼女の神経のすべてがその個所に集中していたからだった。

「返事しろよ。愛想がないな」

堤防の階段を上る時は辛かった。一步一步中気の老人のようにしか上れなかった。そして階段を降りる時も同じだった。

「痛いわ」

彼女は訴えるように彼に言った。

「どこが痛い？」

皮肉な質問だった。

「……………」

「どこなんだ？」

「オシリと……………」

「よしよし、帰りには外してやるよ」

階段を下りた所に小さな棧橋があった。

海は真暗で空との区別はなく、鄭の手にした懐中電灯だけがピタピタと音を立てている

木の棧橋を照らしていた。潮の香がぷーんと鼻をくすぐった。

「冷いかなあ。漬ってみるか」

彼はセツコの返事を待たずにワイシャツを剥ぎ取った。

「許して！」

その切ない言葉は反って彼の嗜虐心を刺激したようだった。彼はポケットから短い紐を取り出すと、それを咬ませて猿轡にした。それから棧橋に散らばっている藁縄の少し長い目のをセツコの首に巻かれた縄に通して結ん

だ。手拭で目かくしがされ、草履が脱がされた。

「さあ、覚悟するんだな。処刑だ」

セツコは自由を奪われた姿で棧橋の先端に立たされた。鄭は壊れたバケツで海水を汲むと、その上から流した。

「ウウウウッ、アアウ」

十月に入った夜の海水は冷めたかった。

「一、二、三、四……………九、十！」

鄭が尻を蹴った。セツコの体が空間に躍りズボンと大きな音を立てて水中に没した。首に掛けられた藁縄は、男の手に握られていた。直ぐ海面に頭が浮き上った。

濡れそぼった黒髪が、蒼白い顔に乱れて凄惨な表情だった。彼女が立つとそう深くなくて海面が乳房の下になった。首の縄が棧橋の杭に結びつけられ鄭の懐中電灯が消された。

「ウウウウ、ウンウンウン」

喉の奥から絞り出すような声だった。

「しばらく、そうしてるんだな。俺が好きになるようにな。どうや、冷いか？」

冷めたいというよりは、海水に浸った体の表面がピリピリと痛いような感じだった。それに縦縄で擦られた個所に海水がしんでヒリヒリと痛んだ。真暗な棧橋の下で首を引張ら



れて海に漬っている彼女は、恐怖と冷めたさで体をふるふる震わせた。

「オイ、声を出すなよ。人が来たから」

低い声で鄭が棧橋の上から声を掛けた。ミシミシッと棧橋がきしんで誰か来たようだった。提燈を下げていた。

「誰かおいでですか？」

土地の者らしかった。

「ああ」

「夜釣りでもなさってるんですかい？」

鄭は棧橋の先端のセツコとは反対側に立っていた。

「いや、散歩のついでに海の臭いを吸いに来たんや」

「先刻、何か大きな水音がしましたが」

「ああ、石を投げてみたんや」

「旦那さん、ここらは危いですから気をつけて下さいよ。この間も若い男の投身自殺がありましたな」

鄭は自分が自殺者に間違われたらしいのを知って苦笑した。それにしても自殺者に気をつけて下さいと言ったその男の言葉がおかしかった。その男は煙草に火を点けるとうまそうに煙を吐いた。

「こちら、夜釣りなら何が釣れるんや？」

「そうですね。こ

のところ駄目ですが、キスなんか揚るようですよ」

鄭はその人の良さそうな男ののんびりした態度に苛立たしさを感じた。水に漬っているセツコのが気になるっていたからだった。

「じゃ、気をつけて下さいな。ごめん」

提燈が遠去かって行くのを見送りながら、鄭はセツコの方を覗いた。

「大丈夫か？」

「ウウウウ、アアアア」

懐中電灯で照らすと、セツコはやはり胸から上を水面に出していたが、顔を頻りに振っていた。彼は首に繫った縄を杭から解くとそれを手にして岸の方へ歩いた。セツコは縄に引かれながら水の中を進んだ。

濡れそぼった彼女の体は冷え切って、岸に上ってから顎をがくがく震わせていた。鄭は首縄を解いて縄を外した。

「寒いか？ 少し運動して体を暖めんといかんあ。走ってみるか」

彼は女の口を括っている縄も後手の縄も解くと、尻を叩いて言った。

「さあ、走れ、この砂浜を真直ぐ走るんや」

セツコは全身を襲って来る寒さに辛抱できず、彼が言うままに砂の上を走った。裸のま

ま走る恥づかしさも、暗闇が消してくれた。走りにくかったが、夢中で手足を動かした。

濡れた頭髮が顔に乱れ、それを掻き上げながら走る彼女の姿は、もし白昼であつたら爽快な詩情を漂わせていたに違ひなかつた。

北欧の映画に見るような若い女体の健康な躍動であつた。鄭は堤防に上つて、彼女と同行に小走りに歩いていった。暗いために彼女の姿は見えなかつたが、そのサクサクと鳴る砂の音を耳にしなが、彼はその女をいじらしく思った。セツコは二度ばかり砂の上に倒れたが、直ぐ起き上つて走り続けた。息が切れたが、狂つたように走るのだった。

セツコは砂の上に俯伏せに倒れると、遠い昔になつてしまつたような子供の頃を思い出した。潮の香のしみ込んだ砂の臭いが懐しかった。

「もう寒くないだろう。大分走つたからな」

全身砂にまみれた肌は、男の照らす懐中電灯の下で妖しく魅惑的だった。男は下駄を履いたままの足を女の脇腹に差し入れ、手を掴んで仰向けに引っくり返した。体の前面にも砂がべったりと附着していた。

電灯が消され、繰り返す波の音が暗闇の中で二人の男女を憐んでいるかのように鳴っていた。

いた。

○

海岸から戻つた二人は、離れ倉庫の中にいた。入浴したセツコは、全身に縄を掛けられて後手にされて立たされていた。首縄から体を縦に割つた二条の縄を軸にして、両腕、乳房の上下、腹部、太腿と横に掛けられた縄は強く彼女の体を締め上げ、縦縄の二本も尻と腹部のところで左右に開かれたため深く肌に喰ひ込んでいた。

息のつまりそうな緊縛で、何重にも巻かれた後手首の縄が、掌を忽ち痺れさせ始めていた。口には縄が咬まされ黒い布が目かくしをし、揃えた両足首にも縄がかかっているためセツコの体には全く自由がなかつた。傍に鄭が立っていた。彼はこのように滅茶苦茶に縛り上げることによって、自分の精気を吸ひつた女体への復讐感に酔っていた。

「苦しいか？ うん、なかなかいい恰好だ。

楽あれば苦ありというところだな。どうや、そのまま逆さにぶら下げてやろうか——」

彼は縛り上げられているセツコを抱いてみた。固い縄と柔らかい肌が彼の皮膚に弛みのない緊縛感を伝えて、新しい興奮を呼び起すのだった。彼は横抱きにすると平手でぶっく

りと盛り上つた臀部の円みを打った。

肌を弾くような凄まじい音が部屋に響き、白い円みが朱を帯びてくるのだった。右の尻から左の尻へ。力一ぱいの四十回は、その打たれる部分に熱を持たせ、朱色に白い斑をぼかし始めるのだった。

打たれる痛さと縄の固さにセツコは涙を流して、目かくしの布を湿めらせていた。

「さあ、これでおしまい。女の尻って鈍感だつていうけれど、俺の手の方が、痛いようだな。さあ逆さ吊りだぞ。その中に夜が明けるからな。朝になつたら大山のそこへ送つてやるから、最後の辛抱や」

高くて小さい台の上に、縛られたまま俯伏せに載せられ、はみ出している足が持ち上げられると両足首を縛っている縄に太い縄が結びつけられて引き上げられた。セツコの体は小さな台の上で逆海老のような姿になつた。

「ウウウウ……」

縦縄が彼女の柔肌を圧迫して、こらえ切れない痛さだった。天井の鉤に縄を結んだ鄭はセツコの上体を抱き上げて足で台を外した。頭が床に着きそうな逆吊りになつた。

「もう少し上げてやるわな」

鄭は台の上に上つて、逆吊りになつてゐる

女体を両手で抱きかかえて持ち上げた。

「さあ足を伸ばしているんだ！」

伸ばした足先が殆んど天井の鉤に着くところまで持ち上げてから、両膝と片腕でその体を支え、残った手です早くたるんで足の縄を鉤にくるくると巻きつけた。セツコの顔は床上一メートル位のところにあった。

【山原清子、鈴木晃子】 SMコンビ・フोट.....

女性対女性の眞迫的緊縛演技写真 分譲

MS役.....山原 清子
M役.....鈴木 晃子

鈴木晃子嬢は、山原清子のペットとして永らく飼育されていたのですが先般本誌のモデルとして紹介を受け、初めて「鼻責万華鏡」(略号「はた」)として八枚一組の鼻責めフットを作成して好評を博しました。今回更に山原清子が実際にペットの鈴木晃子を責めている場面を写真部のアイデアを加味して撮影しました。實際を地でゆく熟演技は全く当初予期しなかった好結果で素晴らしい傑作が出来上りました。一見下さればお分りの通りSFオトとしてもMFオトとしてもその熱のこもったポーズは必ずや今までにない新鮮さで皆様の胸奥に迫るものと思います。

猿轡をされるまで

大手札印画紙焼付 十枚一組 一五〇〇円

略号(さる)

強烈に縛りあげられた鈴木晃子の鼻をつま

逆吊りになった女体は、時々前後左右に腰を振った。そしてその動きのため、ゆらゆらと揺れながら足首の縄を軸にしてゆっくりと回転した。

「ムムムッ！ ウムムムッ！」

セツコは頭をふるわせた。血が頭に下り、伸びた胴のため縦縄が両肩に骨を砕く程強く

み口を開けたところへ布片を押し込み、豆絞りの猿轡をつわを無理強いに噛ませてしまうまでの連続組写真である。

縛りあげられるまで

大手札印画紙焼付 十枚一組 一五〇〇円

略号(さあ)

抵抗する晃子の両手をうしろへ捻じあげて縄をからませ、きりきりと身動きできなくなるまで縛りあげる過程の動きのあるポーズを連続で組写真としました。

屈伏させられるまで

大手札印画紙焼付 二十枚一組 三〇〇〇円

略号(さや)

痛めつける清子のサジスチックな表情と姿態。晃子は清子の意のままになりながらも、その豊かで美しい肢体を惜しげもなく、さらけ出して見事な場面を展開する。

喰い込んでいるのだった。

「こりゃ最高だな。どうや参ったか」

鄭の野卑な言葉も、両乳房を握っている彼の手の感触も、やがてセツコの意識から遠のいて行った。ただ口の縄が解かれ、力なく開けたその口に、ないやら押し入って来るのを朦朧とした意識の一部で感じていた。

○

くたくたに綿のように疲れ切ったセツコだった。残酷な逆吊りからどれ位時間が経ったのか分らなかった。すっかり縄を解かれたセツコは、やはり床の上に横たえられていた。「残念だが、もうお別れや。また来いよ。なあ」

鄭は横に坐って彼女の手の縄の跡をさすりながら言った。

「帰ったら、ゆっくり休ましてもらえよ。俺からも電話しとくからな」

抱き起されたセツコの両手が再び後に廻わされ、柔らかな紐で縛り合わされた。両足首も揃えて同じような紐で縛られた。

「少し時間がかかるから、楽なようにしておいてやるからな。オシッコしたいか？」

セツコがかすかに肯くのを見ると、鄭はニヤリと笑って立ち上った。

「じゃ俺がさしてやる。途中でされると困るからな」

鄭の両手が後左右からセツコの両腿にかかって持ち上げられた。赤ん坊にさせるのと同じ恰好だった。

「さあ、ここはタイル貼りだから大丈夫。やってしまえ」

しかし、こんな恰好では、いくら疲れている彼女にしても無理だった。

「どうしてもしないんなら、厭でも出るようにしてやるよ。尻を叩いて。体を汚すのが厭なら早くやってしまえ！」

彼女は目を閉じたまま、腰の力を抜いた。

○

蜜柑箱を少し大きくしたような頑丈な箱にセツコが入れられた。体を二つ折れにし、頭を膝にくっつけると、すっぽり中に入ってしまっただけの広さはあった。箱の中に坐ったセツコは、そのまま牛乳を二本飲まされ、ハンバークを食べさせられた。

「箱詰めにして送ってやるからな。午後には配達されると思うから辛抱しろよ」

簡単な食事が終ると、口に縄が咬まされ、黒い布で目かくしをされた。そして、彼女の体の空間にクッション枕のようなものがいく

つか詰められてから頭を前に曲げさせられ、蓋が上から置かれた。

「声を出すんじゃないぞ。人に見つかったら恥しいのはお前だからな。それに大山のころへ帰るんだからな」

非情な金属音が蓋を釘づけにして行った。蓋の二隅に小さな三角形の空気抜きが開けられてあったので、窒息する怖れはなかった。

箱の上から藁縄が嚴重に掛けられた。女体の箱詰め荷物だった。エフが附けられ、箱にも宛名と差出人がマジックインキで書きつけられた。箱の中でセツコは体を動かそうとしてみたが、蓋が頭を押さえ、左右前後を囲んでいる板と詰められたクッションのため、自由にはならなかった。

午前九時、トラックがこの屋敷に着いた。

「われ物だから気をつけてくれよ。それに天地を忘れんようにな。いつ頃着くかい？」

「そうですね。今日中でないといけませんかい？」

「うん、先方さんが急いでいるから間違いない夕方までに届けてくれよ」

鄭は念のためトラックの二人の男に金を握らせた。

「こっちから電話をしとくからな。遅れんよ

うに届けてくれよ」

「うはあ、こりゃ重いですな。石でも入ってるんと違いますか」

運転手とその助手は、箱を持ち上げながら笑った。

トラックが走り去るのを見送った鄭は、大きくあくびをした。さすがの彼も疲れを感じているのだった。しかし、内心多少未練があった。

(いい女だったがな——)

彼は海岸の砂の上を懸命に走っているセツコの姿を思い浮かべていた。青白く、そこだけが、ほの明るく肌を輝やかせていたセツコの裸身が、今の彼には何か神々しいもののようにさえ思えるのだった。

走るだけ走った上で、力つきて、ぐったりと砂浜に俯伏せに倒れたセツコの臀部についた粗い砂が、懐中電灯に照らしだされてスポットされた時の妖しい光景が、今もありありと彼の目に焼きついている。

彼は諦めきれぬ思いで、もう一度縄目にくびれたセツコの蒼白い絨肌を睨み映そうと、瞑目した。

(つづく)

△編集部注▽挿入写真は、筆者の提供によるものです。

〔最新版〕 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙(9×13㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

- | | | | | | | | | | | | |
|------|-----------|------|------|-----------|------|------|-----------|------|-------|-----------|------|
| G 12 | 全裸しぱりと浣腸器 | (玉田) | G 38 | 柔肌は縄にくびれて | (玉田) | G 69 | 木馬責め斜め後姿 | (大塚) | G 100 | 膨大な臀部を眼前に | (大塚) |
| G 11 | 浣腸器に脅びえる女 | (玉田) | G 37 | 裸を誇りの椅子縛り | (玉田) | G 68 | 首枷のさらしもの | (大塚) | G 99 | 反りかえる緊縛裸身 | (長野) |
| G 10 | 恐怖のいたぶり | (新井) | G 36 | 写真に埋れた全裸姿 | (大塚) | G 67 | 目かくしのハリッケ | (大塚) | G 98 | 台上の緊縛裸身像 | (長野) |
| G 9 | 手吊り全裸さらし | (玉田) | G 35 | 美貌と豊胸を誇る女 | (長野) | G 66 | 手吊り足縛り仰臥 | (新井) | G 97 | 膺乳房強調喰込む縄 | (大塚) |
| G 8 | 全身ガンジガラメ | (大塚) | G 34 | 典型的な股間しぱり | (大塚) | G 65 | 猿ぐっわの婉な表情 | (新井) | G 96 | 白肌に映える光の縞 | (玉田) |
| G 7 | 煙草責と荒縄緊縛 | (大塚) | G 33 | 足でなぶられる鼻 | (大塚) | G 64 | 後手縛全裸の美しさ | (大塚) | G 95 | 全裸アグラ坐り縛り | (玉田) |
| G 6 | 縄に羞らう裸しぱり | (長野) | G 32 | 踊子の緊縛ポーズ | (絹川) | G 63 | 強奪されたパンティ | (大塚) | G 94 | 裸身を晒す両手縛り | (大塚) |
| G 5 | 敷布に悶える白い肌 | (玉田) | G 31 | 肥り肉を晒らす女 | (東浦) | G 62 | 責めぬかれた表情美 | (大塚) | G 93 | 六尺禪巨大臀部虐め | (大塚) |
| G 4 | 一糸まとわぬ晒し者 | (玉田) | G 30 | 逆エビと浣腸器 | (大塚) | G 61 | 可憐ないじめられ様 | (大塚) | G 92 | 白布の猿轡と白肌責 | (木村) |
| G 3 | 豊臀と足首と後手縛 | (玉田) | G 29 | 緊縛裸身を誇る足 | (長野) | G 60 | 両手吊りの猿ぐっわ | (新井) | G 91 | 奴隷の裸身を捧げる | (木村) |
| G 2 | アグラで縛られる | (玉田) | G 28 | 白肌は縄にくびれて | (大塚) | G 59 | 無抵抗の裸いじめ | (大塚) | G 90 | 後手縛り裸立姿晒し | (玉田) |
| G 1 | 顔面から全身厳重縛 | (東浦) | G 27 | 革の猿轡で責める | (新井) | G 58 | 不安定な台上股間縛 | (大塚) | G 89 | 豊満裸身を誇る緊縛 | (玉田) |
| | | | G 26 | 肌につき刺さる荒縄 | (大塚) | G 57 | 色魔に脱がされる | (新井) | G 88 | 巨大な臀部全裸後手 | (大塚) |
| | | | G 25 | 縛られて鼻を任す | (大塚) | G 56 | 椅子に跨がされた女 | (新井) | G 87 | ヤンチャ娘開股縛り | (長野) |
| | | | G 24 | 後手縛全裸椅子跨ぎ | (東浦) | G 55 | 後手縛りで寝室へ | (絹川) | G 86 | 全裸でしやがむ後手 | (玉田) |
| | | | G 23 | 豊胸に黒紐の輝やき | (長野) | G 54 | 後手吊り全裸の美 | (玉田) | G 85 | 膨隆見事な乳房責め | (長野) |
| | | | G 22 | 二つの乳房アップ | (長野) | G 53 | 全裸後手吊り晒し | (玉田) | G 84 | 首縄開股強烈縛り | (木村) |
| | | | G 21 | 椅子に縛られた全裸 | (玉田) | G 52 | 全裸正面強烈亀甲縛 | (木村) | G 83 | 蒲団上に転がった女 | (遠藤) |
| | | | G 20 | 足首と後手首と縛り | (玉田) | G 51 | 股間縛り全裸重量感 | (大塚) | G 82 | 両手開き吊り顔虐め | (新井) |
| | | | G 19 | 諦観の後手しぱり | (玉田) | G 50 | 後手逆エビ強烈鼻責 | (大塚) | G 81 | 全裸後手足首連繫縛 | (玉田) |
| | | | G 18 | 責写真に埋れた緊縛 | (大塚) | G 49 | 裸身の美を誇る縛り | (長野) | G 80 | 縄にもたえる美女 | (絹川) |
| | | | G 17 | 黒フンで縛られる女 | (玉田) | G 48 | 荒縄と豆絞りの猿轡 | (大塚) | G 79 | 美貌をいためつける | (絹川) |
| | | | G 16 | そりかえる鼻の頭 | (大塚) | G 47 | トイレを前にして | (大塚) | G 78 | 長髪垂らし全裸縛り | (長野) |
| | | | G 15 | 踏みつけられる美貌 | (大塚) | G 46 | 庭の見える部屋にて | (大塚) | G 77 | 火あぶりにあう女 | (大塚) |
| | | | G 14 | 美しき全裸強調縛り | (大塚) | G 45 | オシメカバー縛り | (大塚) | G 76 | 革全頭マスクと手錠 | (大塚) |
| | | | G 13 | 女囚の縛られ姿 | (宇治) | G 44 | 女囚の縛られ姿 | (宇治) | G 75 | 木馬責め斜め前姿 | (大塚) |
| | | | G 43 | 全裸の肌は縄まかせ | (玉田) | G 42 | 全裸の肌は縄まかせ | (玉田) | G 74 | 革全頭マスクと手錠 | (大塚) |
| | | | G 41 | 女囚の縛られ姿 | (宇治) | G 40 | 女囚の縛られ姿 | (宇治) | G 73 | 長髪垂らし全裸縛り | (長野) |
| | | | G 39 | 全裸の肌は縄まかせ | (玉田) | G 39 | 全裸の肌は縄まかせ | (玉田) | G 72 | 火あぶりにあう女 | (大塚) |

娘相撲物語

孝二の結婚

／＼カット・海野三津男

海野三津夫

孝二は、夜明けに目を覚ました。

文子は、彼の肩に手をかけたまま安らかな寝息を立てていた。

孝二は、その手をそっとはずすと、起き出し、窓をあけた。

風は無かった。

水平線がわずかに明るみを帯び、昨夜は音を立ててくずれ落ちていた波は、今は静かに汀を洗っていた。

冷えびえとした空気が、感動の夜の、火照りを残した肌に快よかった。

彼は、籐椅子に身を沈めると、じっと目を閉じた。

文子との出会いは、二年前の、ちょうど昨日のことだった。二人は、結婚の日を、その日に選んだのだった。

二人の出会いには、普通の男と女の場合とは全くちがっていた。ちがっていたというより全くショックキングであった。

(一)

孝二は、自分がそこに来た目的さえ忘れてただ茫然と立ちすくんでいた。

もみ合っていた二つの女体が、折り重なって倒れた時、孝二は我に返った。しかし、彼は、そのまま一步も動けなかった。

どうと倒れた女体が解き離れた時、孝二の

神経は、はじめて反応した。だが、それはおそかった。

一人が、「アッ！」と口を開き、もう一人が、「見たらいけないっ！」と叫んだ。

彼が立ちすくんだのは無理もなかった。

それが、職業的な女の、職業としての姿態であるなら別にどうということはないが、突然、普通の女性の素肌を目にした場合、大抵の男性はショックを感じるものだ。

しかも二人の場合、とうてい女としては考えられないことをやっていたのだから、孝二のショックは大きかった。

彼は、駆け出そうとして、はじめてそこに

来た目的を思い出した。

「電報が……カズちゃんに……」

それだけの声が、やっと出た。

後ろに差し伸べた手から、電報がパツと奪いとられた瞬間、彼は駆け出した。しかし、「待って！」というきびしい声に、彼の足は釘づけにされてしまった。

「待って春山さん。ちょっとでいいから、私たちの話、聞いて、お願い！」

それは山本和子の声だった。

その時まで彼は、文子の名は知っていたが顔は知らなかった。

和子は、孝二と同じ課に机を並べる仲間だった。

彼女は、高校を出るとすぐ入社してきた。三つ年上の孝二は、和子に親切にした。しかし、それは、誰にでも示す親切であって、それ以上のものではなかった。

彼女は、ピチピチした健康な肉体を持ち、きりっとした美しい顔をしていたが、それは彼の好むタイプとは少しちがっていた。

二年間も机を並べていて、男としての関心を持たなかったのは、そのせいであった。

和子の側からも、そうであった。そうしたお互いの気持が二人を気楽にしたのか、逆に

気のおけない友達のような関係が続けさせてきたのだった。

その日、彼は日曜日の日直をしていた。

和子宛の電報が来たのは昼過ぎであった。

それは、和子の姉の危篤を告げるものであった。

彼女に両親はなく、肉親は、嫁いでいるその姉が一人しかいないことを知っていた孝二は、守衛に話して後を頼み、会社のバイクにまたがって、町から十軒ほど離れた彼女の家に行き、それを届けに来たのだった。

和子は、三カ月ほど前から、文子といっしょに、その家に住んでいた。

文子が、和子の高校同期の親友であり、叔父一家に世話になっていた文子が、その一家が転勤で家をあけたあと、和子をよんでいっしょに住むようになったことは、孝二も知っていた。文子に両親はなく、一人の兄も既になかった。

その家は、漁村であるその町の西はずれの丘の上にあった。

町に入って人に聞くと、家はすぐにわかった。国道から丘に小さな道がついていた。

平家だが、ブロック建ての割合近代的な建築だった。周囲には、風を防ぐためかブロッ

クの塀がめぐらされていた。

玄関はしまっていた。

呼鈴はなかったもので、大声で二、三度呼んでみたが答えはなかった。

あきらめかけたが、何とかしてその電報を届けなければならんと思っていたので、塀に沿って東側に廻ってみた。

炊事場と思われるあたりに、小さなくぐり戸があった。

そこには、カギはかかっていなかった。

くぐり戸を押して入ったところに、炊事場の戸があった。呼んでみたが、そこでも答えがなかった。

思い切って庭先へ廻った時、孝二は二人のその姿を見たのだった。

彼のショックも大きかったが、和子と文子のショックは、なお大きかった。

呼びとめて、話を聞いてもらいたいと言った和子だったが、彼女もしばらくは、それ以上言葉が出なかった。

文子も、そのまま立ちすくんでいた。

和子の口から、やっと声が出た。

「ゆっくり話さないと、わかってもらえないと思うから……ちょっと、そのまま待っていてね。お願い」

孝二は、少し落着きをとり戻していた。

「ゆっくりって言うけど、電報、見てごらん姉さんが大変らしい……」

「そうだった！」

孝二の背で、電報をもどかしく開く音がした。

「あっ！ 姉さんが……」

痛むような和子の声に、孝二は思わず後ろをふりかえった。

孝二はそこではじめて、二人のその姿を正面から見たのだった。

電報を握りしめ、ただ一人の肉親の危篤というショックに、身体をふるわしてけんめいに耐える和子と、駆け寄ってその肩を抱きしめ、はげます文子と……。

先刻は気づかなかったが、その砂だらけの素肌に締められていた黒いものは、黒襦子のまわしであった。

かつて想像もしたことなかった女のそんな姿をあらわに見た孝二は、みるみる身体が熱っぽくなるのに気づいて、急いで目をそむけた。

(二)

和子は、

「文ちゃん、春山さんに事情を話してね。お

願い、頼むから」

と言うと部屋に駆けこみ、急いで身支度をして、玄関から駆け出していった。

孝二は、和子をバイクに乗せて町まで帰り夕方の特急に乗せてやろうと考えて来たのだったが、和子がとび出していくまで、それもすっかり忘れていた。

和子の姉は、遠く関西に住んでいた。

思い出して駆け出そうとした時、文子が廊下から呼びとめた。

文子も、すっかり服を着てしまっていた。

時計を見ると、バスに乗って行っても、その特急には十分まにあう時間であった。

孝二は決心して、文子から話を聞くことにした。

海をのぞむ和室に通され、文子と対峙した時、孝二は、先刻とは打ってかわったその姿に驚きを覚えた。

先刻の文子には、りりしさと、たくましさがあった。だが、目の前の文子にはやわらかさがあった。また、当然のことかも知れなかったが、はじらいがあった。

文子は、しばらく黙って海ばかり見つめていた。

孝二も、自分の方から問いただすことにた

めらいを感じて、海の方ばかり見ていた。

五月の海は、さわやかで美しかった。東の方の浜に、夜の漁の準備のためか、あわただしく動く何人かの漁夫の姿が見えていた。日はだいぶ西に傾いていたが、丘の上のその部屋はまだ明るかった。

「あんなところを見せてしまって、ほんとにすまなかったと思います。私はほんとに恥しかった。和ちゃんも同じだったと思う」

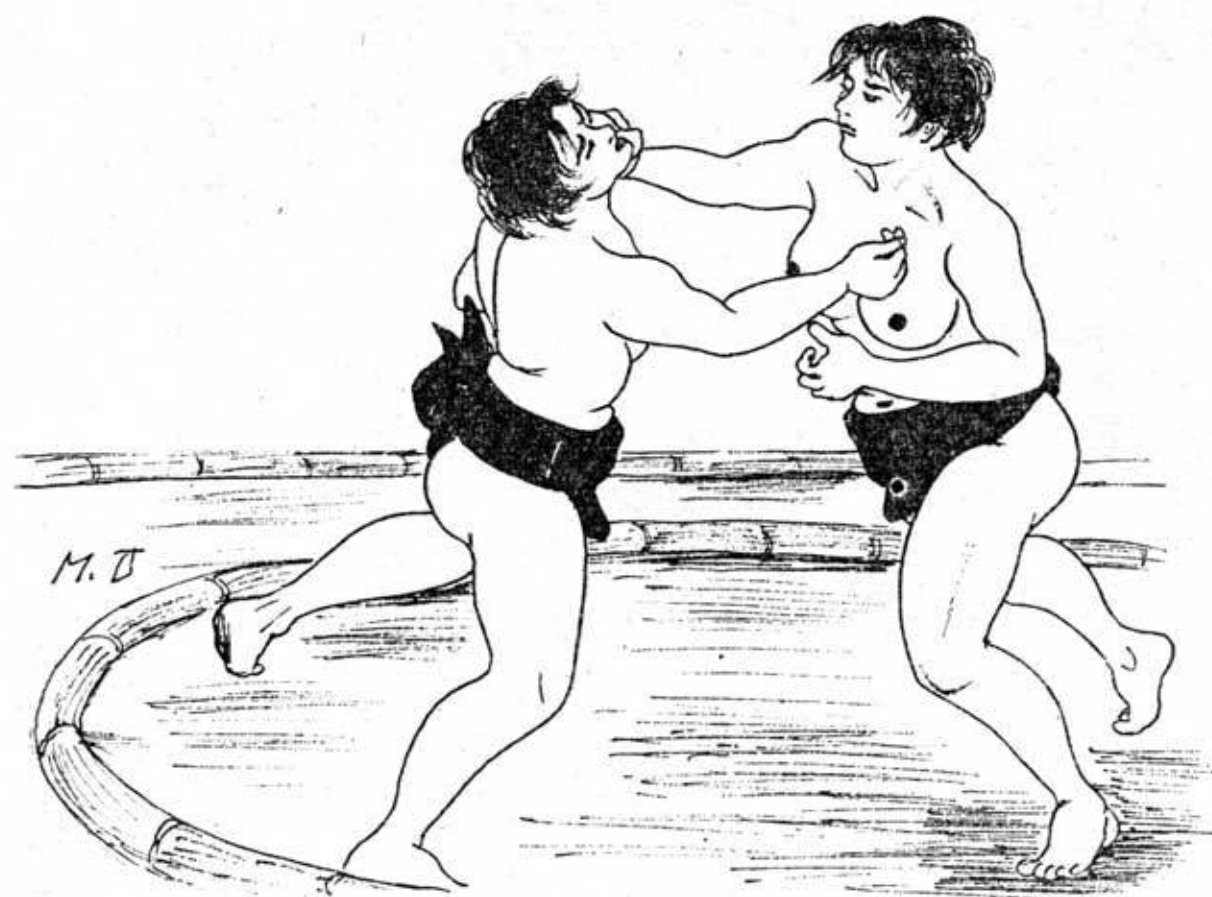
文子が、口を開いた。

「私が、カギをかけ忘れていたから、和ちゃんに何と詫びていいか。けど、若しカギをかけていたら、和ちゃん、姉さんのところへ行くのが一日おくれていたはずだから、仕方なかったと思います」

ポツリポツリとものをいう文子に、孝二は和子と対照的な性格を見出していた。

「僕は何かあった時、悪かったことはなるべく忘れて、良かったことだけ考えることにしているんです。良かったと考えて、くよくよしな方がいいと思うな。和ちゃんにとっては、たった一人の姉さんだから、今はただ、できるだけ健康をとり戻してくれることを祈りたいな」

孝二のその言葉に、文子はホッとしたよう



に大きくうなづいていた。

「二人があんなことをするようになったのにも、何かちゃんとしたわけがあったはずだと思ふな。はじめは、ともかく驚いたけど、今

はそう思っているんです。だから思い切って話してみてもらえんですか」

孝二がそう切り出した時、文子の頬には再び血がのぼったようだった。孝二はそれを見て、つけ加えた。

「うまく言えんけれども、僕は、世の中の常識っていうものが果してみんな正しいのかって、良く思うんだ。今の常識が、ほんとうは非常識なことだったという、そんなことが良くあるでしょう。だから、二人のやることが、実際には、常識的なことなのかも知れん。そう思っているんです」

孝二は、じっと海を見つめている間に、真実、そう思うようになっていた。

常識、非常識の問題は、常日ごろ考えさせられていたことだったが、それを思い出したのだった。

それに、和子にしても文子にしても、どこからどう見てもちゃんとした、身心ともに健康な人間であり、女性であることにあらためて思い至ったからだった。

文子は、すっかり安心したようであった。

彼女は、思い切って話をはじめた。

二人が、高校時代からの親友であり、また二人ともスポーツが大好きで、文子は水泳の選手、和子は八〇〇米の選手だったことは知っていた。

二人が、卒業して別々の会社に就職したのちも、最初は和子のアパートに、そして今では文子の叔父のその家にいっしょに暮らしていることも知っていた。

そして、土曜、日曜となると、二人いっしょに山に登ったり泳ぎに行ったり、水泳や陸上の競技会を見に出かけることも、和子から聞かされていた。

しかし、その二人が、登山や、夏の水泳ぐらいでは、スポーツへの要求を満足させることができず、競技会を見物するたびに、実際にそこに自分が参加できないことに強い不満を持っていたということは知らなかった。

「勤めている会社は別だし、それに、どっちの会社も二、三〇人という小さな会社で、せいぜい昼休みにピンポンをするくらいでしょう。だから、日紡のバレー・チームのはげしい練習風景をテレビなんかで見て、ほんとにうらやましいなあって、二人で話したことも

ありました。私たち、思い切りはげしく動きたかったんです」

文子は、そう言った。

孝二は、自分も全くそうであったので、その言葉がピンときた。

「うん、その気持、良くわかるな。僕も全く同じだった。実は、僕も高校と大学でスポーツをやっていたんだけど、今の会社へ入ってからは何にもできない。身体を動かさないって、こんなにきついことかと、良く思っていたから……」

「春山さんは、高校も大学もサッカー選手だったんですね。和ちゃんから聞いていました」

「ハ、そうだったんです。それに水泳も好きだった。それから高校時代に、一年ほど相撲部にいました。サッカーと両立しないのでやめたけど」

「水泳が好きだったんですか」

文子が目を輝やかした。

「今でも夏になると二、三日おきに必らず泳ぎに行くんですよ。あんまり上手じゃないけど、泳ぐことも好きだが、海が大好きっていうこともあるんだなあ」

「今度の夏は、ぜひ来て下さい。和ちゃんと

三人で泳ぎましょうよ。その海は遠浅だから干潮の時は、ずっと沖まで歩かなければいけないけど、満潮の時は最高なんですよ。それに、とっても、きれいだから、ぜひ来て下さい」

「うん、そうさせてもらおうかな。そして、文子さんから、本格的に水泳を習うことにしよう」

「まさか、私、選手だったと言っても平泳ぎだけなんです。ほかはだめ。とっても教えるなんて！」

「その平泳ぎがだめなんだ。僕は、どうしても足がうまくひろがらんですよ」

文子が思わずふきだした。孝二もつられて二人は大きな声で笑ってしまった。

二人の間にあった壁が、それですっかり取り払われてしまったようだった。

文子は、何のためらいもなく本題に入ってしまった。

「ちょうど半年ぐらい前だったかしら。去年の十一月の終りだったと思います。春山さんも高校の相撲部にいたことがあるそうですね、私たちがあんなことをするようにになったのは、高校生の相撲を見てからなんです。私たち、その日山登りに行ったんです。朝早く

行ったせいで、麓のK町に下りてきたのはまだ、三時頃でした。その高校のそばを通ったら、ちょうどやっていたんです。その郡の四つの高校の対抗でした。私たち、それまで相撲にはあまり興味がなかったんです。嫌いじゃなかったけど、テレビでしか見てなかったせいだと思います。でも、その時、高校生の取り組みを見て、すっかり好きになりました。手に汗をにぎって、はげしい取り組みを見ていました。気がつくとも、予定した列車が出たあとでしたけど、そのまま最後まで見てしまいました。その晩のことです。二人がフトンの上で組み合ったのは……」

孝二は、じっと腕を組んで、黙って文子の次の言葉を待った。

「その晩、二人は高校生の相撲ぶりを思い出していろいろ話してました。同じことを二人でいっしょに言って笑うことが良くありますね。その時もそうでした。『お相撲っていいねえ！』といっしょに言ってしまったって、二人で大笑いしたのを覚えています。しばらくして、和ちゃんが、『山登りなんかじゃ面白くないなあ。お相撲でも取ったら、どんなに気持ちいいだろうなあ』って言いました。私は、自分が女だということなんか、その時すっか

り忘れていました。とにかく何かにつづかっ
ていって、身体じゅうの力を全部使い果たし
てみたいような気持が、急に起って……。い
きなり立ち上ったんです。和ちゃんは、ちょっ
と驚いていたけど、私が手を引いて立ち上ら
せると、ヨシとばかり組みついてきました」
文子の言葉が途切れ、その頬に、再び血が
のぼったようだった。

孝二も黙っていた。

話を聞けば聞くほど、女がそうしたこと
しても、決して悪いことではない、むしろ自
然なことなのかも知れないという気持になっ
てはいたけれども、何しろ、初めて見、聞く
ことだけに、孝二の心は、まだ揺れうごいて
いた。

文子も、あらためて孝二が男であることを
意識したようだった。ホッと溜息をつくと、
海の方をじっと見ていた。

孝二が、何か言わなければ……と思った時、
文子は口を開いた。

「何もかも話してしまいます……。和ちゃん
がさっき出ていくとき、春山さんは約束した
ことは必ず守る人だから、全部話してねと
言っていました」

孝二は、ホッとしました。また、そういう信頼

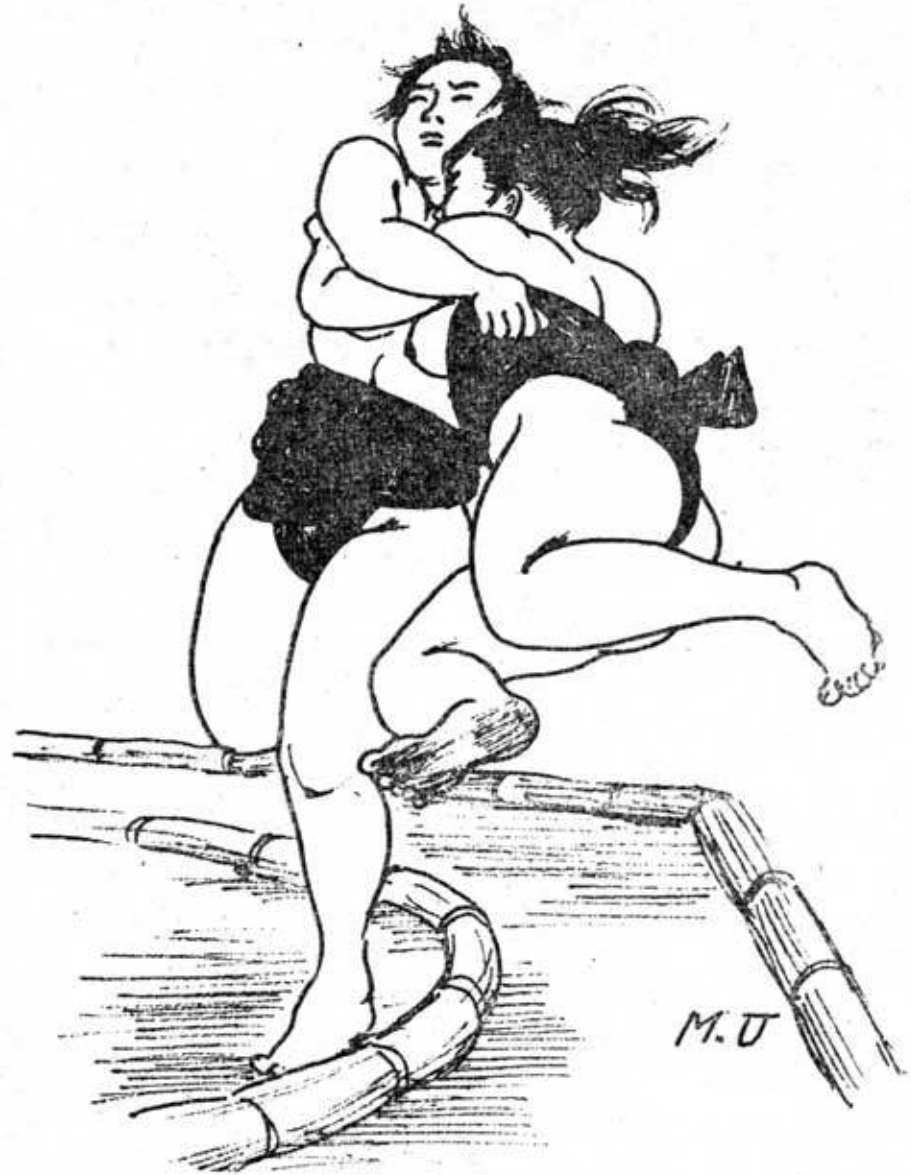
を持たれていることが嬉しかった。しかし孝
二は何も言葉をさはさまなかった。

文子は続けた。

「私たち、さんざんフトンの上であばれてし
まったんですけど、あとで何だか恥ずかしく
なっていました。だって、女がそんなこ
とをするなんて聞いたことなかったから。映
画なんかで女の取っ組み合いを見たことはあ
りますけど、普通の女がすることじゃないっ
て自分たちで決めつけていたくらいですし。
それで、二、三日は、やめていたんです。け
れども、二、三日経つと、また、何かしら、
あばれてみたいという気持が湧いてくるん
です。説明なんてできない気持です。だから、
二人はまたフトンの上で取っ組み合いをや
りました。二、三日おきが、一日おきになり、
それが、毎日のことになり、なっていました。
『誰も見てないからいいよね』、『とにかく
気持ちいいもの』ということ。そのうちに、
寝巻を着たままでは、それがじゃまになっ
て。こんなこと春山さんの前では言えないん
ですけど、さっきあんな姿を見せてしまっ
ているんだから、全部言います。私たち、裸に
なって取っ組み合うようになったんです。パ
ンツの上から帯をしめた恰好で、お相撲取り

しました。でも、アパートだから、幾ら隣とは
厚い壁で仕切られていても、あんまりはげし
くはできませんでした。私たちはそれが不満
で。そのうち、今のこの家に住んでいた叔父
が遠くへ転勤になることに決まって、二、三
年の間お前たち住まないかって言われたん
です。人に貸したくないって言うんですね。私
たち、喜んで引っ越して来ました。二月の初
めでした。ここへ来てからは、ごらんの通り
です。寒かったけど、日曜日になると私たち
庭で思い切りぶつかり合いました。普通の日
は、通勤に三十分はかかるので、思うように
時間はとれませんけど、最初のうちは夜一時
間くらい。今では、朝早く起きて、毎朝一時
間近くやっています。雨の日は別ですけど。
それから、今のうちにまわしを締めるように
なったのは極く最近で二週間前からです。ど
うしてもそれでないと、お相撲にならないか
らです。私たち、あれはみんな自分たちで作
りました。生地はずいぶん迷ったんですけど、
思い切って本式の襦子を買いました。そ
れまでは、ずっと前のままの姿で取っていた
んですけど本式のまわしは、やっぱりちがい
ますね」

何もかも話してしまおうと決意した文子の



口調は、落ちついて淡々としたものになっていた。

「一番うまくいかないのは稽古なんです。お相撲の本を買って読みながらやってるんですけど、なかなかです。でも、精一杯ぶつかり合って汗を流したあとの気持は何とも言えません。だから、自分たちとしては、これで良かったんだと思っているんですけど、本当に、女がこんなことをしていて良いのかと考

ると気持がいいし、身体も丈夫になってくるようなんです、なかなかやめられない。だから、女って何だろう？ 男と女のちがって何だろう？ そんなことも話し合っただけです。でも、まだ答えは出てないんです」

文子は、孝二をまっすぐに見て、彼の答えを求めてきた。

孝二は、先刻とちがった立場におかれてい

えると、まだ確信はないんです。春山さんなんか。どう思いますか？

さっき非常識だと思われていることが案外常識かも知れないと言われたけど……。本当の気持聞かせて下さい。私たち、時々こんなことして、お嫁に行けるかしらって話し合うことがあるんです。でも、あばれ

ちは、自分が聞き出す立場にいた。しかし、今は、相手がすべて自分の胸のうちを打ち明け、逆に聞き出される立場にいるのだった。

だが、孝二には、二人のその疑問に対するスキツとした答えを持っていなかった。

それは至極当然なことだったが、文子の目には、彼がそこでモタモタすることを許さないものがあつた。

孝二には、二つだけ解答があつた。

ひとつは、人間は、自分自身の欲求にもっと自然であつてよいということ。どうも今の世の中ではそんな意味で無理があるんじゃないか、もっと素直に自分の要求をあらわして良いのではないかということ。

もうひとつは、女も本質的には男と変らないものだということ。

それはどちらも、彼の人生観であつた。彼は、それをあらためて思い出していた。

孝二は、文子に、その二つの考えを話し、そしてこうつけ加えた。

「和ちゃんも文子さんも、どこからどう見ても身心ともに健全なんだから、その二人がやむにやまれない気持で始めたことは、決して不自然で、非常識なことだとは思わない。だから、どんどん続けていいと思うな」

文子の緊張がほぐれ、その肩に入っていた力が、すっと抜けたようだった。

「お話して良かった。ともかく続けてみます。でも、最初びっくりなさったでしょう」「そりゃあ驚いたですよ。これからは、あんな不注意をして人に見られんようにせんと」「もちろん、そうします。全く、あんな失敗して」

「起ったことは仕方ないから」

「そうですね。これからのことだなあ」

二人の間には、堅苦しいものは全く無くなっていた。

文子が、茶も入れないまま話していたことに気づいたのはそのせいだった。また、二人とも正坐したまま話していたことにも、そこで初めて気づくのがあった。

あわてて、茶を入れようと立ち上った文子が、シビレのためヘタヘタと坐りこんだ時、二人の間に、心の底からのおかしさがこみ上げてきた。

長い緊張のあとの茶は、全くうまかった。しかし、その茶の味はすぐに苦いものになった。二人はあらためて和子のことを思い出したのだった。

だが、もうそれ以上話す時間はなかった。

日直の時間はとうに終り、宿直がどうしたところかと、いらいらしているはずであった。

孝二は急いで立ち上り、どんなことがあっても口外しないということを述べて、玄関を出た。

文子の表情に、あらためて約束しなくても信頼しているのに、というようなものが一瞬見えた。

孝二は、その表情に、むしろ嬉しさを感じた。

外はもう、すっかり暗くなっていた。

(三)

和子が「今度の日曜日に来て、実際に指導してくれない？」と、二人の相撲の稽古を孝二に頼んだのは、それから二カ月近く経った夏の日であった。

和子の姉は、やはりだめだった。そのことが和子から電話で連絡されたのは、あの日の翌くる日の夕刻だった。

「でも間に合って良かった。春山さん、どうもありがとう、感謝します。このこと文子に伝えて下さい」

和子は意外としっかりした声で話した。

孝二は、すぐに文子に電話した。文子は電話口で無言であった。

「どうも、ごめんなさい。和ちゃんの気持ちを考えるとたまらなくなつて。和ちゃんが帰って来たら、ひと晩せひ来てくれませんか。いっしょに慰めたいから」

文子は、そう言って電話を切った。

和子は一週間後に帰って来た。誰の目にも彼女はやつれて見えた。孝二もたまらなかったが、そういう時には、通りいっぺんの慰めの言葉ではどうにもならないことを知っていたので、彼は「しっかりしろな、和ちゃん」と、それだけ言った。

その次の夜、三人はいっしょに夕食を食べ和子を慰める会というようなものを開いた。

文子が半日の休みをとって、精いっぱい御馳走を作っていた。

和子は、

「友だちって本当にいいなあ。それに春山さんが来てくれて良かった。私、ほんとのところ、自分がどこをどう歩いているのかも、わからないくらいだった。でも、文ちゃんと春山さんの顔を見たたん、何か自分をとりもどしたみたいだった。今はしっかりしてる。生きていこうって、心から思えるようになったの」

と、しみじみ言った。そして

「春山さん。私、あれ以来、何でも話せる友だちみたいに感じてきて、そばにいてももらえるだけで力強い感じがするの。これから友達か、兄貴みたいにしてもらえないかな」と言った。文子も続けて言った。

「私もそうしてもらいたい。これからよろしくね」

孝二は、黙って大きくうなづいた。

だが孝二の心の底は、複雑であった。

和子と文子が、男と全く同じようなことを同じ姿でやっていたということについては、全く疑問は持っていなかった。

女子から話を聞いた時、既にそうであったが、その後、女性の歴史をいろいろ勉強してみても、むしろほかの女性にも積極的にすすめても良いくらいに考えるようになっていた。

彼の複雑な気持というのは、文子に対して恋ごころに似たものを感じはじめた結果、起っているものだった。

孝二は、あの日の夜、「たった一人で、あのさびしい丘の家に置いておいていいだろうか」「もう、寝たろうか」と、文子の上に心を寄せる自分を発見して、ハッとした。

彼は、なぜ和子のことより文子のこと心に寄せるのか？ 考えてみた。これが恋ごころ

なのかとさえ思ってみた。

それが、一週間後に再び会って、更にいつていることを、その時彼は感じていたのだった。

文子を、美しいとか、いいとか思うのではないが、ともかく心が文子の方へ文子の方へと動いていくのだった。

孝二は、大きくうなづきはしたが、友だちとして二人に公平に付き合っていくことが果たしてできるだろうか、全く自信はなかった。

だから彼は、その後、機会があってもなるべく文子と深く話さないようにした。

彼は、自分の要求に自然であれという人生観を持っていたわけだが、一面で、男女間のことについては極めて厳格なものを持っていた。

それは、父の行状から生れた家庭の不幸の結果であった。

彼の亡き父は、男女関係で失敗し、母を悲しませた。母はその結果、病に倒れ、そして死んだ。彼の最も多感な、高校時代のことであつた。姉二人は既に結婚していたので、家には父と彼の二人が残された。だが彼は父が許せなかった。二人だけの家庭に沈黙の日々

が訪れた。父は、母の病死のあと、みるみる衰えを見せ、やがて父も病に倒れ、死んでいった。

彼は、父をもう少し大切にしたいと思った。しかし許すことができなかった。彼が父を許したのは、その死の直前であつた。

父は、彼が自分を許してくれなかったのは当然だと思っていたと言い、笑みを見せながら死んでいった。

そうした不幸が、彼を男女関係で厳格にしていたのだった。

その厳格さは、一時期、自分は決して結婚すまいという不自然な方向に向いていたが、今ではそうではなかった。

しかし、女性を見る目が人一倍慎重でありまた、自分自身に対しても、人一倍の厳しさを持っているのは事実だった。

二十六才になった今日まで、恋ごころを持ったことがなかったのも、そのせいであつたかも知れない。彼には、結婚するなら、心の底からピタリくる人でなければという気持が常に働いていた。

そうであつただけに、文子に対する感情はこわかった。一面では、自然であれと言いきかすのだが、ほかの一面が、文子に会うこと

すら避けさせようとした。

彼は、二度ほど誘われ、その家に行ったが誘われる以外には決して訪ねようとはしなかった。しかし、そうした不自然さを、彼は決して外にはあらわさなかった。

その間に、和子は日に日に元気をとりもどしていた。そして、日に日に、その肌の色が小麦色になってきていた。

文子も同じように、その肌を灼いていた。

彼には、二人が、再び前の生活にもどり、庭先で元氣よく取り組んでいるのが、黙っていても良くわかった。

和子から、二人の稽古をと頼まれた時、孝二は、最初、二人の上の姿を見た時よりも大きなショックを受けた。

文子に心を寄せている自分が、その生まれたまの姿を目の前にしたら、一体どういうことになるか、それがこわかった。

孝二の、そんな気持を知らない和子は後を続けた。

「文ちゃんから最初の日に聞いていたと思うけど、私たち、ずっと本に頼って稽古してきたんです。でも、本ではどうにもならないように、ちっとも上達しないの。だからぜひ二人で話し合ったんだけど、だめかしら。」

春山さん、高校の時やってたんでしょ。私たち、春山さんの前なら、何のわだかまりもなく取れるから、お願いしたいの。どう？ やっぱり非常識かしら、このお願い」

言葉の通り、和子は、何のわだかまりもないようだった。文子も同じらしかった。

孝二は、どうにも答えようがなかった。

だが、そこで心の底の大きな迷いを感じさせてはまずいと思った。孝二にとっては無理なことでも、二人の側からは全く自然な申し出であった。

孝二は、もう何も考えないことにした。自分を徹的に鍛える機会として、正面からぶつかってみようと決意した。

『よし、やってみよう。この際、男と女のそれこそ裸の友情を作りあげてみようか』
だが、心の中では逆のものが、うず巻いていた。

その夜は、ひと晩じゅう眠られなかった。夢うつつの中で、和子と文子がかかるがわるあらわれた。それは一糸もまとわぬ姿であった。文子のそれを見るたびに、孝二はハッと目覚めた。

(四)

遂に、その日曜日がやってきた。

孝二にとって、その日までの三日間は、非常に長く感じられた。あれこれと考え続けた彼は、ぐったりと疲れていた。

その日も、朝から、『何か急な用事でも起ればいいが』と、そればかり願っていた。しかし、約束の時間がとうとうきてしまった。

彼は、もう何も考えまいと決意し、バスに乗った。

玄関には、ベルがついていた。あれ以来つけたものらしかった。

ベルを押すと、二人はとんで出てきた。二人は、まるで子供のように彼が来てくれたことを喜んだ。

孝二は、くよくよと考えてきた自分が恥かしくなると同時に、『この女性たちは、一体どういう女なのだろうか？』と考えるのだった。また、フト、悲しさに似た感情が心をよぎるのを覚えた。

それは、文子が、自分に友だち以上のものを抱いていないことからくるものだった。

しかし、孝二のそうした、あれこれの感情は、いつの間にか消えていった。

子供のように明るい二人の表情と、彼に対して抱いている完全に近い信頼と、健康そのものの肌の色とが、そうさせていった。

彼は、あのことがあってから読んだ本のこの、健康でたくましいスパルタの女たちのことを、思い出していた。

スパルタの女たちは、その少女時代をほとんど一糸もまとわぬ姿で過ごし、あらゆる体育を、少年たちといっしょになっ行って書いた。彼はまた、そのスパルタの娘たちが、青年たちに相撲をいどんでいる絵を見た。

孝二の心から、いわば性的な欲求が消えていき、それにかわって、活動本能とでもいうものが、むくむくと湧いてきた。性的なものが完全に消え去るわけはなかったが、少くとも彼は、それにうち勝つ自信が生れてきた。

「さあ、稽古しようか」

孝二は一服すると、力強く言った。

「お願いします」

二人はいっしょにそう言って、顔を見合せて笑った。

「いつものままの恰好で、いいかしらう」

和子が聞いた。

覚悟のできていた孝二は、

「構わんよ。だって、それでなけりや相撲にならんだらう」

と言った。

二人は、仕度のために別の部屋へ入った。

その間に孝二は庭に出ていた。

庭は、建物からは一段下がっていた。だから、部屋からは坐ったまま海が眺められたが庭に下りるとブロック塀にさえぎられて海は見えなかった。

庭の西側にはブロック塀に沿って高い松が五本ばかり植えてあった。植えてあったというより、おそらく、その家ができる何十年前も前か、らそこに立っていたものと思われた。

庭の真ん中に、砂が敷きつめられていた。

あの時はそうしてなかったが、今見ると、その砂は、ちょうど土俵の広さほどの部分が丸く掘られていた。孝二は、二人のその工夫に驚いていた。

そしてまた、その土俵のあたりまでが松の木かげになっていた。時計を見ると、ちょうど午後三時半だった。

場所も条件も、全く十分すぎるほど整っていた。そして、その丘には、ほかには家がなかったから、特別の用事がない限り訪ねてくる人間も居ないはずだった。

二人は、湯上げタオルに身体を包んで庭へ下りてきた。

「やっぱり、ちょっと恥かしいな」

と文子が言った。

孝二にとって、そうした言葉は言ってもらいたくなかった。だが一面で、そこに『女』を見出してホッとした気にもなった。しかしその時、ああだこうだと思える余裕を持つことは禁物であった。

「稽古をつけるにもどうしようにも、ともかく二、三度いつものようにやってみてくれなにか」

彼の言葉は、自分のそうした余裕を吹き飛ばすように、少し乱暴になっていた。彼はそのことに気づいたが構わんと思った。

文子が先に

「よし、和子、いつもの通り、ぶつかってみようよ」

と言った。

「うん。始めようか」

和子が答えた。

二人の言葉も変っていた。

二人は湯上げタオルをサッと脱ぎ捨て、土俵の中央で向き合った。

腰の高い恰好のあまり良くない仕切り姿に孝二はフト笑いかけたが、じっとにらみ合う二人の真剣な目を発見して、おかしさもふっ飛んでしまった。

二人は立ち上り、すぐ四つに組んだ。右四つであつた。

文子よりやや身長の高い和子が、両まわしをとったが、文子は上手が取れなかった。普通なら、そうした有利な体勢を利用して直ぐ次の技をかけるのだが、和子はそのままだ何もできなかった。

二人は、しばらく、そのまま揉み合っていた。

立ち上りに、『さあ、どうぞ』というように直ぐ四つになったり、そうして何もせず揉み合う姿を見て、孝二は、『なるほど、これでは稽古が必要なはずだ』と思った。

しかし、二人はけんめいのようなだった。それなりに力いっぱい揉み合っているのが、みるみる吹き出してくる汗の玉と、肩や背や、モモの筋肉がぐりぐりと盛り上るのとで良くわかった。

文子が、相手の肩に当てていたアゴをぐつと引き、額を相手の首筋に当てると、ぐいと寄って出た。和子はそれを上手投げでこらえようとしたが、腰を落していた文子には効かなかった。それは却って文子に上手も許す結果となった。

文子は、そのままぐいぐいと寄って行って

弓なりにこらえる和子を、どうと寄り倒してしまった。

和子は一瞬、くやしそうな表情をしたが、それは直ぐに笑顔にかわり、ニコツと笑って立ち上った。

孝二に、既に雑念はなかった。

だが、あらためて見直す二人の肉体の、意外なほどのたくましさに驚くのだった。

和子は、その顔から想像する以上に肉付きが豊かであった。そしてその肌は実によく陽灼けしていた。

文子は、想像した通りの肉体であった。そのふっくらとした頬が、そのまま想像させるように、肩にも胸にも、そしてモモのあたりにも、豊かな肉が恰好良く付いていた。そのくせ決して肥満という感じは与えなかった。肉が適当に引きしまっているせいかもしれないかった。

肌は、もともと色白の方なのか、和子ほどには灼けていなかったが、それでもみごとに小麦色をしていた。

二人は、砂も払わずに二度目の仕切りに入った。

二度目は押し合いになった。

押し合いと言っても、お互いの手を握り合

い、その手を押し合う形だった。

一歩もゆずらず押し合っている、二人の頭がピタツとついた瞬間、和子は思い切り、その腕を引いた。

文子は引き落された恰好で、砂の上に四つん匍いになってしまった。

その恰好のおかしさに、孝二は思わず吹き出してしまった。二人も笑った。

「一対一ね、もう一番いこうよ！」
和子が言った。

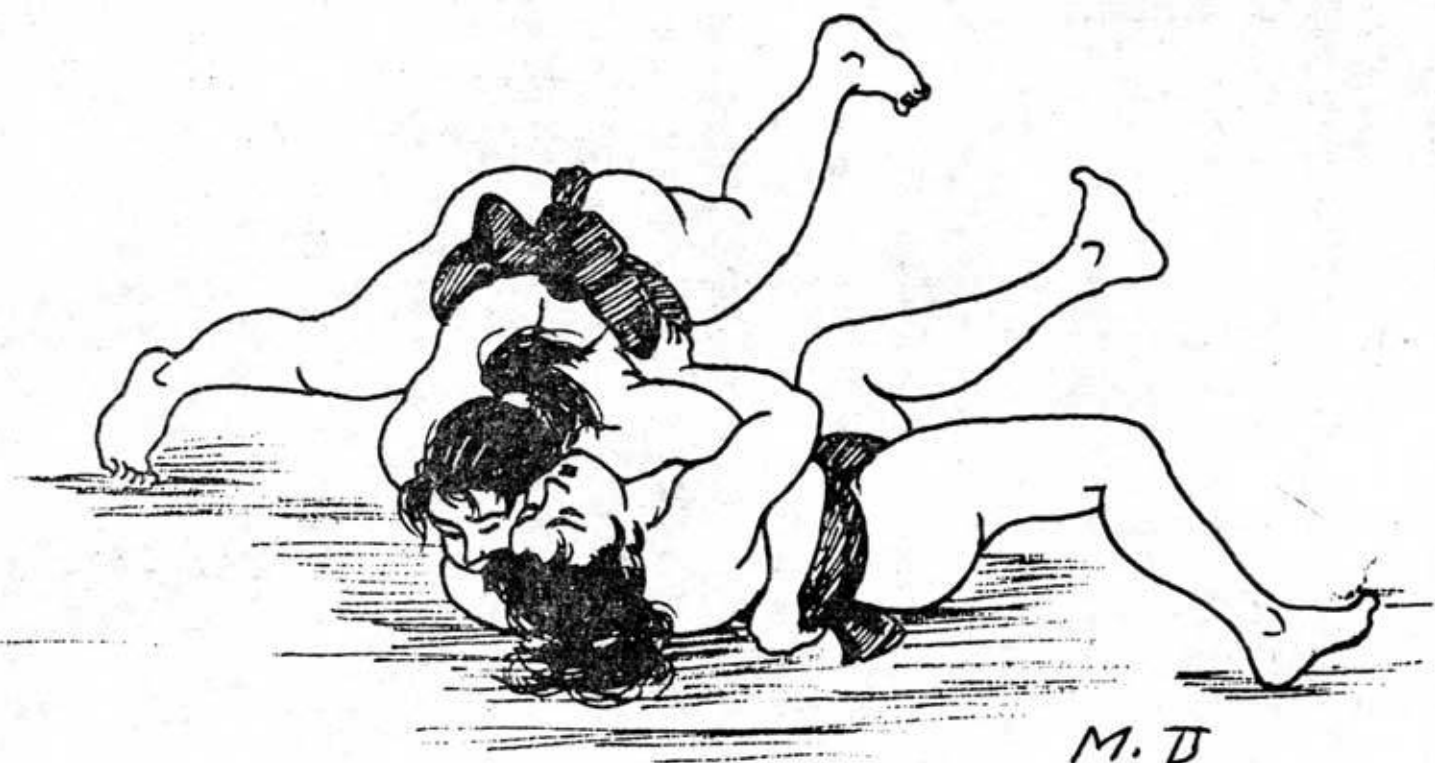
文子も「ようし！」と言って、二人は三度目の取組をすることになった。

三度目も、立ち上り直ぐ四つになった。今度は左四つで、二人とも上手下手をつかんでいた。

最初と同じような揉み合いになった。それはずいぶん長かった。玉になった汗が、松の葉かげから洩れる陽の光にキラキラと輝き、そして筋となって流れ落ちた。

二人の息使いが、すっかり荒くなっていた。

いきなり和子が吊り出しにかかった。文子はけんめいにこらえた。二人の胸と腹がピツタリとつき、まわしがじりじりとずり上っていった。



和子は、浮き上った両足をバタつかせる文子を、遂に吊り出してしまった。

二人は、湯上げタオルで、お互いの身体にベットリといった砂を払い、汗を拭き合いながら、孝二に感想を求めた。

「どうだった？ 春山さん」

和子が口を開き、

「卒直な感想、聞かせてくれませんか？」

と文子が受けついだ。

「うん。立派だったな。圧倒された！特に、最初の時の文子さんの寄りこ、最後の時の和ちゃんの吊りはすごかったね。良くここまで稽古したと思うな。弱い男なんか負かすだろうね、きつと」

二人は、嬉しそうだった。和子が文子の肩をたたいて

「良かったね、文ちゃん」

「でも……」

「おかしいところ、いっぱい、あったと思うの。全部言っしてほしいんです」

「そうだな。じゃあ今見たところで感じたことを言ってみよう。先ず、仕切りだね。腰が高すぎるんだ。それから、立ち上り……」

「ちょっと待って」

和子が口をはさんだ。そして、

「ひとつひとつやって、直してもらおうよ。文ちゃん」

と提案した。

「よし、それなら、こっちへ来てごらん」

孝二は二人を土俵中央に向き合せ、仕切らせた。なかなかうまくいかなかった。

「もっと腰を低く」と言うど、手はだらっと伸ばしたまま腰だけ落して、しゃがんだような恰好になったり、腕に力を入れさせると逆に前のめりになってしまったり。しかし、彼は粘り強く教えた。

「要するに、相手にとびかかっていく前の姿勢だということなんだがなあ」

そう言われた時、二人の姿は、やっと本物に近くなっていった。

「それから、立ち上りなんだが……。二人とも立ち上っていったぺんに四つに組んでしまうだろう。何か、ハイどうぞ！って手を差しのべるようにしてさ。あれじゃあだめだね」

二人は、顔を見合わせてプツと吹き出し、おかしように笑った。

「考えてみると本だね。私たちの相撲って、そうして組んでから始まるもんね」

和子が言った。

「そうなんだよ。小学生が良く、そうするんだ。でも、相撲はね、立ち上りの瞬間が大事なんだ。それに、四つに組んで、まわしを取るだけが相撲じゃない。僕は高校で相撲部に入った時、まわしを取るな！ 押して押して押しまくれ、とよく言われた。基本は押しなんだ。押さば押せ、引かば押せて言うだろう」

「うん、そう言えば本に書いてあるわ」

文子が言った。

「押し合い、突き合い。それから四つ相撲は。だから今日は、ほかにも気づいたことはあるけど、押しの稽古を徹底的にやってみたらと思うんだ」

二人は、大きくうなづいた。

「やっぱり来てもらって良かった。本を読みながらやってるんだけど……だから、押し合いもずいぶんやってみたわけなんだけど、それほどとは思わなかったもんね」

和子が、言った。

孝二は、二人が「もう、とってもだめ！」と言うまで押し合い相撲を取らせることにした。

二人は、なかなか音を上げなかった。砂を掘った土俵であったから、土俵際の

粘りがきいた。また、それだけに勝負はたいてい押し倒して決まった。

だから、二人の背から尻にかけて、砂がベツトリとついた。

しかし二人は、よくがんばった。

どちらかと言うと、押し合いには文子の方が強かった。五回取って三回は勝った。しかし、和子は負けの回数がふえるほどふるい立ち、ぶつかっていった。

孝二は、二人の意志の強さと負けん気に心から感心していた。フト、学生時代のサッカー試合を思い出し、それは、高校時代の相撲部の思い出につながっていった。

二人の意志と負けん気は、男である自分の発揮したものと、決して劣らないことを彼は見出していた。

また、あらん限りの力を出し尽し、必死でぶつかり合う二人の姿を見ているうち、くよくよと思い悩んだことが、おかしいくらいに思えてきた。

目の前に、女性の、しかも自分が恋ごころらしきものを感じている文子のあらわな肉体を見ながら、何も感じない自分を発見して、彼は不思議な思いさえした。二人のそうした姿が、むしろ自然なものにさえ感じられるの

だった。

押し倒した文子も、倒された和子も、すぐには立ち上らなかった。何回目だったか、彼にもわからなくなっていたが、彼はそれまでで、その日の稽古を終らせることにした。

二人は疲れ果てていたが、いかにも満足そうであった。

「私たち、やったわね！」

和子が文子の肩を抱いて言った。

「こんなに稽古したの、初めてだった！」

女子が、和子の手を握り返して言った。

孝二と二人との、心身ともに裸のふれ合いはそうして始まった。

(五)

孝二は、日曜日ごとにその家に行った。

時折り、『こんなこととして良いのか』という気持ちも起らないではなかったが、夏の終り頃になると、二人が技をぐんぐん上達させ、その身体をみるみるたくましくしていくことの楽しみがはるかに大きくなって、その懸念を吹きとばしていた。

文子への気持はかわらなかった。しかし、不思議なことに、その姿を目の前にしている時は落ちついていて、そして、彼女と離れると、その姿や表情のひとつひとつが目に見え

心が動いた。

だが、文子へのそうした感情も、彼の恋愛観である、『両方からはげしく求めた時にこそ恋といえるのだ。そして、感情だけでは決められない。全てがひとつになれるとわかった時、恋は成り立つ』という考え方からも、押さえることができた。

それに、何しろ、それは孝二だけが抱く感情であり、文子は彼に対して何の感情も持っていなかったから、どうもできなかった。

押し合い相撲を続けながら、彼は二人の腰を強くするため兎とびなどをさせた。

また、身体全体を強くし、アノコ型にさせないために、彼は水泳を十分にさせた。水泳は、もちろん彼もやった。文子は約束通り平泳を教えてくれた。和子もぐんぐん上達していった。

午前中水泳をし、昼寝を十分にとって、午後三時か四時頃から相撲の稽古をするというスケジュールも決まってきた。

教えて三回目の日曜日から、彼は二人に突き合い相撲を取らせた。

突っ張りは、二人にほとんど経験がなかったもので、なかなか思い切った突き合いはできなかった。

「遠慮するな！ どうした！」

彼は声をあげましたが、二人の突き合いには力も速度も出なかった。

彼は、心の中で『無理もないな』と思わぬではなかったが、彼には、『やれるところまでやらせてみる』という強い決意があったので、だんだんといらだちを覚えてきた。

彼は、開襟シャツもアンダーシャツも脱ぎ捨て上半身裸になって土俵に飛びこんだ。

「まず和子からだ。思い切って、突っ張ってみろ」

そう言って彼は構えた。

和子、文子と、名を呼び捨てにするようになったのは、文子からの提案であった。文子は、和子に対してはちゃんをつけ、自分に対してはさんをつけるのはいやだと言った。孝二への二人の呼び方も「春山さん」から「孝ちゃん」に変わっていた。兄妹のように呼び合おうという和子の提案だった。

和子は、目をつぶって突いてきた。

その突きには、まだ遠慮があった。孝二は思い切った突っ張りを和子の肩と胸に振舞ってやった。実際に経験させる以外にないと思ったからだ。

和子は、どうと尻餅をついてしまった。

「次！ 文子だ！」

文子は、齒を食いしぼり、きびしい表情で孝二の前に立った。

「よし！ 突いて来い！」

文子も、目をつぶってかかてきた。だが和子が突きとばされるのを見て決意を固めていたらしく、その突きには力があつた。

孝二は、文子にも遠慮のない突っ張りを振舞った。文子もどしんと尻餅をついた。

「わかったかな？ 実際はもっともっと強く突っ張るんだが……よし、このへんで二人でもう一度やってみろ」

二人の目はきびしくなり、その突き合いは前よりははげしくなっていた。だが、なかなか孝二の思うようにはならなかった。

孝二には、二人の稽古が進み、ほとんどの技を覚えたとこで、女性に合った技やルールを考えてみようかという気持があつた。

その時、それを思い出し、『突き合いは女には無理なのか』とフト思った。

しかし彼は思い直した。突っ張りぐらいで顔に傷がつくわけでもない、できるはずだと決心した。

彼は、もう一度土俵に入った。慣れさせること、それだけだと思った。

最初に文子を呼んだ。

文子は、けんめいに突っ張ってきた。孝二の決意がピーンときていたようだった。孝二はその文子の頬を思い切り張った。

文子は「アッ！」と言ってその頬を思わず押えた。しかし孝二は、その手をふり払うとまた張った。女子の顔に一瞬驚きの感情が走ったが、それは直ぐ怒りにかわった。そして孝二を睨みつけると、無茶苦茶に突っ張ってきた。

孝二は心の中で、『ヨシ！ それだ！』と叫んだ。そして一層強い突きを見舞った。文子は土俵の際まで吹っこんだ。

怒りに満ちた文子の表情が目に入ったが、孝二は構わず和子の名を呼んだ。

和子は、土俵の外から駆けこんできた。そして孝二を横から突いてきた。文子に対して彼のやったことを、よほど怒っていると見えた。その和子をも、孝二は構わず突き、そして張った。

和子はむしゃぶりついてきた。それを突き放し、突き倒した。自分でも『無茶かな？』と思わぬでもなかったが、孝二はそれらのことを全て意識してやったのだった。

二人は、あんまりだと抗議してきた。だが

孝二の言葉に、二人はなるほどとなづいてくれるのだった。

孝二は言った。

「相撲という字を考えてごらん。昔は、なぐり合いの、ケンカ同様のことをやっていたから、そんな字が生れた。それが、だんだんとスポーツとして技も整理され、相手を傷つけるような技は許されなくなって、今のようになってきたんだ。だから、絶対に相手を傷つけるようなことはしてはいけない。けれども、どんなことがあっても相手を倒そうという気持が無かったら、遠慮なんかしてたら、それは相撲にはならんのだな。今の張り手で、君たち、ケガをしたか？ しなかったら。張り手は、うっかりしていると耳の鼓膜を破るから、しばらくは君たちには許さんけど。俺が、あんなことをしたというのは、もっと思い切ってもらいたかったからなんだ。二人とも怒ったろう。けど、許してほしいんだな」

二人は、恥かしそうに笑った。

二人の突き合い相撲は、見ちがえるようになっていった。

四週目、彼は二人に、押しと突きだけで試合をさせた。

夏も終りに近づいて、松の葉にさえぎられていた太陽が、同じ時間なのに、ずっと西に下がり、松の幹のあたりから土俵をまともに照らすようになっていた。

だが、二人はそれを気にもとめていなかった。和子の肌は、漁師のように赤銅色になり文子の肌も更に灼けていた。孝二も、学生時代の真黒な肌をとりもどしていた。

その日は、彼も水泳パンツ一枚になった。

勝負は、九回でつけると決められた。

どちらかと言うと、文子は押しに、和子は突きにすぐれていた。

しかし、文子も和子の突きに一步もたじろがなかったし、和子もまた文子の押しをがちり受けとめ、幾度か押し倒しもした。

その日は、五対四で和子が勝ったが、二人は、お互いの力が互角であることを喜び合っていた。

その日はまた、二人がたくさんの御馳走を作って、夜おそくまで語り合った。

孝二は、二人の身長と体重をその夜、はじめて知った。それまでどういうわけか気にかけていなかったが、二人の力が互角であることの話から、わかったのだった。

和子は、一六三センチで五四キロあり、文

子は、一五八センチで五六キロだと言った。二人とも相撲を始めてから三キロづつふえ、水泳を毎日やるようになって、その増えは止まったと言っていた。

文子が、

「ふえるばかりだったから、一時は心配したのよ。これでもやっぱり女だもんね」

と言ったので大笑いになった。

孝二は一六七センチ、六四キロあると聞いて、和子が、「やっぱり男の人は大きいんだなあ」と言った。

彼は、「君たちより軽い男もいるじゃないか。俺だって君たちと、そうちがっているとは言えんな。それに、こっちはずっと自分の稽古はしていないから、そのうち君たちに負けるかもしれんぞ」と言った。

二人は嬉しそうだった。孝二は真実そう思っ
て、驚異さえ感じていた。

(六)

二人の上達は早かった。そして、月日もまた矢のように過ぎていった。

十月も終り頃になると、二人は主な技を覚えこみ、それをおおかた使いこなせるようになっていた。

孝二の、文子に対する気持は変わっていなか

った。彼はしばしば文子の夢を見た。だが彼は、その気持を押えることができた。

慣れももちろんあったが、文子の側に、彼に対する気持がかわらず全くなかったことが、彼をそうさせているようだった。

二人は、全く彼を「兄貴」としてしか感じていなかった。

だが、十一月の第三週の日曜日。彼の、文子に対する感情は決定的なものになった。

『その肌に触れなければ良かったんだ』

彼はその夜、ひと晩じゅう悩んだ。

しかし、あとからどう思ってみたところで仕方なかった。

その日――。

彼は、彼自身もまわしを締め、二人と取組んだのだった。

十一月の第二日曜日に、彼は二人に試合をさせた。

九回の取組は、はげしく、そして立派だった。勝負は、五つの星を上げて和子の勝ちであった。

どちらかと言うと、和子は離れて強く、文子は組んで強いという傾向を持っていたが、総合すれば、その力と技は全く互角であり、気力でもそうであったから、かねての稽古の

時も、お互い一步も引かぬ相撲であった。

しかし、その日の相撲は、それまでにない見事なものだった。

孝二は、何度か自分も土俵にとびこんでいきたい衝動を覚えた。

八回目までに三つの星しか上げず、すでに負けとわかっていたにも拘わらず、最後の勝負にあらん限りの力をつくして、遂に和子を下手投げに敗った文子を見た時、孝二のその衝動は頂点に達していた。

二人が砂を払って立ち上った時、彼は、それを言葉にあらわしていた。

「俺も、君たちと相撲を取りたくなってきたなあ」

彼は、言ってしまったあとで、自分の言葉の結果に気づいて、『しまった！』と思ったが、二人は驚くどころかむしろ喜んだ。

和子は

「いつか突っ張りの稽古つけてもらったでしょう。たったあれだけで私たち相撲というものがつかめたんだから、直接稽古つけてもらえばうんと上達すると思うな」

と言った。

文子も大きくうなづいて、「是非」！と言った。

二人は、自分たちの相撲の上達しか考えていないようだった。孝二は、あらためて女性も男と同じように、強くなることを、そんなに望んでいるのかと思った。

しかし、自らも裸になって、女の肌にふれ揉み合うことの結果には、全く自信がなかった……というより、既に身体じゅうが熱してくるのをどうしようもなかった。

孝二は、自分のまわしが無いことを理由にすれば、せめてその日だけは逃がられることに気づいた。

しかし、彼がそれを言う前に、和子が口を開いてしまった。

「私たちので構わないでしょう。もう一本ずつ作ったのが、洗ってお風呂場に乾かしてあるから、あれを使ってもらったらいいと思う。人の禪で……とか言うけど、いいわよね。私たちここでしばらく休んでるから、仕度してきて。そして、うんと稽古つけてね」

孝二の身体は、更に熱した。

だが、もうあとへ引けなかった。彼女たちが、彼との間を、『男と女』の関係で意識していなければならないほど、彼がためらうことは許されなかった。

風呂場には、二本のまわしが乾かしてあっ

た。

孝二は、思い切って服を脱いだ。

そして、風呂桶の中の真新しい水を手桶にいっぱい汲むと、二度、三度とそれを頭からかぶった。

気持が次第に落ちつき、身体の火照りも、少しずつさめてきた。

彼の手は、二本のまわしの片方に伸び、それを端の方から、ゆっくり丸めていった。

しかし、そのまわしに、『文子』という縫いとりがあるのに気づいた時、彼の身体は、再び熱した。

彼は、そのまわしを竿にかけ直し、もう一度、水をかぶった。しかし、なかなかその火照りはさめなかった。

彼はその時、土俵にとびこんでいきなくなった衝動の真の原因に初めて気づいた。それは、はかならね、文子への気持のたかぶりであつたのだ。

彼は、何度も水をかぶっては深呼吸をくりかえした。そして、禅僧のような心境を得ようとした。

ようやく火照りをさました彼は、急いで和子のまわしを締めこんだ。

二人は、かわるがわるぶつかってきた。

孝二は、絶対に組むまいと、それを突き放し、突き倒し、押しまくった。

全力をつくしての九回もの取組のあとにも拘わらず、二人は、彼が仕度してくる僅かの間に、相当体力をとりもどしていた。

彼はフト、それほどまでに二人が強くなったことに誇りを感じた。

何回突き倒され押し出されても、二人は歯を食いしばって、ぶつかってきた。

緊張も手伝ってか、彼の疲れは以外と早かった。

文子が武者振りついてきた時、彼はそれを突き放すことができなかった。

文子は、ドンと身体ごとぶつかり、彼が一瞬たじろぐところを、がっぶり双差しになってきた。その両腕は、彼の胸をぎゅっと抱きしめ、その両手はまわしを深くつかみ、その頬は、彼の胸にピッタリと押しつけられる恰好になっていた。

彼は、けんめいに身体を引き離そうとして文子の両腕を外側からつかみ、ぐいぐいと引き上げた。

しかし、文子はあらん限りの力でしがみついていた。引き離そうとしてつかんだ腕を持ち上げれば上げるほど、文子の身体も持ち上

り、彼の胸に低く当てられていたその頬は彼の首筋のところまでできていた。その豊かな胸も、彼の胸に押しつけられていた。

文子の首筋を、汗の玉が幾つも流れ落ちるのが目に入った。文子の吐く熱い息が、彼の肩にかかった。

孝二はもう、我を忘れていた。

彼は文子の腕から手を離すと、そのまわしをつかみ、逆にその身体を、ぐいぐいと引きつけていた。

ピタッといっていたお互いの肌を、熱い汗が濡らした。

少しでも早く文子の身体から離れようとする気持が再び動いたが、その胸は逆に一層文子を引きつけていた。

文子が、全身にビリッと力を入れ、彼を吊りにかかった。その瞬間、ムツとするような臭いが彼の鼻をついた。

彼の力は、一瞬ゆるんだ。

ハッと思った時、彼の身体は宙に浮いていた。

「文ちゃん、がんばれ！」

和子の声が耳に入った。

我に帰った孝二は、吊りを外掛けに防ぐと逆に文子を高々と吊り上げ、一気に吊り出し

た。

彼はぐったりと疲れていた。

しかし、和子は、そんなことはお構いなしにぶつかってきた。

和子も武者振りついてきた。

右四つになって、彼女は、ぐいぐいと寄ってきた。

汗にまみれた肌と肌がくっつく恰好になったが、文子の場合のように我を忘れるようなことはなかった。

和子の身体を引きつけながら、孝二はそのことを不思議にさえ思った。

彼はその日の稽古を、それで打ち切った。

もう一度文子の肌に触れるのが、こわかったからだ。

その夜、ひと晩じゅう悩み明かした孝二は二度と直接肌に触れての稽古はすまいと誓った。

文子に対する気持が、もうどうにもならないところまで進んでいることがはっきりした以上、文子の側でどうあれ、それは許されることではなかった。

(七)

孝二は、身体の調子が少し悪いからと、土俵には二度と上らなかった。

しかし、ただ稽古を見ているだけでも身体じゅうが熱っぽくなり、文子の身体を直視することができなくなっていた。

だが孝二は、「行くまいか」と思いながら、足がそこへ向っていくのを、どうすることもできなかった。

冬が来た。

二人はしかし、天気さえ良ければ毎日土俵に上っていた。

相撲を始めた頃に比べて、二人の肉体は見ちがえるようになっていた。ただ立っているだけで力を入れなくても、肩や背や、足の筋肉が見えるほどに、たくましくなっていた。

山にも登らず、喫茶店に行くでもなく、映画も見ない、まさに二人は相撲の虫になってしまっているのだった。

二人とも二十一才になったというのに、結婚とか、異性に対する関心とかは、まるで持っていないようであった。

文子の、孝二への態度も少しも変わらないように見えた。孝二はそのことがたまらなかったが、どうすることもできなかった。

だが、二人の、すべてが相撲を中心に動いていた生活に、意外と早く大きな変化が訪れてきた。そしてその結果、文子と孝二は結ば

れることになったのだった。

年が明けて、三月に入った頃、和子に縁談が持ち込まれてきた。

その相手は、義理の兄であった。亡くなった、和子にとってたった一人の姉の主人であった。

和子は、ひと月ほど考えていたが、結局はその縁談を受けることに決めた。

彼女は、文子と二人のそれまでの生活をやめたくない、始めのうちは断わるつもりでいた。また、孝二が想像していた通り、それまでは結婚のことはまるで考えていなかったし、これからも考えたくないと言った。

しかし、縁談を持ちこまれたことで、否が応でもそれを考えざるを得ないようになったのだった。和子は、それを考える中で、はじめて自分の心の中に義兄に惹かれるものがあったことを見出していた。

和子は、少くとも十日に一回は、姉を失なった義兄を慰めはげます手紙を書いていたがその行為は、義兄への関心もあったためのものであったことに和子は気づいていた。

和子からそのことを聞いて、孝二は、結婚した方がいいと思うようになり、それを強くすすめるようになった。

文子は、せめてあと二年はいっしょにいたいと反対し、和子も悩んだが、孝二はあくまでも結婚をすすめた。

彼の中には、和子の去ったあとの文子の変化を期待する気持ちもはっきりとあった。和子の幸福を願う気持ちよりも、その方が強かったかもしれない。

四月のはじめ、和子は結婚を承知し、式は五月中旬と決まった。

四月の半ばに義兄はその町へやってきた。孝二は会ってみて、この人間なら和子も幸せになれると、ホッと胸をなでおろした。

結婚が決まってからのひと月近くというものは、良く体力が続くものだと思うほど、毎日、朝昼となく二人は相撲を取った。

和子は、結婚が決まると同時に職をやめていたが、文子も、年休の二十日間を全部とっていた。

和子の結婚式の日はみるみる迫ってきた。

結婚式は義兄のいる関西で行なわれることになっていたので、式の三日ほど前に和子は出発しなければならなかった。孝二と文子も家族のいない和子の親きようだいのかわりにいっしょに行くことになっていた。

出発の前日、三人は集まった。

いわばお別れの相撲ということで、それが終わってから、三人でお別れの夕食をとることにした。

二人は、土俵に上った時から泣いていた。口を開いて何か言えば、別れの悲しさが倍になるためだろうか、二人はひと言も口をきかずに、ひたすら取組み合った。

二人は、しばしば四つに組んだまま動かなかった。

涙があふれるとお互いの身体を突き放し、突っ張り合った。

『女どうして、これほどまでに……』と、孝二の中にねたましい気持ちさえ湧き起るのだったが、しかし、二人のそれは美しいものにみえた。

日が暮れて、とうに薄暗くなっているのに「これまでにしよう」と言いながら、また組み合うのだった。汗と涙で、二人の頬も背も腕も足も、砂まみれになっていた。

和子が、突然ワッと泣きながら文子に組みついていった。文子も声をあげて泣いた。泣きながら二人は、めちゃくちゃに取組み合った。

足がからみ合ってどうと砂の上に倒れた。しかし二人は、そのまま上になり下になりし

ていつまでも組み合っていた。

体力がすべて尽きた時、二人は頬ずりをし砂の上にいつまでも抱き合っていた。

孝二は、二人はそのままにしておいて台所に行き、黙々と夕食の仕度をした。

二人はそれに気づき、裸のまま台所へ走ってきたが、孝二は、「今夜は私がやるから、ゆっくり身体を洗いなさい」と言って、それを制した。

ビフテキの焼き工合が硬すぎたことから、三人の間に、その日初めて笑い声があった。それが幸いして最後の夕食は楽しく終ることができた。

和子は、「これから相撲が取れないのが、ほんとに残念だ」と言い続けていた。

文子も同じだった。

孝二は、黙って考えていたが、

「民男くと話して、二人でやってみたらどうかな。夫婦だし。はじめは驚くかもしれないけど、君が今まで相撲を取っていたこともかくしたりしては、これからうまくいかんと思うしね。夫婦って、絶対かくしごとはせん方がいいからな」

と言った。民男というのは、和子の義兄の名であった。

和子は

「でも、彼、男だもん」

と言った。

孝二は間髪を入れずに言った。

「俺と取組んだじゃないか」

「ほんと、そうだったなあ」

和子は笑った。

「君たち二人が相撲を取っているところを見た時、実際俺は驚いた。しかし、文ちゃんから話を聞いた時、女も男もかわらんのだなということがわかった。だから思い切って二人に稽古をつけることができたし、今まで、こうしてることができた。だから、民男さんだってわかるさ。それに、たくましい和ちゃんを見て、更に気に入ったんだから」

孝二は、考えた通り話した。

和子は、

「そう言えばそうね、話してみるかな、思い切って」

と言った。

文子も口を開いて、

「夫婦だったら、誰も何とも思わないし……そうしたらいいわ」

と言った。

あくる日、三人は出発した。

結婚式は無事に終り、和子と民男は、民男の家族と文子、孝二に見送られて新婚旅行に旅立った。

和子は列車の窓から文子の方ばかり見ていた。その目には涙がいっぱいたまっていた。

しかし、その悲しみを、民男の手をしっかりと握ることで耐えている姿を見て、孝二は心から安心した。

(八)

帰りの列車の中で、文子と孝二は黙りがちであった。

孝二には、自分がなかなか口を開けない理由がはっきりわかっていて、口を開けば、文子への想いが、あふれ出そうでならなかったからだ。

しかし、文子がなぜ黙りがちであるかは孝二にはわかりかねた。

文子も自分と同じ理由で黙っているのではないか。孝二はそれを期待した。しかし、それを期待すればするほど、若しそうでなかった時の、自分の受けるだろう深い傷手を思っ

て、彼の口はいっそう重くなっていた。

列車が揺れて、彼の右腕が文子の左腕に触れた時、孝二は、電気に打たれたように感じた。彼の中には、なるべく身体を離しておこ

うという気持と、その逆の気持が葛藤した。町に帰ってからも、孝二は文子に電話もかけなかった。

仕事をしていても文子のこと離れなかったし、夜もロクに眠れなかった。日に何度か電話器に手をかけたが、電話をかけるのが恐しかった。

だが、三日目。彼は思い切って電話をかけた。もつ、どうにもならなくなっていたからだった。

彼はまた、列車を下りて別れる時の、一瞬うるんだ文子の目に、一縷の望みをかけていた。文子は、電話を待っていたと言った。

孝二は、その文子の声で、その気持がすべてわかった。彼女は、和子から来た手紙のことを話したが、それはもう彼の耳には入らなかった。嬉しかった。ただ、嬉しかった。

その日、彼は残業を命ぜられた。

それを文子に電話すると、「何時まででも待っている」と言った。孝二の胸はいっぱいになった。

仕事は七時までかかった。それが終わると彼はバイクに飛び乗った。いったん下宿に帰った彼は、外泊するかも知れないと告げ、自分の部屋に入った。彼の手はタンスのひきだし

に伸び、まわしをつかんでいた。それは半分無意識であった。フト我に帰ってそれをタンスにしまいかけたが、再び取り出すと彼はそれを風呂敷に包んだ。

速度違反もくそもなかった。孝二は暮れかけた海辺の道路を一気に飛ばした。五月の海風が快よかった。

文子は夕食を作って待っていた。

玄関の戸をあけると、彼女は何も言わずニコツと笑った。

孝二は、ぐっと抱きしめたい気持を押えてそっと手を差し出した。文子もそうした。二人は固く手を握り合って、お互いの目をじっと見つめ合った。

それで、すべてが通じ合った。

食事が終わると、文子は和子からの手紙を彼に見せた。

孝二はそれを読んで、思わず顔に血が上るのをどうすることもできなかった。

和子は、新婚旅行も無事終り、幸せに暮しているという普通の挨拶のあとに、『あのことは旅行から帰った晩に打ち明けました。彼はひどく驚いたらしく、黙って私の顔を見ていましたが、いろいろ話すうち、すっかりわかってくれました』と続け、更に『その夜か

ら二人は、夫婦の間でそれをやっています。思い切って早く打ち明けて本当に良かった』と書いていた。

孝二は、矢も楯もたまらなくなっていた。

彼には、それまでの文子への態度のように、思っていてなかなか踏み切れない面があったが、逆に、いったん確信すると突き進んでいく面を持っていた。

彼は文子をまっすぐに見ると、『俺たちもやろう』と言った。

文子は目を大きく開いて驚いていたが、孝二の態度は文子にためらいを許さなかった。

二人は別々の部屋で支度した。孝二が下宿からまわしを持って来たのは、その日にそうするつもりがあったわけではなかった。

文子を想うようになってから、孝二は毎晩のようにそれを締めては、その気持を耐えてきたのだったが、その日、若し文子に結婚前には許されない行為に出ようとしたら、彼は自分のまわしをしっかりと握りしめて耐えるつもりで持ってきたのだった。

しかし、今やそのためでなく、それを締めて文子と相対するためのものになっていた。彼はまわしを締めながら、『だが、決して相撲以上のことはしまい』と心に誓った。

文子の仕度はなかなかであった。彼は、無理もないと思い、先に庭に下りて待った。

庭の土俵は、そのままであった。

彼は、そこにじっと立った。

文子が、そっと庭に下りて来た。その目は伏せられていたが、その肉体には堂々とまわしが締めこまれていた。

二人は、じつくりと仕切った。

文子の目がきらりと光ると、その身体が思い切りぶつかってきた。

孝二はそれを、がっしり受けとめた。

左四つに組んだ二人は、その気持そのままに、はげしく揉み合っては、またじっと組み合い動かなかった。

汗がみるみる全身を濡らした。孝二は我を忘れていた。

けんめいに文子の前袋を右手でつかみ、それを外そうとしていることに気づき、ハッとしてその手を離れた時、文子の手もまた、彼の前袋から離されていた。

文子も我を忘れていたのだった。

孝二は、右手で文子のまわしをつかみ直す、思い切り上手投げを打った。

文子の身体は土俵に落ちた。

だが文子は、痛いとも言わず、再びどんと

ぶつかってきた。

二人は、二度と相手の前袋をつかもつしなかった。しかし逆に、相手のまわしを深くつかみ、身体を引きつけ合おうとした。

文子の豊かな胸がピタリと孝二の胸につけられ、その頬が彼の肩に触れた。

二人は、長いことそうしたままでいた。

我に帰った時、今度は、相手の三ツ目をほどうとしていることに気づいた孝二は、あわわて下手投げを打った。

彼は、もうやめようと思った。

しかし文子が、それを許さなかった。彼女は三たびぶつかってきた。その全身は汗と砂にまみれていた。

突き放そうとする気持と逆に、その腕は文子のまわしをしっかりつかみ、その身体を引きつけていた。

だが彼は、思い直してぐいぐい寄り、土俵際で外掛けに文子を倒した。正面から孝二の身体はおおいかぶさった。

起ち上ろうとしたが、文子はそれを許さなかった。右腕は彼の首にしっかり巻きつけられ、左手は彼のまわしをつかんで離さなかった。

孝二の耳許で、「孝二、好きよ、好きで

たまらない！」と文子はうわごとのように言った。熱い息が彼の首筋にかかった。

「文子、前から……好きだったんだ！」

孝二はそう叫んで、文子の身体をきつく抱きしめていた。

ハッと気づいた時、彼は文子のまわしをすっぱり解いてしまっていた。彼は、「いかん！」と叫ぶと、文子の身体を突き放して立ち上った。

父のことからくる、男女関係での彼のきびしさが、それ以上の行為をさせなかった。

彼はまた、外泊するかもしれないと言った自分の弱さを恥かしいと思った。

文子は、砂の上にうつ伏せになって泣いていた。

その夜、二人は結婚を約束し、秋には式を上げること、それまではどんなことがあっても守るべきことは守ると誓い合った。

二人は、玄関で長い長い口づけをした。文子の目に、涙があふれていた。

× × × × ×

秋に決めていた結婚は、孝二の長期出張でできなくなった。それは、会社の幹部になるための研修で、九月から翌年の三月までであった。

二人はそこで、式の日を五月の、最初の出会いの日に決めた。

九月の出張の前日まで、孝二は一日か二日おきに文子を訪ね、そして相撲を取った。夏の夜には、汗と砂にまみれた身体を快よい海に浸けるのだった。

出張は、非常に長く感じられた。

二人は、ほとんど毎日、お互いに手紙を書き送った。

三月、出張から帰った夜、二人は危うく誓いを破るところであった。しかし、二人は耐えた。

そうすることが良いかどうか、孝二にはわからなくなっていたが、それはとうとう守り通すことができた。

式の日、さわやかな日本晴れであった。出席者は、遠方からやってきた親類を加えても、お互いに孤独に近い者同志であったため少なかった。

しかし、それは二人にとって感動的なものであった。特に、和子の出席は二人を感激させた。

宿に着いた時、外はまだ明るかった。二人は、夜が待ち遠しかった。

現在発売中『限定版グラビア写真集』在庫案内

女体緊縛グラフィック集

〔豊満と清楚〕

一部一〇〇〇円（送共）略号「限二」

緊縛美女八十態〔美しき縛しめ〕 第四集

一部一〇〇〇円（送共）略号「美4」

〔女性刑罰拷問特集〕

日本版

一部一〇〇〇円（送共）略号「美4」

山原 清子『刺青の魅力を探ぐる』

一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

二女緊縛“女斗緊縛競艶写真特集”

一部一〇〇〇円（送共）略号「美8」

「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇

一部一〇〇〇円（送共）略号「美9」

写真集 〔責められる美女百態〕

一部一〇〇〇円（送共）略号「美10」

広い和室に寝具が敷かれ、女中がお休みを言って去った時、二人は思い切り抱き合い、長い口づけをした。

浴衣をスルスルと脱いで真裸になった文子に、孝二はゆっくりと、まわしをしめこんでやった。

それは、二人の約束であった。

孝二のまわしは文子が締めた。

寝具を片隅に押しやった二人は、畳の上に蹲んで向き合い、仕切り、そして組んだ。

揉み合い、吊り合い、そしてまたじっと四つに組み、二人はそれを繰り返した。

全身が汗に濡れ、快よい疲れが出た時、二人はフツンの上に折り重なった。

まわしが解かれ……孝二と文子の幸福の間が……そうして訪れた。

フツと気づくと、文子が起き出していた。

彼女は一糸もまとわぬ姿で起き上ると、籐椅子に身を沈める孝二の首をしっかりと抱きすくめ、頬を寄せてきた。

彼は浴衣を脱ぎ捨て、強くその身体を抱いた。

二人を、たった今水平線から昇ったばかりの太陽が、明るく照らしていた。

（完）



お灸に憑かれた私

白 浜 律 子

私は今年三十六才になる人妻です。子供が二人、どちらも女兒で、上は中学一年生、下が今年四才になります。

私の住んでいる町は、国道二十六号線に沿った、堺市から和歌山に向って十四、五分のところにあります。

五六年以前までは、閑静な住宅地でしたが堺臨港埋立の余波で、巨大なタンクなどが建ち、日がな発電機の騒音や、スモッグの影響なども見られるようになってしまいました。

でも、やはり、夜になると静けさが戻ってまいりますのは、海が近いせいでしょうか。

私の故郷は、和歌山県の南紀、B町ですがそこは、半漁半農の人口二千五百ばかりの小さな町で、太平洋の荒波がまともに、防潮堤に砕け散る荒磯に囲まれていました。

私の家はポツンと町から一軒だけ取り残されたように離れていて、家の裏の山ぞいに、墓場がありました。

紀勢西線、当時は紀勢線のことをこう申したのですが、日に三度、停車をするだけで、私はそこからおよそ一時間ばかりの下町の女学校へ通学しておりました。

私は生れつき孤独な性格だったらしく、それは家が一軒だけ部落から離れていることにも少しの原因はあったと思いますが、お友だちは皆目ありませんでした。

父は土地の材木会社の役員をしておりました。気の合った四五人の有志で出資をした、紀南木材という小っぱけな会社で、そこへ毎日顔を出しておりました。

母は本当の田舎育ちで、大阪や名古屋など生まれてこのかた、ただの一度も行ったこと

がなく、私と姉（三つ違い）の世話と、畑仕事で結構満足して生きているといったタイプでした。

私と姉とは性格がまるでちがっていて、私は孤独癖が強いわりに、人を怖れるといったことはありませんでしたが、姉は一見社交好きでお喋りのようでありながら、実は人を怖がる弱虫の面がございました。

でも、私たち親子は幸せな家族でした。朝八時に父が出勤すると、母は誰もいなくなつた家のあとかたづけを、せっせとはじめるのでした。

私と姉が学校から帰宅するのは、午後五時の汽車でしたから、母は半日をひとりで暮らしていた訳です。

二

私はいまの良人と契ばれてから、丁度十三

年になります。

私の二十三才のときでした。

良人は私より六才上の今年四十二才です。

私はいまだかつて一度も良人を愛したことはありません。これから愛することはないでしょう。

十三年間、どんなに愛そうと努めたか知りませんが、結局、愛というものは努めるもので生まれてくるものではなく、自然に養われるものだということを、つくづく思い知らされただけでした。

良人は、私を欺いて、結婚したのです。

お人好しの父は、良人の家が嘗て和歌山県の大地主で、権力者であったことから、それが戦後、なんらの力もなくなってしまうていことにも、耳をかさず、良人の申し出でに私の許可もなく、勝手に縁を結んでしまったのです。

ところが良人は殆んど無一文の状態で私を迎えたのでした。

いえ、そんなことは、とや角申しません。

結婚は金銭づくではないのですから。でも愛がひとかけらもなかったのです。

私には誓った人がございました。

従兄でした。五ツ年上のおとなしい人でし

た。でもその人は戦死したのです。沖縄の空です。特別幹部候補生、陸軍中尉でした。

昭和四十年夏、戦後二十年経って、生き残った私は、三十六才の女盛りで二人の子の親となり、愛を失ったまま、虚ろな心で日々を重ねているのです。

それはともかく、私がどうして、お灸に憑かれてしまったかを、今からお話したいさねばなりません。

それは従兄が私に遺していったのです。あれはそう、従兄が暑中休暇で、(と申しても実は勤労働員を怠けて休んでいたのかも分りませんが)私の家に寄宿していることがございました。

従兄は毎日規則正しい日課でした。朝五時に起き、午前中は読書、午後夕方まで読書といった、まるでガリ勉屋さんで、「兵隊にとられたら、アホになるさかいな、いまのうちに本読んどくんや」といっておりました。

京都のT大の英文科で、英国劇壇の解剖と歴史とか、そんな風の難かしい研究などとしていたようでした。

ある日、私はきつとなにかの食中毒だったと思いますが、激しい下痢で、お便所を往ったり来たり、顔をしかめ下腹をおさえおさえ

苦んでおりました。

離れにいた従兄が、お茶を飲みきて、私が油汗をかいて苦しんでいるのを見て、

「リッちゃん、工合が悪いの?」

と声をかけてくれました。

「うん、たいしたことあれへん、ちょっと」

私はいくらなんでも、お腹がいたくて、下痢がひどいなんて、恥かしくて申せません。

「さすってやろうか」

「ううん、ええのん」

「ほんとにいいの?」

「うん」

従兄は私の額にういているひどい油汗に、私がムリに我慢していることを見破ったのでしよう。私がいい、いい、と申しておりますのに、つかつかと私の傍まで近づくと「さア横におなりよ」と云って、押入れからお布団をさっさと出してくれるのでした。

母と姉はちょうど、お寺へお説教を聞きに出かけて留守だったのです。

「ええのや、お兄ちゃん」

私は甘えて、お布団の上で駄々をこねました。でもお腹の痛みは、ますますひどくなってくるようで、私はまたお便所へ駆けこまねばなりませんでした。

ほんとに恥かしくて、この時くらい、いまのように水洗のおといれなら、どんなに救かっただろうにと思います。

田舎のお便所は、御存知のように庭から離れた鶏小舎の近くなどに軒を別に建てられています。

そして駆けこむたびに、板戸をガチャンと閉めねばならないのです。

静かに戸を閉めているつもりでも、周障でいると、ガチャンと鳴ってしまうのです。

「薬、買って来ようか、赤痢かなにかだったら大変だからね」

従兄は、私の下痢に気が付いたようすでした。

私は顔をふって、板の間の薬袋を指さしました。

「ははは、こんな売薬なんか利くもんか」

「ううん、それ、よう利んのんよ」

私は、これだけいうのが、やっこの思いでした。従兄は薬袋をガサゴソやっていました。が、岩見銀山のようなと、木曾の百神丸を取出してきました。

「百神丸、三十粒ちようだい」

それは黒い小粒の征露丸によく似た薬でした。

三

一時間もたったでしようか、私は薬が利いたのか、いつの間にか眠っていました。

肩のあたりがひんやりするので目を覚ましますと、従兄が辞書に目を落しながら、団扇であおいでいてくれるのでした。

「お兄ちゃん、かめへん、かめへん、勉強して」

「うん」

といって生返事だけで団扇は止めません。

「どう、お腹の工合」

「うん、もうとまったわ」

といって、私は思わず顔を赤くしました。

「りっちゃん、人間はね、哀しい生きものなんだよ。人間は、誰でも血を持っているだろう。血のなかにはね、人間自身が理解出来ない色々な要素がふくまれているんだ」

従兄の話す口ぶりは優しく、かんでふくめるようでした。

つまり従兄は、人間は、肉体があるかぎり神さまにはなれない。だからこそ哀しい生きものだと言ったのでした。

私には分かるような気がしました。庭さきの赤いアマリリスの花が、ぷうーんと匂ってきました。

「僕も近いうち、入隊するけれども、僕は人を殺したくないな」

私はアマリリスの花の匂いって、哀しいなと思っていました。

「なにを考えているの？」

「お兄ちゃん、死んだらあかん」

私は五、六才の子供のみたいに、従兄のペンダコのある白い手を握っておりました。

「りっちゃん」

従兄は私の目を透かして見るようにしました。そのとき、また私のお腹が無粋にもゴロゴロと鳴ったのです。

「痛む？」

「うん、まだ、ちょっとだけ」

「やっぱり、あんな薬利かへんのや」

「ううん、うち、お腹痛いの、ときどきあるのやね」

従兄は傍の薬袋をみんなサアッと空けると、売薬の一ツツを丁寧に目を通していました。ところが、その中から、「この大きな袋なんや」といって手に取ったものが、私の生涯の運命を、大きくゆさぶるものだったのです。

それは滋賀県の伊吹町で製造されている艾だったのです。

「りっちゃん、お灸すえてみたげよか」

従兄は、なにかを発見でもしたような大きな声で申しました。

「お母ちゃん、いつかて、それすえて、ようきく言うてるけれども……」

「よっしゃ、すえたげよ。僕のおふくろかてようきくて、いつでも自分ですえてるよ」

私は最初、冗談のつもりだったのです。でも従兄の熱心なのに、いつか浴衣を脱いでおりました。

「りっちゃん、ええ体してるなァ、お餅みたいにすべすべしたキメの細かい肌してる」

「イヤ、早くして」

従兄は効能書を丁寧に読みながら、私の腰から背にかけて、小さな艾をつまんでおいてゆきました。

蚊取線香の入れ物を台所から持ってくるマツチをすって、お線香に火を移し、一つ一つ丁寧に、艾に火をおとしていきます。

ジリジリと微かな音とともに、肌が汗ばんできます。

「どう、熱い？」

「……うん……うん、お兄ちゃん」

私は従兄の手を力いっぱい握りしめていました。

「熱いわ、熱いわ、お兄ちゃん！」

従兄は優しい目で、うなずきながら「しんぼ、しんぼう」と励ましてくれるのです。

「お兄いちゃん、背なか、どないかなってえへん？」

「うん、もの凄うきれいな桜色に染まってるよ」

「ほんと、そんなに綺麗？」

「うん、夕焼けの海みたいや」

私の手と従兄の手は汗ばみ、ぐちゃぐちゃに濡れています。

私はいつか瞼を閉じて、懸命に熱さと斗かっていました。

ジリジリと火は肌をこがして、私の体のシンまで燃やしつくすかのように、迫ってくるのです。

でも、どうでしょう。いままでしほるように、ときどきさしこんでいた下腹のあたりの痛みが、嘘のように治まっているのです。

「お兄ちゃん、ええ気持。夢みてるみたい。もっと艾つけて……」

私はこのまま、いつまでも、いつまでも、お兄ちゃんにお灸をすえてもらえるのなら、死んでもいいのと思いました。

好きだった人に、手をしっかり握りしめて

もらって、優しい目で励ましてもらえるなんて、そして私は幼い胸を手拭でおおって、二人きりで、お布団の上にいるのです。

墓場で蟬の時雨のふるように鳴いていました。死んだように静かな海辺の町の屋上がります。

「お兄ちゃん。うち、うち……」

「どうしたの、りっちゃん。泣いたりなんかして」

胸のなか、岸に打ち寄せるどんなに激しい波よりも、激しく騒いできました。

「りっちゃん！ 僕が戦争に行ってもね、ひとりでいるかい」

「うん！」

私はお兄ちゃんに殺されてしまうのではないかと思うくらい、強く強く抱きしめられていました。

「熱い！」

お兄ちゃんの手は火のついた艾がついていました。

四

従兄がそれから三カ月後、兵隊にとられてしまうまで、私は家人のものが留守になると「お兄ちゃん、お灸すえて」

と甘えました。従兄は「よし」といって、

だんだん艾の量を多く重ねるのでした。

「お兄ちゃん、熱いわ、熱いわ」

でも私は口とは逆に、熱さに耐える喜びを体いっぱい、みなぎらせるのでした。

「ね、今日はここにかてしてみてる？」

「えッ、お腹なんか直接してもいいの。袋には書いてないけど」

「ううん、お兄ちゃんがしてくれるのやったら、体の何処かて、きつとええのにきまってるさかい」

本当にそうだったのです。

怖る怖る、私の下腹に艾をつまんでおくと「いいね、火をつけるよ」

と従兄はまだ心配そうな表情で、私の顔をみるのでした。

歯を喰いしぼり、目にしみる汗をしたたらせながら、私は熱さと斗かっていました。

私は艾の香りにいつか、取り憑かれていたのでした。

あの微くさい、そしてどこかに土の乾いた匂いのする艾のどこかに、思えば私は幼いセックスを感じていたのかも知れません。

その当時はただ好きな従兄と、ひそかな遊戯でもするつもりで、お灸ごっこをしていたのでしょが……。

そして、とうとう、ある夜のことでした。

「お兄ちゃんかて、それ脱ぎなさい」

離れて二人きりでした。

私は英話を見てもらうのだと父母を偽って蚊取線香のなかに、艾をさしのばせてゆきました。

「あかんよ、僕はお腹なんか痛なったことあれへんもん。あかんあかん」

私は真剣に拒否する従兄を面白がって、追いかけてまわし、とうとうお灸をすえることを納得させてしまいました。

「いっぺんだけでええのん。うちとの記念や思て、いつかて、お灸のあとみて、うちを思い出してほしいのんや」

この私の真剣な願いに、従兄もやっとうなづいてくれたのでした。

五

「お兄ちゃんの肌かて、女のコみたいに白いなア」

従兄の背は、まるで私たち娘のように、きめのこまかい肌でした。私はそつと唇をおしあててうしろから「お兄ちゃん」といって抱きしめました。

従兄は黙って睨を閉じているだけでした。

「なに、考えてるのん」

「ううん、なんにも考えていないよ。それより早くお灸してんかいな」

私は指さきで、艾をかためて、従兄の背なかに並べてゆきました。

艾をお伽の国の兵隊さんのように順序よく並べてみました。小っちゃい小ちゃいのを十個宛二列に並べてみました。

「なにしてるんや、りっちゃん？」

私がいまいがいかにかかっているものから、従兄はしびれを切らせて、うつむいた恰好のまま、さいそくしました。

「あかん、あかん、動いたら、みんな落ちてしまう」

私は蚊取線香にマッチを五六本すって、充分に点火しました。

蚊取線香の煙が、ゆったりとお部屋に流れて、従兄はじっと、その瞬間を待っているのでした。

私はなんともいえない興奮に指さきが細かくふるえました。いえ、ふるえているのか、しびれているのか見当がつかないくらい、私は嬉しかったのです。

生きていることって素晴らしい、いまでもこの時のことを思い出すにつけ、私は体中がふるえるのを、どうしようもありません。

△日本版▽

略号〔美5〕

山原清子

○木馬責にあつて苦悶する女囚八葉
 木乃々子○白州の上で非人の嬬りものにな
 る女囚八連続四葉(美木乃々子)海老縛りと答打ち
 折檻を受ける女囚——
 連続四葉(美木乃々子)○非人に縛り上げ
 られる哀れな女囚八连续十二葉(美木乃々子)
 子○海老責めに放置され全身蒼白となつた
 女囚八二葉(美木乃々子)○非人に不浄縄
 を掛けられいたぶられる女囚八二葉(美木
 乃々子)○荒庭の上にて荒縄の緊縛に泣き悶
 える女囚八连续八葉(美木乃々子)○算盤
 責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する
 女囚八四葉(美木乃々子)○荒縄で乳房も
 くびれるまで縛られた女囚八三葉(美木乃
 々子)○土壇で胴斬りにされる死罪の女囚八
 四葉(美木乃々子)○算盤責めと石抱きの
 拷問八四葉(美木乃々子)○囚衣を剥がさ
 れ竹のささらで打たれる女囚八四葉(美木
 乃々子)○刺青を晒して木馬責にあう女囚八
 三葉(山原清子)○海老縛りでムチ打ちに
 喘ぐ女囚八四葉(山原清子)○竹の棒に苦
 悶する女囚八四葉(山原清子)○全
 て折檻される女囚八三葉(山原清子)○全
 裸にて白洲に股間縛りであう刺青の女囚八六
 葉(山原清子)○礫合に括られた人墨姐御
 一葉(山原清子)○足首を上にして逆さ
 吊りにされた女囚八一葉(山原清子)

以上合計七十四葉

「あほやなア勿体ない。艾黴くさいのは、そ

れだけ古うて値打ちがあるのやないか」

と母は笑っていましたが、行商の薬売りが来たとき、私は内緒で二袋、よけいに求めておいたのです。

「りっちゃん、熱い、熱い！」

従兄の体じゅうの玉の汗を手拭でぬぐってやりながら、私はふとなんだが、このまま、この人のお嫁さんで一生過ごせたら、どんなに幸せだろうかと考えていました。

六

私がお灸をはじめた秘密の動機は、こんなことからでした。

私は二十三才の春。いまの良人に嫁ぎました。ひとかけらの愛もなく、私のむくろが白いうちかけを着て、泣く泣く式場へ出向いて行ったのです。

私と従兄は肉体上の結びつきはありませんでした。共にお灸の遊びを味わっただけなのです。

お灸の遊びがどんなに私と従兄を深くむすびつけていたか、御想像願えると存じます。結婚の形式がどんなに変わったといっても、やはり本人の意志でないものは、略奪結婚と同じことだと今でも思っております。

良人はずいぶん、いろんな女の人と遊んで

いたようすでした。

私の名はりつ子でした。それなのに、良人は、私の知らない女の人の名を、なんべんもよんだのです。

良人とはこういうものなのか？ 母もこんな我慢をして、私や姉を生んだのだろうか、私はいつか涙を流していました。

「おい、ちょっと立ってごらん！」

良人は低く凄んだ声で、突然、裸の私を窓ぎわに立たせたのです。

「なんだい、これ！」

良人が目を瞞って、指したのは、私の背からお腹へかけて点々と火傷のような跡のあるお灸の跡でした。

私は、心中しまったと思いました、

「いややわア、お灸の跡みたりして」

と笑い顔でごまかしましたが、執念深い良人は、なおも疑い深そうな目で、後ろを向いて御覧といって、全身を入念に調べるのです。

「いつごろから、お灸みたいなんもん、すえとったんや？」

「小さいときから」

「あんな非科学的なもん、キミみたいな賢い人が、ようすえてもろうたなア」

「お母アちゃんが、お灸大好きやさかい、うちかていつかて……」

「勿体ないことするなア、野蛮人やで。こんな美しい肌に傷つけたりしてからに」

良人は私のお灸の跡を一つ一つ、指先でなでるのです。

それはいつくしむように、またなんだか傷がシヤクなようにもとれるのです。

「もう、お灸すえたらあかんで、俺、お灸大嫌いやからな、もし、お灸すえるところ見ついたら絶対許さんさかいな」

私は生きて行くもっとも大きな愉しみを、新婚第一日目に、無理解な良人の手で取り上げられてしまいました。

七

良人は私のお灸を警戒しているのか、同衾するたびに、

「見せてみ、ほんまにはじめて見たとき、びっくりしたで」

と、それでも、私が素直にお灸をやめているので、二年ばかりたって、上の優子が生まれた頃から、もう検査をしなくなりました。

良人には、私以外に好きな女が出来ていたのです。外泊も平気でします。

電話一本かけて来ません。三日でも四日で

も平気なのです。

私はそんな良人の態度をいいことにして、秘かなお灸の愉しみに耽溺しはじめていたのです。

子供を産んだ私は、少し肥ってきました。下腹の肉など、指でおしますと、ぺこんとへこむくらい、むっちり弾んでいるのです。

多分、脂肪がのってきたせいでしょう。私は良人が私をかまわないのをいいことにして週に一度が、二日に一度になり、それがとうとう毎日のように艾の匂いを嗅がないと、落着をなくなってしまったのです。

また、持病の胃痛もあったと思いますけれども、艾の袋を、筆筒の奥底からとり出すときの、ぷうーんと匂うあの秘密めいた歓びは私ひとりの世界のものでありました。

子供を寝かせつけると、私は指先に艾をつみあげて、鼻をくつつけるようにして、匂を嗅ぐのです。

すると、従兄の伸吾さんの優しい顔が、脳裡に大きくうかびあがってくるのです。

「伸吾さん。りつ子、あなたを思い出すとき、いつかてお灸をすえますのよ」

私は小声でひとり呟くのです。

そして、マッチをすって、私は、良人に発

見されにくい個所に艾をおくのです。

チリチリチリと毛が焼けて、なんともいえない、心安まる匂いが私の体をつつんでくれるとき、私は、なんべんも、なんべんも、

「伸吾さん！」

と呼ぶのです。

良人の相手の女性は、元、良人たちと一緒に事業をやっていたことのある仲間のYさんの奥さんでした。

私に、そのことを忠告してくれたのは、やはり仲間のRさんで、

「昔から、あの二人くさかったんでっせ。奥さん、なにも知りはれしまへなんだんか」そんなことまで話してくれるのです。

良人は自分で女好きのするタイプと思い込んでいたらしく、丁度、油関係の仕事が、自動車ブームやなにやかで、好況だったものから、相当派手にお金をつかって、やってゆける様子でした。

私たち家族には、月々四万から五万くらいありました。

私はYさんの奥さんのことは、なんともありませんでした。むしろ良人がYさんの奥さんで満足してくれるのなら、それで救われる思いでした。

私はでも、子供だけは大切に誰にも負けない良い子に育てたいと、育児に専念いたしました。

人一倍、熱心なPTAママさんだったと思います。いえ、いまでも優子はクラスで一番の成績ですし、ピアノだって、大阪のフェスティバルホールで堂々と優勝してくれた腕前ですから……。

良人はなにひとつ、子供の教育なんか、かまってくれません。

「お前は俺がみこんだだけあって、なかなかの賢夫人や、どこへ行ったかて、お前みたいな美人で賢うて、従順な嫁はん、おれへん云われるんや」

良人はかくし女のヒケ目をごまかすのか、いつも私をベタホメにホめるのです。

「お父さん」

「なんや」

「いっぺん、クニへお墓参りに帰って来たいんですけれど」

「ああ、かめへんかめへん」

「ちょうど子供たちも夏休みで、海へ行きたいそうすし」

「なるほど、そら気いつかんで悪かったなアほんで何時から行くつもりや？」

「お父さんは？」

「俺か？」

「ええ」

「俺は、伊丹のガソリンスタンドの件で、いま走りまわっとるさかいな」

「明日、子供たちと……」

「切符買うたるんか」

「はい」

「なんや、ほな行って来いよ」

良人は好都合と、お腹の中で手を叩いていたのでしよう。

八

最近になって、南紀はめざましい発展をとげました。

私のS町も、観光旅館が二軒も海ぎわに、赤いネオンを競っておりまして。駅前には、バスが二台、私たちを待っていました。

懐かしい故郷へ帰って来たのです。いまは父も母も、家の背後の山の墓で静かに眠っているのです。

姉は鉄道員を養子に迎えて、もう四人の子持ちなっていました。

「りっちゃん、ほんまに、きれいな奥さんになつてー」

姉は私を見るなり、たまげた声を出しまし

た。懐かしい故郷の訛です。

夜おそく、姉の良人が戻って来ました。平凡な男でした。

高等小学校を出て、すぐ国鉄に入ったのですから、世の中のことなんか、なんにも知らない男です。

私をチラチラ流し目で見て、西瓜など御馳走してくれました。

私はもういつときでも早く、あのお部屋でひとりきりになりたかったのです。

「お姉ちゃん、お離れ空けてくれてるか？」

姉に待ちきれなくて、さいそくしますと、「ちゃんと掃除したる、あんたの思い出の部屋やもんな」

と笑っていました。姉は、私と伸吾さんのことを知っていたのでした。

私がお嫁に行くとき、伸吾さんのノートを筆筒のひき出しの奥底へかくしたのも、姉は見えて知っていたのです。

「早いもんやなァ。伸吾さん、戦死しはってから、もう十五年たつてももうたんやなァ」去る者、日日にうとし、いえ、そんなことはございせん。私の心と体の中では伸吾さんは何年になつても、ちゃんと生きつづけているのです。

それは、お灸と共に、永遠に生きつづけているのです。子供たちは姉夫婦の子供たちと可愛い枕をならべて、早く眠ってしまいました。

姉と私は、二人っきりで、伸吾さんのいた離れで、やっと落ち着くことが出来ました。

「りっちゃん、あんた可哀そうな女やなァ」

「なんで、お姉ちゃん」

「りっちゃん、あんた、公平さん好きやないのやろ？」

「……」

「うちかて、うちの人、別に好きで一緒にあった訳やないけど、うちの場合は、ほかに好きな人がなかったさかいなァ」

「そやけど、死んでもた人のこと、もう仕様ありませんもん」

「そう、そおや、そやけど、あんたの顔みてるよ、いまでも、好きで仕様ないて書いたァるよ、ほんまに」

肉親はおそろしいと思います。姉は私の心が、十五年たつても、少しも変わっていないことを見破っているのです。

「あんな、りっちゃん。あんた、いつからお灸すえてるのや？」

「えッ？」

姉は私のお灸のことなど到底知る筈はない
と置いていたのです。

「公平さんがなァ、もう大分前やったけど、あんたの体にお灸の跡がいっぱいある言うて手紙よこさあったことがあるねん」

私の顔色は、きつと青ざめていたと思います。これが肉親の姉でなかったら、きつと私は秘密を暴かれたことで、取乱していたにちがいありません。

九

私はでも姉には伸吾さんとの秘密な、お灸の動機は話しませんでした。

嫁ぎ先の近くに、有名なお灸の先生がいて
その人にすえてもらったものだと言つてしま
した。

「公平さん、なんや、あんたの過去のことを疑うてるみたいやったさかい。りっちゃんにかぎってそんなことは絶体ありません、って怒って返事出したんよ。そしたら、それきり来んようになってしもうたけど」

「お母ちゃんがいつかてお灸すえてたさかい
うちも見習うただけよ。心配せんといて」

姉は、その事から母のことなど思い出して
おそくまで、お喋りをつづけるのです。で

◎本誌増頁記念◎

△原稿募集▽

△
内
容
▽

一、特異な風俗文献誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。

一、S並にMは勿論のこと、フエッッシュ各種、女性切腹、女斗相撲、変装、生首狂崇、見世物奇態珍聞、妊婦嗜好蛙腹など広範囲に亘って、大いに新分野の開拓と傑作の御投稿を期待します。

▽規定△

一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。

一、枚数は一切制限いたしません。

一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、漸次誌上に掲載いたします。

一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。

一、御送稿は第一種郵便（密封）にてお願い
い致します。
瓦まで65円、
瓦まで45円、
三〇〇〇瓦まで75円です。
二〇〇〇瓦まで55円、
一〇〇〇瓦まで35円、
五〇〇瓦まで25円。

△奇々編集部▽

も、私はもうじりじりしていたのです。姉の言葉など耳を取りすごして、生返事ばかりしていました。

姉も私が疲れているとでも思ったのか。

「ほな、ゆっくり休みや、子供のことは、うちが面倒みといたげるさかいな」

と主家や引揚げて行きました。

私は、ほんと大きな溜息をつきました。やっとひとりきりになれたのです。

静かな夜の海の、かすかな潮騒が、庭の木々になにか囁いているようでした。

私は、そつと窓を開けてみました。

海ぎわのホテルの灯が、波にうつって、うゆられてまるで夢のように揺れています。

十五年前は、あの辺りは石ころだらけの砂浜だったのにと、様々な想い出に、しばし自分を忘れてしまいました。

私は窓を閉めると、ポストンバッグから用意のお灸の道具一式をとり出しました。

紫のふくさから、なんともいえないなつかしい艾の匂いが流れてきました。

私は狂ったように艾をお腹にのせました。

そして、マッチの火を艾に近づけたとき、私は思わず「伸吾さん」とよんでいました。

熱い火が、肌をかけずって、そうして私の白

い豊かなお腹をジリジリと焼けこがしてゆくのです。

火の赤さが、まるで私の魂のように、少しずつひろがってくるのです。

私の魂、私の哀しい、はじめな魂が、火の燃えるのとともに、少しずつ、少しずつ、生きづいて、大きく炎を上げてゆくのです。

「ああ、うれしい！」

お灸をすえてみたことのない方には、あの熱さからくる、しびれるような歓びは到底お分りにならないと存じます。

熱がジリジリと肌の内奥まで、おかしてしみとおってくるとき、頭はすうーと澄みきって、まるで広い海にでも泳ぎ出たときみたいに、気持がよくなるのです。

艾をちよつとずつ、重ねて、齒を喰いしばり、こぶしを空に、握って耐えているとき、私はもうなにもかも忘却して幸せなのです。

こんな幸せな気持を味あわせて下さる神さま、いえ、伸吾さん、ありがとうございます。

私はとうとう真夜中まで、ありたけの艾をつかい果たしてしまいました。

皮膚がこげて、恍惚境をさまようようになる瞬間、私はいつも、自分の齒で腕のつけ根を、思い切り噛みます。

そうすると、痛みよりも快感が全身に、胸から腰にかけてかけずりまわるのです。

これは私だけの歓びなのでしょう。

十

三日間の墓参にかこつけての帰郷は、私を生きかえらせてくれました。

私の肌は本当に、艶々として、姉などくらべると、驚くくらい健康で美しいのです。

お灸の歓びが、私の生命を息づかせてくれるのでしょ。

家へ帰って来ると、良人はすぐ私を求めました。でも近頃は、私を裸にしたりしません。お義理のように私を抱くだけなのです。

「お前は、べっぴんやけど、燃えたことない女やな？」

「燃えるて、どうなるんでしょうか？」

「婦人雑誌かて、この頃は、書いたるやろうな」

「そやけど、あれみんな嘘や云うてはる人もいやはります」

「そ、そんなことあるかい、現に俺」

「現に燃える女はん知ってはるんですか？」

「……………」

私の意味悪な逆襲に、良人は口をつぐんでしまうのでした。

「ま、お前さんは、賢夫人で通つとるさかいな、天は二物を与えずや、しゃないわ」

「あなた、あなたは、なんにも御存知ないのよ。私は燃えることを、この体で知りぬいて

いるわ。いつも、ひとりになって、燃えるのよ。でも、あなたには、子供を産む道具にか過ぎない私の体」

私はいけない女だと思います。

仮面をかぶった人間かも分りません。

でも、これが私の生きる運命なら、仕方がないのでないでしょうか？」

いま、私のおトイレのなかにいます。この頃は、下の幸子も、私の様子に敏感になっていますから、こんな場所が、私の唯一の憩いになっているのです。便器にまたがって、私は太股に艾をおくのです。

やがて白いふくらはぎに、熱が加わってき

て、私は、うーんと呻きながら、瞼を閉じるのです。なんともいえない、いい気持です。

胸が喘ぐたびに、お腹がぴくんぴくんゆらぎます。

「奥さん、今日はなにか？」

御用聞きの酒屋です。

「奥さん、お留守なんですか？ 無用心だなア、表、開いたままなのに」

創作

今昔物語から
こんじゃくものがたり

山口

広



今を去る千余年の昔、牛車が往き交い、十
二単衣のきらびやかな衣ずれが郷愁に似た幻
想をさそう平安朝時代は、源氏物語や枕草子
に代表される上流社会の平和と倦怠だけが全
部ではなかった。社会保障など思いもよらな
い貧富上下の差の甚しい社会の底辺には、あ
らゆる『悪行』が渦まいていた。
平安である平安朝時代の世俗の諸事を流麗
な筆で描いたのが『今昔物語』である。源隆

国とも、鳥羽僧正とも伝えられるこの大巻の
編者は、こうした『悪行』にも目を閉じるこ
となく、淡々と筆を進めている。
この今昔物語の中にも、私たちの世界があ
る。かの有名な平中の話などもこの中におさ
められている。文豪芥川も早くからここに目
をつけ現代人の目から再構成した今昔物語を
発表した。有名な『偷盗』『羅生門』『藪の
中』なども素材をここに求めたといわれる。

善良で気の弱い庶民にとって、生きにくい
混乱の社会の底辺で、善悪の倫理をふみにじ
ってまで生き抜こうとした姿、更にその中に
喜びを見出したさまざまな生き方に私たち
は、この上もない興味をおぼえる。盗、姦、
殺、争、などかずかずの裏面を収めた巻廿九
などは特に私たちの心をひく。そして、それ
が千数百年の昔だけでなく、現代でも通用す
る筋書として私は拙い筆で、それを現代に置

きかえて構成してみた。

原典は、註釈入りで日本古典全書（朝日新聞社刊）に、岩波文庫或は角川文庫に、収められている。他の文庫本にも恐らくは収録されているであろう。

千数百年の長い年月の間にも、人間の本性は変らず、道德、倫理も幾多の変遷はありながらも、「生の本能」の前には無力であることを示すのみである。

私の拙い文よりは、原典の味わい多い深みを読まれることを希望する。

例えば平中の話など、芳野さんの濡れっぱなしのペンで再構成される方が、もっと立派になるでしょう。

一、ある女強盗の話

平凡な商社会社の社員である山田次郎は、背が高く、均勢のとれた体を、好みのよいグレイの背広に包んで大またに歩いていた。

ほりの深い顔立ち、青々とした剃りあと、そして何よりも仕事熱心な彼に好意を寄せる女子社員は多かった。二十八才になった次郎は、ようやく仕事の面白さがわかりはじめ、はり切った毎日を過していた。今日も二時間

の残業を終え、快い疲れを感じながら駅に急いでいた。夕暮れの淡いたそがれの中を歩いている次郎の横に、後から音もなく追いついたフェアレディが止ると、ハンドルを握った女が呼びかけた。

「お乗りになつて」

思いもかけない事であったが、次郎はごく自然に、開かれたドアから身を入れた。

横から観察すると、鼻筋の通った冷い感じが、むしろ近づき難い気品を作っているこの女は二十を過ぎた位であろうか。クラッチペダルを踏むハイヒールにつながるすらっとした足、きめの細かい肌、よく成熟した体にまとっているのは入念な仕立のスーツである。

次郎は記憶をたどった。だがこの女の顔には全く見おぼえはなかった。女性に似合わずハンドル捌きはしっかりしており、ギヤの使用も適切である。

深い木立に囲まれたコーポラスの二階に次郎を連れてゆくまで、その女は何一つ話さなかった。次郎の問いにも、只、ふっくらした含み笑を洩らすだけであった。

二一とだけ室番号が入れた厚いドアには、この女の素性を現わすどんな印もなかった。室内にも、豪華な調度品がこの部屋に

住む人の好みの良さをものがたるだけで、辛うじて、鏡台の前に置かれたコンパクトに飾り文字でJKを入れたただけで、この女は謎に包まれていた。

奥まった一室、ふんわりした羽根布団をかけたダブルベッドに横たわった女は、片目を閉じてウインクしてほえんだ。冷いばかりの感じが消え、クッションのきいたベッドの上になげだした体と共に、この上もなく肉感的な衝動を与えた。

次郎は当然のように、女に寄り添い、ピンクの口紅に彩られた唇を求めた。女の手は、枕もとのスイッチにのびた。

嵐のような時間は去った。さっぱりと汗を流した次郎は、彼の為に仕立てられたようなガウンをまとうてソファに腰を降した。テーブルの上のシガレットケースからウエストミンスターをとって火をつけた次郎に声がかかった。

「こちらにいらして」

居間の大きなテーブルの上に、何時とどのえられたのか、食事の用意がされている。一足だけ遅れて風呂から出た女にできることではない。ここへ招き入れられた時にも、人のいる気配は全くなかっただけに驚きは大きか

った。

「これは……」

彼が口をきらないうちに、決して召使いとも思えない上品な、彼と同年輩の男が配膳車を押した若い女を従えて入ってくると、鄭重に会釈をして、フルコースの食事の給仕をはじめた。とまどった次郎は救いを求めるような目つきで女を見た。だが女はやはり無言で当然のように、ナプキンを膝にかけて、食事を始めた。次郎はやぶれかぶれの気持ちから、女にならって食事にかかった。

厚い血のしたたるようなビーフステーキ、大きな車エビのフライ、激しい運動の後の空腹は次々に出される料理を食欲に受入れた。

食事が終ると、給仕した二人の男女は静かに退いた。次郎は、五間あるこのコーポラスの区劃を隅まで見てまわったが、もうこの二人の姿はどこにもなかった。静かな部屋の中で、次郎は、再びこのえたいの知れない女の肉体に溺れた。

はじめは、不安を感じないでもなかったが当然のように振舞う、この女と暮すのが当り前の様な気になって一夜を明かした。

翌朝、服を着て別れを告げようとする次郎に、女は半ば媚びるように、半ば命令的に、

「今日はどこへも行かないで」

と、ベッドへ誘った。

こうして、次郎はとうとうこの無口な女にひかれて、このコーポラスに引留められた。二人の食事は、昨夜のように礼儀正しい男女が世話をした。

まだ独身である次郎も、決して女を知らなくはなかったが、この女のあやしい魅力と、肉体に心を奪われてしまった。

三日目の朝、無口だった女が急に話しはじめた。

「こんなになったのも、何かの因縁だね。」

どう？次郎さん。私と一緒に住まない」

自分の名をどこで知られたのだろうか。姓なら上衣の襟の見返しにあるが、而もこの女は俺の持物に手も触れたこともないのに、とどきまぎする次郎を笑いながら見つめて、
「もう私の云うこと、何でもお聞きになれるわね」

次郎は思わず本心から答えた。

「ええ、何でも聞きますよ。殺されたって文句いいませんよ。ふふ、少しオーバーかな。」

で、あなたは、お名前は」

「嬉しいわ。次郎さん。いつまでも一緒に居てね。私、純子よ」

膝にしなだれかかる純子の体を、そっと抱き上げた次郎はベッドに運んだ。

豪華な夕食が終り、再び二人きりになったとき、

「あなた、今朝は殺されたっていいって、おっしゃったわね。こっちへいらして」

一番奥の部屋に次郎は連れてゆかれた。

「ガウン、お脱ぎ、ここに立つの」

命令的に変った口調もりんとして、次郎は意志を失ったかのように隆々とした体を現した。純子は長い棒に広げた次郎の手を細引で縛りつけた。手首と肘をきっちり棒に縛り足首も細引で縛り上げると、まるでかかしのようになって倒れないように重心をとる次郎を残して、純子は去った。棒を背負わされ、かかしのように立ちすくみながら、次郎は純子の考えがわからなかった。しかし、僅か三日であるが純子に対する愛情が芽生え、そして、ことごとくりードされて来たことが、彼女に従う事を、知らず知らずのうちに教え込まれたのである。

間もなく姿を見せた純子は、次郎を驚かせた。ウエストできゅっとしまった乗馬用のキョロットスカートをはき、黒い革長靴に銀色の拍車を輝かせて、すくくと、足を心持ち開

いて前に立った冷い微笑を浮べた純子の姿からは、ベッドで見せる彼女の媚態は想像もできなかった。

「どうしたんだ、純子」

彼の問いに、ただ含み笑いだけが返って来た。後から突き飛ばされ、膝を打ち、顔を打って床に倒れ伏した次郎の体から、パンツが裁り去られた。純子の声と同時に、スポーツで鍛えた次郎の肌に弾力のあるしなやかな答が振り降された。呻く次郎にいい聞かせるように、

「次郎さん、今朝はいったわね。殺されたって良いって。ふふふ。本当にそう思っているか、試しあげるわ」

「うっ」

「わあっ」

びゅっ、と答が風を切る度に次郎の尻に背に、赤い答跡がもり上る。女子社員を魅了した端麗な顔が、その度に崩れ、大きくあけた口から呻きが、叫びが上り、全身に汗がにじみはじめた。

腿も、背中も、尻も、首筋にまで、赤い答跡は、縦横についた。二度、三度答うたれて肌が破れ血のにじみだした所もできた。臍を打たれたときは、最も大きな叫びが響いた。

棒を背負わされた次郎の体が、仰向けにひっくり返された。棒の片端を持ち上げ、体中から汗を流している次郎の肉体を純子は仰向けに返した。背面の答跡が床にあたり、その痛さに、又しても大きな呻きが上がる。

腹、胸、腿を、答がおそう度に背や尻の答跡が床にすれる痛さにも拘わらず次郎の体は大きな叫びと共に波うった。

興奮に、紅潮しながら、純子は答打ちの合間に、次郎の体を弄んだ。

何十回も答うただろうか。

「どう、次郎さん。痛かったでしょう」

「うん、まあ。そんなでもなかったよ」

「ふふふ。まあ思った通りだわ」

口の中でつぶやいて、微笑を浮べた。

「強いわね。次郎さん。まだ殺されたって良いって思ってる？ こんなこと、もう御免だって顔に書いてあるわよ」

「そんなことないよ。どうされたって本望だよ。君みたいな女の人になら……」

いい終らないうちに純子は、彼の体の上に馬乗りになって、じりじりと首の上にまたがった。背中が、肩胛骨が、背負わされた棒にあたり、純子の体重を受けて、ごきりと鳴った。首を太股で締められながら、次郎は息を

つめられた苦しみと同時に、この上ない恍惚とした感じに全身の痛みも忘れた。眼を閉じた次郎の顔を見下しながら、純子も興奮していった。

もとのあでやかなガウン姿になった純子は次郎の縄を解き、痛みに呻く彼の体を蒸しタオルで拭くと、全身の答跡を消毒し、薬を塗りつけてガウンを肩から着せかけた。

「強かったわね、次郎。あなたは、私の奴隷よ。何でもいうこと聞くわね」

彼が答えないうちにアンブル入りの強壮剤が差出された。この上なく美味であった。

ストローから甘く、特有の匂いのあるドリンクを吸いながら、次郎は、この女、純子の為なら、何でもしようという気持が強くなった。もう二日も無断で休んだ会社の事も、ガールフレンドの事も、純子以外のすべてのことを忘れてしまっていた。

コーポラスの一室で、次郎は純子とだけの生活に溺れた。食事を用意する二人の男女も次郎たちにとっては、ただ機械のように無表情で、次第に意識しなくなって来た。

それと共に純子の巧まない威圧感が、次郎に自然のうちに敬語を使わせ、

「純子さん」

と呼ばせ、純子は

「次郎」

と呼びすてにするようになって来た。

たとえ好きあった男女であっても、一日中顔を合わせていると次第に鼻についてきて、はじめはそこが一番気に入った表情であり、動作であった個性すら、何かつまらないきっかけで時には嫌悪すら感ずるほどに嫌になるものである。ところが純子は昼は責め、夜は愛し続けながらも、次郎に飽きを感じさせない不思議な変化を天性として備えているように思えた。

まだ答跡の完全に癒えない次郎に命じた。

「次郎、そこへ横におなり」

「はい、こうですか」

横になった両手に、細いが強い鎖がまきつき、両手はもう三十糎以上は開けなくなつた。更に両膝にも同じ鎖がまきつかれた。シヤックルを使って端を固定されると、もう自分で解くのは難かしかつた。解こうとは思わなかつたが。

「さあ次郎、馬におなり。これをくわえて」
ステインレスのはみを噛まされ、それが手綱につながる。

不自由な手足で、やっと四つん這いになつ

て待つ次郎の背に例の乗馬服姿がまたがる。

銀色に光る拍車を脇腹にあて、答を、むき

だしの尻にくれて純子は命じた。

「次郎、隅から隅までお歩き。止ったらひどいわよ。どうどう」

手足の、いや、四つ足の間隔を僅か三十糎に限られ、腹に腿に尖った拍車をあてられ、尻に強い答を受け、鎖をちらちら鳴らしながら何度もこの広いコポラスの部屋中を往復させられる次郎の馬は次第に遅くなって来た。はじめは軽いと思われた純子の体重も次第に岩の様に重く感じられた。

拍車は本物の馬用のものより先が鈍く削られてはいたが、何度もあてられるうちに、腿や腹の皮が破れ血がにじんできはじめた。尻の答跡も同じようになつた頃、どたと次郎はつぶれた。

「どうしたの、次郎。お立ち。まだへばるのは早いわよ」

声と共に答の雨が肩に、頭にまで降った。

純子を背負ったまま、両手、膝を鎖でつな

がれたまま立上るのは苦しい労働であった。
二度目に立上ったとき、次郎は、純子の重みを支えかねてすぐにつぶれた。あらい息をしながら、絶え絶えにはみを噛まされた口で

哀願した。だが純子には「水を、水を」とは聞えなかつた。

長々と、呻きながら床に伸びた次郎の背から立上った。次郎はうつ伏せに伸びたまま、拍車のちらちら鳴る音が遠ざかるのを聞いた。不自由ながら、自分の鎖につながれた手で噛まされたはみを取除けることもできないに、じっとそのままの姿勢ではみの固いステインレスの棒を噛みしめ、酸っぱい唾を飲みこんでいた。

スリッパの音が耳もとで止った。

「弱いお馬だこと。ほほほ。次郎、参ったでしょう」

はみを外しながら、純子の含み笑いは続いた。

「み、水を。水を下さい。純子さん」

弱々しく哀願する次郎の声を聞きもしないで、手足の鎖が外された、鎖のまきついていた部分は、赤くすり剥けていた。

「次郎、上をお向き、水をあげるわ。お水よりもっと良いものを。ふふふ」

のろのろと、疲れた体を仰向けにして横たわった次郎の上に、ふわりと、あでやかな純子のガウンが跨いだ。純子はガウンの下には肌着をつけていなかった。

「次郎、一滴もこぼすんじゃないよ」

それでも次郎の渴きは止った。

「次郎、ふふふ余計な事をしなくていいの」

あわてて純子は跳上った。

答うちや、色々の責めに痛めつけられる次郎の体は、スポーツで鍛えた芯の強さと、若さと、純子の適切な治療で回復は早かった。答で破れた肌も内からもり上る肉でより遅しく、強い肌になっていった。

もう十日も経ったであろうか。次郎は純子のいうことなら何でも喜んでするようになり女主人に仕える奴隷の地位にすら、喜びを感じ、純子から離れたくないという気持を益々強くしていった。この世は、そして自分の体も心も、純子の為に存在するという気持だけになってしまった。

「次郎、お前、今日はこの服を着るのよ」

純子は黒いズボンと同じ色のセーターをぶら下げている。

「これを着て、ここへ行くのよ。九時丁度はこのマンションの二号室へ行って合図するのよ。次郎、ノックを間違えないでね。誰だっていわれたら、俺だ、ジローだって答えるのよ」

メモ用紙の地図を渡される。

「十分前に出れば歩いて間に合うわ。この鍵はこれ。間違わないようにね」

そのまま純子は出かけてしまった。次郎がここへ来てから始めての外出である。彼は今日はどんな責めが行われるかと、半ば恐れ、半ば楽しみにしていただけに、何か肩すかしをくったような落胆した。しかし、もう純子の命ずるままに動くのが当然であるという気持が支配した。

教えられた通りの合図で、命ぜられたマンションに行く、まるで空室のように全然家具のないこの部屋に、何時も食事の用意をしてくれるあの男が待っていた。

「どうしたんだ。お前、これから、どうするんだ」

「しーっ。黙って待ってろ」

目つきは鋭かった。

五分も経たぬうちに、もう一人の男がやって来た。

三人とも、同じ様に黒いズボンとセーター姿である。三人が揃うと、待つ間もなく大きなハンチングをかぶった小柄な男が入ってきた。服装は三人の男と同じであるが、眼から下を覆う大きな黒い布で顔をかくしている。

涼しい目もとと、白い肌が黒い服に印象的で

ある。他の二人がはっと頭を下げたので、次郎も、それにならって頭を下げた。

「皆、いいか。今日はS銀行だ。月末で商店街の集金が全部集まっているから獲物は大きいぞ。さあ、今から手筈をきめる」

男の声にしてはかん高い声で、その男は綿密な手順を説明しはじめた。次郎は何かその声に聞きおぼえがある様な気がした。

「さあ、行くぞ。静かに行け」

田崎と呼ばれた男がマンションの外に置いてあったブルーバードを運転した。助手席に掛けたボスの後姿を見るうちに、わざと怒らしている肩の丸みと、これだけはかくせない首の細さが、次郎に、ボスの眼もとだけ出た眼ざしから或る連想を与えた。このボスは純子ではないのか。いや、確かに純子だ。自分で自分にいい聞かせ、始めに銀行を襲うと聞かされた時の驚きと、罪悪感が消し飛んだ。

S銀行の手前で車を捨てた四人は命令通りまず電話線と非常ベルのコードを切った。通門を合鍵で開き、ピストルで脅して、警戒していた守衛を縛り上げ宿直の二人を金庫室へ連れて行くのは手筈通りうまく運んだ。だが鍵は支店長が身につけ、而も金庫は時計錠で朝八時にならないと開けない。

「ふっふっふ。こんな事はわかってるぞ。田崎、眠らせろ」

ボスの高い声が、縛られた三人の銀行員に麻酔注射をすることを命じた。次郎はもう一人の男の命ずるままに、色々の道具を運んだり、手伝いをさせられた。

三時間もかかってこじ開けた金庫から、ごっそりと札束が盗み取られた。

アジトにしているマンションの空室に帰り番号の控えてあるであろう新札を焼き捨てても、八百万円を越える金が残った。

「おめえはこれだけだ。大事に使えよ」

田崎に押しつけられた二百万円を押し戻して、次郎が、

「俺は要らない。早く帰りたいんだ。いいだろう」

答えるのを見て、ボスは覆面の陰で満足そうな微笑を浮べた。

ボスが果して純子であるかどうかを確かめたい次郎は、解散すると自分のコーポラスに急いだ。

ベッドですやすやと平静な寝息をたてている純子を見ると、彼の考えていたボスは純子であるという気持がぐらつきそうになった。

責めと愛撫の繰返される毎日が相変らず続

いた。次郎の興奮は、そのどちらの場合にも一層激しくなっていた。だが食事を用意する田崎たち二人は、よく訓練された兵隊の様に決して馴れ馴れしい親しみを表面に現わさず、始めの時と同じように無表情であった。

五六日ごとに彼等は強盗に出かけた。適切な指示を与えるボスと田崎のため、全く足どりを捉まれるようなことはなかった。殆どの場合に、彼等が盗むものは、現金であり、そうでなくても足のつきにくい宝石の原石であるとか、貴金属の地金などに限られていた。

何度目であったか、大きな質屋の老舗を襲った。主人は質商組合の役員で、全国大会に出かけた留守を襲われたのだ。嚴重な戸締りも、彼等の前には無力であった。五十に近い女房と、二人の娘が縛り上げられて居間に連れてこられた。大学に通っている息子は、縛られた上、麻酔薬の注射を打たれた。女中も同様であった。しどけない寝衣のまま縛られて震えおののく女房と娘を前にボスは例のかん高い声で尋ねた。

「おい、金はどこだ。皆だせ」

女房は震えながら箆笥の開きをあげれば手提げ金庫が入っていることを教えた。

眼だけを見せたボスが、太った女房の顎に

手をかけて引き上げた。

「え、おい。たった五六万のこんなはした金じゃねえだろう。本物の金庫はどこだい。かくしとおおせるところと思ったら、大まちがいだぜ」急に口をつぐんだ女房の髪をつかんで、ぐいぐいと振りまわしたボスは続けた。

「おめえのうちにや、これっぽちの金しかねえとはいわせねえぜ。それに、代々伝わる純金の大黒様があるってことは、ちゃんと知ってるんだぜ。大判や小判もうなってるそうだな。え、おう。そんなにしぶとくすると、あとがこわいぞ」

「ツ、ツ、通帳や、カ、株券も、そ、その手提げに入ってますから、どうぞそれで」

「何いってんだい。通帳なんて手が出せるかい。おい、体にきくん。娘のな」

ボスは次郎にめくばせした。

田崎は、女房のでっぷり太った体を、床柱に縛りつけた。年甲斐もなく紅い長じゅばんの寝衣の前がはだけてたんだ腹が現れた。だらりと乳房がたれ下り、黒ずんだ乳首が何か肉感的であった。

「これも邪魔だな。大年増の体も見ごたえがあるぜ。ふっふっふ」

腰を覆う布も除かれると、たるんではいる

がしみつない真白いすべすべした肌がすっかりあらわになった。若かった頃は、さぞすばらしい体であったであろう。

一方、次郎は姉娘の体に手をかけた。二十三四であろうか、純子を一回り大きくしたような伸び伸びと育った体から、大きな花模様のおすいネグリジェが裂き取られた。腰を覆いきれないような小さなパンティ一つにされて、後手のまま前かがみになったが、形のよい豊かな乳房は、とてもかくせなかった。

次郎の手は、恐怖に声も出せない妹の肩をつかんで前に引出した。目もとのぱっちりした妹娘は、父親似であろうか。お下げ髪で、高校生らしいまだ固い体をちぢめていた。

姉妹ともに全裸に剥かれ、身にまとうものは後手を背中深く縛る細引だけであった。二人ともいいあわせた様に、むっちり肉のついた腿を合わせ、前かがみにしゃがみ込む姿になった。

「おい、婆あ。三人とも同じ姿になったんだぞ。痛い目を見ねえうちに白状したらどうだい。え、いえねえんか。純金の大黒様はどこにしまっただるんだ」

目を閉じ、唇をわなわなと震わせながらも婿養子をとった家つき娘であった女房は答え

なかった。ふっくらした小皺のある頬に二度ばかり、ボスの白い小さい手が鳴った。

「ふん、強情はる気かい。お前はしぶといから娘に聞け。娘のひいひいわめく声を聞きやあ氣が変るだらうぜ。次郎、痛めつけてやれ。泣声をあげさせろ」

「やめて。二人とも何も知らないんです。やめて。ひどいことしないで下さい」

子を思う哀願に耳も傾けずボスは顎で命じた。次郎は女房の締めていた腰紐や、箆笥から探した何本もの紐を手にして、しゃがみ込んだ姉娘の柔くカールした髪をつかんで引倒した。

「あつ。真弓、やめて、許して下さい」

叫ぶ女房の声も耳に入らず、次郎は、恐らく純子であろうこのボスを喜ばせる事と、無抵抗な、伸び伸び育った体の娘を虐めめる期待にもえた。

尻をつき、両足をはね上げた姉娘、真弓の首に紐がまきついた。弛い輪にされた紐はそれだけでは首を締めなかった。しかしその紐が、今までは背中というより尻の上にあった後手を背中高く吊り上げ、更に交叉させられた足首を縛った別の紐が髪に結ばれ、引締められると、真弓の体は丸くなり、呻きが口か

ら洩れた。ねじ上げられた両手を自分から痛いほど、背中に高く上げていないと、首にかかった紐が咽喉を締める。腹に太腿がつくほど目の前で交叉した足首を高く上げないと、髪につながれた紐が頭を前に曲げて咽喉を締める。手足の力を抜くことが自分の呼吸を締めることになるので、真弓は肩が、腕が、腿が、脚がめりめりと音を立てるかと思うほどに力を込めた。汗が忽ち全身に吹き出し、もうあられない姿にされてしまった羞恥さえも忘れて、呻きをあげた。

「ううーむ。むー。あー。……」

それでも家に伝わる宝物の価値を充分に心得ているこの娘は、苦しい息の中から母親をばげました。そして苦しみに耐えかねて横倒しになる真弓の体を、次郎は興奮に紅潮しながら純子の手によって経験させられた辱しめの中心をさまざまに弄んだ。

虐なまれる真弓も苦しみ続けたが、見せつけられている女房と妹にもこの上ないいたぶりであった。床柱に後手に縛りつけられ、足首にまで細引のかかった全裸の女房は、きびしい縄目の中で、たるんだ腹を波うたせ、垂れ下った乳房を振りながら、大きく喚き続けた。目を外らそうとしても、苦しみ続ける真

弓から視線をそらせることはできなかった。

妹は、自分も全裸に剥かれてはいたが姉のあられもない姿と、その無抵抗な体に加えられるこの上もない辱しめに声も出なかった。

「マ、真弓。しっかりして、もう、もう、そんなひどい事をしないで。あ、あ、あー。もうよして」

「どうだい。婆あ。金のかくし場所はどこだい。早くいわねえと、娘は悶え死にするぜ。ふふふふ。もう一人の娘にも死ぬ目に合わせたいか。次郎、もっと責めてやるんだ」

「も、もう止めて、いう、いう、いいいます。いうから早くほめてやって下さい。早く」

遂に、妹の体に田崎の手がかかったとき、母親は屈伏した。

「どこだい。早くいえ。婆あ」

「そ、その、掛軸の、裏です。わあっ。早く、早くほめてやって」

ボスの目くばせで、田崎が、床の壁の掛軸を引剥がした。はめ込みの金庫が現れた。と殆んど同時に苦しい姿勢で、あくない辱しめのいたぶりを受けていた真弓が短い呻きと共に失神した。首縄と、足首を吊り上げた紐が解かれても、だらりと仰向けに荒い呼吸を続けながら、真弓の体は、手と足を縛られた

まま横たわっていた。流れる汗で、しっとりときれいな肌が輝いていた。

金庫が開かれると、中には燦然と輝く純金の黒様が、一面に輝く大判小判の上に乗っていた。

「ほう。立派なもんだ。まあ惜しいけど潰してしまふからな。どうだい、この輝きは。ふっふっふ」

小判を振り合せ、リーンとなる金特有の澄んだ音を楽しみながら、ボスは覆面の中の眼を細めた。

「婆さん。こいつは頂きだ。立派なもんだぜ。その代りに一つ余興を見せてやるよ。田崎、次郎、あの二人を引きずって来な」

上の妹が、これほどまで苦しめられ辱められて遂に失神した事も、勿論知らずに、こんこんと眠らせ続けられている長男と、女中が居間に運び込まれた。母親に似て顔立ちのすらっとした長男からも、田舎から出て来た横に広い顔の真中に上向いた鼻と、その下のお厚い唇をぶざまに開いたこの不細工な女中からも寝衣がはぎとられた。力なくだらりとなった二人の体を重ねて、抱き合った形に縛り上げて田崎は笑った。

「ボス、御兩人きつと良い夢を見てまっせ。

はははは」

「どうだい。婆さん、面白えじゃねえか。次郎、ついでに、そっちの二人にも楽しませてやれよ。ふっふっふ」

大きな声を立てて、必死にあらがう妹も、男の暴力にはかなわなかった。失神している姉の上に重ねられて、縛られると、只体を悶えるだけであった。涙がはらはらと姉の顔に落ちた。

居間を立去る時に見た光景は、次郎の網膜に焼きつけられた。床柱を背負って縛られた真白い、太った女房が、落ちる涙もふけないで、大声で泣いている目の前に、二つからみ合った体が転がっている。

この光景は、その後襲った閉店後のキャバレーでも、超一流といわれた洋裁店でも繰返された。

麻酔から覚め、意識をとりもどした後でどうなったかは、勿論新聞などには出なかったが、或はこの二人の運命が大きく変ったかも知れなかった。

ボスの命令でもないのに、こうした事を好んで行なう次郎は、背後にボスの笑いを含んだ、しかし何か嫉妬めいた眼の光りがあったのに気がつかなかった。

或る夜、純子は次郎を一番奥の部屋へ連れていった。ここは板張りの床で、いつも次郎の責めに使われている。次郎は自分から衣服を脱ぎ捨てた。狭い背の高い箱が部屋の中央に置かれていた。

「次郎、この上に仰向けに寝るのよ。ひっくり返さないでね」

「そうそう。うまく乗ったわね。手を上に上げて。もっと伸して」

細い箱の上に仰向けに寝た次郎の手と足が太い綱できっちり縛られた。綱が両方の壁についている太い鉄の環に通される。

こうして俎の鯉のようになった次郎を残して、純子は例の乗馬服に着かえに行った。次郎はここ数日、特に強くなってきた、純子を本当にボスと呼びたい気持ちを、じっとこらえてきた。今日こそ実行しよう。と心をはげました。

拍車の音が近づいた。純子は物をいわずにいきなり拍車のついた革長靴で次郎の乗った狭い箱を蹴倒した。

「むう。うう」

手足を両方の壁に吊られて、ハンモックのように垂れ下った次郎の体は純子の膝の高さで、ぶらぶら振れている。手足が抜けそうな痛さで、思わず呻きがでる。今迄何十日も責め続けられて、きびしい責めにも慣れている筈の次郎も、自分の体重がこんな風に働くとは想像できなかった。もう何回も手だけで、或は足だけで天井から吊られても、これほど痛くはなかった。これは当然である。

「ふっふっふ。次郎、耐えられて。普通の吊りより、ちょっとだけきついんだけど」

例えば鉄棒にぶら下がる時、両手を広く開けば、自分の体重が非常に重くかかってくるのと同じである。

頭をだらりと下に下げて、肩や肘や股にかかる何倍もの重さを歯をくいしばってこらえる次郎の額から汗がにじみ始めた。手首と足首を縛る綱が強く締めまり、手と足が真白に貧血してくる。

苦しみながらも、次郎はいつも味わうこの上ない喜びにひたった。しかしその快感も、

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

純子の足が腹に乗り、少し体重をかけると、何倍もの重みになって、本当に手足がちぎれそうな痛みに押し潰された。

「ううっ。おー。うわっ」

「ふっふっふ。次郎、お前がこんなに喚くのは久しぶりだね。もっとお叫び。ほれ」

「イ、イー、うわっ」

この苦しみはそんなに長くなかった。しかし、次郎にはこの上なく長く感じられた。

蒼白になった次郎の様子を見て、純子は足首をつなぐ綱を切った。ドタリと床に落ちた次郎の手足はほどかれたが、抜けるような痛みと痺れで、動かすことはできなかった。

ガウンに着かえた純子の香り高い液体が、次郎の顔を濡らした。その時、次郎は弱々しい声で呼びかけた。

「ボス。ボスの為なら僕は何でもします」

純子は冷い微笑を浮かべながら、手を上にあげたまま横たわる次郎の顔をスリッパで二三度なぶりながらつぶやいた。

「ふっふっふ。ようやく気がついたのね」

翌日、ソファに腰をかけながら、形のよい足に唇を寄せる次郎に、快い唇づけをさせながら、純子は新しい命令を下した。

「次郎、あと一時間したら、例の所へお行

き。もうボスが私だって知ってるんだから、鍵はいいだろう。さあ、いつもの服を着て行くんだよ」

何時もは必ず田崎が早く来ている。だが今日は誰も居ない。がらんとした殺風景な空室で何時間待ったろうか。もう次郎はすっかり純子——ボスを信頼していた。そして純子が喜ぶことならば何でも自分からすすんで行った。奪う金額や、貴重品は念頭になかった。事実、彼は何も分け前を貰ったことはなかった。ただひたすらに純子の責めと愛撫だけを求めた。彼の知っているのは、ボスが純子という女であり、田崎と下田という輩下の姓だけで、純子の姓も、素性も、田崎らの事柄も何一つ教えられず、また知ろうともしなかった。

今日はもう二時間余り待ちぼうけを喰わされてしまった。少しおかしいと思い、純子の待つであろう、コーポラスの「自分たちの部屋」へと帰った。と、ドアは開かれていた。思わず、「ボス」と叫んで中へ一歩踏み入れてスイッチを押した。

「あっ。これは」

ドアの表には、まぎれもなく二二一と室番号が入っている。

厚い絨毯も、どっしりした家具類も、なつかしい豪華なベッドも、何もかもなくなっている。呆然と冷い床に坐り込んだ次郎は、口の中で何か聞きとれない言葉を、ぶつぶつと繰返していた。

その二日後に、町はずれに近い小さな洋装店にしのび込んだ次郎は、若い娘たちに取押えられた。母娘二人暮しであろうと油断した次郎は、うす汚れた黒づくめの服で、ナイフを持って押入った。当然寝込んでいると思ったこの時刻に、試験準備中の従姉妹が居たのを知らなかった。寝込んでいた母親を縛り上げ、娘を脅して後手を縛ろうとした次郎は、後から頭を揺り木で、したたか殴られて、一瞬よろめいた足を払われ、二人の娘にのしかかられてしまった。ぴちぴちした体が胸にのしかかると、次郎はぐったりと力を抜いた。純子に味あわされた陶酔を感じたのだ。逆に縛られて二人の娘の会話を聞きながら純子のことを想った。

「悦ちゃん、弱い強盗だね」

「こわかったわ。でもよかったわね。正子さん、一一〇番に電話するわ。でもこの人、ハンサムだね」

この二人には次郎のつぶやきは聞えなかった

た。

「ボス、純子さん」

（今昔物語 卷廿九、第三、人に知られざる
女盗人のものがたり）

二、新妻受難の話

酷道と云われる、この二級国道一七五号線は、未舗装で洗濯板と悪口を云われるほど凹凸がはげしく車が通る度にもうもうと土埃が上る。一車線半の狭い凹凸道を濃いブルーのクラウンデラックスが四輪独立懸架の車をはね上げながらクッションをきかせて北へまっしぐらに進んでいた。ボディの色も埃で白っぽくなっていて。

津島健三は半年前に結婚した頼子と始めての里帰りをドライブとしゃれこんだ。会社から三日の休暇をとって頼子の実家、宮津の一流旅館へ遊びに出かけたのだ。大阪を朝出発し、池田、宝塚、三田を経て福知山までは、車の往来もはげしかったが、快晴の秋空の下を、運転歴一年の健三にとってもそう苦痛ではなく、肌のきれいな、はっきりした顔立ちの頼子を横に、得意の表情さえ浮べて、山や村を飛ばしてきた。結婚前から美しかった妻

の頼子はこの所すっかり新妻らしく、なまめかしささえ加わって来た。旧家であり経済的にもめぐまれた頼子の実家からは、結婚前から多くの援助を受けてきただけに、苦学しながら得た学歴だけがとりえの健三は何かひきめを感じ、むしろ鄭重に妻を扱ってきた。

福知山を出て、一七五号線に入ると、全く国道とは云えない悪路であった。

「あなた。もう四、五キロで大江町よ。そこから左に折れて府道に入った方が近道よ。まっすぐに宮津へ帰れるわ」

「そうだね。こんな悪い道じゃ国道だって府道だって同じだからね。何キロ位だい」

「二十三・八キロって書いてあるね」

「それじゃ、まあ一時間って所かな、ゆっくり行っても、三時には着けるね」

クラウンデラックスは、大江町から府道に入った。道の悪さは同じ程度であるが由良川沿いに下っていた道から離れて上りが多くなつた道で、所々はギヤをセカンドに入れてふかさねばならなかった。

何キロか田舎道のドライブが続いた。ガクガクと急にハンドルを右にとられて、健三は無意識にハンドルを左に切ると、ブレーキを強く踏んだ。

「ちえっ。パンクだよ。弱ったな」

「早く直してよ。手伝うわ」

パンクしたまま車を左の路肩の草むらに乘入れる。健三はまだタイヤ交換をしたことはなかった。バンパージャッキで右前輪をあげる。ハブキャップを外す。ここまではよかった。機械に弱い健三は、教習所では習った筈であったが右側の車を固定するボルトが左ネジである事を忘れていた。

「頼子、ねじが外れないんだ」

「困ったわ。あなた、何とかして直してよ」

あいにくとトラックも通らない。たまに通っても土埃をあげて走り去ってしまう。

一時間も待ったであろうか。キャラバンシューズをはき、大きなリュックサックを背負ったがっしりした若い男が一步一步踏みしめてゆるい坂道を登って来た。工具を出しっ放しにして休んでいる二人に声をかけた。

「どうしたんですか」

「パンクしちゃって、直せないんで困ってます。何とかありませんか」

「パンクですか。スペアはあるんですね」
リュックを下すと、道端の大きな石を運んで車止めにした。その男の手にかかると、まるでたあいもなかった。正味十分もかからず

に、ハブキャップがパチンと押込まれてしま
った。

「なあんだ、左ねじだったのか。そう云えば
聞いた事はあったな」

「あなた、しっかりしてよ。安心して乗れな
いわ」

どうにもならない所を助けられ、丁寧に礼
を云う二人を交互に見わたしたその男の視線
が、この所めっきり丸みを大きくした頼子の
体に注がれた。

「どうです。宮津まで行きますが、乗って下
さい。さあ、御礼のつもりです」

「じゃあ、途中まで乗せて頂きますか。僕は
大江山に登るんです。あそこには一寸した岩
場がありましてね。練習です」

頼子は後の席の男を無視して、健三にしな
だれかかり、甘い会話を続けた。第三者が居
るだけに、却って刺戟させられた。

リュックにもたれて居眠りをしていたと思
った男がナイフを健三の首筋につきつけた。

「おい、次の角を左に曲れ。大人しくしない
と、これだぞ」

「あっ。そんな、危いよ。止めてくれ」

「まあ。や、止めて」

二人の驚きをよそに、男は鋭いナイフの刃

で健三の頬をびたびたと叩きながら云った。

「黙って俺の云うことを聞け。昼間からいち
やつきやがって、このトーシローめ」

道は急に狭くなり、左右両輪とも路肩を踏
んでいる。男の命ずるままに、健三は道の傍
の木立の間に乗り入れた。はげしく傾く車
の中で、倒れそうになって自分からナイフにす
りつけて、頬を切りそうになって健三は、ブ
レーキを踏んだ。

「おい、出る。女もだ。こっちへ来い」

いち早くドアから出た男は、健三にナイフ
をつきつけながら頼子を呼んだ。

「手を後にまわせ。おい女、亭主か情人^{いろ}か知
らねえが、これで縛るんだ。逃げたりすると
この男の命はねえからな。大人しくしてりゃ
命まで貰おうなんて云わねえからな。早くし
ねえか」

がちがちと恐怖に歯を鳴らしながら男の目
の色を見ると逆らえない。頼子は、黒いエナ
メルのハイヒールで落葉を踏みながら投げら
れた太いザイルを手にした。

「足も縛っとけ」

「ど、どうか、許して、何でもあげますから
悪、悪いことしないで、お願い」

「何もこわがることはないぜ。お前を喜ばす

ただだから。物を取ったり殺したりはしねえ
からな」

健三は手と足を縛られながら少し希望が湧
いた。頼子のかけた縄目は弛かったからだ。
すぐに自分ではどけると思ったが、男の手は
素早かった。今一本のザイルをねじ上げた頼
子の手首にかけると胸にまで二巻して、堅い
結び目を頼子の背の真中に作った。頼子を草
の中に押し倒すと、健三の傍に立った。

「何でえ、この縛り方は。ぐずぐずじゃねえ
か。これじゃ危くって。ふふふ」

太い樹を背負って縛られた健三は、もう身
動きもできなかった。かっ^と血ののぼった頬
を引きつらせた。

「おい、この道はな、山仕事に入る百姓か、
獵師だけしか通らねえんだ。大きい声を出し
たって、聞いてくれる人は居ねえんだ。ふふ
ふふ。それに、云うことが聞けなけりゃ、こ
れが、お前のきれいな顔を、めっちゃめच्याに
するぜ。え」

ぱっちりした目を見開きながら、口もきけ
ない頼子のスカートに手がかかったとき、

「いや。やめて、それだけは許して、私は
この人の妻ですわ。それだけは許して」

声を押えながらも必死に、縛られた身を悶

えて許しを請うた。

「ふふふ。いやだ、いやだと云うのに、無理にやったんじゃ、面白くねえ。抱いてって自分で云わせてえよ」

後手と胸に縄をかけられただけの頼子の体を押えつけて、ベージュがかった明るい色の上等なスカートが剥ぎとられ、下着を上にもまくり上げられ、レースの縁どりをした可愛いパンティも取られてしまう。エナメル靴が片方ずつ木の茂みに抛り込まれる。シームレスのストッキングが、呻きをあげる口に噛まされ、猿ぐつわに変わった。

「どうだい、すがすがしい気持がするだろ。」

青天井で、素っ裸になると気持がええぞ」

むき出しになった下半身は、もう覆うことはできない。後手を解いて、上衣の袖を抜きストラップを引きちぎってスリッパが引降され、ブラジャーが外されるまでに時間はかからなかった。ウエストがくびれて、それにちなむバストとヒップのふくらみを一層強調している頼子の白磁の肌に再び汚れたザイルがからみついた。ピンクの乳首を中心に置いて、たわたわと揺れる乳房の上下に呼吸も苦しいほど強くザイルがまわされた。

頼子の「許して、やめて、ほどいて……」

という願いもストッキングの猿ぐつわに殺されて健三にも男にも呻きとしか聞えなかった。

「ええ体じゃねえか、どうだい。俺を抱く気になったかい。ふふふ。まだか。まあゆっくりそうしていな」

いやいやするように、首を振る頼子の両足を別々にザイルの中央部に縛った男は、ザイルの一端をあちらの太い松に結んだ。もう一方の端をこちらの丁度おあつらえむきな根っ子をまわし、力をこめて引きしぼった。

「むむむむ」

力一杯こらえている頼子の足は一米ばかりの間隔に開かれ、もう膝を曲げることさえ苦痛を感じる。頼子は閉じた目から涙を流しながら呻き続けた。

そうされながらも、自分の云うことを聞かない頼子に、男は怒った。

「ようし、そんなに俺がいやなら、もういいぞ。体を痛めつけられても文句は云うな。しぶとい女め」

男が藪の中に踏み込んで、消えたあと、健三は、自分の眼の前二米ばかりの所に、あられもない姿を木洩れ陽に曝して呻き悶える白く輝く妻の体に息をのんだように、視線を集中させた。結婚以来何カ月か、もうすべてを

知りつくしたと思っていた頼子の体がこんなに美しく、かぐわしいものであったのかと、新しい美を、閉じた眼から涙を流しながら呻き続ける妻の体に見出して、励ましの、慰めの言葉を送るのも忘れて太い樹に縛りつけられたまま、白く輝くものを凝視していた。たとえ縛られた縄を解かれても、そのまま立ちすくんでいたであろう。

後手を高く背の中央に縛られ、余ったザイルでふっくらと片手では覆いきれないほど大きな形のよい乳房の上下を綱が肌に喰い込むほどきつく締めつけられてあえぐ頼子の体は仰向けに、陽光を受けている。上をむいた乳首のピンクが、陽をうけてまるで紅をさした様に白い肌にアクセントをつけている。細くくびれたウエストの中心に深い陰影を作る脇の凹みが、斜めに光を浴びてそよいでいるうぶ毛の動きを印象づけている。一米ばかり間をおいて、ザイルで引き開かれたすんなりと延びた脚が太さをまして大きなヒップに車がるそのなめらかな曲線のあたり、濃い蔭に健三の視線は止まっている。

やや厚めの唇を割って噛まされたストッキングを奥歯で噛みながら呻く頼子は、苦しさよりも、辱かしさで目を開くことができなかった

った。つんと上向いた鼻につながる額に深い縦じわを二本刻んで、閉じた眼尻から流れた涙が、オパールイヤリングを飾った耳の方に玉になって落ちてゐる。

茂みをかきわけて男が戻って来た。

「まず痛みの方からゆくぞ」

やや茶色がかった大きな栗のいがが、うすく汗ばんだ胸の谷間に置かれた。

「むつ、むつ、うー」

呻きが大きくなる。何十本もの鋭いいがの針が、柔い肌を刺し、痛みにもだえる体の動きでころころと転がっていく。

「おい、いがの滑り台だ。何度でも転がしてやるぜ。早く俺に抱かれないって云えよ。ふふふふ」

いがのとげに刺された肌が、点々と赤く血をにじませる。何時までも苦しみながら横に首を振る頼子を眺める目つきが次第にあやしくなる。

「お前は痛めには強いらしいな。だが、今度はこちらだ。おい見ろ」

男は小枝でひょいとしゃくり上げて、頼子の顔の前にグロテスクな大きなテグス蚕の毛虫をつきつけた。

頼子は張り裂けんばかりに大きく目を見開

いて、枝の先の毛虫を見た、全身に鳥肌が立ち、呻きが一瞬止った。

臍の上に乗せられた毛虫が、もぞもぞと上の方に昇ってくる動きに頼子は声を殺されながらも叫び、鳥肌の立った縛られた体をせい一杯揺り動かしながら悶えた。

「……きゃっ。や、やめて。こわい。それだけは。ああ。取って、何でも聞くから、虫を落して」

いくら身を悶えても吸盤のついた腹足を動かして毛虫は、落ちるところか、動きを早めて腹から胸へ上ってくる。毛虫が揺れ動く乳房に昇りはじめたとき、男は頼子の恐怖にゆがんだ顔がうなずくのを見た。

「ふふふ。いい気持だろう。云うことを聞く気になったらしいな。そうかい。はっきり云って貰おう」

もぞもぞとうごめく毛虫を、そのままにして、猿ぐつわのストッキングが外された。

「お、お願い、虫を取って、早く、早く」

「まあせくなよ。その前に俺の云うことを聞くなって云わなきゃだめだ。俺に抱かれてえってな」

「は、早く。何でもしますから、あ、あ。虫をとって。云うことを聞きます。早く」

汗に濡れた肌からばいと毛虫が取り除けられた。毛虫の行方を、恐怖の目で見送った頼子の全身から力が抜けた。

「おい、悪く思うなよ。女が俺を抱きてえって云ってるぜ」

頼子の苦しみを、恐怖をただ呆然と見ている健三へ捨てぜりふが投げられる。

あきらめて、男のなすがままにまかせた頼子も、いつか健三の存在を忘れた。

背に落葉を何枚かけ、乱れた髪をかき上げようとせずに横ずわりになった放心の頼子と、口をあけて腑抜けの様な顔をしている健三に男は云った。

「あと二軒も行きやあ、車は行けなくなるからな。その辺に置いとくぜ。取りにくるんだな。谷に落ちない様にしなよ。おい女、満足したろうな。ふふふ」

頼子は車が青白い排気を残して行ったときわあっと、両手で顔を覆って泣き伏した。手首の縄の跡が痛々しかった。

しわになったスーツを着けて、うらみのこもった顔で健三の縄を解きにかかったのは一時間近くもあとであった。捨て縄に使う古びたザイルは仲々解けなかった。

縄を解かれ、へたへたと座り込んだ健三へ

あびせられた頼子の言葉は、意外なことに痛烈であった。ぽかんと口をあけて、呆然としている健三の表情には、才能があるとか、切れると云われる会社で引き締った表情は、かけらもなかった。

「あなたって、情ないわね。私があんなにいじめられているのに、何一つ助けられなかったわ。せめて、口でも何か云ってくれればいいのに。これからが思いやられるわ。妻の危険を助けられないなんて、こんないくじなしとは思っても見なかったわ。もうあなたなんか、きらいよ」

「僕、車とってくる。待っててくれよ。な」
弱々しく立上って、目を伏せたままよろよると健三は道の方へ歩いていった。
縛られた妻の体の美しさと、縛られた夫の無力さのどちらがそれからのこの夫婦の間を支配したかは、筆者の知らないことである。
(今昔物語、巻廿九、第廿三、妻を具して丹波国に行く男、大江山に於いて縛らるるものがたり)

あとがき

今昔物語にアイデアを求めたこの二つの短編の次に、巻廿九、第廿八、「清水の南の辺

に住む乞食、女をもって人を謀り入れて殺すものがたり」をテーマに、書きはじめてペンが止った。決して四月頃からの多忙がぶりかえしたわけではない。この表現は自分でも、まえに使った、あれで見た、要するに新しさが無い。更にここはいかにもまわりくどい、簡単すぎて物にならない、自分のものになっていない。自分の書いたものの悪い点だけが目につく。(良い点なんてあるのか)才能がない。(わかり切ったこと。始めからそうだし。読むだけにしておけ。と自分の気持が叫ぶ。

【最新版】 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13寸)焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K1	全裸刺青自慢緊縛 (山原)
K2	恍惚たる責の境地 (山原)
K3	苦悶の表情海老責 (大塚)
K4	海老責にあえぐ女 (大塚)
K5	全裸のぐるぐる巻 (玉田)

K6	豊満な臀部を晒す (刑部)
K7	厳しき縛りに酔う (山原)
K8	荒縄で仕置される (美木)
K9	土壇に観念した女 (美木)
K10	ムチ打たれる女囚 (美木)
K11	縛り人形を眺める (山原)
K12	開孔器で鼻を弄ぶ (山原)
K13	足首と首を連繫す (大塚)
K14	後手の複雑な縛り (玉田)
K15	裸縛りに恥らう女 (山原)
K16	夫にされる鼻責め (増田)
K17	緊縛にあう若妻姿 (増田)
K18	猿轡で鼻を虐める (増田)

K19	開股縛にあう女囚 (美木)
K20	罪状を訊かれる女 (美木)
K21	股間縛りの全裸像 (山原)
K22	荷造り縛りで晒す (玉田)
K23	革拘束衣で括らる (大塚)
K24	庭木に立縛りなる (木村)
K25	柱に晒される裸身 (玉田)
K26	セーラー服しばり (大塚)
K27	高手小手首縄緊縛 (山原)
K28	黒縄豊満刺青縛り (山原)
K29	踏みにじられた女 (山原)
K30	古墳にて吊り準備 (木村)
K31	拷問にあう裸女賊 (山原)
K32	ロープブラジャー (山原)
K33	厳重な後手縛猿轡 (刑部)
K34	エビ縛りにあう女 (木村)

K35	イルリのある風景 (大塚)
K36	麗しき裸身を晒す (大塚)
K37	亀甲縛り正面裸像 (刑部)
K38	豊満乳房縛り上げ (山原)
K39	全裸を投げだして (山原)
K40	縛しめに哭く乙女 (木村)
K41	エビ責め放置十分 (木村)
K42	豊かな全裸を緊縛 (玉田)
K43	観念アグラ縛り囚 (玉田)
K44	笑顔を縛る強烈さ (刑部)
K45	猿轡の下にあえぐ (刑部)
K46	縛りに典子の素顔 (刑部)
K47	伸びやかな裸縛り (刑部)
K48	エビ縛り刺青姐御 (山原)
K49	立木より逆さ吊り (木村)
K50	裸身の緊縛と羞恥 (玉田)

連載小説

はなとへび

花^{はな}

と

蛇^{へび}

団

鬼

六

続編(第二十二回)

嵐に立つ令嬢

大声で流行歌を唄い合い、酔った足をからませるようにし合いながら、義子、マリ、悦子の三人は、地下室に通ずる階段を降りていく。

「お嬢さん、お嬢さんは、いらっしゃいますかね」

「小夜子さん、いよいよ調教のお時間となりましたわよ」

三人のズベ公達は、キャッキョウ笑いながら、薄暗い牢舎に眼をこらすのだった。

狭い、微くさい牢舎の中、荒むしろの上にあぐら縛りにされたまま、放置されている小夜子は、手足の感覚も麻痺し、意識すら、朦朧となりかけていたが、牢格子の間から、のぞきこむズベ公の気配に、はっと全身、針のように緊張させるのだった。

義子は、錠前を外し、仲間と一緒に狭い牢舎の中へ、もぐりこんでくる。

「フッフ、ごめんなさいね。長い間、ほっといちゃって。もっと早く調教するべきだったんだけど、色々と忙がしくてね」

義子は、酒くさい息を吐きながら、小夜子の横へ腰をかがめるのだった。

猿轡の布で鼻まで覆われている小夜子は、泣き出す一歩手前のような美しい眼を義子の方へ向け、哀願するような気弱にまたたきをする。

「さすがに大家のお嬢さんだけあって、きれいな肌をしているわね。透き通るようじゃないの」

マリも悦子も、小夜子の傍へ身を低ませて雪白の美肌をしげしげと見つめるのである。

ウェーブのかかった柔かそうな黒髪は、ふさふさと耳を覆い、憂いに満ちた睫毛の長い美しい瞳——そんな温雅の令嬢をじっと見つめていると、さすがのズベ公達も、この天然

真珠のような輝きをもった美しい処女に静子夫人や京子の如く、醜悪無残な調教を加える事は、何とも痛ましい気がするものであった。

だが、今更、そんな憐憫をもつ事は、自分らしくもないと、義子は、口笛などふいて、小夜子の猿轡を外してやり、

「もう覚悟は出来てるわね、お嬢さん。貴女の弟さんは美津子嬢とびったり呼吸を合わして毎日調教を受けているのよ。貴女も弟に負けないよう、これからがんばってもらわなきゃあね」

義子は、そういつて笑い、猿轡を外し、あぐら縛りにされている小夜子の足縄を解いてやるのだった。

両足が自由になると、小夜子は、本能的に肢をちぢませ、身を前のめりにかがませようとする。そして、甘い香料の匂いを首を振って散らしつつ、必死になって、哀願するのだった。

「お願いです。お金なら、パパに頼んで、いくらでも出して頂きます。もう一度、パパの所へ電話させて下さい！」

ズベ公達は、顔を見合わせ、眉をすくめて笑い合うのだった。

「馬鹿ね。あんた、まだそんな事をいつてん

の。私達は、一度、失敗した事は二度とくりかえさないって主義よ。貴女の身代金をとることはあきらめたわよ」

と義子がいうと、悦子が煙草を口にしながら、そのかわり、と含み笑うのだ。

「お嬢さんのその美しい身体で、あたい達があんたのパパに要求しただけのものは稼ぎ出して頂くわ」

つづいて、マリが、ガムをペツと吐き出して

「お嬢さんも、社長や親分の前で、誓約書を書いたの忘れちゃいないでしょうね。貴女はもう森田組の完全な商品なのよ。よけいな事は心配しないで、立派なスターになってくれりゃ、それでいいわけさ」

望みを断ち切られ、がっくり首を垂れて、すすりあげ出した小夜子を、ズベ公三人は、小気味よさそうに、しばらく眺めていたが、やがて、互に眼で合図し合い、小夜子の両腕をかたく縛り上げている縄を解き出すのであった。

「手がしびれそうなんですよ。少し、休ませてあげるわ」

両手両足が自由になっても、恐しさと羞しさに変りはない。こうしたズベ公の間をかい

くぐって逃走を計るような気力とてない小夜子であった。

自由になった両手で、白桃のような柔かい乳房を抱きしめ、その場にエビのように身体を曲げ、号泣する小夜子である。

そんな小夜子を見下しながら、ズベ公達はこの新鮮な美しさをもつ大家の令嬢を、まずどういう順序で、調教するか楽しそうに話し合うのであった。

義子も悦子もマリも、調教室で銀子と朱美が静子夫人を仕込みあげ始めたのを見物し、手伝いもしていたのであるが、

「あんた達、閑なら、小夜子を調教してよ。遊んでばかりいたって仕様がないう。少しは森田組の仕事に協力しな」

と、首領格の銀子にいわれて、三人連れ立って、やってきたわけだ。

「どうも、あたいは、銀子姐さんみたいに、ガツガツ女を責めるってのは苦手だからね。教養が邪魔するんだよ」

と、義子がいったので、悦子もマリも声をたてて笑った。

「ま、ここで、うだうだいつてたって始まらないよ。一応、このお嬢さんも調教室へ連れて行こうじゃないの」



「そうね」

と、ズベ公三人は、泣きくずれている小夜子の周りに再び、身をかかめる。

「さ、お嬢さん。調教室へ御案内しますわ。お立ち遊ばせ」

マリは、小夜子の陶器のように白い肩を指でつつく。

「お願いします。許して、許して下さい」

小夜子は、床に顔を埋めるようにして、一層、激しく泣きじゃくるのだった。

「何いってんのよ。まだ、ろくな調教も受けちゃいないくせに。さ、立ったり、立ったり」

マリと悦子は、両側から、小夜子のすらりとした白い艶やかな両腕をかいこむようにして、立上らせようとする。

「待って、待って下さい！」

小夜子は、上体を上へ起されようとして、必死に首を振り、美しい顔をひきつらせて叫ぶのだった。

「あんまり手間をとらずと、ただじゃおかないわよ」

義子が、いささか頭にきたという顔つきで小夜子の耳たびをつねりあげる。

悲鳴をあげながら、それでも、必死になっ

て、小夜子は尻ごみするのであった。

調教とは、一体、どういう意味の事なのか小夜子にわかる筈はなかったが、何か、淫靡で残忍な事だという事は、処女の直感でわかるのであろう。

「お立ちったら！」

悦子がヒステリックな声をはりあげて、小夜子の蠟のように白い背を足蹴にした。

「御生です。何か、何か着るものを——」

小夜子は、三人のズベ公に、ようやく、引きずられるようにして立上ったが、歩きな、と肩を押すマリの顔に、哀切的な眼をしばたかせていうのであった。

「せいたくいうんじゃないよ。誓約書にサインしたのを忘れたのかい」

「許可なしで、身体に布切をつける事は、出来ないんだよ。勝手な事すると、あたい達が親分に叱られるんだからね」

「大の男達がさ、涎を流して喜ぶだけのきれいな身体をしてるんじゃないか。何も隠す事はないさ」

ズベ公達は、口々に、そんな事をいいながら、立上らせた小夜子の美しい身体に見とれるのであった。

華麗な花園の中で、月の光りと白露に育ま

れた白い汚れを知らない、花のような美しさを持つ小夜子は、この薄暗い牢舎の中でも、そこだけが光波に包まれているような宝石の輝きを持っている。

この生きた新鮮な美しさを持つ令嬢が、今後、鬼源や川田達の徹底した調教の前に、如何に悶え、そして、屈服し、どのように女の美しさが変化するか、ふと、楽しみになってくるマリや悦子であった。

「さ、行くのよ」

再び、ズベ公に背を押された小夜子は、身も世もあらず身体を前かがみにし、ふっくらした両乳房と前を各々片手で押さえながら、ズベ公三人に囲まれるようにして、静かに歩き出すのである。

「フッフ、可愛いおヒップね。塩をつけて噛ったら、さぞおいしい事と思うわ」

地下の階段を震えながら上っていく小夜子の尻を、うしろから押しあげるようにして、マリがくすくす笑うのだった。

美女対峙

調教室のドアを開け、義子達が小夜子を押しもつとすると。

「何よ、あんた達」

朱美が、静子夫人の尻の方から、汗だくになった顔をのぞかせて、頓狂な声を出した。

静子夫人に対する調教の真最中であつたらしく、立縛りにされている夫人の足もとを埋めつくしている見物人の田代や森田まで、官能の高ぶりにふと水をかけられた不愉快さで顔を歪め、

「調教中、だしぬけにドアを開けるんじゃない。一生懸命やっているスターの気が白けちゃうじゃねえか。気をつけろ」

と、どなるのであつた。

義子は、何かをごまかすように舌を出して笑い

「本番中なら、表に赤ランプをつける必要があるわね」

というと、馬鹿野郎、放送局じゃあるまいし、と見物人達も笑い出す。

「朱美、一寸、一服しようか」

夫人の前面に身をかがめていた銀子が、声をかけ、二人は、化学実験をしている女子学生のように真剣な眼差しで、静かに……き出す。

脂汗を美しい額に一杯浮かべている静子夫人は、艶めかしいうなじを大きくくねらせるようにし、真珠のような美しい歯並びを見せ

つつ、ゆるやかに尻をまわすのであつた。

切断されたものが、ポトリと夫人の足元に落下したが、途端に見物人達は、わっとどよめき、拍手する。

銀子は、立上ると、ハンカチを出し、夫人の額の汗をふきとってやる。

「じゃ、奥様、五分間、休憩しますわ」

「銀子さん」

静子夫人は、気弱なまたたきをして、汗をふく銀子を見た。

「私、とても疲れたわ。今日は、これまでにして頂けないかしら」

「あら、駄目よ」

銀子は、ぴしゃりと閉め出すようにいい、「奥様は約束したんでしょ。社長や親分の調教も受けるって。さっきから、お二人は、うずうずして、お待ち兼ねなのよ」

銀子は、そういつて、朱美に、静子夫人の乱れた髪を直すように命じ、調教室の入口あたりに小夜子を引きずりこんで来ている義子達の方へ行くのであつた。

「何よ、あんた達、小夜子を、ここへ連れ込んだの」

「うん。こういういい所のお嬢さんは、一体どういう風に調教していいかわからないんで

すよ。だから。一応、銀子姐さんか川田さんに相談してみようと思ってね」

義子は、そういつて、その場に、胸を抱くようにして、身をちじませてゐる小夜子に、あごをしゃくるのであった。

「それにしても。ここへ連れこんじゃいけないよ。静子夫人が調教されているのを見たら胆を潰して身体がコチコチになっちゃうよ。こういうおんば日傘で育った娘は、一度に怖い目に合わしちゃいけない。気長に仕込んでいかなきゃね」

などと銀子が講釈を始めたが、そこへ、川田がニヤニヤしながら近づいてくる。

「のんきな事をいっちゃいけないよ。他の連中と違って、この娘は、調教がおくれ過ぎてゐるんだ。だから、短期間にそれを取り戻さなきゃ駄目だ。五人の別嬪さんが、揃って、スタートラインに並べるようにしてやるってのが俺達の仕事だぜ」

成程ね、と銀子は川田の意見にはさからわなかった。

「じゃあ、あんたの知恵を借りようじゃないか。この御令嬢をまずどういう風に――」

「待ちな」

川田は、何か腹案があるらしく、銀子を手

招きして呼び、彼女の耳に口を寄せるのだった。

「うん。そりゃいい思いつきだよ」

銀子は、うなづいて、川田と一緒に、静子夫人のところへ行く。

床に身をちぢませ、すすりあげてゐる小夜子は、そっと首をあげて、銀子達の動きを泣き濡れた瞳で追った。ネチネチした無気味なムードが先程からこの部屋全体にたれこめてゐるのだ。部屋の隅に近いところで、美しい見事な肉体をした女性が、きびしく緊縛された身を一本の鎖につながれて、つま先立ちをしているようだが、それは、ぎっしり埋め尽す野卑な男女の見物人に隠れて、はっきりとはわからない。何か邪悪で、悲惨ないたづらをその女性は、受けているようでもあるが、それが、どういう事で、その哀れな女性が誰であるかも小夜子にはわからなかった。が、やがて、自分の運命も、あのようになるのではないかと、身が引きさかれるような思いになり、小夜子は、一層、身体をすくませて、声をあげて泣くのであった。

そんな小夜子の傍に近寄った悦子とマリは「ねえ、お嬢さん。あそこに立たされている美しい女の人に見覚えはない。遠山財閥の令

夫人、遠山静子女史よ」

えっと小夜子は、泣き濡れた瞳をあげた。そして、まさか、と思い、激しく首を振るのであった。

遠山静子夫人は、小夜子の父親の経営する宝石商会の大事な得意客でもあり、また、小夜子にとって静子夫人は、日本舞踊とお茶の師匠でもあった。父親がぜひにと、静子夫人に頼みこみ、弟子など持つのは嫌がる静子夫人であったが、父親に口説き落された形で、小夜子の花嫁修業を手伝う事になったのである。だから、小夜子にとっては、静子夫人は師匠であり、先生であった。小夜子が、ピアノのリサイタルをやった時など、夫人は、何百枚もの切符を引受けてくれただけではなく花束をもって応援にもかけつけてくれた。客席に、静子夫人が坐った時、その気高い美しさに圧倒され、開幕前であるのに、人々は静まり返ったほどである。

その静子夫人が、この地獄屋敷で捕われの身となっているとは、小夜子には信じられな。しかし、この屋敷へ連れ込まれてから、小夜子は、何度か、ズベ公ややくざ連中が、静子という名を口にした事を思い出した。もしか、という血走った気持になって、小

夜子は、かたく乳房を抱きしめながら、そつと顔をあげるのだった。

「あっ」

小夜子の美しい顔は、血の氣を失った。

まぎれもない静子夫人の瓜実顔が、立ったり、しゃがんだりしている男達の間から、ちらりと見えたのである。

上背があつて伸びやかな見事な肉体。まつ毛の長い切長の瞳は軽く閉ざしているが、まっすぐな柔かい鼻の線、花のような形の唇、雪をとかしたような色白の肌、まさしく、静子夫人であつた。だが、何という恐い事であらう。身には、一枚の布切れも——いや、それだけではない。その柔軟な美しい肉体は一本のロープで、きびしく後手に縛りあげられていたのではない。静子夫人を、このような姿にして、両手の自由までを奪い、一体、この屋敷に巣くう悪魔達は、何をたくらんでいたのか、勿論、小夜子には、想像も出来ないことであつたが、あまりの恐しさに、小夜子は小刻みに身体を震わせ、手で眼を覆うのであつた。

——一方、静子夫人の両側に立った川田と銀子は、先程から、しきりに難題を夫人に吹きかけていたのである。

「な、今、いったような要領でやってくれりゃいいんだ。何でもねえ事じゃねえか」

川田は、フフフ、と口を歪め、朱美の手で髪をすきあげられ、ローションを吹きかけられたりしている静子夫人を見ながら、いうのだった。

川田は、村瀬小夜子が、静子夫人について日本舞踊や茶の湯を習っていた事をふと思ひ出し、奇妙な事を考えついたのである。

つまり、それは、小夜子の師匠であつた静子夫人に、おびえきっている小夜子から恐怖心を取り除かせ、こういう世界で働くことが女として如何に楽しいものであるかという事の説得をさせる事なのだ。

「俺達が、ああだ、こうだ、とやかましくいうよりも、小夜子の先生であつた奥さんが、優しく説得してやってくれりゃ小夜子だってその氣になると思うんだ。何しろ、小夜子にとっちゃ、尊敬している先生のいう事だし、それに、実際に悦んで見せてやりゃ、なるほど、そんなもんかなと思うぜ。どうだい。やってくれるだろうな」

静子夫人は、川田から顔をそらせるようにして、眼を閉じ合合している。
「どうなんだよ。おい」

川田は、夫人のあごに手をかけ、ぐいと自分の方へ顔を向かせるのだった。

小夜子に、そんな説得をして、次には、自分が責めを要求し、小夜子の前で悦んで見せるなど、静子夫人は、川田の卑劣な着想に、涙が胸をついてこぼれそうになった。が、それを強く拒絶するだけの氣力もなくなっている夫人は、ただ眉を悲しげに寄せ、眼を固く閉じ合合せているだけなのである。

「黙っているところを見ると、不承知なんだな。それじゃ、こっちにも考えがあるぜ」

川田は、冷酷で残忍なものを眼の底に浮かべ、夫人の臍を指ではじくのがあった。

静子夫人は、眼を開き、悲しげな視線を川田にそそいだ。

今更、拒否したところで、どうなるものでもないという悲しいあきらめが夫人の表情に現れている。こうした地獄から逃れる術はないのなら、腰をすえてかからなければならぬといった決意の色も表情に現れていた。犬になつたら犬に、猫になつたら猫の生き方があるというような捨鉢な気分でもあつた。

「わかりましたわ、川田さん」

「よし、じゃ、やってくれるんだな」

静子夫人は、小さくうなずく。

川田は、入口にいる義子達に向かって声をかけた。

「おい、お嬢さんを、ここへ連れて来な。元遠山夫人が、ぜひ話をしたいといっけてらっしゃるんだ」

静子夫人は、小夜子が、この屋敷へ捕われているという事は知っていた。知っていたとて、自分に何が出来るってものではない。何とかして、この地獄屋敷から逃走してくれるよう心の中で祈っていたのである。それと、もう一つは、鬼源や川田に調教されているあられもない自分の姿だけは、小夜子の眼にさらしたくなかった。何時であつたか、遠山家の広大な庭の一隅に建つ茶室の中で、美しい振袖姿の小夜子と茶釜をはさんで対峙したすがすがしい朝の光景が、ふと、静子夫人の脳裡をかすめるのである。

このような、みじめな羞しい姿で、小夜子と対面するなど、果して、これは、この世の出来事であろうか。たまらない気持ちになって静子夫人は、身体を硬化させ、深く、うなだれてしまうのだ。

「何してんのよ。早くおいでったら」

マリと悦子に、両手をかいこまれるようにして、小夜子は、静子夫人の前へ引き出され

る。

「せ、先生！」

と、小夜子が静子夫人に向かって、叫んだので、ズベ公も、やくざ達も、わっと哄笑するのだった。

「そうかい。静子夫人は、このお嬢さんにとっちゃ先生だったんだな」

と田代が、胸も腰も、ハチ切れそうに肉づいている美しい人妻と、何から何まで細い柔かいウエーブで取囲まれているような体つきの令嬢を見くらべるようにして、ニタリと口元を歪めるのだった。

「そういえば、このお嬢さん、どこかで見た事があると思つたわ」

と、千代が乗り出してくる。

「そうだ。何とかいう宝石商のお嬢さんなのね。思い出したわよ」

千代は、一人でうなずきながら、田代や森田に、小夜子が静子夫人について、日本舞踊や茶などを習っていた事を説明するのであった。

「ここじゃ、そんな高級な事を教える必要はねえ。女として、もっと楽しい事を静子夫人は教えてあげようとおっしゃるんだ」

川田は、うきうきした調子で、二人の美女

を見くらべるようにしていう。そして、チンピラやくざに命じて、天井の梁にロープを結ばせるのだった。

静子夫人が立たされているすぐ前に、一本のロープが垂れ下がる。手をのばせば、とどきそうな、そんな距離に、小夜子も立たせて夫人に色々と語りかけさせるという川田の着想であつた。

「さ、お嬢さん、あんたも、前の先生のように、おとなしくお手々をうしろに廻して、縛って頂きな」

川田がそういうと同時に、麻縄を持って、待機していた悦子とマリが、乳房を抱いている小夜子の両手を強引にうしろへねじ曲げようとするのだ。

「やめてっ、嫌、嫌よ」

小夜子は、ズベ公達に取られた手を引き抜こうとし、必死に抵抗を始めるのだったが、「手間をとらすじゃねえ。少しは、前の先生に見習ったらどうだ。ちゃんと、先生は、見本を示して下さっているぜ」

森田は、そういつて、川田と二人、ズベ公達の仕事に協力するのだった。

「先生っ、私達、ど、どうして、こんな目に会わされなくちゃいけないの！ ね、先生、

何とかいって下さい！」

小夜子は、川田やズベ公達の手で、ひしひし、縄をかけられながら、必死になって叫ぶのだ。

——小夜子さん、私達は、こうして生きながら地獄へ落ちる運命だったのよ。でも、希望を失っちゃいけない。どのような仕打ちを受けても、生き続けなきゃ駄目よ——。

静子夫人は、心の中で、血を吐く思いで叫び、顔をねじるようにして、小夜子から眼をそらしつづけるのであった。

小夜子の熟した白桃のような形のいい乳房の上下には、太目の麻縄が二本三本とかけられ、やがて、小夜子をきびしく後手に縛りあげた縄尻は、天井から垂れ下がるロープにながれて、遂に小夜子は、夫人と同様、立縛りにされた姿のまま、一米もない距離をはさんで、夫人と向かい合ったのである。

悲しい説得

互いに顔をねじ曲げて、視線をそらせ合っている美しい師匠と美しい弟子を、千代は、楽しい気分で眺めている。

去年の正月であったか、遠山家では、日頃

親しくしている財界の知名人や大使館に勤務する外人を招いて、正月パーティをやり、そのあと、二階の大広間で、静子夫人と小夜子が、日本舞踊を披露した。それを、千代は、

ふと思いついている。遠山が贅をこらして作りあげた、檜の舞台の上に、金紙の鳥帽子をかぶり、雪のように白い化粧をほどこした静子夫人と小夜子が、棹のようなものと舞扇を使って、華麗な舞いを演じ、来客の喝采を受けた。それが、三番叟というのか、朝妻船という舞踊なのか、無学な千代にわかる筈はなかったが、あの華美で豪華な衣裳をまとって目もさめるような美しい舞いを演じた静子夫人と小夜子が、つまり、師弟の関係にあった二人の美女が、今、ここに、生まれたままの姿となって、対峙し、今後は、森田組仕込みの裸踊りを演じる事になるのだと思うと、息がつまるほど、おかしくなってくる千代であった。

川田、田代、森田の三人などは、向かい合っている二人の美女の間にだらしく坐りこみ、静子夫人のそれと、小夜子のそれを見くらべては笑い、ウイスキーをくみ合っているのである。

やがて、川田は、のっそりと立上り、静子

夫人の柔軟な肩に、あごを乗せつけるようにしている。

「へへへ、何時まで照れ合っていたって仕方がねえぜ。さあ、さっき俺が教えてやった通りの要領で、小夜子を説得してくんな」

静子夫人は、苦しげに眉を寄せて、川田から顔をそらせたが、うしろから、銀子が、夫人の尻をつねりあげた。

「ぐずぐずすると、二人とも、例の葉をぬりこむよ。一緒に声をはりあげて、泣いてみたいのかい」

静子夫人は、うなだれたまま、首を左右に振るのであった。

「じゃ、早いと頼むよ」

銀子は、そう言って、今度は、小夜子の方へ立ち、

「フッフ、お嬢さん。これから、貴女のお師匠さんがね。お茶やお花なんてチョロイもんより、もっと楽しいものがあるってことを教えて下さるそうよ。さ、そんなに顔を隠していちゃ、先生に失礼じゃないの」

銀子は、小夜子のあごに手をかけ、顔を起させる。

「せ、先生！」

小夜子は、涙を一杯ににじませた瞳をあげ

「ど、どうして、先生は、こんな所に。わからない、わからないわ」

そういうや堰を切ったように、小夜子は泣き出すのであった。

銀子は、北叟笑んで夫人の方に眼をやり、「どうして、こんな所にいるのって、お嬢さんが聞いているじゃないの。さあ、早く答えてあげて、奥様」

静子夫人は、しばらく黙然したまま、心の動揺を押さえていたが、未練を断ち切ったように美しい顔を上げた。

「ねえ、小夜子さん。私のいうことを、よく聞いて下さいね。静子は、自分から好んで、このお屋敷へ来たのよ」

えっと、小夜子は首をあげた。静子夫人の瞳の表には、悲しそうな影が射している。

「遠山隆義との夫婦生活なんて無意味であったことが、ここへ来て、やっとわかったの。」

静子は、女としての喜びを、ここへ来て、充分知ることが出来たのよ」

小夜子は、息のつまるような思いで、夫人の顔に眼を向けている。

「静子は、もう遠山家とは、縁もゆかりもない女。名も捨て、財産も捨て、そして、着ているものまでも。今の私の持っているものは

この肉体だけなのよ。でも、それを、私は、森田組の皆様にも、一生捧げることにしたの」

「な、なにをおっしゃるんです。先生、気をたしかに持って下さい！」

小夜子は、たまらなくなつて、緊縛された身を激しく揺するのだったが、静子夫人は、黒瞳がちに澄んだ瞳に、キラリと涙を光らせて、

「小夜子さん。お願い、貴女も、静子のような気持になつて、このお屋敷で楽しく暮すことを考えて頂戴」

そういった静子夫人は、こらえ切れなくなつて、ハラハラと涙を流しつつ

「いくら、いくら逃げようとしても、もう駄目なのよ。楽しい思い出を胸の奥にこめて、この屋敷で、お互いに仲よく暮しましょうよね、小夜子さん」

静子夫人は、遂に声をあげて泣き出してしまふのだった。

地獄屋敷内での数々のおぞましい調教から逃れる方法はただ一つ、その調教を快感として受取れるような肉体に我が身を作り変える事だとして、夫人は、川田に強制された事とはいいながら、半分は、自分の意志で、小夜子に覚しているのもあった。

嗚咽しながら、語りかける夫人を見て、小夜子は、それが悪者達に強制されて、夫人が自分をいつわり、必死になつて演じているのだとわかったが、夫人も、自分と同様、誘拐されて、ここへ運びこまれ、日夜、口ではいえぬほどの、おぞましい責めを受けていたのだと思うと、胸がはりさけるばかりの思いになる。

「先生！」

小夜子は、いう言葉もなく、すすり泣く。

小夜子とて、この屋敷に巣くう悪魔達のために、舌を噛み切りたい程の辛い恐ろしい目に会わされたが、夫人が身に受けた苦しさにくらべれば、ものの数ではないのではないか、といった気持になる。

「おいおい、急に二人とも、メソメソして、嫌にしめっぽくなつたじゃないか。さ、奥さん。次は、どうするんだ。早くしろよ」

川田は、そういつて、夫人の肩をつく。

静子夫人は、涙をふり払うようにして、川田の顔を淋しい微笑を浮かべて見るのであった。

「ごめんなさいね。何だか、急に悲しくなってきたの」

そして、夫人は、再び、小夜子の方に視線

を向け、

「それじゃ、小夜子さん。どれほど、静子がこのお屋敷の人々に可愛がられているか、その証拠をお見せするわ」

「その前に」と川田がニヤニヤしながら、夫人の耳に口を当てる。

眉をひそめ、静子夫人は顔をそらせる。

「そんな事、別にしなくたって」

「いいから、やんな」

川田は、えへらえへら笑っている。

夫人は、再び、小夜子に向かって口を開いた。

「ねえ、小夜子さん」

と、いったものの、夫人は、どうにも、その言葉は出しかねて、頬を染め、もじもじしていたが、思い切ったように、

「これから、お互いに鍛えなけりやならない所を觀賞して、批評し合いますようよ。ね、お開きになって」

静子夫人は、そういうと、軽く眼を閉じ、静かに肢を左右へ開け出すのであった。

長年、日本舞踊で鍛えた夫人の両腿は、肉づきもよく、白い脂肪のしぶきで光って見える。大きく八の字に開くと、内腿の肉は、ピーンと張り、豊満にして、艶麗な肉体に一種

の輝きを添えたよう一層美しさは増すのであった。温雅と淫奔とが同居したような静子夫人のポーズは、大いに見る者の眼を楽しませたのであるが、小夜子は、逆に、ぴったりと両腿を閉ざし、赤らんだ顔を必死にねじ曲げているのである。

「ずるいわ。静子だけに、こんな恰好をさせるなんて。ねえ、小夜子さん。貴女もお開きになって」

静子夫人は、川田に強要された通り、演じつつ、鼻を鳴らすようにして、小夜子に語りかけるのであった。

「おい、お嬢さん」

田代と森田が、酒にほてった頬をなぜながら、身体を硬化させ、小刻みに震えている小夜子の傍へにじり寄る。

「弟子は、師匠のいう通りにするもんだぜ。そら、師匠がああやって見本を示して下さってるじゃねえか」

と、森田が小夜子の脇のあたりをつつくと田代も、舌なめずりをしながら、

「師匠が弟子と……くらべっこしてみたいんだとさ。光栄じゃないか」

屈辱に悶え泣きし始めた令嬢を、静子夫人の横に立っている川田と銀子は、小気味良さ

そうに眺めている。川田は、再び、静子の耳に口を当てる。

静子夫人は、人間的感情の一切を投げ捨てた冷淡さを顔に表わし、ぼんやり川田のいう事を聞いているのであった。そして、今度は田代と森田に対し、夫人は語りかけるのである。

「ねえ、社長、かまいませんわ。その強情な娘の肢を大きく割って、縛りあげて下さいまし。師匠の私に、恥をかかすなんて、許せませんわ」

チンピラ二人が、田代の命令で、立縛りにされている小夜子の足の左右に一尺ぐらいの竹ぐいを打ちこむのである。

森田と田代は、身をかがめて、小夜子の足首を左右からひきつかんだ。

「お前さんが強情だから、とうとう先生を怒らせてしまったじゃないか。こんな事はしたくねえんだが、静子奥様の命令なんだ。恨むなら奥様を恨むんだぜ」

森田と田代は、手に力を入れる。

「あつ、な、なにすんの！ やめてっ」

小夜子は、狂気したように首を振り、足をばたつかせようとしたが、森田と田代の馬鹿力に勝てるわけではない。

静子夫人は、涙に濡れた瞳を物悲しげに細めて、左右に大きく開かされた小夜子を見るのであった。

各々の足首を床に打ちこまれてある竹ぐいに皮紐で固く結んだ田代と森田は、ほっとして立上り、首も顔も燃えるように熱くして、すすり泣く小夜子を、しげしげと見つめるのである。

「何も、そんなに羞しがる事はねえだろう。そういう風になると、きれいな身体が一層きれいに見えるぜ」

そして、見物人達は、堂々と開け合って立つ二人の美女の周囲をぐるぐる廻ったり、二人の間へ割りこんだりして、その美しい見事な肉体を觀賞するのだ。

「さて、見物衆の批評も大方出つくしたようだ。今度は、本人同士で批評し合ってみな」

川田は、夫人の足元にあぐら組んで悦に入っている。

遠山家の美しい庭園の見える日本間で、この二人の美女は、仲良く踊りの所作を研究していたのだ。手や上体を折り曲げるようにして、様々の優美な曲線を出すよう工夫し合っていた大家の麗夫人と深窓の令嬢——それが今、互いに大きく開け合い、批評をし合おう

としている。川田は、何とも不思議な気分になり、矢鱈にウイスキーをあふるのである。そして、声を大きくして夫人に浴びせた。

「よ。いつまでも照れ合っていねえで、……の批評をし合わないか」

静子夫人は、そっと眼を開き、小夜子の方を見た。涙に濡れた美しい小夜子の視線と夫人の視線は、ぴったりと合った。

（許して、許して、小夜子さん）

静子夫人は、何度も心の中で叫び、半ば、自虐的になって、口を開くのであった。

「さあ、小夜子さん。今度は私達で批評し合いましよ。遠慮なさらず、おっしゃりたい事をおっしゃって」

そして、静子夫人は、一層、大きく開けて見せ、羞しげに眼を閉ざすのである。

調教開始

小夜子は、眼の前の夫人がとる大胆な仕草に、ぞっとする恐怖を覚え、齒ががくがくするのである。これが今まで、尊敬し、師事した静子夫人に、間違いはないのであるうかと小夜子は、信じられない思いになる。

「先生！ やめて、やめて下さい！」

小夜子は、白い頬を充血させ、激しく首を振った。両手が自由にされれば耳を覆ってしまいたい。それほど、静子夫人の言葉は、小夜子にとって、恐いものだったのである。

首をねじ曲げるようにして、夫人から必死に視線をそらせようとする小夜子を見た銀子と朱美は舌打ちして、

「ちゃんと見なきゃ駄目だよ。あんた、先生のいう事に、さからう気なの。承知しないわよ」

そして、二人のズベ公は、小夜子の髪や、あごをおさえて、ぐいと夫人の方へ視線を向けさせるのであった。

静子夫人の方では、相変らず、川田がニヤニヤして、うしろから夫人の肩を抱きしめるようにし、しきりに何か耳にささやいているのだった。

「さ、小夜子さん。よくごらんになって。貴女、静子の——」

夫人が口ごもると、川田が邪慳に、夫人の尻をつねりあげるのだ。

「貴女、静子の……ごらんになったの、始めてでしょ。どう。すばらしいと思いませんか。ねえ、何とか、おっしゃって」

そして、夫人は、前へ廻って来た川田に向



かって、彼に指示された通り、一抹の憂いを帯びた眼を羞かしげにしばたきながら、

「ねえ、川田さん。小夜子さんに私、羞恥というものを完全に捨てた女になった事を、お知らせしようと思うの」

「なるほど、腹の中まで見せてやりたいってわけだな」

川田は、ニタニタ口を歪めている。

ええと夫人は、うなずいて、ほんのり頬を染め、そっと横へ顔をそむけるのであった。

「で、俺にどうしてくれというんだね」

川田は、静子夫人の軽く瞑黙した美しい横顔に眼を向けていうのである。

「な、なんだか、いい難いわ」

夫人の羞らしいのこもった美しい容貌は、紅を流したよう熱くなる。

「どうしたんだよ。はっきりいいなよ」

自分が夫人に教示しておきながら、川田はわざととぼけて見せるのだ。

静子夫人は、悪寒のようなものが身体中を駆けめぐるのを押さえるべく、しばらく努力していたが、やがて、放心したような、うっとりした眼を川田に注いで、

「ねえ、花を開かせて下さらない。花の実を小夜子さんに見て頂きたいの」

よしきた、と川田が身をかがめると、静子

夫人は、八の字に開いた肢をふんばるようにして、それを心持ち前へ押し出すようにするのだった。

「さすがは、生花の大家ね。おっしゃることがきれいだわ」

といい、ホホホと笑ったのは千代である。

ふと、それに眼をやった小夜子は、うとうめいて固く眼を閉ざし、ぶるぶる身体を震わせるのである。

何という恐しい、いや、恐ろしいとか残酷といったものではなく、小夜子の身内には、得体の知れない暗い波が押し寄せ、船酔いにあつたよう反吐を吐くのではないかと思つたぐらいである。

唇は、次第に……られていき、さくらんぼに似た可愛……、誘導されるままはつきり首をのぞかせる。

静子夫人は、雪白の艶やかなうなじを大きく見せ、美しい眉を切なげに曇らせつつ、ゆるやかに首を振っている。

「さ、小夜子さん。ごらんになって。これが静子の、これが静子の、ああ——」

夫人が、齒を噛みならして、大きく首をのけぞらせた時、

「おい、川田、調子に乗るんじゃないねえ」

と、森田が声をかけた。

へい、と川田は、手をひっこめ、へへへ、と卑屈に笑うのだった。

「どうも、わっしは、すぐに調子に乗っちゃうくせがあるもんで——」

「奥さんを責めるんじゃない、小夜子の調教について、奥さんの智恵を拝借しようっていう事だったんだろ」

妙に嫉妬めいた気分になって森田はむつかしい顔をしている。この天下の美女に対し、川田が何時もいい役廻りを演じているように思うのだ。好色な事に関しては、田代も森田も、川田以上に物凄さがあつたが、しかし、衆人環視の中では、川田のように巧妙に立廻る事が出来ない。やはり、四十代の男だけに照れくささという事もあり、寝室以外では、何か場違いの感じ、抜け目なく情念を満たそうという芸当は出来ない。好色と一口にいても、色々と種類はあるようである。

それだけに、川田が、調子づいてくると、森田は楽しい気分であるにはあるのだが、度を越してくれば、何となく不愉快で、たまに

は、こっちへ主導権を渡せ、といった気分になるのである。

さすがに川田は、そういう事は見てとっている。

「じゃ、一つ、今度は社長と親分に代っていただきましょう」

と如才なくいい、へへへと追従笑いをするのであった。

「代れといったってよ川田。一体、どういう風に——」

やはり、川田から、要領を聞かねば着手出来ない森田と田代であった。

「そいつは、この奥様に、聞いておくんなさい。ちゃんと打合わせ済みですから」

川田にそういわれて、森田と田代は、静子夫人の両側にわかれて立ち、八の字型に開いている夫人の両肢を、元通り閉じ合わせてやる。

伸びやかな美しい肢体を持つ静子夫人は、肢を開かせてみても、閉じ合わせてみても、高雅な美しさは変わらず、それでいて、充分、男性の官能をうずかせる。

「さて、奥さん。そろそろ小夜子嬢に調教をほどこさなきゃならないんだが、まず、どういう所から手をつけるべきだね。フッフ、見

給え、小夜子嬢、さっきから大きく……待ちくたびれていらっしゃるよ」

田代は、上下を縄でしめあげられている夫人の見事な乳房に、そっと接吻しているのであった。

「小夜子さんは、何といっても、いい所のお嬢さん。最初から、手荒な事をしちゃいけませんわ。恐怖心を取り除き、くつろいだ気持ちにしてあげて下さいまし」

静子夫人は、伏眼をしたまま、先程、銀子と川田にいい含められたことを、口に出しているのである。

「つまり、どうすりゃいいんだね」

「——浣腸を」

夫人は、そういった途端、がっくり首を落とし、肩を震わせて泣き出した。

「許してっ、小夜子さん。ここは、地獄なのよ。たとえ私が、貴女の身代りになるといったところで、この人達は、貴女を許すようなことはしない。し、辛抱して頂戴！」

川田のいいなりになっている自分の浅ましさに急に憤りを感じたのか、夫人は、突然、取り乱したのである。

「つまらねえこと、いうんじゃない」

川田は、いきなり、近寄って、静子夫人の

頬を平手打ちするのであった。

「俺に命令された通りやってりゃいいんだ。せつかくムードが出てきたと思ったのに、これじゃブチこわしじゃねえか」

川田は眼をつりあげて、更に夫人の頬を打とうとしたが、それを田代と森田は押しとどめる。

「ま、待ちな。いくらショーのスターになったといったって、やはり人間だ。たまにや、かつと頭にくる事があらあな」

と森田がいうと、田代も顔をくずして、
「それ位の元気があった方が、かえって頼もしいというものだよ」

そして、田代は、ハンカチを出して、泣きじゃくっている夫人の首に優しく手をかけ、涙をぬぐってやる。

「それだけいたら、気持がすっとしたろう奥さん。さ、さっぱりしたところで、も一度ショーのスターにもどるんだ。わかったね」
田代は、気味の悪いほどの優しい口調でいい、何度も、わかったね、をくりかえすのであった。

静子夫人は、服従を示すように小さくうなづく。そして、涙を今一度、振り払うようにして

「もう二度と、自分に戻ったりはいたしません。ごめんなさい」

といい、田代の肩に顔を埋めるのだった。
「さ、早くしな。時間が惜しいじゃねえか」

川田が仏頂面をして、夫人にいう。

「川田さん、お願い、浣腸器とお人形を持って来て下さいまし」

静子夫人は、田代の肩から、顔を離すと、再び正面に向き直り、小さく口を開くのだ。

川田に命じられて、チンピラ達が調教室の戸棚を開き、それを探し始める。

なるほど、と田代と森田は、顔を見合わせ川田と銀子の着想に舌を巻いた。

この美しい日本舞踊の師匠と弟子を、このように向かい合わせたまま、その前とうしろを同時に責めようというのである。

小夜子は、チンピラの一人が持って来たガラス管を見た途端、全身総毛立つ思いになり
「嫌よ、嫌っ、馬鹿な事はしないでっ」

と、狂気したように首を振り、左右へ開かされた両肢を悶えさせる。

「こういう立ちポーズで浣腸するのも、オツなものね」

銀子は、洗面器の中に石鹸水をとかしながら、楽しそうに、小夜子の肢態を見上げた。

細い線と柔かい曲線とで囲まれた美しい肉体を持つ深窓の令嬢は、生まれて始めて、ほどこされようとする浣腸の恐怖に、舌足らずの悲鳴をあげ、必死に身をくねらせ、許しを乞うのだ。

「御生ですっ、やめて下さい！ そんな事だけは、嫌、嫌、絶体に嫌！」

小夜子は、泣きわめく。

よく熟れた白桃のような乳房がふさふさと揺れ、雪をとかしたように白い肉腿の筋肉が恐ろしさのためか、ピクピク痙攣するのだった。そんな令嬢の懊悩ぶりを、チンピラの竹田と堀川は、ニタニタして眺めていたが、浣腸器にたっぷり石鹸水を吸いこませた銀子が
「あんた達、ぼんやり突っ立ってないで、お嬢さんの足の下に便器を置いてあげなよ。馬や牛みたいに、そのへんへポタポタ落されちゃ困るわよ」

という。あいよ、と二人のチンピラは、戸棚から、ブリキ製の便器をとってくると、腰をかがめ、令嬢の肢の間へ、それを配置する。

「そこじゃねえな。この辺だな」

と竹田が、眼で距離を計るようにして、便器をずらせると、

「そりゃ、うしろ過ぎるぜ。もう少し、前だ」

と、堀川がそれを移動させ、令嬢が、麗わしい両肢を開いて作ったトンネルの下で、チンピラ二人は、わざとらしく、便器を出したり、ひっこめたりしているのだ。

小夜子は、もう生きた心地もない。激しくすすりあげながら、自分は一体どうなるのかと熱病に冒されたように考えているだけであつた。

「おっと、まだ始めちゃいけねえぜ。こっちが開始したら、それと同時に、そっちも、スタートを切るんだ。奥様が合図して下さるか」

静子夫人の方へ陣どっている川田が、銀子に声をかけた。

そして、チンピラの一人に手渡された桐の箱を小脇にかかえた川田は、田代と森田に肩を抱かれるようにして立っている静子夫人の前に進む。

「何度もうようだが、精一杯のお色気を盛るんだ。要領は、さっき、俺が説明した通りだ。わかったな」

静子夫人は、初々しい羞恥の感情を、美しい黒い瞳ににじませて、かすかにうなずくのであつた。

夫人は、今や、拒否する心を完全に捨て、

悪魔達に対しての絶体服従を、かたく心に誓つたようである。

「それから、花でお人形を包みたくなったら、はつきり社長や親分をお願いするんだぜ。いいな」

川田のいう意味がわかって、夫人は、ふと視線をそらせ、耳や首筋まで赤くしたが、再び軽うなずいて見せるのだった。

「じゃあ、こいつは、社長にお渡ししときます。へへへ」

川田から、桐の箱を受取った田代は、夫人の背後から、両手を夫人の首に巻きつかせるようにして、

「一体、こりゃ何だね、え、奥さん」

わざと、夫人の鼻先で箱の紐を解き始めるのであつた。

箱の蓋には、鬼源の字で『遠山静子・調教用』と墨字で書かれてある。

蓋を開けて、中味を見た田代と森田は、ほう、と声をあげ、

「こりゃ見事なものだ。本物そっくりじゃないか」

と、感歎するのであつた。

静子夫人は、さっと顔を赤く染め、横に立っている森田の胸に顔を隠そうとする。夫人

の熟れきった乳白色の肉体から艶めかしい色気がたちこめ、顔を思わず男の胸に埋めるところなど、何とも可憐であり、いじらしい風趣であつた。田代は大いに気を良くし、それを手に取って眺めるのである。

「鬼源は、これを奥さんに使った事があるのかね」

夫人は、森田の懷に額を押しつけたまま、首を左右に振る。

「じゃ、俺達が始めて実験するってわけか」

田代は、腹をゆすって笑う。

「嫌、そんなもの使うの」

夫人は、甘えるように嫌々と首を振る。

「そうはいかんよ。そこのお嬢さんと一緒にスタートする約束だったんだろ。自分がいい出したくせに、何いってるんだ」

静子夫人は、田代と森田に、身体を立直されると、羞らしいのもった瞳を田代に向けて「じゃ、お任せしますわ。どうとも、お好きになうにささって。そのかわり」

「何だね」

「うんと可愛がって下さらなきゃ嫌」

「勿論だよ」

「静子、声をあげて泣くかも知れないけど、かまわない？」

「望むところさ」

静子夫人は、こうした悪魔達と戦い抜く一つの方法として、この肉体を武器として、積極的に男達に挑みかかろうという破れかぶれの決心をしたのである。

けども達の要求を、うんと駆りたててキリキリ舞いをさせてやるのだ、と静子夫人は度胸をすえたものと思われる。

そっちが、そっちなら、と年増女に対する年増男の方も受入れ態勢は出来ている。夫人が攻勢に出るといふなら、火の玉のように燃え上らせてやるだけだと、手練手管にも年期が入っている田代と森田は、ぞくぞくした気持ちになるのであった。

「伝言板」○モデル志願をされた西宮市の影山綾子さん、先日撮影した写真、御入用でしたらお送りしますから、連絡先をお知らせ下さい。○東浦ひかるさん、お渡ししたいものがありますので、一度電話して下さい。富永さんからの伝言もありますから。○山本章氏へ、貴方から一方的な日時の指定がありました、残念ながら、その後彼女からは連絡がありませんでした。この前、すっぱかしたので彼女は諦めているのかもしれませんが。

田代と森田は、静子夫人の廻りをぐるぐる廻るようにして、背中や肩、乳房、臍、大腿、内腿、そして、尻など、あたりかまわず接吻の雨をふらしまくる。

静子夫人は、固く眼を閉ざし、歯を噛みしめ、大きく首をのけぞらせて、煽られるまい燃え上るまい、と息をつめているようであったが、大きく見せた、艶やかな夫人のうなじに、田代は、喰いつくように唇を当てるのだった。

「ああ——」

夫人は、上気した顔をくねらせ、小さく口を開ける。

森田は、夫人の耳たぶに熱い口吻をし、あえぎつつける夫人に、

「大分、楽しい気分になったようだな。お嬢さんもお待ちかねだぜ。そろそろ箱の中身を使っちゃ——」

「駄目、駄目」

夫人は、とろりと濡れたような色っぽい眼つきで森田を見上げ

「ねえ、おっぱいを——」

よしよしと、森田は、夫人の豊かな乳房を両手ではさむように持ち、その一つ一つの乳首に熱い接吻を注ぐと、次に、夫人のうしろ

へ廻って両手を広げて、背後から乳房をつかみあげ、ゆるやかに動かし始めたのである。

うなじから、口を離れた田代は、フーと息をつき、夫人の紅潮した熱い頬を両手ではさむように持ち、形のいい夫人の唇を激しく吸い出すのであった。

「ああ、静子、もうどうなったって、かまわないわ」

田代が、夫人の唇から口を離し、そっと、身をかがめていくと、静子夫人は、自分の方から、そっと押し出すようにして、田代の手に触れさせるのである。

「そろそろ始まるようよ」

と、銀子は、浣腸器を手を持ちかえ、小夜子の背後へ廻った。

「ああ、お願い、お願いします！」

と叫ぶ小夜子にはおかまいなしに、身をかがませた銀子と朱美は、

「ちょっと失礼。支度だけさせて頂くわ」

消毒用のアルコールにガーゼを浸し、丁寧にふき清めるのであった。

「あっ、ああ——」

小夜子は、突然、強烈な電気に触れた瞬間のよう、悲鳴をあげて首をのけぞらせたのである。

(未完)

女体切腹小説

殉 じゅん

愛 あい

の

女 ひと

飯

森

潔

はじめに

昭和二十年八月十六日、即ち太平洋戦争が敗戦に終わった翌日の早朝、軍港の町Y市の高い丘の中腹にある住宅地で、二人のうら若い女性が切腹自決した事件が起った。

その一人の名を高見律子といい、もう一人の名を、同じく節子といった。律子は、数え年二十二才で海軍飛行中尉高見健二郎の未亡人。節子は、健二郎の妹で数え年十八才の乙女であった。

二人とも女ながらも腹十文字に掻き切つての見事な最期であった。律子は夫への、節子は恋人への追腹であったが、敗戦の混乱期の

事として新聞にも出ず、しばらくの間、近所の人々の話題になったに止まって、やがてすっかり忘れ去られてしまうようになった。

私は、この事の始末をせひ書いて置きたいと思う。拙文で、それに少し長くなるとは思うが、二人の清純な真心に免じて、お許しいただきたいと願う。

神風特別攻撃隊の栄光の陰に

(一)

昭和二十年三月の末、軍部の必死の宣伝にも拘らず戦局の悪化が誰の眼にも明らかに映り始めていた頃、律子はひそかに自害を決意した。

夜。灯火管制下の、そこだけ明るく浮かび上るような灯の下に、匂うような白無垢姿の律子は長い間身じろぎもせず坐っていた。神棚の前に敷いた白布の上に端座した律子の前には錦の袋に入った懐剣が置かれていた。

十一時を過ぎた今、街はひっそりと静まり返り、ただ夜を徹して建艦を急ぐ海軍工廠の鋸を打つ音だけが微かに夜のしじまを伝わって聞えてくるだけであった。

律子の唇から苦しげな吐息がもれた。律子は静かに袋の紐を解き懐剣の鞘を払った。磨ぎすまされた匂うような刃が光をはね返して光った。その刃先にじっと見入っていた律子の唇が微かに動いた。

「あなた、お先に」

律子は、尖先を静かに喉元に当てて目をつむった。

だが、やがてその刃は力なく下され、閉じたままの瞼から涙が止めどなく流れ落ちた。

律子はガバと俯伏せに身を投げ出して呻くように咽び泣いた。

律子は死ねなかった。夫にも知れずに独りで死んでゆく淋しさに耐えられなかった。もう一度夫の胸に抱れて心ゆくまで泣きたかった。身もだえて嗚咽する律子のつややかな髪が円やかな白無垢の肩の上でふるえていた。

(二)

律子が何故に自害を決意し、何故に死ねなかったのかを語らねばならない。

律子は東北の城下町W市の塗器問屋の長女として生れた。

律子が健二郎を知ったのは、当時A中学の四年生であった兄の浩が同じ剣道部の友人として家に招いた時であった。A高女の二年生であった律子の胸には、その日から健二郎に對するひそかな思慕が芽生えはじめた。

中学四年から海軍兵学校へ進んだ健二郎が故郷を発って行く日、律子はそっと人陰からそれを見送った。両親や兄妹と多くの級友に

見送られて、汽車の窓から澄んだ瞳を輝かせて手を振っていた健二郎の面影が律子の心に焼きついて残った。あの人は最早、自分とは関りあいのない遠い人になってしまったのだという思いが、胸に迫って律子は思わず涙ぐんだ。

しかし健二郎は律子にとって遠い人になってしまったのではなかった。夏になると健二郎は決まって墓参に帰って来た。そしてその度に必ず兄を訪ねて律子の家に寄った。

律子の心を察した浩は健二郎に、それを打明けた。律子が四年生の夏、健二郎が明日江田島に帰るといふ日、二人は夕陽が斜めに射し込む郊外のまばらな雑木林の中で変らぬ愛を誓い合った。

やがて女学校を卒業して二年目、太平洋戦争が次第に急を告げはじめた頃、相手が明日の生命の知れない軍人ではと不安がる両親を納得させ、同じ理由で踏切かねる気持になっていた健二郎の胸に律子は自分からとび込んでいった。

それから暫くの間は、律子にとっては夢のような日々が明け暮れた。

しかし、そのような幸せは長くは続かなかった。

戦局が日増しに悪化してくるに従って特攻隊が生まれ、やがてそれが一つの制度とまでなるに至った。毎日のように特攻隊の輝かしい戦果と傷ましい犠牲とが新聞のトップを飾るようになった。

いつの間にか律子は、夫が特攻隊員として飛び立っていつてしまう日の来る事を心ひそかに怖れるようになっていた。その日がいつ来るか、今日か、明日かと怖れながら過す一日、一日……。軍人の妻となった日から、夫が帰らぬ人となる日の覚悟はできていた筈であった。しかし、律子は今、夫と共に生きるこの幸せに必死に取りすがっていた。何日かおきに帰ってくる夫のたくましい胸に顔を埋めて悦びにふるえながら、夜がいつまでも明けないでくれればいいと願った。明日がこわかった。

その薄永を踏むような思いの日々が重なって、いつの間にか昭和二十年の年が明けた。

健二郎が時々発熱するようになったのは、一月の末頃からであった。律子が心配しても彼は、軍の病院で手当を受けているから心配しなくともいいと言うだけであったが、病状は少しも良くならずにかえって悪化してくるようであった。やがて彼は、家に入るなり、

ぐったりとして寝込む事が多くなり、やさしく律子を抱く事も無くなった。そうになってくるに従って、彼はめっきりと無口になり、律子を見る眼にも深い苦悩の色が浮かぶようになった。

律子は、夫が軍の病院で手当を受けているというのが嘘である事を感じていた。しかし夫はなぜそれ程までに自分を酷使するのか？。律子にはある予感があった。しかし、それを口にして夫に確める事はできなかった。それは、律子が最も恐れていたもの、二人の愛の生活の終りを招き寄せずにはおかないものであったからである。

だが、律子のその思いが当たっていた事が明らかにする日が遂に来了。健二郎の親友であり、時々一緒に訪れて来た事のある伊藤中尉が特攻で散華したというニュースを新聞で見た時の夫の苦痛にゆがんだ表情を見た時、律子は自分の暗い臆測が全く当たっていた事を明らかに知った。

夫は特攻に志願しようとしなかったのだ。愛する妻を独りぼちにさせないために。そして、そのような私情のために特攻に志願しようとしないうちに自ら責めさいなんで、病気になることも治療を受けようと思えしないうちに。

だ。その苦しみを妻には言えないために、独りでじっと耐え続けて来た夫。どんなにか苦しきろうと思うと、律子は毎夜、独り寝の床に転々ともだえた。

いくら手を伸ばしても、どんなにもがいても、夫は、自分には手の届かない巨大な力によって、ずるずると自分から引き離されてゆく。こんなに切なく愛し合っているのに、それが何の力にもならない。ただ傷心の夫を心を込めていたわり、涙を押し隠して微笑みかける——。それが、どんどん広がってゆく傷口を癒すことはできず、ただひと時、その痛みをやわらげてやれるものでしかない事を知っているながら、それだけしかしてやれない苦しみ——。愛が罪である筈はないのに、その愛の故になぜこんなに苦しまなければならぬのか。

——戦争さえ無かったら。

律子は、ふとそう思う時があった。確かに戦争さえ無かったら、この悲しみも苦しみも無くてよかった筈であった。しかし忠君愛国の教育をしか受けてこなかった律子にとって、は天皇の名に於て戦われている戦争を批判する等という事は思いも及ばない事であった。この出口のない切ない思いは、律子に、自

分自身を責める道をしか残しておいてくれなかった。

——わたしさえ居なかったら。

身も細る苦悩の果てに、律子は自害を決意した。国史で学んだあの武士達の妻のように潔よく刃に伏して果てようと思った。——だが律子は死ねなかった。

(三)

夫が勤務中に倒れたという報らせを受けたのは、それから間もない日の朝であった。

律子は、眼の前が真暗になる思いの中で、「取り乱してはいけない。取り乱してはいけない」と、必死に自分に言い聞かせながら海軍病院へ急いだ。知っている道筋なのに、どこをどう歩いたのか、少しも覚えていなかった。ただ、足がふるえて仕方がなかった事と白いコンクリートの道が、どこまでもどこまでも続いていて終りがないように思えた事だけが後になって思い出せる総てであった。ベッドの上に、夫は、この前出かけた時よりも、げっそりとやつれて意識もなく眠っていた。

「だめですなあ奥さん。こんなにひどくなるまで構わないでおいちゃ」

そう言う若い軍医の声にはなじるような響

きがあった。律子はそれを心に痛く聞きながら、声を挙げて泣いてしまいたい衝動に耐えるのが精一杯であった。

この時以来、律子は死を思わなくなった。今は何よりも、この夫のためには、妻である自分が必要である事を知ったからである。

この日から律子は、週に一度の見舞の日のためにだけ生きるようになった。律子にとっては、夫のベッドの傍に居る事のできる週一度の短い時間だけが生きるに価する総てになった。

(四)

五月になって、律子は、夫の妹である節子を自分の家に迎え入れた。

節子は、高見家の三人兄妹の末子として育った。父とは子供の頃に死に別れ、次兄の健二郎が軍人となり、次いで家を守っていた長兄が応召してからは母と二人きりで暮らしていたが、昨年その母も病死した後は、叔父の家から女学校に通い、卒業すると同時に、勤労員でこのY市の海軍航空技術廠に来ていたのであった。

律子は幼い頃からの節子を知っていたし、昨年の春、節子の母の葬儀に参列してからは特に節子を愛しいと思うようになっていた。

Y市に來た節子は当初は寮に入っていたのだが、律子が特別に願ひ出て、自分の家に引き取る事にしたのであった。

節子は、背のすらりとした、二つに分けて編んだお下げがよく似合う美しい少女であった。

夫の入院以來ひっそりとしていた家の中に久しぶりに笑い声が聞かれるようになった。

殉愛の誓い

六月の末。

病院の開け放たれた窓の外には、濃さを増した木々の緑が風にそよぎ、正午近い強い日射しが木々の葉の間からチラチラとこぼれていた。

「水……」

謔言のように健二郎の唇が動いた。

律子は、そっと水差しを夫の口に当てた。筋と皮ばかりのような喉を、ゴクツ、ゴクツと水が通っていった。

飲み終った健二郎は、目を開いて、力の無い、しかし柔かな眼差しで律子を見つめた。

「律子」

久しぶりに聞く、いたわりのこもった声であった。

「ハイ」

律子は甘えるように返事をして、夫の顔の上に身をかがめた。

健二郎は、枕の下から、そっと一冊の大学ノートを取り出して律子の手に渡した。

それは日誌であった。結婚以来、夫が毎日欠かさずに日誌をつけていた事を律子は知っていた。その習慣は兵学校時代からのものらしく、家にも既に十冊を越える日誌があったのだが見せられるのは今が初めてであった。

律子は日誌を開いた。日附を見ると、入院の少し前からのものであった。短い日で四、五行、長い日でも七、八行の簡潔な日誌であった。

律子が始めから読み出しているのを見た健二郎は、「最後のところを」と言った。

律子は思わずハツとした。それが何を意味するのかを予知したからだ。律子は息が止まる思いで頁を繰った。手がふるえた。

読み始めた律子の顔から血の気が引いた。それは、まぎれもない遺書であった。そこには、心もち大きな字で次のように書かれてあった。

六月二十九日

律子、苦勞ばかりさせて済まなかった。僕



健二郎

律子どの

読み終った律子は、ブルブルと震える手でしっかりと遺書を握りしめ、歯をかみしめて睨み上げてくる激情に必死に耐えた。しっかりと閉じたから涙があふれて、白く震える頬を伝って流れた。
——わたしも死ぬ！ そうだわ、

腹を切って！ 夫の身代りに切腹！

のような我尽者に心から仕えてくれた事に心から御礼を言う。良き妻を得た事では僕は誰よりも幸せ者だと思っている。君を残して先立つのは心苦しいが許してほしい。どうか末永く幸せに生きてほしい。

唯一つ心残りなのは、軍人である僕が、このような大事の時にベッドの上で死なねばならぬ事だ。せめて武人らしく腹を切りたかった。その他には思い残す事は何もない。節子にもよろしく伝えてほしい。

嵐のような激情の中で律子はそう心に誓った。殉死の覚悟は、健二郎の妻になろうと心を決めた日からできていた。切腹！ たとえそれがどのように苦しかろうとも、いや、それが苦しいものであればある程、律子は腹を切りたかった。自分への愛の故に苦しみ続け、腹を切りたいと希いながら腹を切らずに死なねばならぬ夫の心を思うと、夫へのこの愛の切なさの証には切腹こそが最もふさわしいと

思われた。切腹！ この雄々しい死への希いが律子の心に赤く燃えた。

律子は漸く眼を開けて夫を見た。顔をそむけた夫の閉じられた瞼にも涙が光っていた。

律子は、その顔に自分の顔を近づけて、小さく夫を呼んだ。

健二郎は涙に濡れた眼を開いて妻を見た。

「あなた。わたしにも死なせて！」

ハッとしたように健二郎は大きく眼を見開いた。そしてじっと律子を見つめていたが、首を横に振った。

「いや！ 律子はもう決めたの。許して頂けなくてもお供します。律子は、あなたの身代りに切腹するの。ね、死なせて。一緒に連れて行って！」

律子は、ねだるように、甘えるように言った。

健二郎はしばらくの間、まばたきもせず、律子を見つめていたが、急に顔がゆがみ、その眼に新しい涙があふれた。

律子は夫の骨だらけの手をとって頬に当てた。律子の温い涙が二人の手を濡らした。

「律子！」

健二郎の手に力がこもった。

もはや何も言葉はいらなかった。律子は夫

が死を許してくれたのを知った。律子は今漸く夫と自分とが一つになったのを感じた。あの苦しみが始まって以来二人の間を隔ていた障壁を、今ようやく乗り越える事ができたのだった。

「あなた、律子、とっても、しあわせ」

律子は夢見るような声で言って、涙に濡れた頬を夫の手にすりつけた。

節子の決意

健二郎は次の週を待たずに死んだ。葬式は故郷のW市でささやかに行われた。

実家の両親は、律子に、一日も早くY市を引きあげて帰ってくるようにすすめたが、律子は、もう少し節子さんの世話もしたいからと言って遺骨を抱いてY市に戻った。

律子は、客間に使っていた六畳に小さな仏壇を置いて遺骨と遺影とを飾った。

律子は、葬儀も、とどこおりなく済んだ今は、一日も早く腹を切って夫の許に行きたかった。だが唯一つ心配なのは節子の事であった。自分の他には頼るべき身寄りの無くなった節子の事を思うと律子の心は痛んだ。律子は胸に深い決意を抱いたまま、その決行を一日、一日と先へのぼした。

六月も半ば過ぎた或る日の事であった。

律子は、節子宛の一通の郵便を受取った。

差出人は神田京子であった。京子は、節子と想思の仲にあった靖夫の妹であり、節子より一つ年下でA高女四年生として在学中であり、靖夫は節子よりは、二つ年上で予科練出の飛行兵として、九州の某基地に居たのである。

夕刻、節子は今日も二時間の残業をすませて元気に帰って来た。

「節子さん、手紙よ。京子さんから」

「まァ……」

節子は座るのも、もどかしそうに封を切った。だが、読み始めた節子の顔からみるみる血の気が退いた。節子はものも言わず立上ると隣の仏間に入って襖を閉め切った。律子は隣室からもれてくる節子の鳴咽を聞きながら凝然と座っていた。

やがて漸く節子の泣き止んだ気配に、律子は立って襖を開けた。ほの暗い仏間に俯伏せている節子の肩が、まだ小刻みにふるえていた。

「どうしたの？」

いたわりを込めた律子の声に、節子は漸く顔を上げた。そして真直ぐに律子を見た。そ

の眼からまた新しい涙があふれた。

「靖夫さんが、靖夫さんが……」

節子の唇が、わなわなとふるえた。

「戦死なさったの！」

言い終るなり、節子は律子の胸に身を投げ出して、激しく泣いた。

その節子を律子は黙ってやさしく抱いた。

やがて節子は、律子の胸の中で泣きはらした顔を挙げた。

「お姉さま。節子、死にたい！」

必死に訴える眼であった。

「一緒に死にましょう」という言葉が口まですで出なかったのを、律子は抑えた。節子の悲しみは痛い程解った。でもこの人を死なせてはならないと思った。

「解るわ、節子さんの気持。でも、死んではいけない。生きるのよ、お国の為に。生きて靖夫さんの志を継ぐのよ。……ね」

やさしく言う律子の顔を、節子はじっと見つめていた。

「解ったわ、節子、一生懸命働くわ。でも、もし敵が上陸して来たら節子に死なせて。きれいなうちに潔く死にたいの」

律子はひしと節子を抱きしめた。

「節子さん、その時は一緒に死にましょう。」

日本の女らしく、りっぱに……」

律子は、その夜、初めて追腹の決意を打明けた。

「まア、切腹！」

節子は、驚きと畏敬を込めて律子を見上げた。

「切腹！ 勇ましいわ」

節子は、独り言のように呟くと、そっと腹を切る手まねをしてみるのだった。

「節子も切腹したいわ。ね、お姉さま、節子に、おなかの切り方教えてくださらない」

節子は火照^{ほて}った顔を上げて、まぶしそうに律子を見上げた。

律子にはそのような節子が切ない程いじらしかった。この美しい乙女が腹を切る——。それはどんなにか哀しく美しいだろうと思つた。しかし不安でもあった。節子は本当に腹を切る苦しみを知っているのだろうか。

「でも、切腹って……」

律子が言いよどむと、節子は、きっぱりと言いつ切った。

「わかるわ。でも節子、きっと大丈夫よ。日本の女ですもの。いさぎよく、切って見せるわ。きっと立派に。靖夫さんも、きっと賞め

てくださるわ」

そう言う節子の頬に、まぶしいような紅がさした。

はらきりの手習い

二人は、灯火管制下の、そこだけ明るく浮き上るような灯の下で、律子が用意した木造りの短刀を前にして向い合つた。

たとえ真似事にせよ、人の前で腹を切る仕事をすること、律子はふしぎな胸の高鳴りを覚えていた。

律子が浴衣の前をゆったりと寛げると、節子もそれに習つた。

「節子さん、切腹は、こうして！」

律子が、短刀に白布を巻きつけ、下腹のふくらみを真一文字に引き回して見せると、節子もそれにならつた。

「お姉さま、こうするのね」

節子はそう言いながら、臍下の、まだ稚さの残る張りつめた下腹をキリキリと引き回して、火照った顔を上げた。その腹には、カッキリと一文字にうす紅い筋が浮かんでいた。

「立派よ、それでいいの。息を抜かないで一息に切るのよ。苦しくとも、思い切つて」

節子は、眼を輝かせて大きく頷いた。

その夜、律子は夢を見た。

切腹の夢であつた。

「あなた、おそばに……」

律子は、ためらいもなく右手の懐剣をプツツリと腹に突立てた。痛みは無かつた。そのまま、右へキリキリと引き回していった。確かに腹は切れているのだが、血は殆ど出なかつた。

——切腹って、こんなかしら。

ふと、そんな思いが脳裡をかすめた。

その時、腹を切る律子の右手が、急に後からしっかりと押えられたのである。腹は、ちやうど左脇から臍下まで掻き切つたところであつた。

「切らせて、このまま切らせて！ 覚悟の切腹よ、止めないで！」

律子は身もだえして、刃を引き回そうとあせつた。

「死んではいけません。高見中尉は生きてい

るんです」
それは、病院で夫の係りをしていた若い軍医の声であつた。

「うそです、うそです！ お願い、りっぱにりっぱに切らせて！」

切腹をとめられるなんて、まして腹を半分

切り裂いたままで助かるなんて恥かしい。早く、早く切り終えなければ、とあせりながら律子は一気に掻き切ろうとした。

「ごらんない。そら、そこに中尉が」

その声に、律子が思わず顔を上げると、そこにまぎれもない夫が立っていた。軍服姿のまだ一度も病気などした事のないような、元氣なたくましい夫であった。

「あ、あなた！」

律子は、思わず腹の刃を抜き捨てて手を伸ばした。だが、届く筈なのに、どうしても手が届かない。

「あなた、あなた！」

律子の手は宙を泳いだ。

律子は自分の声で目が覚めた。胸が激しく動悸し、体がじっとりと汗ばんでいた。

——夢だったんだわ。

律子は、蒲団の上に座ると、動悸する胸を抱きしめた。

「あなた」

切なかった。閉じた瞼の裏に、夢に見たたくましい夫の姿が、まだ鮮かに残っていた。夫の胸に抱かれて生きる悦びにふるえたあの日々のように、もう一度夫の胸に顔を埋めて

泣きたかった。渇くような思慕の切なさに律子は身もだえた。

律子は、夢中で帯を解き、夜着の肌を押し開いた。そこには、固く凝った円やかな双の乳房の下に、処女のように艶やかな張りつめた白い腹が生々しく息づいていた。そこは、やがて夫の許へ行くために切り開くべき部位であった。

——ここを切るのだわ、こうして。

律子は憑かれたように、枕元の木造りの短刀を執ると、下腹に押し当て、力まかせに、臍下をブリブリと真一文字に引き回した。痛み鈍さがもどかしかった。

律子は、あえぎながら、もう一度短刀を腹に当てた。そして、腹をせり出すようにしながら、さっきよりも更に力を込めてギリギリと引き回した。律子は、下腹の底に渦巻く狂おしい迄の情感に身をくねらせた。

「切腹！ああ、……せっぽく！」

切なかった。今すぐ、この腹を、本当にブリブリと切り開いて夫の許に行きたかった。

「お姉さま」

節子の声に、律子はハッとして、思わず夜着の前をかき合わせた。節子はいつの間にか目覚めていたのである。律子は、見られてし

まったという思いに、全身が、カッと熱くな

った。

「お姉さま、切腹のお稽古？」

律子は、ようやくの思いで頷いた。節子は、むっくりと起きて、律子に向い合

って坐ると、ささやくように、

「節子もするわ、おなかの切り方、忘れないように。見てね」

と言ひ、手早く前を寛げて、短刀をそのつややかな下腹に当てた。そして「ウーム」と、微かな呻きさえもらしながら、力を込めて真一文字に引き回していった。節子の白い腹には、見るみるうす紅い一文字の筋がカッキリと浮かび上った。

だが節子は、まだ腹から短刀を離さないで「お姉さま、節子ね、どうせおなかを切るなら、十文字に切りたいの。十文字の切腹、こうすればいいのね！」

そう言いざま、憑かれたように、みぞおちから真直ぐに、臍を通過して下腹まで一気に引きおろした。

律子は羞恥から救われた。そして、救われただけでなく、節子の腹切りのしぐさに切ない興奮も覚えていた。

「それでいいの、立派だわ！ わたしも十文

字に切るわ、見てね」

律子も、そう言いざま、節子の手から短刀をとると、みぞおちに力一杯突立て、夢中で一気に引きおろした。

二人の白い腹には、鮮かな十文字の筋が浮かび上った。

二人は、どちらからともなく、ぴったりと胸を合わせて抱き合った。

「せっぽくって、セツナイわ！」

節子が、熱い息を吐きながら、喘ぐように言った。

その前夜

このY軍港には、不思議に敵機は姿を見せなかったが、空襲警報は毎日のように不気味に鳴りひびいた。

朝、節子を送り出した後、律子は、何日か図書館に通って「切腹」や「武士道」に関する事を調べあげ、それを刻明にノートした。

吉村れつ、溝口よしなどをはじめとして、多くの女性たちが男も及ばぬ見事な切腹を遂げている事もその時に知った。そして、そのような記述を見る度に、律子は抑え切れない興奮を覚えた。

そのような時、律子は、家に帰ると仏壇の

前に座して、そっと腹を寛げ、木造り短刀を腹に押し当てるのであった。

八月に入り、広島と長崎に相次いで特殊爆弾が炸裂し、ソ連軍が満州の国境を越えたというニュースが伝えられた頃から、律子は後始末を始めていた。敵が上陸して来たら、直ぐにでも切腹できるようにしておくつもりであった。その日は意外に早く来た。

八月十五日 正午。

終戦の放送を、律子は、隣組の人々と一緒にAさんの家の庭先で聞いた。

そよとした風もなく、真夏の太陽が真上から照りつける時間であった。

不明瞭な放送ではあったが、それが敗戦の告示である事が解った時、異様な静寂が辺りを支配し、やがて、その静寂を破って、こらえかねた嗚咽がもれ始めた。

律子は、身じろぎもせず立ちつくしていた。不思議に涙は出なかった。

——敗けたのだわ。戦争は終わったのだわ。律子は、自分に何度もそう言い聞かせた。しかし、実感は湧かなかった。それは余りにも唐突な出来事であった。

つい昨日まで「一億玉砕」と教えられ、最後の一兵まで戦うのだ」と聞かされ、戦局の悪化にもかかわらず心の底のどこかでは「神州の不滅」を信じていた律子にとっては、急に「戦争は終わったのだ」と聞かされても直ぐには実感とならないのは当然の事であった。

勿論律子は、敵の上陸を期して腹を切るつもりであった。しかしそれは、生きていて手足まといになるよりとは思って、その時期を選んだのであって、律子にとっては、夫への追腹は、同時に「護国の願い」を込めた身代りの切腹でもあったのである。

家に帰った律子は、暫くの間、気抜けしたように座り込んでいた。

夫の苦しみも、自分の苦しみも、そしてこの戦争のために流された幾百万の人々の血も涙も、今は総てが無になったのだという空虚さが心に重く沈んでいた。

その空しさの中で、律子は、初めて夫にめぐり合った日から今日までの歳月を思い起していた。

胸をときめかせた愛情の日々。夫のたくましい胸に体を埋めて女の悦びと羞恥にふるえた初夜の床。——夫の発病。そこから始まった果てしない苦悩の日々。そして病床の夫に

追腹を誓ったあの日――。

それは僅か数年の歲月ではあったが、律子にとっては歲月では測る事のできない重さをもっていた。これまでの間がとも永かったようにも思えたし、ほんに瞬間のでき事のようにも思えた。しかし、自分にとっての総てであった最愛の人を亡^{うしな}った今は、これ以上生きていて仕なければならぬ事は何も残ってはいなかった。しかも戦いに敗れ、その夫の死さえも無になった今となっては……。律子はすでにその生涯を生き尽してしまったのであった。

「――あなた、律子はお側にゆきます。ごらんになってね。笑われないように、きつと見事に切腹して見せますわ」

律子は、夫の遺影に頬をすり寄せてそう言った。青白かった彼女の頬に血がのぼり、涙が一筋頬を伝った。

律子は、切腹を明日の早朝に、と決めて、最後の用意にとりかかった。かねてこの日のために心掛けていたつもりではあったが、いざとなってみると、しなければならぬ事は以外に多かった。明日のために必要なもの以外は取りまとめて整理し、残す必要のない物は焼き捨てた。そして家の中の隅々まで念入

りに掃除を済ませた時は、時計はもう五時を回っていた。

節子が帰って来たのは、律子が、最後の入浴のためにと、風呂に火を入れていた時であった。

「――お姉さま！」

節子は、入ってくるなり、律子の体に身を投げて哭いた。

「負けたのね。とうとう……」

節子は、しゃくり上げながら、なおも激しく泣き続けた。

「死ぬわ。節子、立派に切腹してみせるわ」

律子は、その肩をやさしく抱き、髪をなでてやった。

「わかったわ。ね、一緒に……」

律子がそう言うと、節子は、泣きじゃくりながら大きく頷いた。

やがて節子は、漸く泣きはらした顔を上げた。

「お姉さま、切腹、いつなさるの」

「あすの朝、早いうちに……ね、あなたも自分の持ち物を整理なさい」

「ハイ」

節子は、泣きはらした眼に微笑を見せて立ち上った。

律子は、風呂の炊き口にしゃがんで、薪を足した。火は音を立てて気持よく燃えた。

律子は、その赤い火の色に落城の城を包む炎を思った。そして、その炎の中に、城主と共に潔よく腹を裂いてゆく奥方や、姫や、腰元たちの白い腹を彩ってゆく血潮を思った。耳をすますと、腹を裂いてゆく女達の切ないうめきが聞えるような気がした。

「――お姉さま」

いつの間にか節子が側に立っていた。

「整理は済んだの」

「もう少しなの。でも、困ったわ。明日、何を着てしたらいいかしら」

「わたしのを貸してあげるわ」

律子は、先になって居間に入り、タンスの引出から自分の白無垢を出して渡した。

「まあ、勿体ないわ」

節子は嬉しそうに白無垢を体に当てて見ていたが、ふと心配そうな顔になって言った。

「でも、お姉さまは？」

律子は黙って洋服ダンスを開けて見せた。そこには、手入れの届いた海軍将校の夏の軍服が一着だけ掛けてあった。

「お兄さまの軍服」

律子は頷いて見せた。

「まア、男装のはらきり！」
憧れを込めた眼で見上げる節子が、律子にはまぶしかった。

やがて二人は、仏間に、腹切りの座をつくった。仏壇の前に毛布を二つ折にして白木綿で巻いたものを二枚横に並べ、その後、屏風をめぐらした。次いでそれぞれの席の前に三宝を置いて、その上に、左に懐剣、右に白鞘の短刀をのせた。

「節子さんは、この懐剣を使つてね」

節子は頷いて、そこに坐り、押し戴いて懐剣の鞘を払った。磨きすまされた紫色の焼刃が匂うようであった。

「切れそうだわ」

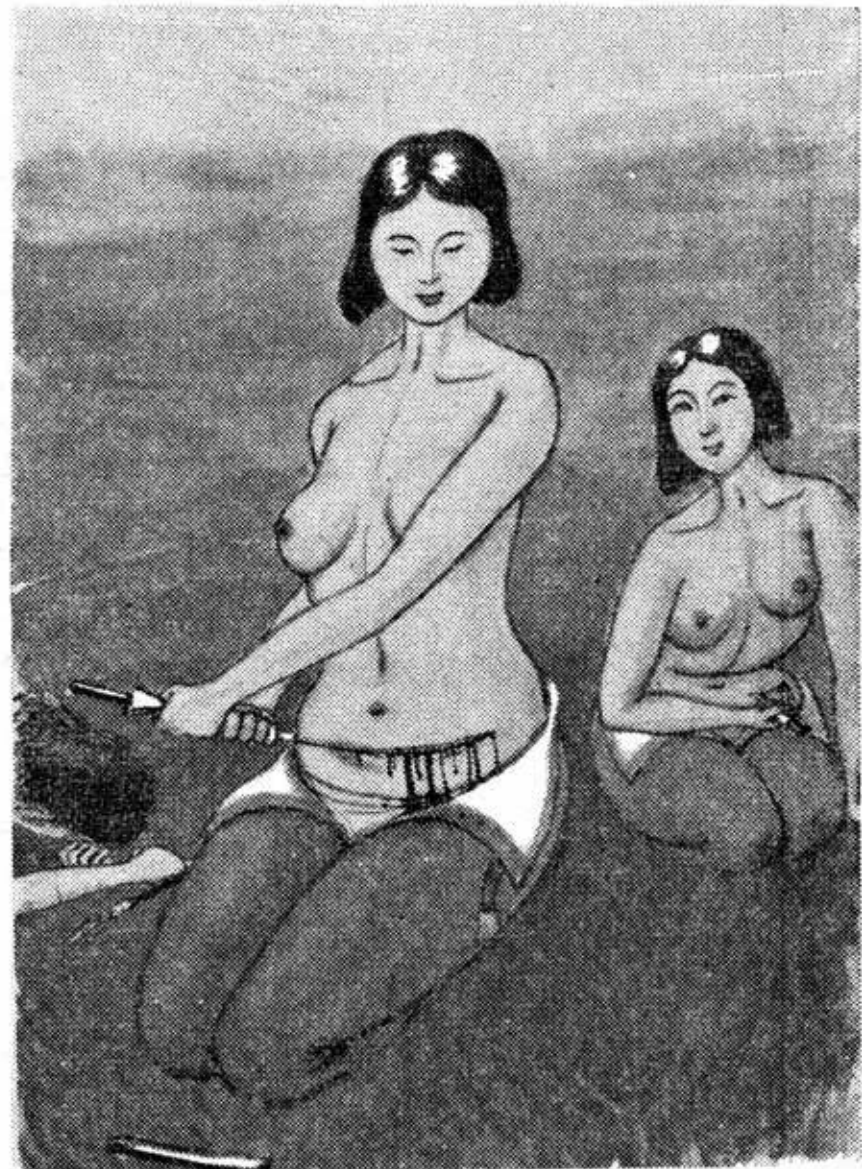
節子は魅入られたように刃に見入っていたが、ふと気付いたように顔をあげた。

「——お母さまのお形見？」

律子は頷いて

「無銘だけど、よく切れるわ。節子さんに使つて頂こうと思って研ぎに出しておいたの」

節子は、感謝の眼で律子を見上げた。



「——節子、きっと、立派に切るわ」

律子は、やさしく、大きく頷いて見せた。

二人は、軽い夕食を済ませると、机に向つて遺書を書いた。悲しいのではなかったが、これを読む人の事を思うと、書きながら涙があふれた。心を込めて封をし宛名を書くといよいよ明日は死ぬのだという実感が胸に迫った。

二人が、最後の入浴のために湯殿に入ったのは、九時を少し回った頃であった。

二人は、死後誰に体を見られても恥かしくないようにと、体の隅々まで入念に洗い合った。

律子は、節子の背中を流してやりながら、しみじみとした思いでその体を見た。すんなりと伸びた背中から、円やかに肉づいた腰の張りにもまだ異性を知らない乙女の清らかさが匂うようであった。

——この人は、女の悦びも知らないままに心の夫に殉じて明日は腹を切るのだ。こんなに美しく、清らかなままに……。

そう思うと、律子の胸に切ないものが、こみ上げてくるのであった。

「——節子さん。今まで、ほんとうに何もしてあげられなかったわね。ごめんなさい」
しみじみとした思いで律子はそう言った。
ふと気付くと、節子の肩が小刻みにふるえていた。

「お姉さま、いや！そんな事おっしゃって。節子こそ、わがままばかり……」

その声が急に涙声になり、振り向いた顔が濡れていた。

「——お姉さま」

「節子さん」

二人は、ひしと抱き合った。

——かわいいひと！

律子も、円やかな節子の体を抱きしめて泣いた。

しばらくして、泣き止んだ節子は、

「お姉さま。節子のこと、心配しないで。節子、ちっとも悲しくなんかないの、あすは、お姉さまと一緒におなかを切るのね。ようっく見てね、節子のせつぷく」

律子の耳許で甘えるようにそう言った。

律子が大きく頷いて微笑んで見せると、

「節子ね、きつと、立派に切腹できると思うわ。今まで、何度もひとりでお稽古したの」

節子は、そう言って、そつと愛しげに自分の腹をおさえるのであった。

「——節子さん、切腹好き？」

律子は、思わずそう尋ねてしまってハッとした。口にしてはならない事を言ってしまったと思ったからだだった。

節子は、パッと顔を赤めてうつむいた。

「好きよ。せつぷく、好きになってしまった

の。あの時から」

消え入るような声でそう言う節子を、律子

は、そつと抱いてやった。

「——いいのよ。恥かしい事なんかないわ。

わたしも、せつぷく、大好き」

「……………」

節子の手が、律子の体にかみついた。

二人の吐く息は熱く、二人の手はお互いの体をまさぐり合った。

「セツナイわ、お姉さま。節子、早く、せつぷくしたい！」

節子が喘ぐように言った。

律子とて思いは同じであった。叶う事ならこの場で腹を掻き切ってしまいたいという衝動に駆られた。しかし律子は、漸くにしてその衝動に耐えた。

「あなたの切腹、あすは、ようっく見てあげるわ。ね、それまで……」

熱くささやく律子に、節子は、その胸に顔を埋めたまま、コックリと頷いた。

二人は、そのまま動かなかった。ピツタリと寄せ合った肌をとおして、二人は互に相手の体の温みを感じ、その体内を音高く流れている血潮の熱さを感じていた。無限に時が流れていくように思われた。

二人が最後の夜の床についたのは、九時過ぎであった。

律子は、その床の中で、明朝の予定を話した。

切腹は、誰も訪れる心配のない時刻、即ち五時までに済ませる。そのために、起床は三時。寝具を整理し、浣腸をすませ、身体を清め、最後の装いをして切腹の座につく。

「お浣腸もするの？」

「そうよ。おなかを切った時、苦しんで粗相するといけないから」

「まア……」

羞しそうに頬を染める節子に、律子はちょっとためらったが、思い切って言った。

「それからね。おなかを切る時、あそこから粗相しない？」

節子は、ちょっとした間、もの問いたげに律子の顔を見つめていたが、急に耳まで真赤にして眼を伏せてしまった。

「お姉さま、知っていらっしゃったの。節子のこと」

消え入りたような声だった。

「わかるわ。わたしも、そうなの」

「まア、お姉さまも」

節子は、まじまじと律子を見つめ、それか

ら漸く安心したように、溜めていた息を吐いた。

「よかったわ、節子だけじゃなくって。節子心配していたの」

律子は、手を伸ばして、やさしく節子の手を握った。

「安心できて？」

節子は、まだ恥かしそうに頷いた。

「それならお話するわ。ガーゼを当てて、丁字帯で押えるといいわ」

「でも、節子、新しいのが……」

「心配しなくてもいいのよ、あなたの物も新しく用意してあるの」

「ありがと、お姉さま。節子、恥かしくて言えなかったの」

節子は、うるんだ眼に微笑を見せて、握られた手にそっと力を込めた。

「それじゃ、もう休みましょう。あすは早いよ」

と律子が言うと、節子はもう一度そっと律子の手を握りしめて、

「おやすみなさい」

と、童女のように言った。

初めて灯火管制の解けたこの夜、外にはまだ灯のもれている家が多かった。

女はらきり

(一)

朝三時、目覚しの音で律子はめざめた。

横を見ると、節子はまだ安らかな寝息をたてて眠っていた。

律子は、蒲団の上に坐って眼をつむった。

——いよいよ今日のだわ。切腹！

感傷は湧かなかった。身のひきしまる凜々しい感情だけが胸を占めていた。

律子は、これから切腹までの間にしなければならぬ事を、手ぬかりのないようにもう一度思い返してみたら、静かに節子と呼び起した。

二人は、先ず寝具の始末をすると、それぞれに浣腸をした。節子はその時、恥かしそうに頬を染めたが、ためらいは見せなかった。

次に湯殿に入って、心ゆくまで何杯も水を浴びた。冷たい水の感触が火照った肌に快よかった。冷えてぷりぷりと緊まってゆく肌の下で、清らかな熱い思いが凝固していった。

体を拭き終えた二人は、どちらからともなく体を寄せて、ぴったりと裸身を合わせたまま暫くは動かなかった。

「いよいよ、せっぽく、ね」

「りっぱに、いさぎよく」

二人は、顔を見合わせると、熱い思いを込めて微笑み合った。

二人は、最後の身仕度にとりかかった。律子は、自分の体に合うように仕立て直しておいた夫の軍服に身を固めると、節子に手伝わしてもらって、髪を解き、耳のすぐ下の辺りで短かく切った。その方が軍服には似合うと思ったからである。

「まア！」

節子の口から、声にならない声もれた。髪を切り、軍服に身を固めた律子は、それ程凜々しく美しかった。

節子は、白無垢を着て、巾の狭い白地の帯を細腰の辺りに締めた。

すべての用意が済むと、二人は手を取り合った。

「節子さん、思い残す事はなくって？」

「ないわ何も。ただ、りっぱに切腹したい」

節子は清々しくそう言い切った。

二人は、手を取り合って仏間に入った。

仏壇には、健二郎の写真と並べて、小さな靖夫の写真が飾られてあった。

「——あなた、いよいよお側に行けますわ。お約束のとおり、女ながらも腹を切ります。」

律子の切腹、ようつくごらんになってね」

仏前に焼香し、律子は心の中でそう言っ
手を合わせた。写真の中の夫が、微笑みかけ
ているようであった。

律子が済んでも、節子はまだ手を合わせて
いた。

二人は、向い合って腹切りの座についた。
短い沈黙の時間が流れた。

二人の眼が合った。

「では——」

低く抑えた律子の声に、節子は頷いた。二
人は静かに切腹の用意にとりかかった。

律子は、上着を脱いで後ろに回し、ベルト
をゆるめ、シャツの釦を一つ一つゆっくりと
外して前を寛げ、パンティを押し下げてふく
よかな肌を惜しげもなく広くむき出した。

節子も、帯を太腰の辺りに締め直すと、ゆ
つたりと広く肌を押し開いた。

息づまるような沈黙の中で、二人の若い匂
うのような肌が切なく息づいていた。

「お姉さま、お先に！」

節子は、ためらいをふり切るように言っ
て懐剣の鞘を払った。

「待って、わたしが先に」

律子は、節子をおし止めると、三宝の上の

短刀をとって、静かに鞘を払い、切先を二寸
余り残してキリキリと白布を巻き、逆手にと
った。

「わたしが先に一文字に切るわ」

「お姉さま、節子に先に切らせて。節子、仕
損じるといけないから」

「大丈夫よ、深くは切らないわ。あなたの切
腹見届けないうちは死ねないもの。わたしが
一文字に切ったら、あなたの切腹見せてね。

その後でわたしは十文字に切るわ」

「でも、お姉さま」

なおも心配そうな節子に、律子は微笑んで
みせて、

「大丈夫よ、切腹、ようつく見て」

そう言いながら、左手でしっかり押えた腹
を見下した。

——今こそ、この腹を、切るのだわ。ほん
とくに切腹するのだわ。

夫への殉死を誓った日から、切なく待ちこ
がれたこの瞬間——。

さすがに胸の高鳴るのが、ハッキリと判っ
た。律子は、呼吸の度に切なく盛り上る腹部

をしっかりと抑えて息を整えた。

やがて、律子は左掌でサラサラと腹部を愛
しむように撫でさすり始めた。

節子は、まばたきもせず、食い入るよう
にその手許を見つめていた。

律子は、左掌をぐっと引いて腹の皮を張っ
た。短刀が光った。節子は思わず眼をつむっ
た。

「ウッ！」

発止とばかり、律子は腹に刃を突立ててい
た。重く腹の底に届くような鈍痛であった。

「アッ！」

思わず、節子の口から声が漏れた。

刃を浮かせて見ると確かに切先は五分余り
腹に食い込んでいた。手頃な深さであった。

「切るわ、見て！」

律子は、低く抑えた声でそう言うと、息を
止めて、深くもならず浅くもならないように
注意しながら、臍下一寸の辺りのふくらみを
真一文字に、ジリジリと割いていった。

ゾリッ、ゾリゾリッという肉の切れる切な
い感触と共に、鮮烈な痛みが腹いっぱいに拡
がってきた。延びてゆく切口は少しずつ口を
開け、沸々と血を滴らせ始めた。

——腹が、腹が切れている！こ、これが
せつぷく！せ、せつぷく！

律子は、われとわが腹を切り裂く感動にふ
るえながら、夢中で刃を引き回していった。

「き、切ったわ！ 見て、見て！」

傷は浅かったが、腹いっぱい、尺余にわたる割腹であった。

「お、お姉さま！」

節子は、ひしと律子の膝にしがみついて、キラキラと燃える眼で、真一文字に血を吹く割腹の跡を喰い入るように見つめた。

「まア！ こ、こんなにりっぱに切れて。りっぱよ、りっぱなせっぷく！ お、お姉さま、苦しくない？」

節子の声が喘いでいた。

律子は、腹の底の方から拡がってくる狂おしい迄の情感に切なく身をよじった。

「お姉さま！ 今度は、節子がせっぷくー」
泳えかねたような節子の声に、律子は漸くわれに返った。

節子は、自分の席に戻ると、手早くしごきで膝を縛り、右手に懐剣をとりあげ、左手で腹をおさえた。

律子は、用意して置いた巾広い繻帯を手早く傷口に巻くと、節子の斜前にすり寄った。

節子は、腹をながめて切るべき部位を確かめているふうであったが

「脱ぐわ、じゃまになるから」

独り言のように、そう言って、衿に手をか

け、肩をすくめるようにして、するりと両肩を抜いた。

匂うような裸身であった。やや上向きの双の乳房が固く凝って、その上にバラの蕾をそえたような乳首が、ふるえるようにツンと立っていた。

節子は、更に帯際をグイと押し下げ、むっちりとした白い下腹の臍下深く露わにした。緊張に白く冴えた節子の顔に、微かな羞恥が動いた。

「お姉さま、ようっく見てね、節子のせっぷく！」

節子はそう言って刃を持った手を膝の上にのせると、左掌でしっかりと腹をおさえた。節子の呼吸につれて、彫りの深い臍が切なげに喘えいだ。

律子は、喉がからからに乾くのを覚えた。

節子は、左掌をぐっと脇に引いてしっかりと腹を抑え、その張りつめた左の脇腹にピタリと刃を当てた。

律子がハッと息をつめた時、口許をきゅっと引きしめた節子は、

「ウッ！」

絞るような気合と共に、発止とばかり刃を突き立てていた。

だが、弾力を秘めた乙女の腹は、グッと凹んでそれに抗した。見ると、刃は、切先が僅かに隠れる程にしか入っていなかった。

「——浅いわ」

節子は、そう呟くと、ちょっと考える様子であったが、直ぐに懐剣に左手を持ち添えてグーッと押し込んだ。

遂に刃は二寸近くも深々と腹中に没し、刃のまわりにじわじわと血がにじんできた。

「切るわ、見て！」

節子は、叫ぶように言いざま、横へ、真一文字にキリキリと刃を引き回しはじめた。

節子のやわらかい腹は刃に引っ張られてよじれながらジリジリと切り裂かれていった。

ぶりっ、ぶりぶりっ！ 身のすくむような音と共に切なく延びてゆく切口に、チラッと白い肉が見え、忽ち沸々と血潮が溢れ、タラ

タラと腹を染めて流れ始めた。

だが、刃が腹の中ほどにさしかかった時、節子の手がぶるぶるとふるえだした。

「ウウッ」

歯をくいしばり、顔をしかめて節子は呻いた。

「しっかりして！ ひと思いに切るの！」

節子は、コックリと頷くと、懐剣を握り直

し、二、三度喘ぐように荒い息をしてから、大きく息を吸って止め、ギューと血の出る程唇をかみしめた。

「ウウッ！ せ、せっぷく！」

節子は、せり出すようにした下腹の上を、渾身の力を込めて、ギリギリと一気に刃を引き回した。

ぶりぶりぶりっ！

見事であった。刃は節子の意志どおりに、そのふくよかな下腹部を真一文字に深々と切り割いてしまった。

「き、切ったわ！ お、お姉さま。見て、節子の、せっぷく！ せっぷく」

節子の腹は、臍下一寸の辺りで八寸余りも大きく笑み割れてドクドクと血を吐き出し、切口には、薄黄色い脂肪層が血をはじいて妖しく光っていた。

「い、一文字、こ、これで、いいのね」

節子の青白く冴えた額には、脂汗がじっとりと浮かび、ハア、ハアと喘ぐ度びに、肩も胸も、腹も大きく波打った。

「み、見事よ、見事な切腹！」

律子は、哭き出した思いで言った。

節子は、血の気の引いた頬に切ない微笑を見て、

「き、切るわ！ 十文字に……」

と言ひ、震える手で腹の刃を引き抜くと、刃先を下に持ち直して、みぞおちに当てた。だが、手がふるえて、なかなか切先が定まらない。

その時律子は、もうこれ以上この切ない腹切りを見るのに耐えられない思いになっていた。これ以上苦しむ節子を見るにしのびなかった。律子は、思わず節子の手を抑えた。

「苦しいんでしょ、もう、いいわ。見事よ。見事な切腹！」

だが節子は、首を横に振った。

「いや！ 止めないで。ち、力の、かぎり、き、切って、見るわ！」

節子は、口惜しそうに歯がみして、グーッと大きく息を吸って腹に力を入れた。腹がふくらみ、傷口が大きく一寸程も口を開けた。

その時、思いがけない事が起った。その大きく口を開けた傷口から、血潮をはじいて、ムクムクと、生き物のように腸がはみ出して来たのである。

「あ！」

節子は、懐剣を投げ出し、両手で、あふれ出してくる腸を押えた。

「は、はらわた。はずかしい！」

節子は、羞恥にパッと頬を染め、わなわなと震える手で、必死に腸を傷口に押し込むのであった。

律子は、そのいじらしさに声もなく哭きながら、これで節子の切腹は終りだと思った。

「節子さん、介錯するわ！」

律子は、節子の腹を割いた懐剣をとりあげて、しっかりと握り直した。

「い、いや！ お、お姉さま。切って！ 十文字に、十文字に！」

節子は、漸く腸を押し込んだ傷口を血みどろの手でしっかりと抑えながら、哀願するように律子を仰いだ。

瞬時、律子は迷った。

「お姉さま、は、早く、早く切って！」

もはや逡巡してはいられなかった。律子は涙をふるって、血に濡れた切先を、ピタリと節子のみぞおちに当てた。

「切るわ！ 息を抜かないで！」

節子は、嬉しそうに頷くと、ぐっと背筋を伸ばして、大きく息を吸って止めた。しっかりと傷口を抑えている手が震えていた。

「ウッ！」

律子は、思い切って節子のみぞおちに刃を突立てると、一気に、そのやわらかい腹を真

直ぐに切り下げた。新しい血がしぶいた。肉を割く手応えの切なさには手がしびれそうであった。

刃は正中線を深々と切り割いて、臍に達した。臍は、この若々しい肉体の内に秘められた「生」への執着を示すかのように、引き下す刃に抗してグーッと縦に切なく伸びた。

「ウウッ……ウームッ……」

泳えに泳えた呻きが節子の唇を割った。

刃は、遂にブツリと臍を切り、割いて一文字の切口に合した。節子が必死に抑えていたにも拘らず、切口の下縁は、刃に押されて切なく口を開いた。

律子は、思わず眼をつむって、夢中で切り下げた。

「き、切れたわ！ 切れたわ！」

律子は、節子の耳許で叫んだ。

「う、うれしい。き、き、切れたのね。十、十文字に……」

節子は、眼を開けて、見事にも十文字に切りさばかれた自分の腹を確かめると、かすかな微笑みをもたらして、崩れるように律子の腕に身をもたせかけて激しく喘いだ。

節子のふくよかな腹は、大きくざくろのようには割れてドクドクと血を吐き出し、喘ぐ度に大きく波打った。

「み、見事よ。みごとな、せっぷく！」

律子は、泣きじゃくりながら、節子の耳許に口を寄せて言った。

「節子……うれしいの……せ、せっぷく……せ、せ、せっぷく……」

律子は、ひしと節子を抱きしめた。

「節子、も、もう……力が無いの。おねえさま。ゆ、許して。は、はらわたを……」

「はらわたを……出させて！」

見ると、節子が必死に抑えているにも拘らず、その傷口には再び腸がはみ出し始めている。もう、それを抑えきる事は不可能のようであった。

「いいわ、出しても。本当の切腹は、はらわたを出すのよ。恥かしくなんかないわ」

節子は、安堵したような微笑を見せると、燃えるような眼で腹を見つめながら、傷口を抑えていた手の力を抜いた。たちまち傷口は大きくゆるみ、そこから待ちかねたかのように、生き物のような腸がムクムクとあふれてきた。

節子は、わなわなと震える両手で、膝の上にあふれ出た腹わたを掴んだ。

「こ、これが……わたしの……は、はらわた……！ ……う、うれしいわ、節子、こ、こんな、りっぱに切れて。……靖夫さん……見て！ ……せ、節子のはらわた……。節子は、お腹を、切ったの。……お、女ながらも、せっぷく！ ……あ、あなたの妻、妻としての、せっぷくよ。ほ、ほめて……りっぱだって、ほめて……」

身をくねらせ、肩で大きく喘きながら、仏壇の靖夫の写真に語りかける節子。その声は見事に腹を切り終えた誇りと悦びにふるえていた。

律子は、その健気さに泣きながら、仏壇から靖夫の写真をおろして節子の手に持たせてやった。

「や、靖夫さん！」

節子は、ひしとそれ掴み、ふるえる手で頬に押し当てた。

その眼がうるみ、涙があふれた。唇がわなわなとふるえたが声にはならなかった。

律子は、こみ上げてくる鳴咽を必死にこらえ、声なく泣きながら、ひしと節子を抱きしめた。

「お、お姉さま。もう眼がみえないの、か、介錯して……」

やがて節子は、息も絶え絶えに、そう言う

て眼をつむった。その血の気のすっかり退いた顔には、苦痛を越えた安らぎが浮かんでいた。律子は、左手でしっかりと節子の肩を抱き、右手の刃の切先を、その白く凝った右の乳房の下に当てた。

「待ってね、わたしも直ぐに行くわ」

節子の顔に、チラッと微笑が浮かんだように見えた。

律子は、祈る思いで右手に力を込めた。

「ウウッ……」

節子の体が、消え残っていた生命を証しするかの様に激しく痙攣した。

律子は、節子の手を懐剣の柄に副えさせると、その体をそっと俯伏せに倒してやった。

白い背筋をのべた節子の体の下に、血汐が音もなく拡がっていった。

節子の体は、それから暫くの間、時々微かに痙攣していたが、やがてそれも動かなくなかった。

律子は思わず深い息を吐いた。大きく割けて血汐を吹いていた節子の白い腹の切ない悶えが眼底に焼きつき、激痛に耐えながら自分の腹を切りさばいてゆく節子の悩ましい呻きが、まだはっきりと聞えるような気がした。

「——節子さん、切なかったわ。あなたの切

腹！ わたしも直ぐにゆくわ、あなたに負けないように、きっとりっぱに」

律子は、乱れかかった節子の髪を直してやりながら、まだ温みの残っている節子にそう語りかけた。目の前に節子の死を見ていながら、まだそれが信じられないような思いであった。今にも、節子がむっくりと顔を上げて「お姉さま」と、甘えるような笑顔を見せてくれるような気がしてならなかった。

(二)

律子は、涙でくずれた化粧を直し、もう一度髪に櫛を入れると、再び腹切りの座についた。

傷口に巻き締めた繃帯には、あふれる程じつとりと血がにじんでいた。

律子は静かに繃帯を解きはじめた。殆ど痛みは無くなっていたが、それでも繃帯がすれる度に、身の縮むような痛みが走った。最後の一卷を解き終ると、今まで血で温められていた傷口に朝の冷気が沁むようであった。

一文字の切口には、薄黄色い粟粒のような皮下脂肪が、押し出されるように盛り上っていた。

律子は短刀をとると静かに眼をつむった。思い残す事は何も無かった。今は、ただ、立

派に腹を切りたかった。節子が見事に腹を割いて果てた今、万が一にも自分だけが切り損じて羞しい姿を晒してはならなかった。

——女ながらも、見事な十文字腹を。

それは祈りに近い必死の思いであった。律子は、ギョッと唇を噛みしめると、右手も短刀に持ち添えて、傷口の左の端に切先を当てた。ドキッ、ドキッと高鳴る心臓の鼓動がはつきりとわかった。

一度、二度と静かに呼吸し、三度目に大きく息を吸って腹をふくらませた。

「ウッ！」

プツリと突立てた。既に腹皮の切れている傷口は思った程の抵抗もなく、刃は二寸程も深々と腹中に没した。腹の底に届く重く熱い痛みであった。

——このまま引き回せばいいんだわ、ひと思いに！

律子は、自分の腹を見据えながら、もう一度大きく息をすると、膝を割り、腹をせり出すようにして、右へ、もとの傷口の上をギリギリと引き回していった。

灼熱の激痛であった。分厚い布地を割くような重い手応え、ゾリゾリゾリッという肉の切れる切ない感触。

「ウ、ウウッ……ウームッ……あ、あなた、み、見て！……り、律子の、律子のせ、せつぶく！」

ともすれば浮き上りそうになる刃を必死に抑えながら、律子は漸く臍の真下に至るまで刃を運んだ。眼もくらむような激痛が襲って来た。

——切腹って、こんなにセツナイ。

律子は、震える手で腹の刃をしっかりと抑えながら、思わず呻いた。

新たに切り割いた傷口は大きく笑み割れ、パツクリと深い創口を見せながら、その奥から滝のように血をしたたらせていた。

——もう半分だわ。一気に切らねば。

律子は、刃をしっかりと握り直すと、血のにじむ程唇をギョツと噛みしめた。

「ウ、ウッ……ウームッ！……」

渾身の力を込め、腰を左に大きくひねるようにしながら一気に刃を引き回した。

ぶりっ、ぶりぶりぶりっ

すばらしい切れ味であった。律子のふくよかな下腹部は大きく真一文字に口を開けた。

「切った。ついに切ったわ！」

思わず律子は叫んだ。

尺余の傷口には、皮下脂肪があふれるよう

に盛り上り、その奥から腸が、はみ出してきていた。吹き出す血潮に下腹は一面の血であった。

——これが、わたしの切ったお腹。すばらしいわ。一文字の切腹はこれでいいのだわ。力の無くならないうちに、早く十文字に切らねば。

律子は憑かれたように、下腹から刃を引き抜くと、刃を下向きに持ちかえて鳩尾に押し当てた。

だが律子は、そこで、ふと手を止めた。鳩尾から真直ぐに、ちょうど臍を通るように切り下げるのは困難な事のように思われたのである。どうしても臍を切りたかった律子は、思い直して、切先を形よく凹んだ臍窩に向けた。そして、押し込むように切先を臍窩に吸わせていった。ジーンとしびれるような感覚が腹一杯に広がった。

下腹部の切傷の痛みは、どこかに消え去ってしまい、今は、このしびれるような感覚だけが体の総ての部分を支配しているように感じられた。

「あ、あなた。あなた！」

律子は、思わず、膝をすり合わせ、身をよじって喘ぎながら、夢中で更に深く刃を吸わ

せていった。切先は確かに二寸程も臍窩の中に没し、刃のまわりには血がにじんで来た。

一文字の傷口からは、すでに腸が下腹一杯にあふれ、ぬめぬめと光り輝いていた。律子は、しびれるような恍惚感の中で、今、自分と夫とが一体となっているのを感じていた。

——これが、わたしのはらわた。このお腹の中で、夫を慕ってもだえ続けていたわたしの生命なのだよ。これこそ、腹切りの苦しみで購った、わたしの愛の証しなのだよ。あなた、御覧になって。これ、こんなにはらわたがもだえています。わたしの切ない心のように。あなた、待ってね、律子は、いま直ぐに！

律子は、肩で大きく喘ぎながら、ぶるぶる震える手で、もう一度しっかりと短刀を握り直した。

「ウームッ！」

全身の力を集めて切り下した。だが、あふれる腸が邪魔になって、刃は一文字の傷口に合したところで止ってしまった。

「——どうしよう、まだ十文字にはならないわ。そうだわ、下から」

律子は、刃を引き抜くと、血に濡れたパンティを深く押し下げて、そして、もう夢中で刃を押し込むようにしながら、最後の力をふ

りしぼってギリギリと切り上げた。

切れたノと思った時、クラクラッと目まいがした。律子は、腹の刃を抜き捨てると、両手を前について、漸く体を支えた。止めを刺そうにも、もう力が無かった。律子は、弱っ

た視力で腹の切り傷を確認した。

確かに腹は十文字に切れていた。それは、ぼんやりとほの白い肌の上に真紅の大輪の花が美しく咲き誇っているように見えた。

——切ったのたわ。遂に仕遂げたのだわ。

十文字の切腹ノ。女ながらも見事に。

かすんだ意識の中で、律子は、これで恥かしくなく死ねる、と思った。

ぐんぐんと深い暗い所に引きずり込まれていくような感じてあった。

新版Mフット

新人S女性出現

股挟み

略号

(あと) 女の逞ましい股に、がっちり挟まれた男の顔。

大手札印画紙焼付

四枚一組 一〇〇〇円

素足の脂

略号

(あて) 女の美しい素足をべっとり顔の上にのせられた男。

大手札印画紙焼付

五枚一組 一二〇〇円

ムチの威力

略号

(あさ) 縛った男をムチを揮って意のままに料理する高慢な女。

大手札印画紙焼付

十枚一組 二〇〇〇円

人間便器

略号

(あす) トイレの中で女の便器の代

用となり下った男の顔。

大手札印画紙焼付

十枚一組 二〇〇〇円

蠟涙の洗礼

略号

(あせ) 女に蠟涙を全身に浴びせられて悶えている縛られ男。

大手札印画紙焼付

四枚一組 一〇〇〇円

尻の下顔

略号

(あた) 女の尻の下に押しつぶされて、うごめいている男の顔。

大手札印画紙焼付

二枚一組 六〇〇円

海老しばり

略号

(あそ) エビ縛りで苦しんでいる男を意のままに弄ぶ女。

大手札印画紙焼付

六枚一組 一四〇〇円

神酒授与

略号

(あち) ネクターを直接口へ与えられてる男の幸福。

大手札印画紙焼付

六枚一組 一四〇〇円

股責極楽

略号

(あつ) 女の股でがっちり咽喉輪を押さえられている男。

大手札印画紙焼付

四枚一組 一〇〇〇円

足舐と嗅香

略号

(あこ) 女の素足を舐めさせられ、その香を嗅がされる男。

大手札印画紙焼付

五枚一組 一二〇〇円

顔面騎乗

略号

(あう) 男の顔の上に、どっかと豊満なお尻を据えた女。

大手札印画紙焼付

七枚一組 一五〇〇円

人間犬の芸

略号

(あえ) 首輪とくさりとムチで厳しく芸を仕込まれる犬男。

大手札印画紙焼付

十枚一組 二〇〇〇円

女の尻と顔

略号

(あく) 女の巨大なお尻によって押し潰された男の顔。

大手札印画紙焼付

三枚一組 八〇〇円

足指の饗宴

略号

(あの) 女の足の指に挟んだお菓子を口でいただく縛られ男。

大手札印画紙焼付

二枚一組 六〇〇円

男を縛る女

略号

(あに) 男を縛り上げて自由を奪い恣に弄った末屈伏させる女。

大手札印画紙焼付

十枚一組 二〇〇〇円

尻責股責

略号

(あぬ) 女性の最大の武器尻と股とで男の顔をむちゃに責める。

大手札印画紙焼付

十枚一組 二〇〇〇円

S
M
カ
メ
ラ
・
ハ
ン
ト

………
／＼続・小原真澄の巻
………

「岩 壁 の 裸 女」

辻 村 隆

七月十五日——今日も暑かった。金曜日なので多少の用件もあったが、それを犠牲にして、マスキの誕生日のこの一日を、私は彼女と過すつもりで日をあけておいた。

午前七時——。通勤者と学生で混雑する近鉄八尾駅前、その混雑を避けて駅の外れで車を止めて私はマスキを待っている。

正直いって、彼女と会おうとするこの瞬間まで、私は今日の目的地をきめかねていたのだった。マスキは泳ぎたいという。その条件を充たす、車の一日の行程は、琵琶湖か和歌の浦か、少し伸ばして若狭湾、志摩半島から鳥羽といったところが可能行動半径だが、そ

の個所を思い浮かべても、野外緊縛フオトの出来そうなところは一寸思いつかなかった。釣りブーム、マイカーラッシュで、今日此の頃は鄙びた果てにも、人の渦が巻き、車が走っている。人里離れた山峡の遊泳の地となつてくると、当今容易には見付からない現状である。

泳いだあと、旅館の一室で撮るのでは、余りにも曲がなさすぎるというものだ。とつおいつ迷った挙句、きめかねて私は、免も角マスキに出逢ってから、なるようになるつもりでいた。

あれ程以前から、今日の日を愉しみにして

いたマスキのことだから、必ずやってくる確信はあった。私は車のうしろにすみこんできたポットをえんぴを伸ばしてとり、よく冷えた麦茶を一杯、一気にのむ。

カーラジオで朝のミュージックをきくともなしに聞き流していると、人並みを縫って小走りになるマスキの姿が私の視線に流れた。

車を降りて手を上げる。逸早く認めて彼女は忽ち満面に笑みをたたえて勢いよく駆けて来た。

「おじさん！ おはよう。待ちだった？」

「いや、ほんのさっき着いたところさ。今日はバカに綺麗だね」



「大きに。この服おろし立てやの、どう、よく似合います?」

マスマは濃い目のグリーンワンピースにとも柄のネッカチーフ。ワインカラーのハイヒールに純白のビニールの大きな編袋をさげ腕には私のプレゼントした腕時計を、バンドを白に変えてはめたいで立ちだった。やや調和を欠いたたちでも、全身にみなぎる若さが、その異和感を見事に吹っ飛ばして鮮やかに成熟した娘のスタイルがそこにあった。マスマは心得た調子で、私の左に席を占める。

「お誕生日おめでとう。でもいいかね、誕

生日を一日中私とつき合って……」

「かめへんわ。毎年誕生日やいうても、別段とり立てて何もせえしません。精々お母ちゃんが赤御飯たいてくれる程度やもん」

マスマの家庭は至って庶民的らしい。となれば私も気がラクというものである。

「何処へ行く? まだ行先も考えていないですよ」

「おじさんの行くところならどこでも構へん。でも泳ぎたいなあ、ウチそのために、セパレートの水着はりこんで買ったんよ」

「和歌山まで行くと泳げるが、えらい人混みだしネ。鳥羽から志摩へ行くともなると泳い

でなら、一寸日帰りはシンドイなあ」

「泊っても構へんわ、おじさんさえよかったら……」

マスマはケロリといったのけた。一泊は流石に親娘程年が違うだけに憚られたが、マスマにこうもあっさりいわれると、年甲斐もなく私の血はヒタヒタと躍り出した。一層この際羽目を外して泊ってやろうか。この若い娘は、或いはそれを希っているのかも知れない。私の腹は突嗟にきまった。よしッ、その気になってやれ。

「じゃあ腹をきめた。志摩半島へ行くとするか——」

「ウワツ素敵、きつとそうくるだろうと思っただわ。ウチきつとそう言わはると思って、二日間有給休暇とったんよ。あしたは土曜日でしょう、その次日曜日、だから二日位かめへんわ。ほんなら早よ出発しましょ」

「ビックリシタナーモウ。いいのかい家の方?」

「そうね。ほんなら一寸電話で呼び出してもろて、お母ちゃんに、そういっとくわ」

幾分ズベ公めいた過去があるから、大胆卒直、決断が早い。この若いマスマに私は早々に振り廻されている。

駅前の公衆電話でダイヤルを回しているマ
スミは如何にも屈託がない。どうやら呼び出
してもらっているらしい。何か喋べっていた
かと思うと、もう駆け戻って来た。

「氣いつけていってきいて……」

「私のこと言ったの？」

「何が悲しいと言わんならんの。阿呆やな、
おじさん！そんなこと正直にいうたら、アカ
ンといわれるにきまつてるやないの。会社の
お友達ら四人で、ドライブして、泳いで、キ
ャンプしてくるって言うたんや」

洒々といったのけると、啞然とする私を尻
目にしてマスミはさっさと車に乗り込んだ。

これがハイティーンの現代娘というもので
あろうか。今更の如く、私自身しみじみと時
代のズレを感じずにはおられなかった。当人
はいつまでも若い氣でいる筈の、このプレイ
ボーイも、マスミにかかつては、さっぱり型
なしである。

ハンドルを持った私に、マスミは弾みきつ
た声を投げかけてきた。

「おじさん——いっちゃようパーッと派手にと
ばしてや。レッツゴー——」

× × ×

あらかじめ行先や目的地をきめていなかった

たせいもあるし、精々一日ぐらいの行程のつ
もりだったから、生憎と地図をもって来なか
ったが、標識もあり、大体の見当もついてい
るから、カンを頼りに走ることにした。

河内の八尾駅前から、大阪、奈良間の国道
二十五号線に出ると、王寺を経由して天理へ
走る。時間が早いので停滞は少ない。機本の
インターチェンジから名阪道路へと入る。

「おじさん、ウチは泊ってもええけど、おじ
さんは構わないの？」

若いマスミが中年男の私の方を心配してく
れる。出掛けにカメラ・ハントをとるため少
し遠出するとはいっておいたが、まさか泊る
とは言っていない。まさかの時は、箕田氏を
ダシに使って三人で泊ったことにすればよか
ろう。幾ら理解のある女房でも、こんな若い
娘と二人きりで泊ったとすれば、心穏やかで
はあるまい。この道は先日、黒髪の乙女、菊
田アツ子と走った思い出のハイウェイだ。カ
ークラーも効いてきて、車内は快適——。

上野市のインターをこえる時、私は優雅な
菊田アツ子の緊縛のポーズを刹那脳裡に浮か
べた。車は、カーブと上り下りの多いハイウ
エイを、関のインター目指して走っている。

小原真澄は、まるで女学生の遠足気分だっ

た。早速袋からガムをとり出すやら、チョコ
レートを噛じるやら、缶入りジュースをあけ
るやら、次々食べることに忙しい。こうして
いると、まるで女学生気分が抜けきらない小
娘といったところだが、喋べる言葉にはひと
かどのプレイの味をしまった成熟した女の匂い
がブンブンとしているから妙だ。

「おじさん、ユリコ変ったわよこの頃。会社
やめてしもて、物凄く派手になってきたわ」
「そうかい。あの夜マスミと別れてユリコを
撮ったんだけど、あの時どうもしっくりゆか
なくてネ。遂々あれきりだよ」

「この間、ユリコにあった時、おじさんのこ
とを言いたら、余りよく言わなかったけ。悪口
言ったのと違うのよ。おじさんには余り興味
ないってたんだよ。あれから何度も、本屋の
人とシャシンとってるそうよ。知っていはる
の？」

「知ってるよ。私が紹介したんだもの。ユリ
コはユリコの行き方があるしね。マスミはマ
スミの行き方があるだろう」

「ウチはおツチョコチョコイやさかい、パッパ
ッしているように見えるけど、本当は案外純
情なんやし。ユリコは見掛けはウチよりおと
なしう見えるけど、大胆やわ、やることが」

マスキの言葉は意外に核心をついていた。確かにおとなしそうに見えるユリコが、プレイに対してはかなり大胆であるとの、箕田氏の話だったし、パッパッとして見えるマスキが案外世間知らずのネンネの面があった。

車は関のインターチェンジを折れて、津市に向っている。

「今もユリコと仲良しかい？」

「会社止めてから、余りもの言う機会あらへんけど、時々駅で、ヒョッコリ出会う時あるわ。この間一緒に喫茶店へ入って、面白い話きいたわ」

「どんなこと？」

「一寸言うの恥ずかしいなあ。あのネ、ユリコがこの前にシャシンとった時、その日は本屋の編集長の人、えらいきつうくくりはったんやて。ええ恰好やいうて、長い間くくってはあったらしいね。ユリコは辛抱強い方から、その間じっと我慢してたんやけど、くるのが強かったんで、縄のくくったあとが手首や腕や、脚や、それこそ体中一杯にカタがついて、なかなかとれへんねん。暑い時やしノースリーブの膝上十センチの服きていたでしょ。それで済んで別れてからも、縄のあとが全部はつきりと体に出てるさかい、電車

にのった時、男の人がようけじろじろ見はったそうや。あんまり恥ずかしいさかい八尾の駅までようのらんと、途中の布施の駅で降りたら、五十ぐらいのおっさんが、いつまでもユリコのあとからついてくるんやて……。怖わなあって、いっそ交番へ飛び込もか思ったけど、交番で、その縄のかた聞かれたら返事に困るさかい、交番へも行けず、半泣きになって走ってんやて……」

私の縛った過去のモデルの中にも、そんな経験はあったに違いない。別れたら、もうモデルの縄跡なんて、てんで念頭になかった私だったからだ。夏場の、しかも近頃の様露出傾向の服なら、さもありなん。緊縛の縄跡は容易に消えず隠しようもあるまい。私は黙ってウンウンとうなずき返し乍ら、その先をきこうとする。

「どうやら、うまいことマイたらしいんやけど、もうコリゴリやいうてたわ」

その人はユリコの縄目を見て彼女のあとを追ったのは、或いはプレイへの探求者であつたかも知れない。或いは奇クファンか——そんな詮索はどちらでもいいが、仮りに若し私が、そんな女性に遭遇するシーンがあるとすれば、私も亦、くだんの女性のあとを追っ

ていたかも知れない。

「もうコリゴリや言うて、それから……」

「えらい熱心やのネ。これから編集長とドライブするんや言うてたわ」

「じゃあ、チットも懲りていない」

「好きなんよあのコ、くくられるのが……」

「そう思う？」

「でも、好きやて自分で言うてたんやもの」

「縛られるのがかい」

「そうやわ、きつと。夏は薄着で他人に見られるさかい、いややけど、冬ならなんぼきつうくられても、差支えあらへんて言うてんやもの」

私は箕田氏の飼育ぶりをまざまざと睨に浮かべた。緩急自在、じわじわと否応なしにMに飼育してゆく彼の、モデルに対する執着はやはり彼ならではの手腕に違いなかった。

車は、いつしか伊勢路に入っている。内宮外宮の参拝は、どうも今の私達には些か縁遠い。勿体ないが省かせて戴いて、二見ガ浦へと走る。車の往来が激しくなり、もうスピードは出せない。先の車の尻にピッタリついて私は走る。

「マスキは縛られるのがキライかい？」

「そんなこと、好き嫌いで割り切れないわ。」



イヤな人
なら、ど
んなに言
われても
イヤやし
おじさん
なら何で
もさせて
上げる」
「ほう、
何でもと
は嬉しい
ね。それ
なら、海
辺で陽の
光を浴び
て、裸に
して縛る
がいいか
い？」
「いいわ
でも人が
見るでし
ょう。人
に見られ

たら、いややわ」
「そりゃ私だって叶わんよ。誰も居ないところだよ」

「そんなところある？」

ある？と聞かれて、突嗟に返事に困った。
それ程にマイカー族は絶え間なく走り、泳げ
そうな海岸は人の浪が渦巻いていたからだ。
「あればの話だよ。探すよ」

「ふーん、探すの。おじさんも好きやね」
マスマは感嘆ともつかぬ、ややあきれた声
をあげて、ニヤニヤ笑った。

私達は鳥羽で昼食をとった。ひっきりなし
に、間食してい乍ら、マスマはモリモリ食べ
た。羨ましい程に健康であり、それが美と
なって、マスマの体に若さをみなぎらせてい
た。

車を一時預けして鳥羽の水族館をのぞく。
大きな水槽に海女の実演があった。私はマス
ミにささやく。

「マスマをあの水槽にハダカで入れて、泳が
せて見たいね」

「エッチ——」

マスマは私の手首をギュッとひねった。
水族館を出て、私は内海の蒸気船をあやつ
る若い船員にきいた。

「志摩で、静かに泳げるところないですか」
「そうですね。海水浴場となると、どこもか
しこも人が多いですね。賢島や渡鹿野も泳げ
ますが、御座の白浜海岸なんか静かでいいで
すよ」

「そこに旅館があるのですか」
旅館は大していいのありません。英虞湾
を渡って浜島へ行くか、それとも少し伸ばし
て波切あたりですと、いいホテルもあります
が——」

船員は丁寧に教えてくれ乍らも、ジロジロ
と私達二人を見守った。親娘でもなし、とい
ってアベックにしては一寸という処の不審な
のかもしれない。

「車で行けるでしょうか」

「行けますよ。皆、車で飛ばしていますよ」
私は尚も精しく道を聞いて、御礼にピース
一個を渡した。

地図もない、出たところ勝負の運転が又つづ
いた。あなた任せのマスマはのんきなもので
ハミングを口吟んで、又ぞろガムを噛んでい
る。教えられた道を辿って鳥羽から鶴方まで
一時間少し。真っすぐ走れば賢島。左へ行け
ば浜島へ行く。左にとれば波切から大王崎に
出る。私は大王崎の岬に、目星をつけて走っ

た。三十分——。車を船着場で止めて一時預けし、磯の香の漂う陽盛りの石だたみを昇った。急な石段や坂がつづく。視界が開け、大王崎の灯台が聳えていた。入場料を払って灯台にのぼる。眼下に伊勢湾の荒波が白く岩に砕け波間に海女が点在して貝をとっていた。雄大な眺めに、しばしプレイの想念を忘れて水平線を眺める。マスマは物珍らしげにぐるぐると灯台の展望台を廻っている。

しかし、ここも人は多かった。マスマを全裸にして緊縛のフオトをとるなんてことは到底のぞめそうにもない。海水客が僅かの、浪静かな一辺を見つけては、近くの旅館から水着姿の僂とび出し色彩りどりの姿で浜辺をかけて行く。

「ああ、おじさん、早く泳ぎたいなあ」
マスマは、その群れに眼をやって俄かに初期の目的を想い出したかのように私の背をついた。

「ここじゃフオトとれないのよ」

「もうそんなこと、どうでもいいやないの。ウチ、はよ泳ぎたいわあ」

「浪が荒いし深いぞ。泳げるって、どれくらいなの？」

「五十米ぐらい」

「ダメダメ。それじゃもっと安全なところではないとダメだよ。じゃあ、とも角泳ぐところを見付けにゆこう」

私はそこそこに灯台を降りる。ブスツとしてマスマは私についてくる。もう駄々っ子のようになって、早く泳ぎたがっているのだ。波切から和具まで三十分、海岸べりに沿って走り、更に十五分許り走ると、いかにも漁村然とした御座につく。車の一時預けもなし白浜の海岸近くの凹地に車を置いて、私達は海岸に出る。既に三時を廻っている。

「じゃあ、ここで泳ごう。車の中で支度しようよ」

「泳いでいいの。わあ、嬉しい」

まるで子供のように嬉々とはしゃいで、マスマは私を尻目に車に向けて一散にかけていった。車に鍵がかかっているのに……。

車のシートの上で、不自由な姿勢で、私達は水着に換えていた。マスマは物怯しせず、次々と脱いでいったが、パンティ一枚になると、流石に若い娘の羞恥で、豊満な乳房を手で覆い乍ら、「おじさん、あっち向いてて。何ほ何でも、矢張り恥ずかしいやないの」

× × ×
防波堤をくだると、白砂がはだしの足に熱

かった。よしず張りののみもの屋や、キャンプ場が点在していて、海の水は蒼く澄んで美しかった。

腹部の露出したセパレーツスタイルのマスマは、一きわ際立った存在だった。泳いでいた若者や、中学生までがジロジロとマスマのフレッシュなスタイルを無遠慮に見守っていた。そのあとからカメラと、防水バッグ（中身は縄とバスタオル）をぶらさげて、腹をつき出し、ややたるんだ肌を見せて水泳パンツ姿で、のこのこついて行く私の姿は、誰が見ても、ボディガード役の親父然に見えたに違いない。

「おじさん、早く早く」

水しぶきをあげて、マスマはこらえ性もなく、既に水沫をけたてて飛び込んでいった。平泳ぎで、十数米、マスマはさも気持よさそうに遊泳していった。ビニールをひろげて、カメラ類を包み、波打際において、私ものそのと波間に入って行く。

「おじさん、眼鏡外さないとダメよ」

マスマは天真爛漫に叫ぶ。とんでもない、これを外すとメクラ同然。近視の私には、マスマの姿もさだかに見えやしない。いいからと私は手を振る。マスマはそんな私に両手で

水を浴びせかけ、キャアキャアいい乍ら、無心に抱きついてくる。ここまでくれば流石に泳いでいる者は少ない。五、六十人程度だろうか。ボートの若い連中が、興味深げに、私達の周りを、ぐるぐる漕ぎ廻っている。

その間にも、私は恰好の撮影場所を物色していた。防波堤のきれいな処から、小鳥が点在し、岩壁がつづいて、岬が突出している。その辺りに余り人影はない。

「あの辺りまで行って見ようか」

私の意図を察して、マスミは奇妙な笑みを浮かべてうなづいた。

「どうやら撮れそうな気がするよ。マスミはどう思う？」

「大丈夫そうね。泳ぐことは泳いだし、おじさんも喜ばせないと怒られるからな」

ペロリと舌を出して、渚をドンドンと躍るように走って行く。この無邪気と適当な悪戯ッぽさと新鮮さが、私は可愛いと思った。

岩肌を露呈して岬の辺りは、もう泳ぐものもなかった。足許に気を配り乍ら、白浜の海水浴場をあとに岬を廻ると人影もなかった。しかし、沖合のあちこちには、ボートや釣り船が点在していた。大きな岩に腰を降ろしてしばらく状況観察することにした。

「あらッ、ヤドカリやわ」

マスミは物珍らしげに岩の隙間を這うヤドカリを怖わごわ追った。岩の淵にうにが黒いとげをといでへばりついている。小蟹がチョロチョロと走り、岩間の海面を小魚が群れ泳いで行く。都合で育ったマスミにとっては、そのすべてが珍奇なものとして映った。

ここは愉しい夏の天国だ。快適の海は紺青に輝いて、太陽はギラギラと直射の光を投げかけている。水平線の遙か彼方にポツリと志摩半島が浮かんでいる。

この大自然を背景にして、私のこれからとろうとする緊縛のプレイの行為は、どうにも場違いめいて、チグハグなものに思えた。

SMのプレイは所詮、陰湿な一室での生産物なのであろうか。大自然の光景は、プレイしようとする者にとっては、余りにも眩しすぎた。

小原真澄は、無心に爪先でピチャピチャと水を叩き、小石を拾っては海面に投げ込んでいた。彼女にとっても、これからの行為は、成いは気分が乗らなかったのかも知れない。私はその時ハタと重大なことを忘れていた事に気付いた。マスミの誕生日のプレゼントとして準備しておいた、指輪を贈ることをすっ

かり失念していたのである。

「うっかりしていて御免御免——。マスミにプレゼントする気で指輪もって来たのに、渡すことをコロッと忘れていたよ」

「まあ、指輪を——。有難うおじさん、でも今頃思い出すなんて忘れン坊ね」

「年のせいかなあ」

「あれのことばかり考えていたからよ」

マスミは妖しい笑みを浮かべて首をすくめた。正にその通りかも知れない。今日の行先それに運転とマスミの会話。プレイフォトE TC。すぐ手渡すべきが今まで忘れていたなんて、確かに迂かつである。

「七月の誕生日知っている？」

「知らない」

「教えてやろうか——。ルビーなんだよ」

「ルビーって綺麗なんでしょ」

「紅玉ともいうからね。紅くキラキラ輝いて情熱と恋と純潔をあらわしているんだよ」

「まあ素敵、ええやないの」

「車においてある。とってこようか」

「ええわよ、あとで。ウチどうして御礼いたらいいの」

「御礼なんかいらないよ。その代り……」

「皆までいわんというて、分ってるわ」

マスミは、いきなり首っ玉に嚙じりついて来て、唇を押しつけて来た。ガムの香りと磯の塩っぱさが私の口中に匂った。

パツと唇を離すと、マスミはスツと立上り辺りを注意深く見廻してから、濡れて肌にピツタリとへばりついたセパレーツの水着を迅速にとった。

豊かな乳房が大きく波打ち、ぶるんぶるんと震えて喘いでいる。さっと大きな岩に飛びうつると、すくくと正面きって私の眼前にすべてを曝して立っていた。

「早く撮って、これでいい？」

壮大な伊勢湾を背景にした、あざやかな女体だ。私は突嗟に変貌したマスミの行動に、大慌てでカメラをとり出し、フィルムターをはめる手ももどかしく、この美の権化ともいうべき、マスミのヌードを、夢中で数枚とっていた。

私の血は忽ちにして騒ぎ始め、本来のSM探求者の姿にかえりつつあった。ほっと一息ついてとも角私はバスタオルを投げた。両手でうけとめて、あざやかにさっと身に纏うとマスミは艶然と笑った。女学生気分のぬけきらぬ天真爛漫の、あの先刻のマスミのあどけない肢態は忽然と消滅して、そこにあるのは

成熟したニンフとも見まごう鮮烈な女体が現出していた。

マスミの立つ岩壁のうしろ、十数米の彼方になんか大きな岩畳があった。私はそれを指さす。振返ってマスミはすべてを心得て、牝鹿のように跳躍し乍ら、岩畳に走る。

幸い辺りには全然人影もない。遙か彼方の波間に数そうの小舟がただよっていても、その釣人が、若しや遠眼鏡で私達の行為を窃視していたとしても、もはや私はやむにやまれぬ心情にかき立てられていた。

岩畳にマスミを押し転がし、馬乗りになって私を無慚とも思える力強さで、マスミに縄をかけていた。軽い抵抗があったが、それは尚更にSの血をかき立てて快かった。私もマスミも無言のパンツタイムが続いていた。カメラも手ももどかしく、前後左右から巖頭の裸女をとりまくった。

岩畳の上は防風林の樹木につづいている。その太い幹の一本が、台風直撃をくらって倒壊したのか、汐と風にまみれて朽ちて倒れていた。樹皮はとげとげしかった。私は容赦なく、マスミの後手の縄尻をとって、邪慥にその倒壊した大木の根っこまで引曳るようにしてつれていった。

太い横倒しの木に押倒すと、ぐるぐる巻きにマスミをそれに縛りつける。岩に当たって碎ける白い波頭が、波濤と共にマスミの足許をぬらした。

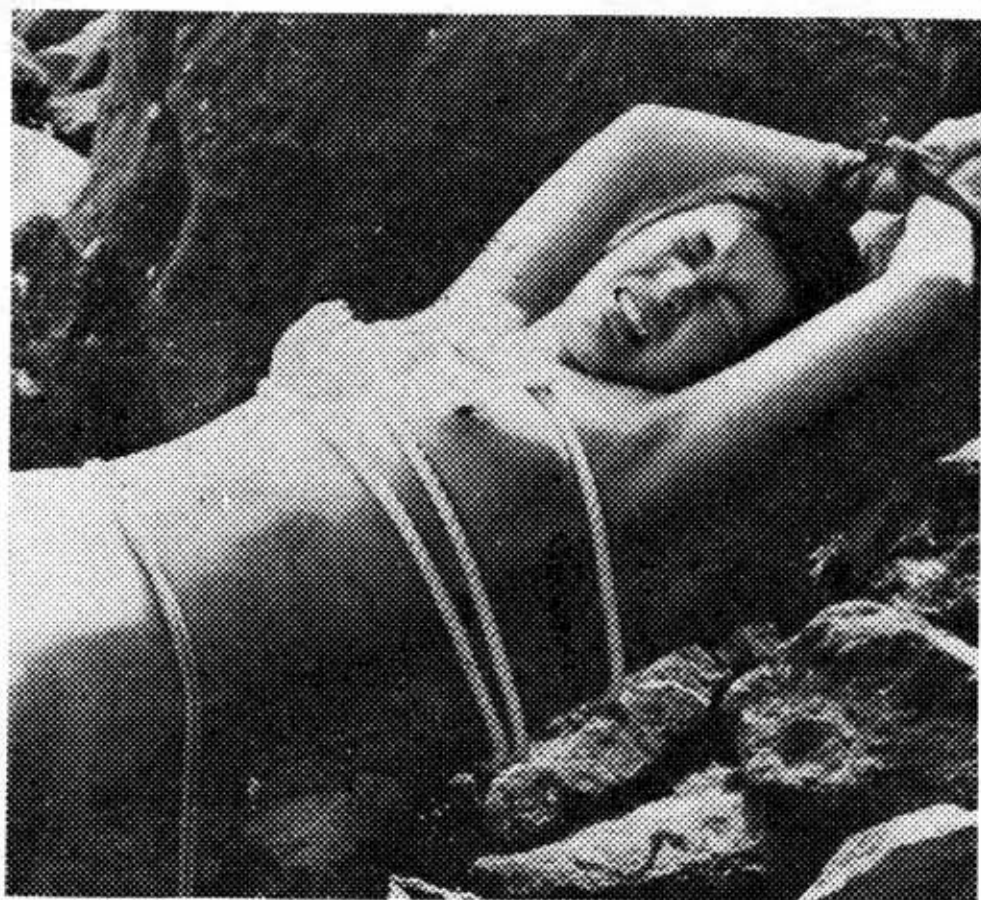
背中が樹皮に突きささって痛むのか、マスミは縛られて、しきりに体をうねらした。うねる女体に、突出した乳房が、別の生きものの様に、ゆらゆらと妖しく蠢めいていた。

「痛い？」

「背中が痛いわ。でも我慢できる」

「よし、えらい。じゃあ、もう少しだ」

私は私自身を励ます様に声をかけて、更にマスミの両脚を太い樹木を跨がせて、ダラリと下に垂れ下らせ、樹木の下で左右の足音を引きしめて縛り合わせた。両手は後手に縛った尽では縛りつけられないので放ってあったが、ついで両手首を縛り合わせて、頭上に引っ張りあげてざらざらの樹木にしっかりと結びつけた。身動き出来ない状態にして、カメラはこの無慚なマスミの姿を執拗にとらえていった。直射日光が、ジリジリと、濡れそぼれたマスミの皮膚を灼き、やがて肌の水分は蒸発していった。観念したようにマスミは眼を閉じていた。私の性向を知悉しているマスミは、泣かず、叫ばず、笑わず、私のなすが



俣に身を委ねているようであった。

「ほどこいてやろうか——」

耳許でささやくと、微かに首を振った。

「もっともっと、この俣、縛っておいてやろうか」

今度は少し強く首を振った。否とも応ともいえず、マスミは私の言葉のプレイに困惑しているようであった。

ぼつりとマスミが言った。そつと睨を開いて——。

「おじさん、マスミをくくるのが好き？」

「好きだよ。こんな若いマスミをこんな処で縛れるなんて、考えても見なかった。絶対だよ」

私は夢中で、縛ったマスミの女体を撫でなすり、唇を肌におしつけ、乾いた愛撫をつづけていた。私のなすが俣になつていたマスミが、ポツリと、呟やくように言った。

「もうほどこいて……抱きつけないもの」

× × ×

夕陽が水平線に沈む頃、私達は波切の高台の旅館の、海に面した一室で、徐々に茜に染まりつつ、暮れなずんで行く壮麗な岩頭の風景に、うっとり耽溺していた。

岩打つ波が眼下に、手にとるように聞こえる。潮の香をのせた、夕闇の微かな風が、快よく日焼けした私達の顔を撫でていった。

私とマスミはこの一室で、始めての夜を迎えようとしている。旅館の体裁上、私達は親

娘のようにとりつくろつてあるが、世慣れた女中の眼から見れば、唯の親娘ではないことぐらい、既に見抜いていたかも知れない。

夕食は新鮮な海の幸豊富な魚介の料理だった。すこぶる野趣があり、潮焼けした女中の顔と共に、南国めいた感が一入深く迫って来た。ビールをつぐと女中はそそくさと出ていった。或いは気をきかせたのかも知れない。私の契めに応じて、マスミもコップ二、三杯のビールをあざやかに呑みほしていた。

じかに浜へ通ずる芝生の一角に、夜目にも浜木綿が白く咲いているのが望見された。

「ウチ、おじさんこうしているの、何や夢見てるみたいやわあ」

うるんだ瞳で、茫洋たる大洋を望みながらマスミは私に体を持たせかけてきた。それはアプレ的な現代娘の姿のすっかり影を潜めた感傷にふける無邪気な一少女の姿でしかなかった。

「会社の慰安旅行で時々行くこともあるけどやかましいばかりで面白いことあれへん。大好きなおじさんと二人きりで、こうしてゆっくりおられるなんて、ウチ、最高に幸せやと思うわ」

それは少女の偽らぬ愛情の告白であるかも

知れなかった。

「私もマスマミが大好きだよ。正直で純粋で、しかもこんなに美しいからね」

「おじさん、これからもずっとつき合ってくれる？」

少女の口から出た「つき合ってくれろ？」という言葉に私は微笑をさそわれて、深くうなずいて、そっと肩を抱きよせた。

マスマミは中指に嵌めたルビーの指輪を、いとほしげに撫でさすりながら、ほてった頬を輝やかせて、私を振り仰いだ。

私は単なるプレイだけでは済みそうにもない、今夜の成行に内心不安だった。マスマミは恐らく私を拒まないだろう。むしろ積極的に身を投げ出してきた時……。それを私は怖れる。中年男の燃えたぎる欲望を抑制出来得る自信が私にはなかった。

「こんな機会は、そうざらにはないだろう。」

今夜プレイの緊縛やりたいがいいだろう」

「そんなこと、ダメ押さんかて、勿論その気でいるわ」

マスマミは当り前のことだと云わんばかりにニッコリした。

「じゃあ、少し散歩して見るか、面白い散歩をネ」

私はわざとマスマミの眼前でバッグを開き、二米ばかりの縄をとり出した。

海辺に面した硝子戸を閉め、カーテンを引くと、無言で、マスマミに縄をもって近づく。

「どないしはるの？」

「マスマミを裸にして縛って、その上から、この浴衣をきて散歩するのさ」

「へんなことばかり考え出すのネ、おじさんは——」

マスマミは素直に浴衣をぬぎ、ブラジャーとパンティをとって、ぬけぬけと私の眼前に屹立した。

首縄にすると見えるので、胸に縄をかけて豊満としか言いようのない見事な乳房を縄で挟んできつくしめ上げた。縄目から洩れ上った乳房はプリンプリンと堅く飛出してふくらみ、一きわふくらみを豊かに露呈していた。

胸で結び目をつくり、臍の辺りで更に胴をくびってしめつけ、股縄にして背中とめる。

その上からパンティだけをつけさせて裸身に浴衣をきせかけ、私達は暗い波切の海辺に出た。服が縄ですれるのか、稍々ぎこちなげに両脚を心持ち開いてマスマミはヒョコヒョコと飛ぶようにして歩いた。

「よくしまっているかネ」

「しまりすぎやわ。散歩しても、ちっともええことあらへんわ」

愉しかるべき夜の散策のひとつが、縄の強さで削減されるのか、マスマミは少し不気嫌だった。

激しい波濤の響きが、夜目にも白く波頭となって岩を噛んでいた。辺りは人影もない。

岩影に身をよせて、私はそっと手探りにマスマミのパンティをおろした。片足ずつ挙げて彼女は素直にぬいだ。腰紐をとき、浴衣をはがした。夜目にも白々と、マスマミの裸身が浮かび上る。腰紐で後手に縛り、私はマスマミの浴衣をいつでも着せかける状態にして手がかえ、片手で紐尻を握って、夜の浜辺を押し出すようにして歩かせた。

「撮りたいなあ、こんなマスマミを……」

呟やく私に、マスマミは振返り、

「好きネ」と一言笑った。

前方に影のようにアベックが浮き上る。私はあわてて後手の腰紐をほどき、フワッと浴衣をきせかけて、その場にしゃがむ。眼前数メートルのところを若い男女が手をつなぎ合わせた俤ゆるゆる通り過ぎる。女の肩へ腕を廻した男の手の先が、女の胸許の奥へかくれている。何をまさぐっているのか。

「ウチもええ恋人、はよ欲しいわ。おじさんは別やけど……。ウチ、もしも結婚しても可愛がってネ」

吐く息が匂うばかり唇をよせて、マスマは囁やき、私の手をとって胸許へ押し込んだ。「いやッ、痛いわ。そんなにきつう掴んだらあかへん。もっとゆるう……」

× × ×

尿意を覚えて、フト眼覚めると、既にカーテンを隔てて外界はうっすらと白みかかっていた。枕元の時計をたぐりよせて、仄暗いスタンドの光でのぞき込むと、午前四時半を少し過ぎていた。私の胸を抱くようにして、丸くなってマスマは健康な寝息を立てていた。昨夜おそく、わざと酔った声で家内に電話した虚偽が、淡い悔恨となって、胸をしめつける。箕田氏とモデルと三人同行で、志摩へ来ておそくなったと告げたのだったが。

妻が私の言葉を信じようが、信じまいが、もう行為は現実となって、朝を迎えようとしている。

マスマと一夜を共にして、遂に意馬心猿の私の心を押えたのが、糟糠の妻に対する、せめてもの私の良心であった。

私はマスマの瘦顔にやるせない愛情を覚え

ながら、昨夜から深更にかけての、激しいプレイの跡を静かに反芻していた。

夜の九時半まで夜気に打たれて私達は戻った。潮風にべとついた肌を再度浴場で洗い落とし、さっぱりした気分部屋に戻ると、私は又してもビールを注文した。体のことを考え普段はビール一本以上のまねように心掛けている私であったが、今夜はがむしゃらに羽目を外してのみたくなっていた。

三本のビールと突き出しをもってこさせ、グビグビやりながら、私はマスマをじりじり責め始めていた。フォートのためのプレイではなく、今夜はプレイそのものをゆっくり愉しみたかった。

「今夜は相当きつく縛っても、明日になれば縄のあとはとれているから、ユリコのような心配はないよ。さあ、おいで——」

テーブルを隔てて向い側に坐っていたマスマを招く。

「これ脱ぐの？」

マスマは悪戯っぽい眼で私の意図を窺うようにしながら、浴衣の襟を両手で開く仕ぐさをした。私はわざと鹿爪らしい顔になっとうなずく。

「もう女中さん、入って来ないかしら」

「用事がなければ、呼ばないと来ないよ。念の為、入口をしめておけよ」

うなずいて立上ると、彼女は入口に掛金をおろし、腰紐をといて惜しげもなく素肌をさらし、どきりと弾みをつけて私の傍らに身を投げ出した。

私は手を伸ばして床の間のバッグをとり、持参したロープをすべてとり出す。

快くビールの酔いが体内に廻り始め、露わな嗜虐の感情が全身にみなぎり始める。

小麦色に灼けた、圧倒されそうな若さの漲ぎった肌が眼の前に、私の緊縛を素直に待ち受けているのだった。

私はゴクリと生唾をのみこむと、やおらマスマのうしろに廻った。両手を背に捻じ上げるようにして高手小手に肌深く縄を喰い込ませる。胸に廻した縄の割れ目から、巨大な乳房が、それだけ別のいきもののように、桃紅色にいろづいて突出している。

両の脚首をつよく縛り合せて、このポリュームの塊のような、ピチピチした女体を膝に抱き上げる。すべてを私のなすが俣に任せきったマスマは、羞恥をかなぐり捨てた、かなり大胆な開放さで、私の膝上で豊かな軀をくねらせていた。

私はこの可愛いペットを片手で愛撫しながら、ビールをあけていた。

「どうだい、のませてやろうか」

と囁けば、甘えた口吻りで

「アーン」

と口を開く。

既に空になったビール瓶が二本、机上に並んでいた。フト悪魔めいた意図が私の脳裡をよぎる。私は憑かれたように空のビール瓶を握りしめていた。

現実に戻った部屋の窓辺は徐々に明るさを増していた。私は枕元のピースを一本抜きとると、ゆっくりと紫煙を吐く。仄暗い天井に煙はゆるめいて静かに立ち昇っていった。

マシミは未だ無心に、心持ち口を小さく



く開け、形よく並んだ白い前歯を覗かせて、スヤスヤと寝息を立てていた。彼女は枕元に転がっているビール瓶に眼をやって、私はまざまざと夜の痴態を憶い出していた。

寝返りを打ったマシミの体は、敷布団に大の字になった。その腕に手首に、胸のふくらみに、昨夜の名残りの、縄の跡が消えもやらずうっすらと残っていた。

浅い眠りの間、小休止していた嗜虐の感情が、眼覚めと共に再び感情も眼を覚して、又ぞろ疼き出していた。

そっと身をずらせて、散らばった俤になっていた縄をとり上げると、左右一杯に広げた両手を、胸前で組み合わせて、静かに前手縛りにして、縄尻は私自身の手首に巻きつけた。

半醒半睡の状態から、

やがてマシミはうっすらと眼を開いた。両手を縛られていることに気付くと、眼をつむって薄く笑った。

「おじさん、今何時——」

「夜明けの五時少し廻ったところだよ」

「ずっと起きてはったの？」

「ほんのさっき眼をさましたのさ」

「また、くくりはったの？」

「いけないかい——」

マシミはそれに応えず首を振った。粘ばった唇がしらずしらず重なり合い、私はいとおしく彼女の裸身を撫でさすっていた。

マシミはついに急に体をねじらせて、少しもだえた。

「どうしたの？」

しばしの空白があってから、彼女は私から顔をそらして言った。

「おじさん、ウチおシッコがしたいの」

「そう——、じゃあ、この俤つれていってやるよ。さあ——」

「イヤーン、おじさん一緒に行くの？」

「私もビールをのみ過ぎたのか、行きたくて仕方なかったところだ」

「ああ、かなわんなあ。おじさんにかかっては……」

マスマはあきらめて、のろのろ身を起すとはずみをつけて立上った。私は縛ってある両手の縄を引っ張って、前手縛りにしたままで部屋を出た。料理旅館なので部屋はトイレ付きではなかったのだ。静まりかえった廊下をヒタヒタと踏んで、トイレへと連れ込んだ。用を足す人もなく、トイレはしーんとしている。思い切って婦人用へ押し込み、扉を開くと、観念したマスマは、悪びれた風もなくしやがみ込んだ。

激しい音を聞きながら、私はつくづく芳野眉美の神経になりたいと思った。私は巻いてあるトイレットペーパーを長くきり破った。立上ったマスマは何を思ったか、私の顔を見てクスッと、おかしように笑った。

「何が可笑しいの？」

「いいことを思いついたの。この縄ほどいてちょうだい。今度はウチがおじさんをくくってトイレへつれていってあげる。いいでしょ。さあ、早く、早くしたらあ」

× × ×

今日も暑い――。

旅館の女中に見送られても、マスマはケロリとして、何事もなかったように澆刺としていた。旅館の土産物コーナーで買ってやった

真珠のネックレスが、早速これ見よがしに、マスマの小麦色の肌に白い白さを反映させていた。値頃からして模造真珠であったにせよ、若いマスマは、それを結構よろこんでいた。

「おじさん、もうこの戻帰るの？」

「ああ、そうだよ」

「なんや、ガッカリやわあ。もう一日ぐらい泊っていてもいいのに」

「仕事もあって、そうもいかんのだよ。又この次にしようよ」

「ウチ、この戻帰ってしても別れるのが淋しかったさかい、勝手なこと言うてカンニン」

真実、マスマは淋しげな顔を隠そうとしなかった。

既に陽の高くなった砂ぼこりの道を、私はかなりのスピードで引返していった。マスマは私に体をもたせかけ、一夜の憶い出を反芻して噛みしめているようであった。

「ウチはすごく楽しかったわ。おじさんも楽しかった？」

「ああ、楽しかったネ」

「ウチ、おじさんに何もしてあげられなかったけど……、ウチに何か出来ることあらへん？」

「あれで十分だよ。私は大満足だよ」

「せやかて、おじさんはウチのからだを欲しがらへん。ウチは男の人と泊ったら、誰でも体を求めはると思ってたわ」

「求めなくても、充分に私風に愉しんだのだよ。あれでいいんだ」

「誰も本当にしないやろな。でもおじさん、ビール瓶にはマイったわ」

「それを言うなよ」

「ウチ、おじさんに沢山お金使わせたけど、何もあげられへん。ほんまに悪いと思うよ」

「じゃあ、ほしいもののひとつ言おうか。マスマの今、はいているパンティ――」

「又そんなこという、エッチ！」

マスマは私の肩をポンと叩いて、大きく笑った。そしてモゾモゾしながら、シートに坐った俣の姿勢で、巧みにパンティをぬいだ。

「ハイ、これ――」

「本当に呉れるの？」

「こんな汚れたものでもよかったら。その代り大阪へついたら新しいのを買うてネ。でないとウチ、何ぼ何でもノーパンティでは歩かれへんもの」

汚れているから、体臭がにじんでいるから欲しいのだと言おうとして、私は流石に口に

出さなかった。S一辺倒と自他共に許す私にこんな傾向があったとは、我ながら意外であった。愛する者への執着が私をそうさせたのであるうか。

やや薄汚れた水色のパンティを、マスマはわざと私の顔の前でヒラヒラさせた。ハンドルを握っていた片手を離して、それをひったくると、私は照れ臭げに、大急ぎでズボンの中に押し込んだ。

車は有料道路の、志摩スカイラインを時速八〇キロで飛ばしている。

乾いたハイウェイのアスファルトに、逃げ水が現われては逃げ、又現われては消えていった。

突然、大きくしゃみ一発、マスマはややだらしない開き気味だった両脚をあわてて揃えた。更に又一発――。

「ハクショイ……。おじさん、裾の風通しがようて、大事なところが風邪ひくわ」

眼下にリアス式海岸の雄大な眺めを見下しながら車はぐんぐんスピードを上げてつつ走。この辺は標高何百米になるのだろうか、

いやに冷気が肌に感ずると思ったら、陸地側の谷底から、ぐんぐんと霧が立ちこめてくる。一瞬フロントガラスを囲んで、濃い乳白色のベールに包まれたかと思うと、忽ち雲霧地帯を抜けて紺青の青空が望める。

十数分か、二十数分か。通行料五百円の有料道路にしては、あつという間に通り返けてしまふあつけないさであったが、それだけ道路が快適だという証拠になるのだろうか。食べ疲れたのだろうか、マスマはこくりこくりと居眠りを始めていた。

(完)

【最新版】女体責写真五十粒選

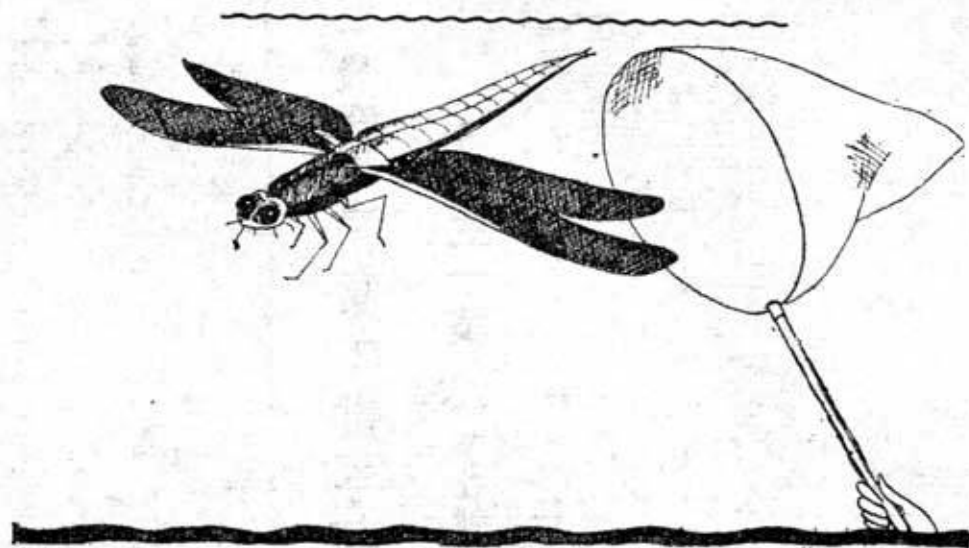
A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	七〇〇円
三十組三十枚	五〇〇円
四十組四十枚	三〇〇円
五十組五十枚	四〇〇円

A 5	亀甲強烈乳房縛り	(遠藤)
A 6	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A 7	豊満乳房いじめ	(遠藤)
A 8	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A 9	鼻責鼻梁いたぶり	(遠藤)
A 10	全裸後手高小手	(遠藤)
A 11	膨隆臀部さらし	(長野)
A 12	全裸正面強烈縛り	(長野)
A 13	うねる緊縛裸身	(長野)
A 14	色輝の開股しほり	(長野)
A 15	正面縛蛙股ひらき	(長野)
A 16	裸自慢縛りヌード	(長野)

A 17	正面アグラしほり	(長野)
A 18	正面大の字開股縛	(長野)
A 19	遅ましき裸しほり	(長野)
A 20	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A 21	両手前縛り髪首絞	(大塚)
A 22	両手吊り股間吊り	(桜井)
A 23	両手膝下しほり	(関谷)
A 24	淫れんする裸身像	(関谷)
A 25	両股縄掛け開股縛	(大塚)
A 26	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A 27	乳房晒し肉体自慢	(長野)
A 28	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A 29	投げ出した全裸縛	(長野)
A 30	捕われの全裸緊縛	(梨花)
A 31	羞らいの両股縛り	(大塚)
A 32	猿轡乳房いたぶり	(遠藤)
A 33	荒縄全身縛り豆絞	(大塚)

A 34	盛り上る乳房縄目	(長野)
A 35	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A 36	ムチ打悶えポーズ	(関谷)
A 37	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A 38	縦縄股間縛り正面	(関谷)
A 39	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A 40	くさり乳房責め	(長野)
A 41	強制片足挙げ責め	(大塚)
A 42	正面乳房くびり縛	(関谷)
A 43	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A 44	手吊りパンティ落	(絹川)
A 45	白バンド後手吊り	(東浦)
A 46	豆絞り高小手呻	(絹川)
A 47	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A 48	ガンジガラメ立縛	(愛川)
A 49	亀甲本縄股間縛り	(絹川)
A 50	立木縛竹棒責め	(桜井)



水 中 花

芳 野 眉 美

西 日

国電M駅は街の谷間にある。せまい階段を上って改札口を出、右の陸橋を渡ると、なかなか下り坂に沿って商店街になる。商店街の入口で細い道に右折し、谷間の八

本の白い線を見下しながら五分ほど歩くと、閑静な住宅街になる。

国電と貨物線の交錯するガード下で、連続強盗事件が新聞を賑わしたこともある。犯行は夜、犯人はアベックばかりを狙っている。目と鼻の先に駅前派出所がありながら、犯人

は不明であった。あまりにも周囲が暗すぎたのである。

このあたりの住宅は、武蔵野太古の密林を形成したといわれる、カシやシイの常緑闊葉樹の巨木が並ぶ自然園の裏にあり、うっそうと繁った森が庭々を囲んで、街路との視野をさえぎっている。森の樹木は、初夏から梅雨にかけて一雨ごとに化粧を直し、その装束を新にして眼を奪う。あざやかな緑は眼を射るほど美しい。

ある初夏の夕暮、スーツケースを下げた学生服の少年が、石門の表札を見上げて立っていた。学帽はかぶっていない。額にうっすらと汗を滲ませた少年の顔には、出入りのためではなく外部の者を寄せつけないために造られたと思われるような、部厚く閉ざされた門に対する当惑した表情がありありと見えた。

表札は、筆太に「鬼頭」とある。

少年は、長く続く石の塀に沿って歩き始めた。勝手口が何処かにあるはずであった。

泥榛よけのガラスの破片を顔に散乱させた石塀は、隣家と石畳を敷いた露路を境にしてやっと左折した。その露路の奥に勝手口があった。

少年は呼鈴を押した。が、足音は無い。少

年は勝手口の戸に手を掛けた。

開いた。

広大な屋敷であった。中世の豪族の屋敷跡がそのまま住居になっていて、今でも残る土塁が豪快に屋敷を囲んでいた。土塁に桜の大木が多い。

少年は勝手口から台所に廻った。かなりの距離があった。台所の戸を開け、

「御免下さい」

声を掛けたが、返事は無かった。屋敷全体がひっそりと静まりかえっている。

しばらくして、台所からそう遠くはない物置に、人の気配を感じて少年は耳を敏てた。

呻めき声が、聞こえたように、思った。

スーツケースを置くと、少年は物置に近寄った。

物置といっても、倉庫を思わせるような建物である。ここでは、何から何まで巨大であった。

戸は、閉められてある。

少年は、節穴に眼をつけた。そして、そのまま動かなかった。物置の中の、奇怪な情景が、少年の息を止めた。

全裸の女が、両腕を竹竿に縛られて、天井から吊り下げられていたのである。

まっ白な肉体に喰い込む荒縄が痛々しい。

が、女の顔はわからなかった。能面が女の顔をおおっていたのである。

その面に、少年は見覚えがあった。「羽衣」で優雅な月宮の舞を舞う天女の面であった。

清浄な神聖な増ぞうの面をつけられた一糸もまとっていない女体は、空間に静かにゆらいでいた。竹竿を吊る三つの滑車がきしむ。

ふくよかな丸い二つの乳房が、少年の眼を鋭く射た。

突然、西日が、物置の高窓を通して、全裸の女の肌に映えた。美しい体毛があった。

その瞬間、女体が大きくゆらぎ、下腹部の黒い繁みから、一条の白線が弧を描いて落下した。

西日に反射して、白く輝きながら……。

それがかなり長い時間だったか、短い時間だったか少年はわからない。

左右に開かれた女の脚は、そのまま動かなかった。西日の中に、一滴、一滴と雫が舞った。

物置の死角に、一人の謎人がうずくまっていたのに少年は気がついた。あわて、物置の節穴からはなれた。

「誰だ」

鋭い声がなかでした。

「そこに居るのは、誰だ」

少年は更にうしろに飛び去った。

物置の戸が開いて、着流しの老人が姿を現わした。その手に、竹の杖が握られていた。

「誰だね、君は」

と老人は少年に言った。その声に毒があった。

少年がこの時の老人の顔を、『道明寺』で見た異邦的な楽を舞う神がつけた悪尉あくじようの面に例えたのは、全裸の女体に増ぞう女の面おんながつけられてあった連想によるものと思われる。

「牧——」

少年は口ごもった。

「牧、二郎です」

「牧」

「奥様から、お手紙を頂きましたので」

少年は胸のポケットから、丁寧にたたんだ封書を取り出すと、老人に渡した。その手がかすかにふるえていた。

封書の裏に「鬼頭寿美麗」とあった。老人の顔が、わずかにほころんだようであった。

「君かね、寿美麗の遠縁にあたるという子供は」

少年はうなずいた。

「いくつだ」

「十八です」

「学生か」

「浪人です」

「浪人か」

老人はニヤリとした。始めて少年に見せた笑顔であった。

「わたしが、鬼頭三郎太だ」

古風な名前を老人は告げた。

「君の部屋は、台所の横に用意してある」

「お世話になります」

「うむ」

鬼頭老人は杖の先で、少年のあごを持ち上げた。

「見たかね」

物置の中を覗いたか、と老人は聞いているのだ。

少年は沈黙した。眼を伏せた。

「見なかったことにしておこう」

「――」

「今夜はゆっくり休みなさい。あとで風呂をわかさせよう」

鬼頭老人は、行け、という風に、杖を母屋に向けた。

少年は台所にむかって歩き始めた。足が宙

を浮いていた。全身汗びっしょりであった。

老人の姿が物置に消えた。

面

二郎は、はっとして眼を覚ました。

初めは朦朧としていた女体が、次第にはつきりした姿を現わし、突然緊縛を破ったまっ白な肉体は宙を舞い、二郎に襲いかかった。叫ぼうとしたが声は出ない。金縛りにあったように、二郎の身体は少しも動かない。空な眼が天井を睨むだけである。

二郎に被さった女の顔は、増ぞうの面をつけていた。

二郎を襲った女体は、老人に、竹竿に両腕を縛られ宙吊りにされていた全裸の女であった。

無抵抗のまま二郎は犯された。

眼が覚めて、下腹にどろんとしたぬくみと異臭に気づき、二郎は当惑した。夢精であった。

軽い夜具が、二郎のそれを刺激したものだろう。

あたりは森閑としていて、夢に驚かされなければ、二郎はいつまでも寝ていたかもしれない。駅前の車の洪水と騒音が嘘のようであ

った。

窓から朝日が射し込んでいた。

昨夜、老人が寝室に退いてから、やっと落ち着いたらしく、寿美麗夫人はケーキと紅茶を持って、二郎の部屋に來た。老人の夜は早い。二郎は風呂を浴び、老人と夫人と三人で食卓を囲んでいる。

「よく来て下さいましたわねえ」

切れ長の眼が、やさしく二郎に微笑みかけた。遠縁とはいいいながら、二郎は寿美麗夫人と自分がどんな関係にあるのか知らない。二郎の母親に寿美麗夫人からお手伝さんを依頼する手紙が寄せられたのが、二郎が上京する発端になった。お手伝いさんになる若い女性が多くなかなか見つからなかったからである。

「わたくし、二郎さんが赤ちゃんの頃を知っているのよ。女学生の頃、夏休に一度遊びに行ったことがあるから」

「ぼくはおぼえていません」

「無理もないわ。金時の腹巻ひとつで遊んでいたもの」

麻の葉模様の江戸小紋の細い柄が、アップのうなじもまっ白な寿美麗夫人に映えて美しい。おもわず上気した顔を、二郎はあわててかくした。そうでなくても、二郎の年頃は年

上の女性に弱いのである。

「お部屋とお庭の掃除を手伝ってもらえば、それでいいのよ」

夫人は二郎のこれからの役目を話した。

「広いですね」

「主人とわたしだけでしょう。お掃除だけで

限定版グラビア写真集

△美しき縛しめ▽第七集 愈々好評!! 残部少し!!

山原清子
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる

写真集

頒価一部一〇〇〇円 略号△美7▽

全部最近撮影の力作!

未公開の秘蔵写真集

刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉
ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊
縛フオトの結集版 (思わず息をのむ凄いポーズばかり満載)

このグラビア写真集の写真を撮影するため
に、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のよ
うに煩して特写しました。ここに収録したも
のは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。
山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素
晴しい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的
に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭
なピントのフオトに表現しました。殊に彼女
好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フオ
トの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げ
ました。このような稀有の文献資料は他では
二度と手には絶対に入らないという自負を持

っております。一般市販はいたしておりませ
んから直接発行所へお申込み願います。
△内容▽全裸の刺青を晒らす後手縛り。股
間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺
青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる
逆エビポーズ。乳房責めにうろたえる清子。
海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上
にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛
全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える
妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛り
にうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。
清子の身体各部のアップ。

くたびれてしまう」

三廻りも年下の寿美麗夫人は、鬼頭老人の
二度目の夫人である。死別した前夫人と同様
子供は無かった。老人に種が無かったのかも
しれない。このことは、上京するとき母親
から聞いて二郎は知っていた。老人と夫人と
があまりにも年が違いすぎるので、二郎が素
朴な質問を母親にしたのである。

「午前中に用事をすまして、午後から予備校
に行くようにして下さいな」

「はい」

「あとは、ちょっとした雑用とお留守番ね」

「わかりました。お世話になります」

「こちらこそ。二郎さんが来てくれて本当に
助かったわ」

二郎の夜具を用意してから、

「主人は老人だから気むずかしいけれど、思
ったよりやさしいから、こわがらないでね」
と二郎にいった。二郎は笑顔を見せた。

「じゃ、ゆっくりお休みなさい。明日は起こ
しませんから」

寿美麗夫人が去ってから、二郎は深い嘆息
をついた。物置の奇怪な情景が頭に焼きつい
ているのだが、それを口に出せなかったこと
である。夫人の態度にそれらしい様子は見受

けられぬ。宙吊りにされていた増の面の裸女が、寿美麗夫人とどうしても結びつかない。老人の特別な女なのかもしれないと二郎は思った。

——見なかったことにしておこう。という老人の言葉が重くのし掛かった。増の面の女は禁句であった。誰でもいい。

すべては白日夢の彼方にあった。二郎は起き上がった。

「洗濯物は、えんりやなくだすのよ」

と寿美麗夫人に言われたけれど、汚れたパノンを抱いていけるものではない。二郎は新聞に包むとスーツケースにしまった。あとでそっと洗濯するつもりだった。まだ勝手がよくわからない。

二郎は洗顔をすませて庭に出た。

庭の中央に浜形の池があり、スイレンが浮かんでいる。庭全体に手入れがいきとどなくて池も荒れているが、白砂を敷いた州は美しい。二郎は沢飛石を渡ってみた。

この池も中世からの名残りなのかもしれない。

植込みの前を細い流れが続き、センダンの木かげに、支那風の陶製のトンが置いてあった。

二郎は白砂のある庭園を、京都の天竜寺や大徳寺で見たことがある。雄大な背景を持つたこれら特別史蹟の名園は、あまりにも宋元山水画風になりすぎて、優美には違いないが子供心に何かなじめなかったことをおぼえている。違和感がそこにあった。

それらの名園とは、比較にならないだろうが、鬼頭老人の少し荒れた庭に、二郎は何故か親しみをおぼえたのである。

白砂の州の前に、母屋から長い廊下でつながれた離れの、庭への出口があった。窓から夜具をかたづけられている白い割烹着の寿美麗夫人が見えた。

離れは老人の寝室らしい。

廊下に沿って枝振りも見事な松があった。

敷砂をさけて、飛石づたいに二郎は離れに近寄った。

「寝すごしてしまつて」

「おなががすいたでしょう。お寝坊さん」

ほがらかな声がはね返ってきた。

「あんまり静かなものですから」

「朝食をすませてから、用事をおたのみするわ」

老人の姿は見えなかった。何処に出掛けたのかもしれない。

「老人の寝室には、調度品は何も無かった。書軸のかかった床の間に、蒼黒色の光沢を放つ水石が一つ置いてある。」

「石が好きなんですか」

二郎は掃除が続けている寿美麗夫人にきいた。

「御老体の趣味らしいでしょう」

「ええ」

「これはね、神居古潭石」

「——」

「北海道の旭川のそばに、神居古潭というところがあるわ。アイヌ語で、神々がいるところ、ということですよ」

「石狩川の石ですね」

銘があり、溪谷」。

その水石がすばらしい山水景体を思わせ、また神居古潭の溪谷でとれたから、そう命名したのだろう。

「能の面も御主人の趣味ですか」

「そうよ」

床の間をはさむ三方の壁に、能の面が飾られてあった。

左に、小面、石に慈童、床の間に面して磐若、増女の面は無い。

二郎はちらっと寿美麗夫人の横顔を見た。

増女の面をかぶった全裸の女体が、もし寿
美麗夫人だとしたら……老人の二号とか、愛
人とかでなく、寿美麗夫人だったら……なま
りにも刺激が強すぎる。

「さあすんだ。お食事にしましょう」
二郎はあわてて妄想をかし消した。

その夜、離れの渡り廊下を全裸の女が静か
に歩いていくのを、二郎は見た。

その時、二郎は妙に寝つかれなくて、池の
端に出、石に腰かけて、池を見ていたのであ
る。二郎はあわてて植え込みにかくれた。

女は何も着ていなかった。長い黒髪だけが

わずかに女の肌を、かくしているだけであっ
た。

その瞬間、二郎は息を止めて凝視した。
女が、可憐な処女の面といわれる小面の面
をつけていたのである。

全裸の女は離れに消えた。

(続く)

〔最近撮影新趣向分譲品〕

極鮮明印画紙焼付写真

柔軟二つ折緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
美木乃々子 略号(ぬに)

猿ぐつわ全裸縛り

大手札五枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号(ぬへ)

真紅腰巻着用縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号(ぬち)

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(つめ)

柱縛り全裸腎晒し

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(つま)

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(つも)

座禅縛り足吊り揚げ

大手札二枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(さは)

柱抱擁全身嚴重縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さけ)

足挙げ全裸正面縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さこ)

柱縛り臀部晒し

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さく)

柱縛り正面晒し

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(さき)

鼻腔煙草挿し責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号(ぬと)

鼻責めのアップ

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬは)

強烈縛り美貌翻弄

大手札八枚一組 八〇〇円
美木乃々子 略号(ぬほ)

開股高手小手逆吊り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(つぼ)

高手小手逆吊り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(つふ)

浣腸悦楽独リプレイ

大手札五枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の義味

大手札五枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)

縄に悶える裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(さひ)

全裸股間縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(さふ)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

相撲着用裸女艶姿

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
美木乃々子 略号(ぬわ)

六尺禪着用裸女艶姿

大手札七枚一組 七〇〇円
美木乃々子 略号(ぬお)

凄艶乳房責め

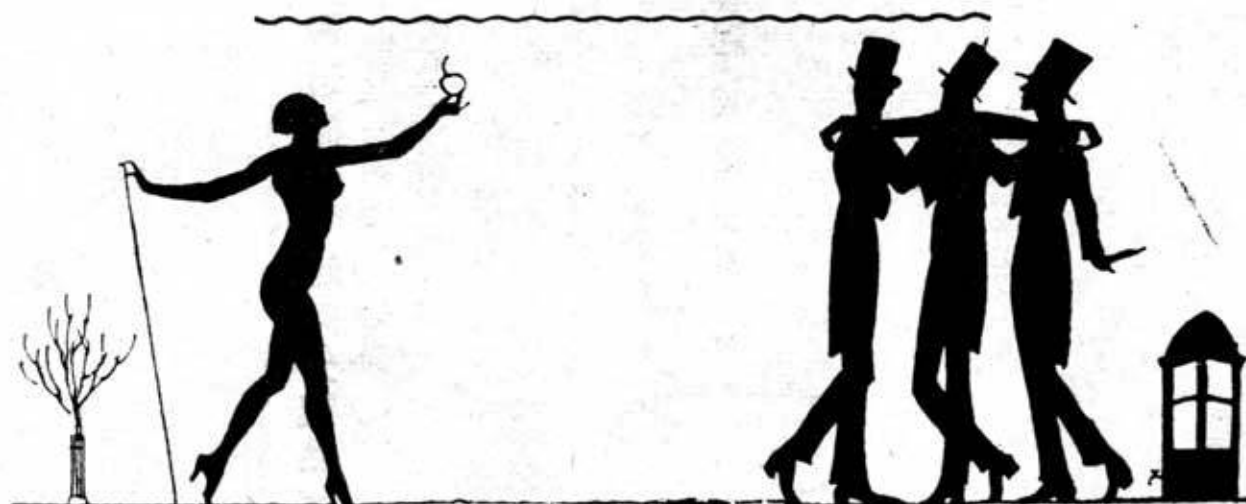
大手札三枚一組 三〇〇円
四方 清美 略号(きよ)

哀婉美貌女囚独居

大手札三枚一組 三〇〇円
柳 初子 略号(はつ)

両手吊りの美女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(けい)



〔中宮栄〕

奇譚雑談 「夜の徒然草」

既に二年の歳月が過ぎたが、編集者の御機嫌を一旦損じたとなると、縁故は旧に復さないうらしく、私の原稿は活字にならない。と言った、あきらめから私の方でもペンをとらなくなってしまった。然しその間「奇ク」から離れていたのではなく、依然として愛読者の一人として共に在った。

「奇ク」は一般書店では入手出来ない。私の場合は新宿まで足を伸して都電通りの書店、若しくは三越裏の店舗で買う事になっている。発行所へ直接に代金を添えて申し込めば「苦勞」ではないものをと人は言うかも知れないが、立ち読族の間に割り込んで頁を繰るのは仲々おつなものである。（ここにも隠れた読者がいるな）とにやつきながら、顔を覗いてみるのも愉快なものだ。

「御熱心ですね、お好きですか？」

私よりぐうんと年輩の紳士に声をかけた時慌てて奇クを書棚に戻した彼氏、私が他の同系誌と共々奇クを包装して貰い店を出ると、見えがくれしながら従いて来て、西武新宿の駅では改札を先に通過し階段の上でどうやら待っている様子、気の弱い人だなと思いつつ声を掛けてきたらお相手しようと思心楽しみながら、ゆっくり上りきると案の定「……失

礼ですが」と呼びかけてきた。

住居は驚の宮だと言い、団地住いのこと、「ああ、それじゃ近くでしたね、今は私、転居してずっと北へ移りましたが、駅前の喫茶店の常連でしたよ」

と言葉を交わすうち気持もうちとけて轟音の車内ではほとんど無言、降車駅のホームに吐き出されてからは、堰をきったように話はずむ。そして件の喫茶店へ誘い、誘われる事もなく吸い込まれて行った。

この紳士についての話は後にするとして、第六系統——即ちエロダクシオン専門上映館で封切られた（七月二十六日より）の「骨まで縛れ」に触れてみたい。

スリーエス三十六枚撮りのフィルムをつめてスクリーン盗み撮りにほのかな期待を抱いて観に行った映画だったが——奇譚クラブという副題が目にとまらなかったら、見逃していた作品かも知れない。何にせ最近映倫が厳しく倫理規定が本来の味を減失させてしまったから、内容に目新しいものが消えて、同時に「成人映画」に対する期待も消えたので、——遂に一度もシャッターをおすことなく終ってしまった。原作にある嗜虐性も凌辱感もとぼしく、僅かに縛りのムードをかもし出し

ただけ。脚本は原作者自身のようにでありながらも余りに粗末な作品であった。評論家ではないし、そのポーズをとる必要もないので単なる印象批評でしかないが、興味は山本昌平演ずるところのバーテンダーの露骨な下着フェチシスト振りであった。洗濯済みの干してあった下着を盗んで来た（台詞で説明）というが、泉に当る部分に顔を寄せかき抱くシンをサラッとやってのけたのは他に類を見ない。映画製作に当たっての苦心談（自己擁護のようだが）は、団氏が「鬼六談義」「日本三文映画」II奇ク二月号IIで記しておられるが、原作改悪が問題とされた前作「花と蛇」の方が私を喜ばせた。しかし、メインタイトルで奇譚クラブ連載「花と蛇」よりと現われた事で、「奇ク」誌が何パーセントかの新しき読者を開拓出来るとしたら、PRの実が他人の手に依ってなされたとしてよろこばしい。株で稼いでそれを本誌刊行の資金へくり入れるという箕田氏の苦勞が救えるなら、無断使用かどうかは知らないが、ポスターに書かれた五つの文字に驚かされた私も、見終って損したという気分を吹き消そうと思う。

【サロン掲載のプレイ・フォトについて】

須磨氏が若々しい愛妻相手の洋風アブ・フ

ォトを引提げての初お目見得を歓迎したい。俗に言う「アメリカン・スタイル」の責写真なら、劣情を刺戟すると「条例」大人が睨みをきかすグラビア問題も穏当に解決されるのではないだろうか、という気がする。見る頁もあってこそ、新しい風俗文献誌として、保存価値のある貴重性を増す事となるだろう。

須磨氏の好みと私とは共通性が伺われる。但しプレイ・フォトとしては物足りない。プレイという語感はどうしても動的である。緊縛という文字には拘束性が内在する筈だ。掲載二葉の写真共、自由に遊べる余地が残っているのは甘さがあっていただけでない。脚の何処かに「枷」なるものとか、「縛り」があったら……と惜しまれる。先輩格(?)の増田氏は更に徹底して面白。『みゆきの全身拘束具』の披露がコラムにあって黒の総革製を施術された夫人のフォトがあるが、これにはドキリとさせられた。スレーブマシンといい（夫妻対談「春宵一刻縛千金」四十年八月号）、首枷（SMカメラ・ハント「みゆきのバースディ」）などで増田氏のいたぶり振りは、そうした好伴侶がおられる事で誠に羨しき限りだが、それらの要素（小道具を使って）をとり入れた本格的な拷問シーンを

を演出される事をおすすめしたい。

今までに夫婦プレイを発表なさった方も数多いが、最近の小竹氏、新田英雄氏、新宮明夫氏、水野弘氏、そして博士号をお持ちになる程の先達辻村氏の諸氏と、アブ三昧のひとつきを過したいものである。その折、名を落して失礼したが、長田実氏を含めて、長田氏が辻村氏に紹介したという井沢嬢、又、強いマゾ傾向を示したという山本阿津子嬢にも再登場願ってパーティが催せたら素晴らしいものだと考えている。

【後援会の件】

山原清子嬢の後援会ニュースを茲しばらく目にしない。会員になり損ねた私だがその動静が知りたいと思う。提案として大塚、東浦両嬢の後援会設立の話があった（編集部日より「四十年十二月号」）が、その反応皆無——誌上において——であったような気がする。私の記憶違いかも知れないが、だとしたら残念だ。今更なにをと思われるかも知れないが得難いタレントとして両嬢に御活躍願う意味からも、後援会設立の再提案を試みたい。企画運営は慎重に且つ偏重せぬ様にし、世間的な誤解を蒙らぬ様努めるなら、奇クの外郭団体としての実益も計れるように思える。と

言っても、御当人が断然拒否されては、うたかたの夢ではあるが。

【読者交歓について】

切実なる願望を抱きながら、読者通信に投稿する人は矢張り何処かに『うしろめたさ』を感じているのだろうか。自分の事なのに、その呼びかけは消極的である。投稿もそれ一つの自慰的行為なら何をかいわんや、だが、自己の主張ならその責任において堂々と交歓を欲すべきである。編集子がその連絡欄で文通斡旋はしないと明言しているのにかかわらず、『住所は知らせてあります』とか、上位の所在地名のみである（これは編集方針のようだから仕方ないとしても）のは、その心が淋しい。尤も私などはアブノーマルな事柄に關してのカウンセラーを買って出る旨の文信に住所明記で投稿したりして、それが売買目的、三行広告的記事として忌避されたような経験もある訳だが、度び度び『編集後記』で言及されている辞句を引用すれば、○本誌の内容についての忌憚のない御意見はつとめて掲載するよう心掛けています。読者の手による読者のための雑誌をモットーにしている本誌の当然のゆき方であり、そのことによって益々本誌の型破りの雑誌としての真価が発揮さ

れるものと信じている。という次第で、読者の立場から言えば、或る精神の拠り所として「奇ク」を選び愛している以上、叶わぬ夢とは知りつつも、望みを捨て切れないうるのだし、無下に失望感を与えられる事には心痛むのである。従って、当編集部にかかわりなしと突放しての通信欄であるから、臆せず住所記名のあった分については地番名まで記載すべきだと考える。または××希望と分類して公開文は載せず、住所・氏名・年・性別のみ連記するペンペール欄を併設されるよう希望する。これら名簿提供は、健康な精神保有の読者に対しての最大のサービスであり、プレゼントである。

【伊那柴子について】

エネマ・マニアなら標記の名を知っておられる事だろう。最近静岡局留とかで交信を求めていた女性だが、その気になって文通をした人は、軒並み、その筋の「参考人」にされた筈。恥を告白する様だが、私もその彼に寝耳に水の驚きを味わされた一人である。こうした事実があると、読者通信は恐しい。各位共、不良分子には充分御注意の程を……と訴える次第。

【紳士との会話】

驚宮駅前の洋菓子店の喫茶室で、二人は向かい合って座っている。

「先程は、若い変な奴に声かけられたと、大分警戒されてましたね」

と、私からの発言、以下交互に喋り続く。

「年甲斐もなく、あおしたものに関心がありまして……」

「年と共に強くなる……じゃないんですか」

「辛辣ですね」

「回りくどいのや、遠慮はきらいなもんですからね。それに、アブ探究の気持があった場合、ねちねちしてたら、その態度が変態的ですよ」

「でしような」

「どうもお見掛けした所、貴方は欲求不満型ですね、いじけてますよ」

「はあ、でしようなね」

「私などと、まるっきり違う。私は欲しいものは手に入れた。可愛いと思ったら『可愛さ余って憎さ百倍』的に虐めてやりたくなく。合意の上で直接的なプレイに入っていきます」

「相手がないんです。そんな許し合える」

「奥様は？」

「SEXの方で『知恵シリーズ』の本が出た

お蔭で、やっとこんな事もあるのかな、と判りかけて来た程度の……奥手なんですか」

「教育が悪かった」

「と思いますね、でも私だってSMプレイなんて言葉知らずにいたんですからね、極く最近まで」

四十過ぎていると思われるサラリーマン氏（名刺によると課長の肩書）性癖にめざめて目下盛んに知識欲沸騰中の様子、私のコレクションを是非見せて欲しい、教えて欲しいと懇望されるが、即答を保留し条件を提示する

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分	1冊	三五〇円（送20円）
三月分	3冊	一〇五〇円（送共）
半年分	6冊	二一〇〇円（送共）
一年分	12冊	四二〇〇円（送共）

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。○直接予約購読のお申込みを下さるのには

事にした。御夫婦揃っておいでなら、と。

このサラリーマン氏の家庭に、私の撒いた（と言うより吹き込んだ）種が定着するかどうかは後日まで待たねばならない。今後、一定の日時、会って話し合う約束をする。

【会ってみたい人】

後援会設立の再提案をした関係で、大塚、東浦の両モデル嬢と膝を交えて懇談したのものだと思う。然し私はパートナーを得たい気持から藤村美香嬢のような真摯な呼びかけをしている女性に会ってみたい。私は危惧なく

大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号、天星社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円（切手可）の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

美香嬢には会えそうな気がする。奇クを買う

にも車で遠出する程の人だから、深夜のドライブのつもりで直接お出掛け下されば歓迎したい。この雑談は筆名だが、極めて適切なヒントでもある。練馬登記所前とも呼ばれてるバス停前に日石のスタンドがあり、深夜クラクションが短く鳴ったのを聞いたら、私から外に出て行く。新しい電話局の営業開始まで新架設がなく不便をかこっているが、求める気持が誠ならアバンチュールも又楽しき哉とはならないだろうか。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添付致します。

何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金がかかりますので御留意願います。八本号にて前金切りの判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受け取りにならない方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間に御受取りにならないときは、発送人に返戻されます。